

二〇二〇年度

川端康成研究

——一九三〇・四〇年代『雪国』生成期間における同時代との交点——

千葉大学大学院

人文社会科学研究所

博士後期課程

堀内京

【目次】

I

凡例

IV

序章

1

第一節 本論文の課題と問題の所在

2

第二節 一九三〇・四〇年代における『雪国』生成期間に着目する意義

5

第三節 先行研究

10

第四節 本論文の構成

12

注

13

小説発表状況一覧

18

第一章 交錯する「日本の故郷」と「神話」——『牧歌』——

22

第一節 はじめに

23

第二節 『牧歌』における第二章「戸隠の巫女」の位置——「日本の故郷」と「神話」

25

第三節 「作者」の発する「神話」

27

第四節 知子の発する「日本の故郷」

29

第五節 「作者」の反論、「神話」「故郷」の相違点

31

第六節 旅人が「郷土」に向こうに「日本」を見る不可能性

33

第七節 おわりに

36

注

37

第二章 〈幻想〉の「ユウトピア軽井沢」で見る〈日本〉——『高原』における日中戦争下の〈知識

人〉／血のゆくえ

41

第一節 はじめに

42

第二節 〈幻想〉のユウトピアとしての軽井沢

45

第三節 須田の血の継承

53

第四節 「混血」のゆくえ

56

第五節 おわりに

59

注	61
第三章 「言葉」を与えるということ——『美しい旅』——	67
第一節 はじめに	68
第二節 動物と人間の間？	69
第三節 花子の教育を担う達男	72
第四節 満州からの手紙——「続編」	76
第五節 「言葉」Ⅱ「日本語」を与えてしまうこと——綴方との関連から——	80
第六節 おわりに	83
注	85
第四章 〈旅行〉から〈旅〉への遡行——『旅への誘ひ』——	89
第一節 はじめに	90
第二節 新婚旅行の表象／市河明子の登場による旅の変質	91
第三節 岡本かの子「東海道五十三次」の重み	97
第四節 おわりに	102
注	105
第五章 「外地」メディアと小説——『東海道』の射程——	110
第一節 はじめに	111
第二節 川端康成と古典	113
第三節 『東海道』の中の古典	115
第四節 『東海道』における地方・郷土	119
第五節 おわりに	121
注	122
第六章 『雪国』——『北越雪譜』の位相と地名回避の効果——	126
第一節 はじめに	127
第二節 「雪中火事」における『北越雪譜』の位相	131

第三節	『雪国』の地名回避と対置する東京	137
第四節	おわりに	143
注		145
	『北越雪譜』、「雪中火事」、「雪国抄」本文対照表	151
終章		162
第一節	各章の結論	163
第二節	本論文の結論	170
第三節	今後の課題	173
注		174
参考文献一覧		176
初出一覧		200

【凡例】

(1) 文献については、単行本のタイトルを『』で示し、新聞・雑誌のタイトルおよびそれらに掲載された文章のタイトルは「」で示した。

(2) 年号は基本的に西暦で表記した。

(3) 引用文中の漢字は新字に揃え、仮名遣いについては原文のままとした。また、ルビは適宜省略した。

(4) 引用文中の傍点及び傍線は、特に断りのない場合、引用者による。また、引用を略した部分については(中略)で示した。

(5) 引用箇所は「」で示しているが、分析概念として扱う場合はへで示している。

(6) 川端康成の小説の引用は初出に拠る。

(7) 小説の連作全体を指す場合、タイトルは、『』で示した。

(8) 満州の表記は、基本的に「満州」とした。ただし、引用については、「満洲」と表記されている場合、引用元のまま記した。

序 章

第一節 本論文の課題と問題の所在

本論文は、川端康成（一八九九年六月一日～一九七二年四月一六日）の『雪国』生成期間にあたる一九三〇・四〇年代に発表された小説を分析することで、川端文学がいかに時代に呼応しながら生成されてきたかについて、明らかにすることを課題とする。

川端康成が「日本的」で「伝統的」な美の体現者であるという作家像は、膨大に積み重ねられてきた川端文学研究がノーベル賞受賞対象作品である『雪国』、『千羽鶴』、『古都』をはじめとする代表作に集中した¹ことに加え、戦²後に発表されたテクストや、川端による「日本回帰」、「古典回帰」発言によって構成されてきた。

こうした作家像の定着は、一九三〇・四〇年代に発表された小説が十分に検討されないまま研究史が構成されるという重大な問題を孕んでいる。

本論文は、あくまでも一九三〇・四〇年代の『雪国』生成期間に発表された小説を研究対象とすることで、川端文学を捉え直す視座を開くことを目標とする。その際、「日本的」で「伝統的」な美の体現者であるという旧来の作家像を一度取り外し、川端の小説を同時代の文脈のなかで検討していく。

本節では、川端の作家像の形成を西洋から与えられた評価であるノーベル賞受賞と、「古典回帰」宣言、川端文学のカノン化という視点から整理していきたい³。

まずは、川端の作家像を強く印象づけたノーベル文学賞受賞⁴について簡単に整理していきたい。川端は、一九六八年、インドの詩人タゴール（一九一三年受賞）以来、東洋から選出された二人目のノーベル文学賞受賞者となった。当時発表された受賞理由は、「日本人の心の精髓を、すぐれた感受性をもって表現するその叙述の巧みさ」と「川端氏は東洋と西洋の精神的なかけ橋づくりに貢献した」⁵という二点であり、この他には先掲の受賞対象作品が発表されただけだった⁶。受賞五〇年後にあたる二〇一九年にスウェーデン・アカデミーから新たな選考資料が公開された際には、再度川端のノーベル賞受賞に注目が集まり、複数の論考が発表された⁷。田村充正は、一九六八年一〇月一八日から一二月一二日まで続いた川端のノーベル賞受賞にまつわる新聞の「過熱報道」を分析したうえで、「敗戦によって失われた国としての威信を東京オリンピックの成功によって取り戻しつつあった一九六〇年代の日本という歴史の文脈の中で捉え直せば、これで日本の現代文学が世界に認められたという喜びかたを安易に批判することはできない」⁸としながらも、受賞の背景にある「政治的配慮」に言及し、ノーベル賞受賞と川端のペンクラブにおける活

動との関連を指摘している。島崎藤村、正宗白鳥、志賀直哉に続いて川端が第四代日本ペンクラブ会長に就任したのは、一九四八年で、在任は一九六五年まで一八年間に及んだ。一九五七年には、第二九回国際ペンクラブ東京大会を開催し、翌一九五八年には、国際ペンクラブ副会長に選出された。ノーベル賞受賞は、川端の小説のみならず、こうした社会的な活動への評価も考慮された結果である。

ノーベル賞授賞式に和服姿で登場した川端は、受賞講演「美しい日本の私」（「朝日新聞」他一九六八年二月一六日）において、禅の論理や古典受容を披露し、自らの文学の根源には、日本の古典文学が絶対的に存在していることを強調した。そのうえで、「西洋」との不均衡について次のように述べている。

私の作品を虚無と言ふ評家がありますが、西洋流のニヒリズムといふ言葉はあてはまりません。心の根本がちがふと思つてゐます。

川端は、ノーベル賞受賞の際に、西洋から付与された「日本的」で「伝統的」な美の体現者であるという作家像を受賞講演において自ら肯定し、決定的なものとした。こうした西洋から与えられた評価を引き継いで展開される日本の川端研究について、原善は「研究者は西欧から貼られたレッテルを剥がそうとすることなく（つまりはそのレッテルを受け入れてしまった上で）、そのことで自らの自立性を示そうとするかに、そんなレッテルを貼られた作家を遠ざける姿勢を取ろうとした」と問題を指摘し、再評価を促している。

次の引用は、川端の随筆「哀愁」（「社会」一九四七年一〇月）である。

かうして私が長物語のほぼ半ば二十三帖まで読みすんだところで、日本は降伏した。「源氏」の妙な読み方をしたことは、しかし私に深い印象を残した。電車のなかでときどき「源氏」に恍惚と陶醉してゐる自分に気がついて私は驚いたものである。もう戦災者や疎開者が荷物を持ち込むやうになつてをり、空襲に怯えながら焦げ臭い焼跡を不規則に動いてゐる、そんな電車と自分との不調和だけでも驚くに価ひしたが、千年前の文学と自分との調和により多く驚いたのだった。

私は割と早く中学生のころから「源氏」を読みかじり、それが影響を残したと考へ

てゐるし、後にも読み散らす折はあつたが、今度のやうに没入し、また親近したことはなかつた。昔の仮名書きの木版本のせみであらうかと思つてみた。ためしに小さい活字本と読みくらべてみると、確かにずゐぶんと味がちがつてゐた。また戦争のせみもあつただらう。

しかし私はもつと直接に「源氏」と私との同じ心の流れにただよひ、そこに一切を忘れたのであつた。私は日本を思ひ、自らを覚つた。あのやうな電車のなかで和本をひろげてゐるといふ、いくらかきぎでいやみでもある私の振舞ひは、思ひがけない結果を招いた。

戦後に発表されたこの随筆は、川端の「古典回帰」宣言として度々引用され、研究史において重視されてきた¹⁰。川端の「古典回帰」宣言は、終戦後に集中して見られるため、研究史においては戦前／戦後の分断を招いてきた¹¹。だが、川端の「古典回帰」は、終戦によつて突発的に起こつたものではなく、第二次世界大戦末期には既に表れている。例えば、「満洲国の文学」（『芸文』一九四四年七月）には、「このごろ久しぶりに『源氏物語』を讀返しながら、私は故旧のなつかしさ言ひやうがない。自分が最も多く影響を受けてゐるのは、少年時代にわけもわからず読散らした、この千年前の作品ではないかと、いままらおどろかれる」とあり、また本論文で取り上げる終戦前に執筆された小説『旅への誘ひ』（本論文第四章）や、『東海道』（本論文第五章）のなかにも「古典回帰」の萌芽は表れている。また、川端の「古典回帰」は、「古典」を重視することで国威発揚を説いた日本浪曼派らの古典礼賛とも異なるものとして評価されてきた¹²。こうした川端の「古典回帰」の内実についても個別のテキストの検討が必要だと考えられる。

次に、川端文学がカノン形成¹³のなかに取り込まれていった様相を確認していきたい。十重田裕一は、一九五〇・六〇年代の川端への評価が、「高度経済成長と呼応するようにして、大きく上昇」し、カノン化される過程を「マスメディアとの相互関連性」から検討している。

文学全集、文庫本といった活字メディアや川端の小説、内容見本という広告、そして映画、テレビといった複数のメディアを横断して、過去の日本を回想しながら「日本」を表象しようとする現象が共通して見られた、ということである。そうした現象は、一九五〇年代後半から六〇年代にかけて集中していた。一九五〇年代後半から六〇年

代にかけて、「日本」のイメージをかたちづくりとする動向は、川端についていえば、日本ペンクラブ会長ならびに国際ペンクラブ副会長として、欧米を中心とする諸外国と関係しながら活動をしていたこと、そして、川端の著作が一九五〇年代中期から継続して多数、海外で翻訳されることも密接につながっている。¹⁴

つまり、高度経済成長期には、活字メディアに限定されることなく、複数のメディアによって流布された川端作品から、「日本」のイメージをかたちづくりとする動向¹³が見られた。そこには、一九五〇年代半ばから六〇年代にかけて四回映画化された「伊豆の踊子」も重要な位置を占めている。山本芳明は、「高度成長が始まり、日本が大衆消費社会へ大きく変容していく時代」を「映画へのコンテンツの提供、週刊誌ブーム、テレビの普及などによって、メディアとの新たな関係が模索され、また、消費者としての読者が増大したことを受けて、古典文学や海外文学を含めて、教育やアカデミズムなどの文学の再生産装置が整備されつつあった時代」と捉え、「川端康成や小林秀雄が日本を代表する文化人にのしあがっていくのは、文化資本としての文学の価値の上昇を示している」¹⁵と説明している。坂井セシルは、「文学現象を世界的な視野で観察した場合、川端文学のカノンは確実に進んでいる。日本では、本文の現役性は薄れていても、特徴的な表現、方法、装置などの拡散によって、川端文学は一定の地位を確保しており、読者に接近している」¹⁶と述べ、川端文学のカノン化が今現在も進行していることを指摘している。

川端の「日本的」で「伝統的」な美の体現者であるという作家像は、ノーベル賞受賞、川端による「古典回帰」宣言、川端を「日本」のカノンとして形成したマスメディアの動向など複数の要因が先行するかたちで形成されてきた。

従って、こうした作家像は、川端の小説を詳細に検討したうえで形成されたものではない。そのため、個々の小説を同時代の文脈のなかで検討し、川端文学の位置づけを再考する必要があると考えられる。

第二節 一九三〇・四〇年代における『雪国』生成期間に着目する意義

四〇年以上にわたる川端の作家活動を捉えることは、容易ではない。小説家としての出発期には、「新感覚派の旗手」として文壇にデビューし、一九二〇～三〇年代の西洋のモダニズム文学に深くコミットしていた川端康成には、戦後、「日本的」で「伝統的」な美

の体现者としての作家像が固定化する。こうした作家像の変換は、川端文学研究において、戦前／戦後を分断してきた。しかし、その分断が一九三〇・四〇年代に発表された川端の個々の小説を十分に検討したうえで起きたのかという点については、検討の余地があるように思われる。

そこで、本論文では、『雪国』生成期間にあたる一九三〇・四〇年代に発表された小説を検討することで、この時期の川端文学について捉え直すことにした。本論文の射程とするところを一九三〇・四〇年代における『雪国』生成期間とした理由は、主に以下の二点に集約される。

一点目は、『雪国』から「日本」や「伝統」にまつわる視点が見出されてきた問題である。仁平政人は、同時代評においては、『雪国』から「日本」や「伝統」という視点を見出すものはほとんど見られないことを述べたうえで、「作中の空間を「日本（伝統）回帰」といった文脈で捉えてきた研究史は、戦後において構築されてきた「日本的・伝統的な作家」という川端評価の枠組みに深くとらわれてきたと言うべき」で、「そうした旧来の視点は、何よりもテキストの具体的な表現と、その歴史的な文脈を捨象することにつながってきた」¹⁷という重要な指摘を行っている。仁平の指摘にあるように、戦後の研究史は、『雪国』から「日本」や「伝統」にまつわる視点を積極的に看取してきた。『雪国』に注目が集まることで、『雪国』と同時期に執筆されてきたその他の小説は、『雪国』の影に隠れて忘却されてきた。一九三〇・四〇年代における『雪国』生成期間は、そのほとんどが戦時下であった。川端におけるこの期間は、寡作期と捉えられ、その姿勢は、「沈黙」や「芸術的抵抗」と評価されてきた¹⁸。例えば、川端の作家活動の最初期から晩年に至るまで執筆が続いた『掌の小説』¹⁹の発表も、『雪国』生成期間に限定すると、一〇作品程度に留まっている²⁰。しかし、あらためてこの期間を振り返ると、本論文所収の「小説発表状況一覧」（二八～二二頁）からも明らかのように、川端の創作活動は継続的に行われていた。戦時下という非常時の出版事情もあり、単発の短編小説の発表が多くみられるなか、川端は数編の連載小説を発表している。本論文の第一章から第五章では、『雪国』と並行して執筆された連載小説と、断続的に連載された五編の小説を取り上げる。留意すべきは、この五編の小説では、旅人の立場の語り手が「郷土」や「国土」という土地と、そこに生きる人々を糾合し、同時代的な視点から「日本」なるものを見出そうとする試みが展開されることである。こうした共通点をもつ小説群は、いうまでもなく同時代のコンテクストを多分に織り込みながら構成されており、戦後に形作られた「日本的」で「伝統的」

な美の体現者としての川端の作家像が固定化するなかで埋もれていった。本論文は、『雪国』と並行して執筆されたこれらの小説群を検討したうえで、『雪国』を読み直し、『雪国』生成期間を捉え直す試みである。そこには、『雪国』執筆期間における川端の創作活動を可視化するねらいがある。加えて注目したいことは、戦時下という非常時の貴重な連載（または断続連載）小説発表の場で、川端がどのように発表媒体と読者層を意識しながら対メディア戦略を行っていたかという点である。こうした川端のメディア戦略は、戦時下に限定されるものではなく、本章第一節で確認したように、「日本的」で「伝統的」な美の体現者としての作家像が固定化していくことにも深く関連している。

二点目は、一九三〇・四〇年代に発表された小説が刊本に収録される機会に恵まれず、研究される機会を失っているという問題である。なお、各章で扱う小説の発表状況については、この序章の終わりに添付する「小説発表状況一覧」を参照されたい。

ここで、本論文で扱う小説の刊本への採録状況について簡単に触れておきたい。第一章で論じる『牧歌』は、「婦人公論」に一九三七年六月から一九三八年一二月まで連載された三章構成の小説である。初めての刊本への採録では、第二章の戸隠を舞台としたところのみが「戸隠の巫女」として独立したかたちで『川端康成選集 第九卷』（改造社、一九三九年一二月）に収められた。全編が初めて刊本に収録されたのは、初出の発表から一二年後、一六巻本『川端康成全集 第八卷』（新潮社、一九四九年一二月）においてであった。次に全編が刊本に収められたのは三七巻本『川端康成全集 第六卷』（新潮社、一九八一年四月）においてであり、全編が刊本に収録された機会は、僅か二回に留まっている。

第二章で論じる『高原』は、各雑誌に一九三七年一月から一九三九年一二月まで断続的に発表された小説であるが、完結後すぐに『川端康成選集 第九卷』（改造社、一九三九年一二月）に全編が収められ、その後幾度も刊本へ収録されている。第三章で論じる『美しい旅』は、正編が「少女の友」に一九三九年七月から一九四一年四月まで二一回発表され、続編も同じく「少女の友」に一九四一年九月から一九四二年一〇月まで一回発表された。その後、続編を含まない形で複数回単行本化され、全編を刊本で読むことが可能になったのは、三七巻本『川端康成全集 第二〇卷』（新潮社、一九八一年一二月）においてであった。第四章で論じる『旅への誘ひ』は、「新女苑」に一九四〇年一月から九月まで発表されたが、刊本への初収録は、三七巻本『川端康成全集 第三三卷』（新潮社、一九八一年二月）においてであり、単行本への採録は、この一度に限られている。第五章で論じる『東海道』は、「満洲日日新聞」に一九四三年七月二〇日から一〇月三十一日まで発

表され、一日遅れで「大連日日新聞」にも掲載された。『東海道』は、「満洲日日新聞」に掲載された四人回分に、川端秀子夫人の手元に残されていた五〇回から五四回分までを付け足したうえで、『天授の子』（新潮社、一九七五年六月）に初めて採録された。『東海道』も初出が発表されてから、三〇年以上が経過した後、初めて刊本に採録されたことになる。

こうして、刊本への採録状況を整理していくと、一九三〇・四〇年代に発表された小説は、単行本化される機会に恵まなかったばかりか、収録された場合にも、部分的にしか採録されないなど未整理な状況が続いてきた。こうしたテキストの未整理は、この時期に発表された小説の研究が進まない一つの要因だと考えられる。

特に、『美しい旅』は、満州の日本語教育を取り扱った続編が川端の没後まで単行本に収められなかったという注目すべき事実もある。

やはり、川端を「日本的」で「伝統的」な美の体現者に収斂する前に、個別の小説を検討する必要性が生じるのだ。

次に、あらかじめ『雪国』の生成期間について確認しておこう。『雪国』の生成期間をいつまでと捉えるのか、ということについてはある種の困難が伴う。左の表は、『雪国』の発表状況をまとめたものである。

初出発表誌・単行本	備考
①「夕景色の鏡」(「文芸春秋」一九三五年一月) ②「白い朝の鏡」(「改造」一九三五年一月) ③「物語」(「日本評論」一九三五年一月) ④「徒勞」(「日本評論」一九三五年二月) ⑤「萱の花」(「中央公論」一九三六年八月) ⑥「火の枕」(「文芸春秋」一九三六年一〇月) ⑦「手毬歌」(「改造」一九三七年五月) ⑧「新稿」(「日本近代文学館蔵「肉筆原稿」) ⑨旧版『雪国』(創元社、一九三七年六月) ⑩「雪中火事」(「公論」一九四〇年十二月) ⑪「天の河」(「文芸春秋」一九四一年八月)	初の単行本化(本稿では旧版と記す) 初の単行本化から「三年半の空白」後の続稿

⑫ 「雪国抄」(「暁鐘」一九四六年五月)	⑩ 「雪中火事」の改稿
⑬ 「続雪国」(「小説新潮」一九四七年一〇月)	⑪ 「天の河」の改稿
⑭ 『決定版 雪国』(創元社、一九四八年十二月)	ほぼテキストが確定
⑮ 定本『雪国』(牧羊社、一九七一年八月)	定本刊行

*単行本はゴシック体とした。

*⑨の書名は、『雪国』であるが、便宜上、旧版『雪国』と記す。

*二重傍線は、終戦の境を表す。

この表に基づいて『雪国』の成立過程を整理すると、次のようになる。各雑誌に断続的に分載された①「夕景色の鏡」(「文芸春秋」一九三五年一月)から⑦「手毬歌」(「改造」一九三七年五月)までを加筆修正し、⑧「新稿」(日本近代文学館蔵「肉筆原稿」)を加えて、最初の単行本として⑨旧版『雪国』(創元社、一九三七年六月)が刊行された。それから三年半を経て、続稿となる⑩「雪中火事」(「公論」一九四〇年十二月)と⑪「天の河」(「文芸春秋」一九四一年八月)が書き継がれたが、この二編は終戦を経て、⑫「雪国抄」(「暁鐘」一九四六年五月)、⑬「続雪国」(「小説新潮」一九四七年一〇月)として改稿された。旧版『雪国』に、⑫「雪国抄」と⑬「続雪国」を加え、⑭『決定版 雪国』(創元社、一九四八年十二月)が刊行された。この『決定版 雪国』によってテキストは、ほぼ確定した。ただし、『決定版 雪国』以降も、細かな改稿が行われた。その後、⑮定本『雪国』(牧羊社、一九七一年八月)が刊行されている。

さらに川端の没後には、①「夕景色の鏡」、②「白い朝の鏡」、③「物語」を抄出し、改稿した遺稿「雪国抄」(「サンデー毎日」一九七二年八月一三日)が発表された。平山三男によると、この遺稿「雪国抄」は、「袋綴の和装本二冊に毛筆」で記されたもので、「以上二冊／昭和四十七年／一月二月画く／康成」と執筆時期が記されているという²¹。

川端は、一九七二年四月一六日に没している。この遺稿「雪国抄」の存在によって、川端が死の直前まで『雪国』という小説に向かい合っていたことが判明した。

こうした事情もあり、川端の『雪国』の執筆期間をいつまでと捉えるかは、難しい問題であるが、本論文においては、『雪国』の生成期間を①「夕景色の鏡」(「文芸春秋」一九三五年一月)の発表から、テキストがほぼ確定する⑭『決定版 雪国』(創元社、一九四八年十二月)までの一四年間と定める。先述の通り、本論文は、その期間に川端が発

表した五つの小説を検討したうえで、『雪国』を読み直す試みである。

第三節 先行研究

『雪国』生成期間（一九三五年一月～一九四八年十二月）は、日中戦争、第二次世界大戦、終戦に跨がっている。本節では、戦時下にあたるこの時期の川端が先行研究においてどのように捉えられてきたのか研究史を辿ってみたい。川端の戦時下については、「他の時期に比べ研究は立ち遅れている」²²との指摘がある。川端の初期（初発期）²³や、『千羽鶴』、『山の音』が発表された戦後²⁴と比較すると、この時期の川端の文学的営為に関する研究は、積極的に進められてきたとは言い難い。こうした先行研究には、次のような問題点が指摘できる。一点目は、川端は、戦争と距離を置いた作家であるという共通認識を批評家や研究者が持つことで、戦時下に発表された個別の小説が同時代の文脈のなかで検討されないことである。二点目は、この時期の川端の文学的営為が一極集中するかたちで『雪国』と関連付けられて語られることである。三点目は、川端の戦時下が同時代に発表された小説ではなく、川端によって戦後に発表された随筆や友人への追悼文などから看取されてきた傾向が強いことである。

野寄勉に、川端は「戦争に対する関与とその言説は豊かな方だった」²⁵という指摘もあるように、戦争にまつわる川端の言説は、数多く残されている。それは、例えば「敗戦のころ」（「新潮」一九五五年八月）、「東京裁判判決の日」（「社会」一九四九年一月）などの複数の随筆や、「片岡鉄兵の死」（「新文学」一九四五年三月）、「島木健作追悼」（「新潮」一九四五年十一月）、「横光利一弔辞」（「人間」一九四八年二月）などの追悼文に表出している。

先述の通り、従来、研究史においては、川端は戦争と距離を置いた作家だという見方がされてきた。例えば、三好行雄は、「軍国主義日本の開幕前夜」に「とめどない転落をつづける昭和文学史のおなじ季節にささやかな文学の自律をまもり、いわば芸術的抵抗のひとつの形式をもつとも純粹につらぬくことができた」小説に堀辰雄の「風立ちぬ」を挙げ、「そのとき、『雪国』の舞台がふたたび山ぶかい温泉宿に閉じられていたのは決して偶然でない」と『雪国』に言及したうえで、川端にも同様に、「政治にむかつてもつとも完璧に自己を閉ざす」「芸術的抵抗」²⁶を見出している。中村光夫も「戦争中、川端はいわゆ

る国策の動きに積極的に添ふことはなく、東京から少し離れた古い文化都市である鎌倉に住んで少しづつ仕事をし、市民としての義務も果たすといふ、大変地味な生活をしてをりました」²⁷と川端と「国策の動き」には距離があるという見方を示している。また、川嶋至は、川端が海軍報道班員として鹿児島県鹿屋の特攻隊基地に赴いた経験が「生命の樹」一編しか生み出さなかったことを批判的に捉え、「それも「私」の眼に映ずる自然の美しさが語られる作品しか生まなかったことに、私たちは愕然とし、あの大きな戦争にすら人間的な関心を示さずに素通りできた作家に、恐怖に近い尊敬の念を捧げないわけにはいかない」²⁸と川端の戦争への眼差しに厳しい評価を与えている。柄谷行人は、『雪国』を「歴史的文脈だけでなく、「歴史」が完全に消されている」小説だと評したうえで、その『雪国』を執筆していた川端は「どんな戦争イデオロギーとも無縁で、滅び行く「美しい日本」の像のみが定着される」²⁹と『雪国』に焦点化することで、「イデオロギーと無縁」な川端を見出している。羽鳥徹哉は、川端の「戦争中の文章」を検討したうえで、「川端は戦争中、戦争に反対するなどということはできなかった。むしろ運命の力を受け入れる形で、受け入れざるを得なかった。しかし受け入れながら、それが日本民族のエゴとしての戦争でなく、むしろ日本を世界に解消させる形での戦争を願った」³⁰と川端は、「日本民族のエゴとしての戦争」を望まなかったという指摘をしている。林武志は、川端が戦争について語る「歴史」という言葉に着目し、川端のいう「歴史」は、「敗戦と源氏物語を重ね合せて見る「歴史」であり、それは「極めて文学的」³¹であることから、川端が戦後振り返る「歴史」が一般的な「歴史」とは距離のあるものだと捉えている。田村嘉勝は、川端の「国策に参加した」ことを次のように整理する。「川端は、昭和十七年に日本文学報国会の派遣作家として、長野県の農村を訪れた。又、一九年には、日本文学振興会の制定した「戦記文学賞」の選者になっており、二十年四月には、海軍報道部員となって、鹿児島県鹿屋の海軍航空特攻隊基地へ行き、一ヶ月程滞在していた」。田村は、川端のこうした行動は、「外面的には、戦争への積極的参加の如きに見られるが、内面においては、寧ろ、反意を示していた」として、「川端の戦争協力は複雑な二重性を持つ協力であった」³²と結論づけている。長谷川泉は、戦時下に執筆された「日本の母」を訪ねて」（『婦人画報』一九四二年一月）や、「英霊の遺文」（『東京新聞』一九四二年一月八日〜一月十五日）、一九四三年一月六日〜一月十二日、一九四四年一月一〇日〜一月十五日）について追究する必要性を指摘している³³。鈴木伸一は、戦時下の川端について「黙して語らず」³⁴という姿勢を見、「次第にファシショ化する国家、そしてその影響下にある時

世と己の芸術を追い求める作家としての生命維持という相容れない要求に、引き裂かれる作家川端の存在を確認し得る」³⁴と同時代に生きる「作家」としての川端の苦悩に言及している。

二〇〇〇年代に入ると、戦時下における川端について、従来の見方を問い直すべきであるという論考が発表されていく。山中正樹は、川端の「十五年戦争」中に発表した小説や随想を概観したうえで、「川端自身、あるいは同時代や旧来の川端の〈読者〉なら、「川端は戦争と距離を置いていた」と樂觀的に語ることができたかもしれない。しかし現代の「私たち」には、そうした無責任な態度は許されるはずがない」³⁵と、川端が「戦争から距離を置いていた」という従来の見方への再評価を促している。三浦卓は、個別のテクストの分析を通して、川端が「戦時体制を補完した可能性は否定できない」と「既存の川端像の再考」³⁶を促している。李聖傑は、川端の戦後に表出する「魔界」思想が第二次世界大戦、敗戦、文学上の知己の死によってもたらされたと捉え、その点について詳細に論じている³⁷。チャールズ・カベルは、川端が戦時下に発表した『『女性文章』序』（川端康成編『女性文章』満州文芸春秋社、一九四五年一月）などを分析したうえで、「川端の戦後忘れられ、失われた文章を認識して、著者の有名な戦時期作品を読み直せば、当時の帝国主義との関係がより解りやすくなる」³⁸と、戦時下における川端の「忘れられ、失われた文章」を捉え直す必要性を指摘している。

以上のように、戦時下における川端については、従来川端と戦争の積極的な接点を認めない立場が多くを占めてきた。しかし、近年、具体的に小説を分析することで、川端の戦時下を再考する必要性が指摘されるようになった。

第四節 本論文の構成

第一章では、川端が「信州見聞記風な長篇小説」（「あとがき」『川端康成選集 第九巻』改造社、一九三九年十二月）と述べた『牧歌』を取り上げ、日中戦争開戦の時分に東京から訪れる旅人の「作者」が信濃の戸隠に「日本の故郷」と「神話」を希求する様相について論じる。

第二章では、日中戦争勃発直後の軽井沢を舞台とした『高原』を取り上げ、東京から訪れる語り手の須田が日中戦争下を生きる〈知識人〉であることに着目する。そのうえで、須田が「四十ヶ国程の人種」の「雑居」する軽井沢というトポスで、当時の〈知識人〉が

共通して抱えていた〈西洋〉を内面化したうえで、〈日本〉を相対化するという課題にどのように関心を示していくかという点について論じる。

第三章では、『美しい旅』を取り上げ、元々「言葉」を持たない盲聾啞の少女花子に「言葉」を与えることが同時代の文脈のなかでどのような意味を持つのかという点に着目する。そのうえで、長らく刊本に収められなかった満州の日本語教育を扱った続編と、正編が「言葉」Ⅱ「日本語」を与えるという共通した課題を持つことについて論じる。

第四章では、『旅への誘ひ』を取り上げ、従来第五章で論じる『東海道』に吸収された小説として捉えられてきた『旅への誘ひ』を一つの独立した小説として扱う。一九四〇年前後における旅をめぐるコンテキストを手がかりに、『旅への誘ひ』を読み直したうえで、『東海道』との関係性について検討する。その際、『旅への誘ひ』と『東海道』の初出メディアの性格の違いとそれぞれのメディアが果たす役割、読者層についても論じる。

第五章では、『東海道』を取り上げ、初出メディアが「満洲日日新聞」であることに着目し、想定しうる満州の読者に向けて、川端がどのようなことを発信していたかについて検討する。

第六章では、『雪国』を取り上げる。これまで『雪国』からは、「日本」や「伝統」にまつわる視点が看取されてきた。『雪国』生成期間に並行して執筆、発表された第一章から第五章までに取り上げた小説と同様に、『雪国』にも同時代のコンテキストが内包されていることに注目する。なかでも鈴木牧之の『北越雪譜』がテキストに取り込まれた点と、島村が駒子と過ごす雪国に地名が与えられない意味について同時代状況に鑑みたうえで検討する。

1 仁平政人「無言のまほりを廻る——川端康成「無言」論——」（『日本文芸論稿』二〇〇九年一〇月、後「第三部 川端康成の戦後——「新感覚主義」のゆくえ——第三章「無言」論——無言のまほりを廻る——」）と改題して『川端康成の方法——二〇世紀モダニズムと「日本」言説の構成——』（東北大学出版会、二〇一一年九月）では、川端研究史における問題を次のように整理している。「川端文学の研究史が、これまで著名なテキスト（例えば「伊豆の踊子」や『雪国』『山の音』など）に集中する形で進められてきた——それは、「日本的・叙情的な作家」といった定型化した作家イメージが、今日に至るまで

再生産され続けてきたということと密接に連動している——一方で、〈川端神話〉の圏外に属するテキストが多く等閑視されてきたという事態を、端的に物語っていると見られる」。

2 戦後に形作られた川端の作家像の固定化については、仁平政人『川端康成の方法——二〇世紀モダニズムと「日本」言説の構成——』（東北大学出版会、二〇一一年九月）の「第三部 川端康成の戦後——「新感覚主義」のゆくえ——序——問題の所在——」や、姜惠彬「序章」(『川端康成初期作品研究』筑波大学博士(文学)学位請求論文、二〇一六年三月)等において論じられている。本章「第三節 先行研究」で明らかにするように、『雪国』の評価は、そのまま川端文学研究の中核を為すものとなってきた。そうした経緯から、本節においては、姜惠彬の「川端研究史の問題所在を、『雪国』のノーベル賞受賞と戦後における〈国民文学〉の形成の中で具現化」した先行論を踏まえて、戦後に形作られた川端の作家像について検討する。

3 川端のノーベル賞選考の過程については、大木ひさよ「川端康成とノーベル文学賞——スウェーデンアカデミー所蔵の選考資料をめぐる——」(『京都語文』二〇一四年一月)を参照した。

4 「川端康成氏にノーベル賞」(『朝日新聞』一九六八年一〇月一八日)

5 注4に同じ。

6 二〇一九年一月二日にスウェーデン・アカデミーから、川端のノーベル賞選考に関する新たな選考資料が公開された。その後発表された論考には以下のものがある。吉武信彦「ノーベル賞の国際政治学——ノーベル文学賞と日本、1958～1967年の日本人候補に関する基礎的研究(1)——」(『地域政策研究』二〇一九年二月)、向井弘樹「ノーベル賞 日本人受賞者列伝 川端康成の巻——③」(『月刊 VERDA』二〇一九年二月)、待田晋哉「川端康成ノーベル賞受賞秘話」(『中央公論』二〇一九年三月)等。

7 田村充正『「雪国」は小説なのか——比較文学試論——』(中央公論新社、二〇〇二年六月)

8 川端香男里編「年譜」(三七巻本『川端康成全集 第三五巻』新潮社、一九八三年二月)

9 原善「あとがき」(『川端康成——その遠近法』大修館書店、一九九九年四月)

10 平山三男「「哀愁」論——川端に於ける戦争の意味——」(川端文学研究会編『川端康成研究叢書10』孤影の哀愁』教育出版センター、一九八一年一〇月)、田村嘉勝「川端康

成と「哀愁」——戦後文学への架橋として——」（『奥羽大学文学部紀要』一九九九年二月）、三浦卓「単行本『哀愁』の構造——川端康成の戦前／戦後再考にむけて」（川端康成学会編『川端文学への視界29』銀の鈴社、二〇一四年六月）等。

11 注2 仁平政人『川端康成の方法——二〇世紀モダニズムと「日本」言説の構成——』（東北大学出版会、二〇一一年九月）の「第三部 川端康成の戦後——「新感覚主義」のゆくえ——序——問題の所在——」に同じ。このなかで仁平は川端研究における戦前／戦後の分断について以下のように整理している。「研究史においては、このような川端の発言【引用者注：川端の随筆「哀愁」や「横光利一吊辞」（「人間」一九四八年二月）、「独影自命（第一回）」（一六卷本『川端康成全集 第一巻』新潮社、一九四八年五月）】を参照することに於いて、戦後の川端の文学活動に、方向性と質の両面にわたって戦前期から切断された性格を見だし、その「転換」や「変容」の内実を探ろうとする議論が、今日に至るまで数多く提起されてきた」。

12 例えば、小田切秀雄「文学における戦争責任の追及」（『新日本文学』一九四六年六月）では、「文学における戦争責任者」として菊池寛、久米正雄、中村武羅夫、高村光太郎、野口米次郎、西條八十、齋藤瀏、齋藤茂吉、岩田豊雄（獅子文六）、火野葦平、横光利一、河上徹太郎、小林秀雄、亀井勝一郎、保田与重郎、林房雄、浅野晃、中河与一、尾崎士郎、佐藤春夫、武者小路実篤、戸川貞雄、吉川英治、藤田徳太郎、山田孝雄の二五名の名前を挙げている。川端の名前は見られない。

13 文学におけるカノン形成については、ハルオ・シラネ、鈴木登美編『創造された古典——カノン形成・国民国家・日本文学』（新曜社、一九九九年四月）を参照した。

14 十重田裕一「つくられる「日本」の作家の肖像——高度経済成長期の川端康成」（『文学』二〇〇四年十一月）

15 山本芳明「特集にあたって」（『文学』二〇〇四年十一月）なお、この号（注14も同じ）は、「編成の力学50年代をよむ」という特集号である。

16 坂井セシル「1川端康成と21世紀文学 カノンの効果をめぐって」（坂井セシル、紅野謙介、十重田裕一、マイケル・ボードラッシュ、和田博文編『川端康成スタディーズ 21世紀に読み継ぐために』笠間書院、二〇一六年十二月）

17 仁平政人「旅行」する言葉、「山歩き」する身体——川端康成『雪国』論序説——

（『日本文学』二〇一七年六月）

18 日中戦争、第二次世界大戦、終戦に跨がる『雪国』生成期間の先行研究については、本

章「第三節 先行研究」を参照されたい。

19 川端康成の短編小説のなかで、どの小説を『掌の小説』と定義し、何編を認定するかについては、研究者によって見解が分かれている。羽鳥徹哉「掌の小説について」（川端文学研究会編『〈論集〉川端康成——掌の小説』おうふう、二〇〇一年三月）においては、「掌の小説」の研究について次のように整理されている。

現在の『川端康成全集第一巻』（昭五六・一〇、新潮社）に収録されている掌の小説は一二二編である。しかし他に掌の小説がないわけではない。松坂俊夫、長谷川泉、森晴雄、石川巧の四氏が、それぞれに掌の小説を認定する作業を試みている。松坂、長谷川、森の三氏は、最初発表したものを、その後増補している。結果的に、長谷川一四七編、石川一六五編、森一七三編、松坂一七五編を掌の小説として認定している。

20 注19において、『掌の小説』は、研究者によって定義や認定する数が異なることを述べたが、三七巻本『川端康成全集 第一巻』（新潮社、一九八一年一〇月）に収録された『雪国』生成期間（一九三五年一月～一九四八年十二月）に発表された『掌の小説』は以下の一一編である。①「愛犬安産」（『東京日日新聞』一九三五年一月二一日）②「ざくろ」（『新潮』一九四三年五月）③「十七歳」（『文芸春秋』一九四四年七月）④「わかめ」（『文芸春秋』一九四四年七月）⑤「小切」（『文芸春秋』一九四四年七月）⑥「さと」（『写真週報』一九四四年一〇月一八日）⑦「水」（『写真週報』一九四四年一〇月二五日）⑧「五拾銭銀貨」（『新潮』一九四六年二月）⑨「さざん花」（『新潮』一九四六年二月）⑩「紅梅」（『小説新聞』一九四八年四月一日）⑪「足袋」（『暮しの手帖』一九四八年九月）

21 平山三男編著『遺稿『雪国抄』影印本文と注釈・論考』（至文堂、一九九三年九月）

22 深澤晴美『『新女苑』における川端康成——戦時下の側面』（『和洋九段女子中学校・高等学校紀要』一九九七年三月）

23 注1、2、11 仁平政人『川端康成の方法——二〇世紀モダニズムと「日本」言説の構成——』（東北大学出版会、二〇一一年九月）等では、川端とモダニズム文学について検討されている。

24 『千羽鶴』の研究史は、馬場重行編『川端康成作品論集成 第七巻『千羽鶴』』（おうふう、二〇一二年一月）、『山の音』の研究史は、田村充正編『川端康成作品論集成 第八巻『山の音』』（おうふう、二〇一三年一月）をそれぞれ参照した。

25 野寄勉「戦争観」（田村充正、馬場重行、原善編『〈川端文学の世界5〉その思想』勉誠

出版、一九九九年五月)

26 三好行雄「昭和一〇年代の文学——芸術的抵抗の一形式にふれつつ——」(唐木順三ら著『日本文学講座 第六卷』河出書房、一九五五年九月)

27 中村光夫「川端文学の特質」(『中村光夫全集 第六卷』筑摩書房、一九七二年十二月)

28 川嶋至『川端康成の世界』(講談社、一九六九年一〇月)

29 柄谷行人「近代日本の批評 昭和前期Ⅰ」(柄谷行人編著『近代日本の批評・昭和篇「上」』福武書店、一九九〇年十二月)

30 羽鳥徹哉「川端康成と戦争」(『解釈と鑑賞』一九八一年四月)

31 林武志「川端康成における「戦争」」(『解釈と鑑賞』一九八一年四月)

32 田村嘉勝「川端康成の戦争体験——「反橋」三部作から——」(『言文』一九七九年一〇月)

33 長谷川泉「十五年戦争下の川端康成」(『社会文学』一九九一年七月、後『長谷川泉著作選⑤』川端康成論考』明治書院、一九九一年十一月)

34 鈴木伸一「川端康成の政治観——時局認識に関する一考察——」(『二松』二〇〇〇年三月)

35 山中正樹「十五年戦争」と作家「川端康成」(覚え書き)——昭和十年代の「作品」を中心に——」(『桜花学園大学人文学部研究紀要』二〇〇五年三月)

36 三浦卓『少女の友』のコミュニケーションと川端康成「美しい旅」——〈障害者〉から〈満洲〉へ——」(『日本近代文学』二〇〇九年五月)

37 李聖傑『早稲田大学モノグラフ 106』川端康成の「魔界」に関する研究——その生成を中心に——」(早稲田大学出版部、二〇一四年三月)

38 チャールズ・カベル「戦時期の日本文学——ナショナリズムにおける女性像の構成——」(黄順姫編「20世紀におけるナショナリズム、スポーツ、身体文化…平成12—13年度成果報告書 戦後身体文化における日本・韓国比較研究」国際会議報告書、筑波大学社会科学系、二〇〇一年三月)

「小説発表状況一覧」

年	月	作品	初出	タイトル	同時期に発表された川端の小説・備考
1935	1	「雪国」	「文芸春秋」	「夕景色の鏡」	「浅草祭」（「文芸」1～2月、「文学界」3月）「愛犬安産」（「東京日日新聞」、1月21日）、「出世人形」（「現代」1月）、「舞姫の暦」（「福岡日日新聞」1月6日～3月25日他3紙でも掲載された）、「駒鳥温泉」（「少女倶楽部」2月）、「田舎芝居」（「中央公論」5月）、「童謡」（「改造」10月）、「四竹」（「中央公論」10月）→「虹」「弟の秘密」（「少女倶楽部」12月）
1935	1	「雪国」	「改造」	「白い朝の鏡」	
1935	11	「雪国」	「日本評論」	「物語」	
1935	12	「雪国」	「日本評論」	「徒労」	
1936	8	「雪国」	「中央公論」	「萱の花」	「イタリアの歌」（「改造」1月）、「これを見し時」（「文芸春秋」1月）、「花の湖」（「若草」1～6月）、「花のワルツ」（「改造」4、5月「文学会」7月「文学界」1937年1月）、「翼にのせて」（「少女倶楽部」6月）、「むすめごころ」（「雄弁」8月）、「コスモスの友」（「少女倶楽部」10月）、「七人の妻」（「週刊朝日」10月）、「女学生」（「若草」10月）、「父母」（「改造」10月）、「女性開眼」（「報知新聞」12月11日～1937年7月23日）、「夕映少女」（「333」12月）
1936	10	「雪国」	「文芸春秋」	「火の枕」	
1937	5	「雪国」	「改造」	「手毬歌」	「初雪」（「週刊朝日」1月20日）、「乙女の港」（「少女の友」6月～1938年3月）、「夏の友情」（「少女の友」8月） ※「女性開眼」、「花のワルツ」は1936年から続けて発表中
1937	6	「牧歌」	「婦人公論」	序章信州教育 1美篤刈る 2高松宮殿下の御言葉	
1937	6	「雪国」		旧版『雪国』（創元社）	
1937	7	「牧歌」	「婦人公論」	序章信州教育 2高松宮殿下の御言葉（つづき）	
1937	8	「牧歌」	「婦人公論」	序章信州教育 3戸隠草	
1937	9	「牧歌」	「婦人公論」	序章信州教育 4、長野師範学校と上田蚕糸	
1937	10	「牧歌」	「婦人公論」	第二章軽井沢挿話 1長野師範学校	
1937	11	「高原」	「文芸春秋」	「高原」（現行『高原』1、2）	
1937	11	「高原」	「改造」	「風土記」（現行『高原』3）	
1937	11	「牧歌」	「婦人公論」	戸隠の巫女 1、一茶の柏原 2新しい土	
1937	12	「牧歌」	「婦人公論」	戸隠の巫女 3落葉 4出征と結婚	
1938	1	「牧歌」	「婦人公論」	戸隠の巫女 4出征と結婚	
1938	2	「牧歌」	「婦人公論」	ひめすみれさいしん	

年	月	作品	初出	タイトル	同時期に発表された川端の小説・備考
1938	3	「牧歌」	「婦人公論」	神話	～1939年3月）、「愛」（「オール読物」7月）、「本因坊名人引退 碁観戦記」（「東京日日新聞」他7月23日～12月29日）、「試験の 時」（「少女の友」夏期臨時増刊号8月）、「百日堂先生」（「文芸 春秋」10月） ※「乙女の港」1937年から続けて発表中
1938	4	「牧歌」	「婦人公論」	巫女舞	
1938	5	「牧歌」	「婦人公論」	巫女舞	
1938	6	「牧歌」	「婦人公論」	巫女舞 春來れ	
1938	7	「牧歌」	「婦人公論」	ふるさとのうた 1雑報	
1938	8	「牧歌」	「婦人公論」	ふるさとのうた 雑報	
1938	9	「牧歌」	「婦人公論」	ふるさとのうた 2南信濃へ	
1938	10	「牧歌」	「婦人公論」	ふるさとのうた 2南信濃へ	
1938	11	「牧歌」	「婦人公論」	ふるさとのうた 2南信濃へ	
1938	12	「牧歌」	「婦人公論」	南信濃へ	
1938	12	「高原」	「日本評論」	「高原」（現行『高原』4）	「大牡丹」（「愛」のつづき「新女苑」1月）、「故人の園」（「大 陸」2月）、「兄の遺曲」（「少女の友」4月）、「佐山女史（原題 「映画館前」）」（「モダン日本」10月）、「母の読める」（「文 芸」10月～1940年1月）、「美人競争」（「オール読物」10月）
1939	7	「美しい旅」	「少女の友」	1小鳥と汽車と 2唇にふれて	
1939	8	「美しい旅」	「少女の友」	3森の散歩	
1939	9	「美しい旅」	「少女の友」	4朝の見送り	
1939	10	「高原」	「改造」	「初秋高原」（現行『高原』5）	
1939	10	「美しい旅」	「少女の友」	5目覚める湖水	
1939	11	「美しい旅」	「少女の友」	6チチとハハ	
1939	12	「高原」	「公論」	「樅の家」（現行『高原』6）	
1939	12	「高原」		『川端康成選集9』（『高原』初刊）	
1939	12	「美しい旅」	「少女の友」	7雪降る	
1940	1	「美しい旅」	「少女の友」	8初旅 9父のありか	【7月「美しい旅」中原淳一の挿絵掲載最後となる。11 月「雪国」発表再開される。】 「正月三ヶ日」（「中央公論」1月）、「母の初恋」（「婦人公論」1 月）、「旅人宿」（「文芸春秋」1月）、「女の夢」（「婦人公論」2 月）「ほくろの手紙」（原題「悪妻の手紙 愛する人達」）」（「婦 人公論」3月）、「夜のさいころ」（「婦人公論」5月）、「燕の童
1940	1	「旅への誘ひ」	「新女苑」	出発の章	
1940	2	「美しい旅」	「少女の友」	9父のありか	
1940	2	「旅への誘ひ」	「新女苑」	箱根・熱海の章	
1940	3	「美しい旅」	「少女の友」	10東京へ	

年	月	作品	初出	タイトル	同時期に発表された川端の小説・備考
1940	3	「旅への誘ひ」	「新女苑」	箱根・熱海の章（つづき）	女」（「婦人公論」6月）、「日雀」（「文芸春秋」7月）、「夫唱婦和」（「婦人公論」7月）、「子供一人」（「婦人公論」8月）、「本因坊秀哉名人引退碁観戦記」（「囲碁春秋」8～10月）→「名人」、「ゆくひと」（「婦人公論」11月）、「年の暮」（「婦人公論」12月） ※「母の読める」1939年から続けて発表中
1940	5	「美しい旅」	「少女の友」	11春の庭石	
1940	5	「旅への誘ひ」	「新女苑」	蒲郡の章	
1940	6	「美しい旅」	「少女の友」	12盲学校	
1940	6	「旅への誘ひ」	「新女苑」	蒲郡の章（つづき）	
1940	7	「美しい旅」	「少女の友」	12盲学校 13聾学校	
1940	7	「旅への誘ひ」	「新女苑」	東海道の章	
1940	8	「美しい旅」	「少女の友」	14聾学校	
1940	8	「旅への誘ひ」	「新女苑」	東海道の章（つづき）	
1940	9	「美しい旅」	「少女の友」	15聞える太鼓	
1940	9	「旅への誘ひ」	「新女苑」	東海道の章（最終回）	
1940	10	「美しい旅」	「少女の友」	16聞える太鼓（つづき）	
1940	11	「美しい旅」	「少女の友」	17聞える太鼓（つづき）	
1940	12	「雪国」	「公論」	「雪中火事」	
1940	12	「美しい旅」	「少女の友」	18家庭訪問	
1941	1	「美しい旅」	「少女の友」	19家庭訪問	【川端 1 回目の満州行き4月2日～5月16日、2 回目の満州行き 9 月5日～11月30日。9月「美しい旅」続編連載開始。】 「寒風」（「日本評論」1月～1942年4月）、「義眼」（「文芸春秋」1月）、「朝雲」（「新女苑」2月）
1941	2	「美しい旅」	「少女の友」	20家庭訪問	
1941	3	「美しい旅」	「少女の友」	21望みの海	
1941	4	「美しい旅」	「少女の友」	望みの海 美しい旅の一章	
1941	8	「雪国」	「文芸春秋」	「天の河」	
1941	9	「美しい旅」	「少女の友」	一、女に生まれて	
1941	10	「美しい旅」	「少女の友」	一女に生まれて（つづき）	
1942	1	「美しい旅」	「少女の友」	続美しい旅 二満州の手紙	「名人」（「八雲」8月）→「名人」 ※「寒風」1941年から続けて発表中
1942	2	「美しい旅」	「少女の友」	美しい旅 二満州の手紙（つづき）	
1942	3	「美しい旅」	「少女の友」	美しい旅 三満州の手紙（つづき）	

年	月	作品	初出	タイトル	同時期に発表された川端の小説・備考
1942	4	「美しい旅」	「少女の友」	美しい旅 四帰国	
1942	5	「美しい旅」	「少女の友」	美しい旅 五綴方使節	
1942	6	「美しい旅」	「少女の友」	美しい旅 六帰国	
1942	7	「美しい旅」	「少女の友」	美しい旅 七帰国	
1942	8	「美しい旅」	「少女の友」	美しい旅 八一つの家	
1942	10	「美しい旅」	「少女の友」	美しい旅 九声のある言葉	
1943	7	「東海道」	「満洲日日新聞」	【一】～【十】	「父の名」（「文芸」2、3月）、「故園」（「文芸」5月～1945年1月まで断続連載）、「ざくろ」（「新潮」5月）、「夕日」（「日本評論」8、12月、1944年3月）→「名人」
1943	8	「東海道」	「満洲日日新聞」	【一一】～【二九】	
1943	9	「東海道」	「満洲日日新聞」	【三〇】～【四一】	
1943	10	「東海道」	「満洲日日新聞」	【四二】～【四八】（連載は、10月31日まで）	
1944					「小切」（「文芸春秋」7月）、「十七歳」（「文芸春秋」7月）、「わかめ」（「文芸春秋」7月）、「さと」（「写真週報」10月18日）、「水」（「写真週報」10月25日） ※「故園」、「夕日」1943年から続けて発表中
1945					「冬の曲」（「文芸」4月） ※「故園」1943年から続けて発表中
1946	5	「雪国」	「暁鐘」	「雪国抄」（「雪中火事」の改稿）	「女の手」（「人間」1月）、「感情の塔」（「世界文化」2月）、「五拾銭銀貨」（「新潮」2月）、「再会」（「世界」2月）、「過去」（「文芸春秋」6月）→「再会」の後半部分、「生命の樹」（「婦人文庫」7月）、「さざん花」（「新潮」12月）
1947	10	「雪国」	「小説新潮」	「続雪国」（「天の河」の改稿）	「花」（「世界文化」4月）→「名人」、「夢」（「婦人文庫」11、12月合併号）
1948	12	「雪国」		決定版『雪国』（創元社）	「未亡人」（「改造」1月）→「名人」、「再婚者」（「新潮」1～5、8月～1952年1月）、「紅梅」（「小説新聞」4月）、「少年」（「人間」5月～1949年3月）、「足袋」（「暮しの手帖」9月）、「反橋（原題「手紙）」」（「別冊風雪」10月）
1971	8	「雪国」		定本『雪国』（牧羊社）	「隅田川」（「新潮」11月）

この表は、川端香男里編「年譜」（三七巻本『川端康成全集 第三五巻』一九八三年二月）、羽鳥徹哉・原善編『川端康成全作品事典』（勉誠出版、一九九八年六月）、小谷野敦、深澤晴美編『川端康成詳細年譜』（勉誠出版、二〇一六年八月）を基に作成した。

第一章 交錯する「日本の故郷」と「神話」——『牧歌』——

第一節 はじめに

川端康成の『牧歌』は、一九三七年六月から翌一九三八年十二月まで「婦人公論」に九回に亘って連載された¹⁾。その後、初出時の第二章の戸隠を舞台としたところのみが抜粋され、「戸隠の巫女」として『川端康成選集 第九卷』（改造社、一九三九年十二月）に収録された。それは、同じ書名で二度刊行された『高原』（甲鳥書林、一九四二年七月、甲鳥書房、一九六九年二月）においても踏襲されている。初出の全体が『牧歌』として刊本に収録されたのは、一六卷本『川端康成全集 第八卷』（新潮社、一九四九年十二月）においてである。よって、初出の連載開始から小説の全体が『牧歌』として発表されるまで、一二年の歳月が流れている。初出と一六卷本『川端康成全集 第八卷』を比較検討すると、章立ての修正と本文の改訂が認められる²⁾。『牧歌』の執筆期間は、川端の代表作『雪国』の執筆期間とも重なる³⁾。具体的には、旧版『雪国』（創元社、一九三七年六月）が刊行されてから、その続稿である「雪中火事」（「公論」一九四〇年十二月）が発表されるまでの間に『牧歌』は執筆されている。『雪国』には、「雪国の村」の地名は出てこない。しかし、川端自身の発言や書簡、研究史において、『雪国』の舞台は、越後湯沢であることが定説となっている⁴⁾。『雪国』は、一九三七年六月に一度旧版『雪国』（創元社）としてまとめられ、続稿発表まで「三年半の空白期間」があり、その間、川端の目は越後湯沢を離れて信州に向けられることになる⁵⁾。その後、『雪国』の執筆を再開し、「雪中火事」を発表している。

こうした事情も踏まえ、一九三〇・四〇年代の川端文学において、信州を舞台にした小説は、さらに研究が進められるべきであると考ええる。川端の生い立ちや、それまでの文学活動からは、一九三〇年代半ばまで特に信州との関わりは認められない。そのような川端がなぜこの時期に信州に目をむけることになったのか。さらに、信州を舞台としたテクストを相次いで発表するようになったのだろうか。

まずは、川端と信州というトposについて簡単に確認しておきたい。川端が信州をはじめて訪れたのは、三七卷本『川端康成全集 第三五卷』所収の「年譜」によると、一九三五年に確認することができる。そこには「十二月二十二日上諏訪に行く（「花の湖」執筆のため）」とある。翌年八月に再度川端は信州を訪れ、このときの信州（主に軽井沢）滞在は、随筆「神津牧場行」（「スキート」一九三六年一〇月）に記載されている。また、随筆「平穏温泉だより」（「文学界」一九三六年十二月）には、三度目の信州訪問の様子

が紹介されている。加えて川端は、一九三七年六月に刊行した旧版『雪国』により、翌七月には第二回文芸懇話会賞を受賞し、その賞金で軽井沢に別荘を手に入れる。『牧歌』の連載開始から約一ヶ月後のことである。

川端は、信州の特徴として、「郷土研究」の発達をあげている。

信濃は郷土の研究といふことが全国第一に発達してをりまして、文献も多いし、便利なのですが、そして郷土を知ることには日本を知ることにもなるのですが、さういふ本はお読みにならなくとも、せめて確氷の月くらゐは「知つたつもり」で御覧になることをおすすめしたいのであります。⁷

ここからは、川端が「郷土を知ることには日本を知ることにもなる」という見立てのもとに、信州に接近した様子がうかがえる。⁸『牧歌』においても、「郷土文化の最も発達した国の信州は、教育と教員とを忘れて、到底語れるものではない」とあり、序章「信州教育」では、第二章「戸隠の巫女」に登場する一九三三年に起こった「二・四事件の赤化小学教員の一人」である戸隠の知子の兄の背景が信濃教育会編『信濃教育会五十年史』（信濃毎日新聞社、一九三五年五月）等の「郷土資料」を用いることで詳細に語られている。

川端は、信州を舞台とした小説をいくつも残している。⁹ そのなかでも、『牧歌』は信州を舞台にした作品群の初期に執筆された。また、『牧歌』には、「支那事変が勃発した」とあるように、執筆当時の時代背景が織り込まれている。『雪国』と執筆期間が重なっていることや、「支那事変」前後という発表時期から、「戦時下の川端の日本回帰の在り様を考える上でもっと重視されるべき作品」¹⁰であることが指摘されている。また、同時代評においても中野重治は、「芸者や踊り子の世界から川端氏がこゝへ移つたことは作品価値決定の全条件を満足させるものでないとはいへ、またこれが婦人雑誌の連載小説であるとはいへ、この作家とこの作品とは多くの問題を孕んで多くの作家の将来へ関係する」¹¹と述べており、『牧歌』の執筆は、同時代状況へ視線を向けた川端の重要な転換点だと捉えられている。この中野の指摘にもあるように、『牧歌』は「婦人雑誌」である「婦人公論」に連載された小説である。連載前に川端が「婦人雑誌向きの小説にはなるかどうか分らぬが、一つくらゐはかういふ作品も見逃して置いてほしい」¹²と述べていた通り、信州の「郷土」を追究する小説の内容は、決して「婦人雑誌」に適したものとはいえず、読者への配慮も看取し難い。深澤晴美によると、こうした「婦人雑誌」にそぐわない連載が

許容された背景には、川端と親しい関係にあった中央公論社の担当編集者藤田圭雄の存在があるという¹³。先の川端の発言からも発表メディアへの意識は看取できるものの、『牧歌』においては、発表媒体や読者層への配慮よりも川端の「この国【引用者注…信州】を書きたい」¹⁴という思いが優先されたようである。

先にも確認したとおり、川端文学研究史において『牧歌』は、研究が進んでいる作品とは言い難い¹⁵。

本章では、『雪国』の執筆を一度中断した期間に『牧歌』が執筆されたということ、『牧歌』の執筆期間は、「支那事変」前後であるということ、そのような時期の信州というトポスをどのように川端が描こうとしたのか、という点に着目して論を進めたい。

第二節 『牧歌』における第二章「戸隠の巫女」の位置——「日本の故郷」と「神話」

『牧歌』は、序章「信州教育」、第二章「戸隠の巫女」、第三章「ふるさとのうた」の三章で構成されている。旅人である「作者」が信州を訪ね歩き展開される「信州見聞記風な長篇小説」¹⁶である。「作者」が語り手の役割を果たし、その「作者」を導く案内人の「娘」が各章に配されている。『牧歌』の中心は、第二章「戸隠の巫女」だと考えられる。初出の序章結末部に追記として、「才詫び 次号ヨリ本筋二入リマス」と記されており、『牧歌』の中心が第二章「戸隠の巫女」であることは、川端からも暗示されている。また、第二章の戸隠を舞台としたところのみが「戸隠の巫女」として独立して刊本に収録される機会を持ったことは、先に述べた通りである。序章「信州教育」に登場する小泉勝子は、冒頭で生い立ちが紹介されているものの、実際に「作者」を案内することはない。第三章「ふるさとの歌」では、「作者」が青木という瀕死の「いひなづけ」を持つ園子のいる富士見高原を訪れるが、富士見高原から移動することもなく、園子も勝子と同様に「作者」を案内することはない。第二章「戸隠の巫女」のヒロイン知子だけが「作者」に信州（主に柏原と戸隠）を実際に案内する。知子は、戸隠の「古い神官の娘」である。第二章の冒頭、「作者」は、柏原駅まで出迎えに来た知子とともに、柏原経由で戸隠へ向かう。

あらかじめ「作者」と知子のほかに、三人の登場人物を確認したい。一人目は、知子の兄である。知子の兄は、一九三三年に起きた「二・四事件の赤化小学教員の一人」であり、「転向してからは、長野の郊外に、果樹園を営ん」でいる。「作者」が戸隠を訪れた際には、満州に出征している。二人目は、知子の兄が結婚した通子である。通子は、知子の兄

と「出征の前夜」に結婚した。夫の出征後は、果樹園で林檎を育てている。三人目は、桂子である。桂子は通子の妹であり、「作者」と知子が見る神楽を舞う「戸隠少女」である。

金井景子が「川端に強い印象を与えたのは、戸隠の地に関する縁起と、その縁起にちなんだ神楽舞」¹⁷であると指摘するように、戸隠というトポス、知子とその戸隠の「神官の娘」であることは、見落とすことができない。「作者」が戸隠の「古い神官の娘」に案内されることが『牧歌』において重要なのである。

『牧歌』全体を見渡しても、竹内清己が指摘するように、「転向者であり出征兵士である兄について語る知子の、「日本の故郷」「神話」の希求が川端のモチーフであることは明らか」¹⁸であり、この川端が希求し、小説のなかで追究した「日本の故郷」、「神話」の内実を整理することで、『牧歌』を再検討したい。先行研究においても、『牧歌』における「日本の故郷」と「神話」について言及が集中しており、特に「日本の故郷」について検討する論考が見受けられる。各論者が共通して指摘していることは、「日本の故郷」という言葉に象徴される「作者」と信州の地元民との交錯¹⁹についてである。例えば大原祐治は、旅人の「作者」と、戸隠に生きる知子の戸隠というトポスに対する考えの齟齬を次のように論じている。

「旅人」の「作者」が日本の「神話」に思いを馳せるその場所は、日中開戦後の現実を生きる人々が生活する場以外の何ものでもないのである。人々はそれぞれの形で、その生活の場Ⅱ郷土が見せる裂け目と向き合って生きなければならない。それは、「日本の故郷」という甘美な抽象的観念には決して回収され得ないものだろう。²⁰

一方で、先行研究においては、「日本の故郷」と「神話」が同義語として捉えられ、その相違点についてはあまり注目されてこなかったように考えられる。

『牧歌』における「日本の故郷」と「神話」という言葉の関係を整理すると、「故郷」という言葉は、知子が言い出した言葉であり、「神話」は「作者」が言い出した言葉である。第二章「戸隠の巫女」「神話」（婦人公論）一九三八年三月）において、「作者」は知子に向かって「神話」という言葉を連呼するが、知子はそうした「作者」の意図がわからずに戸惑いを見せる。第二章「戸隠の巫女」「巫女舞」（一九三八年五月）では、桂子の舞う神楽を見た後、知子が「作者」に伝えるかたちで「日本の故郷を書かうと思ひになつて、奥信濃までいらしてゐるんですね」という言葉を「作者」に向けて話す。

まずは、「作者」の発した「神話」の意味を捉え、知子が「日本の故郷」という言葉を発するまでの過程を追い、知子のいう「日本の故郷」という言葉に含意された意味を再検討したい。そのうえで、作中における「日本の故郷」と「神話」の共通点と相違点を明らかにしていきたい。

第三節 「作者」の発する「神話」

はじめに、「神話」という言葉について確認していきたい。第二章「戸隠の巫女」「神話」には以下のようにある。（引用中の波線は、「作者」の考えと言動を示し、傍線は、知子の考えと言動を示している。全て引用者による。）

古い神官の娘は、綺麗な耳が冷たさうに、手にはさつきの白鬚草とその後で摘んだ梅鉢草とを、持つてゐるとも知らずに持つてゐた。梅鉢草も白梅ほどに小さい。

これらの白い花は、ここが神話の湖水であつた岸辺にも、やはり同じ花で咲いてゐたのだらうか。作者はそんなことを思つた。ふと呟いた。

「神話ですね。」

なにが、と云ふ風に、知子は振り向いた。

「兄さんの出征も、通子さんの結婚もですよ。日本の国の大きい動きも…。」

「神話？」

知子は腑に落ちぬ顔をしたが、

「さうね。」

と、うなづいて、

「私を慰めて、そんなこと仰しやつてますの？」

「さういふわけぢやない。この奥社の境内から牧場あたりの高原が、神話時代に湖水だつたことがあるかしらと考へて、その神話の湖水を想像してたんですよ。」

「そんなこと？」

と、知子は軽く迷ふやう…

「兄や通子さんと、関係がございますの？」

「ありますよ。その神話の人達の子孫ぢやないですか、同じ土地に生れた…。」

「ええ。さういふことを伺つても、今は身にしますのね。」

しかし、知子は不服らしかった。

「ですけど、もつとびしびし叱つていただいた方が、ありがたいんです。——さつき、仰しやつたぢやあませんの？ 兄の理性の蔭に、私が苦しむことはない。白鬚草のやうな鬚を生やせつて。どういふ鬚なんですか？」

「神話の鬚ですよ。」

「神話でしたら、私は小さい時に巫女で、神楽を舞つてましたから、お手のもののはずなんですけれど。」

と、知子は笑ひ出した。

「これらの白い花は、ここが神話の湖水であつた岸边にも、やはり同じ花で咲いてゐたのだらうか。作者はそんなことを思つた」というのは、この直前の場面まで「作者」が体験していた夢想の続きである。その「作者」の個人的な体験に基づく「神話ですね」という「作者」の呟きが知子との会話に発展していく。

ところが、このとき「作者」が発した「神話」という言葉があまりにも「作者」の夢想という個人的な体験によつていたため、知子は、「作者」の話す「神話」という言葉の意味や意図を理解することができない。そのため、知子は「作者」に対して、疑問形やクエツションマークで問いかけを繰り返している。重ねて、「作者」が「神話」を連呼することに対して「腑に落ちぬ顔をした」、「軽く迷ふやう」、「不服らしかった」と困惑や不満の表情を浮かべ、それでも「神話」にこだわる「作者」に対して知子はいかに「笑ひ出す」。「作者」が「結婚」を「神話」と言うことに対して自分を「慰めて」いるのではないか、と考える知子は「神話」を神聖なものとして捉えている。自分が「小さい時に巫女で、神楽を舞つて」いたことと結びつけていることもほぼ同様に、「神話」という言葉を神聖なものとして捉えているからだと考えられる。

このように「神話」を神聖なものとして捉えるのは、ごく一般的なことである。「作者」の意図を読み取れないことについても、知子を責めるより夢想という自分の特殊な体験を「さういふわけぢやない。この奥社の境内から牧場あたりの高原が、神話時代に湖水だつたことがあるかしらと考へて、その神話の湖水を想像してたんですよ」としか説明しない「作者」に疑問を持つ方が妥当である。

結局のところ、知子には、「神話」という言葉のなかに内包されている「作者」の希求しているものがこの時点ではわからない。このことについて、知子なりの回答を「作者」

に向けて出すのは、戸隠の神楽を見終わり、巫女としての自分の後継者である桂子を見送った次の場面でのことである。

第四節 知子の発する「日本の故郷」

知子は、「作者」が「奥信濃」を訪ねた動機について言及する。

「真直ぐに広い坂道を下りてゆく、桂子の白衣を見送りながら、

「日本の故郷を書かうとお思ひになつて、奥信濃までいらしてるんですね。」

と、知子はぼつりと云った。

そして、遠い山を見た。

「私は故郷を出て行かうとしてゐますのに…」

御神楽を見て、自分の幼い巫女の頃を思ひ出して、つい眦が濡れて来た。その照れ

隠しの言葉とも聞える。

「故郷が書けたらいいが、まあ、あの故郷も、この故郷も、ただ素通りして歩いて死ぬことでせうね。つくづく、あさましい根性ですよ。」

名月や江戸の奴等が何知つて 一茶

「私だつてさうですわ。この次は、どこでお目にかかれるかと思ふと…」

「兄さんと一緒に支那へ行きたいつて、柏原の駅で云つてましたね。信州からは、随分満洲へ移民しますね。」

「ええ。兄は、戦地で、却つて日本の故郷を見つけてゐるかもしれませんわ。さつき私、講中の方々を見てゐて、この方々の子供さん達と同じ兵隊に出てゐることは、兄の為にしあはせだと思ひましたの。戦争の時は、みんな一緒ですもの。あの講中の方々は、肉親を国の犠牲にして、あんなに黙つて、古い神の前に坐つてらつしやるんですわ。知らずに、疑はずに、ことあげせずに…」

「そんな——あんたも都会人の見方をしてゐる。」

「神話ですわ。」

知子は微笑んだ。

知子は、「日本の故郷を書かうとお思ひになつて、奥信濃までいらしてるんですね」「と「作者」に言い、さらに「私は故郷を出て行かうとしてゐますのに…」と続ける。さらに加えて注意しておきたいのは「御神楽を見て、自分の幼い巫女の頃を思ひ出して、つい眦が濡れて来た、その照れ隠しの言葉とも聞える」というところである。「その照れ隠しの言葉とも聞える」というのは「作者」の推察だが、知子が「御神楽を見て、自分の幼い巫女の頃を思ひ出して、つい眦が濡れて来た」というのは事実である。知子は、「御神楽を見」という出来事を契機として、「故郷」という言葉を言い出したと考えられ、この言葉は「作者」には「照れ隠しの言葉」と受け取られる。

ここで整理しておくと、「兄は、戦地で、反つて日本の故郷を見つけてゐるかもしれないわ」という知子の発言から推すと、「日本の故郷」と、知子の実際に生まれ育つた「故郷」とは、別の意味を指していると考えられる。

つまり、知子は、「日本の故郷」は、実際に生まれ育つた土地でなくても成立しうる、極論を言えば日本の中に存在しなくても構わない、却つてその方が都合が良い場合さえあるとまで言っている。

知子の言う「日本の故郷」の第一条件は、「みんな一緒」になれるということにある。知子の兄は、「二・四事件の赤化小学教員」であるという過去がある。その意味で、実際に生まれ育つた「故郷」信州の地にいる限り、人里離れた農場で過ごさねばならないほど周囲から孤立している。知子は、兄が「戦争」のために戦地に行つてこそ、互いの過去に関係なく、周囲の人々と同じ行動をとることができるようになり、日本に残っている出征兵士の家族たちがそうであるように、「知らずに、疑はずに」、「みんな一緒」になることができると考えている。

そうした知子の考えを聞いた「作者」は、「そんな——あんたも都会人の見方をしてゐる」と知子に抵抗を試みるが、知子はそのような「作者」に対し、「神話ですわ」と応える。以前あなたが仰つた「神話」とは、このような意味ですね、と返すことになる。ここでの知子の「微笑」みは、先の第二章「戸隠の巫女」「神話」において、「作者」の連呼する「神話」の意味がわからずに「笑ひ出した」ときとは対照的なものとなっている。

どちらも「作者」に向けた笑顔という意味では共通している。しかし、以前の「笑ひ」は「作者」の個人的な夢想から派生した「神話」という言葉を収集し、その場を納めるためのものであり、「作者」が「神話」という言葉を連呼する意図を理解できない点をこま

かすような意味を含んだものだった。

しかし、ここでの「微笑み」は、「作者」の発した「神話」という言葉の意味を自分なりに理解したという知子の確信を象徴しているものと考えられる。

知子の確信を隈なく捉えることは難しいが、知子の言う「日本の故郷」及び「神話」が「みんな一緒」になることが可能な場所、あるいは方法であるということは、間違いないがないように考えられる。成田龍一の「故郷」に関する共通の記憶——すなわち集合的記憶が「故郷」という共感の共同性をつくり出し、共同性を支えていく²¹という指摘は、知子言う「みんな一緒」という「故郷」観と重なるものがある。

さらに、「神話」と「みんな一緒」という連帯感との関わりについて宇波彰に次のような発言がある。

かつて神話は、共同体内部の連帯性を確認させる機能を持っていた。今日の記号表現に神話化を求める動きがあり、受け手の側もそれを積極的に承認する傾向があるのは、無意識のうちに神話的なものを再生させ、集団的な記憶を再確認し、失われている他人との連帯を回復させようとする試みなのかもしれない。²²

この宇波の指摘にあるように、真に「神話」に「失われている他人との連帯を回復」させる力があるのなら、それは大変魅力的であるが、「作者」は知子に対して、「——あんたも都会人の見方をしてゐる」と反論を試みている。

ここまでは、『牧歌』における「日本の故郷」と「神話」というキーワードについて、知子に重きを置いて読解してきたが、次は「作者」の発言に注目していきたい。

第五節 「作者」の反論、「神話」「故郷」の相違点

知子の「日本の故郷を書かうとお思ひになつて、奥信濃までいらしてるんですね」という問いかけに対し、「故郷が書けたらいいが、まあ、あの故郷も、この故郷も、ただ素通りして歩いて、死ぬことでせうね。つくづく、あさましい根性ですよ」と「作者」は応える。また、知子の「日本の故郷」は必ずしも生まれ育った土地（日本、信州）でなくとも構わないという考え方に対する「そんな——あんたも都会人の見方をしてゐる」という発言は、知子の発言に対する「作者」のささやかな反論と見ることができだろう。

知子は、「日本の故郷」と「神話」をほぼ同義として捉えているが、そのことに対して「作者」は、反論を試みている。このことから、「日本の故郷」と「神話」との相違点も読み取ることができるだろう。

先にも確認したように、知子の「日本の故郷」、「神話」に関する発言について、「作者」は当初知子の「照れ隠し」ではないかという見方をしていた。これに対する「故郷が書けたらいいが、まあ、あの故郷も、この故郷も、ただ素通りして歩いて、死ぬことでせうね。つくづく、あさましい根性ですよ」という「作者」の返答は、知子の「照れ隠し」を「照れ隠し」で返しているとも見るができるが、その後の「——あんたも都会人の見方をしてゐる」という発言については、「作者」が知子に対峙しようとしている姿勢が窺える。

知子が言う、生まれ育ったところでなくとも「故郷」になるという発想は、実際の「故郷」とそれ以外のものが近似値になるという点で、小林秀雄の「故郷を失った文学」にある「何事につけ近代的といふ言葉と西洋的といふ言葉が同じ意味を持つてゐるわが国の近代文学が西洋の影響なしには生きて来られなかつたのは言ふまでもないが、重要な事は私達はもう西洋の影響を受けるのになれて、それが西洋の影響かどうか判然しなくなつてゐる所まで来てゐるといふ事だ」²³に通底するところがある。周知の通り東京で生まれ育った小林秀雄は、自分には「故郷といふ意味がわからぬ」²⁴という実感から、この「故郷を失った文学」を執筆している。そのなかで小林は、実際に生まれ育った故郷が故郷と感ぜられなくなること、故郷ではないところとの差異がなくなると述べている。これに対し、知子は、生まれ育ったわけでもない、縁故のないところでさえ「故郷」になり得ると言っている。そこに知子のより大胆な発想を見ることができる。

知子のいう「日本の故郷」は、「みんな一緒」になれること、そのことを可能とするために実際の「故郷」でない方が都合が良いということであれば、そこを「故郷」と呼んでも構わないというものだった。「作者」が知子と対峙しようと試みたのは、後者の縁故のない土地でさえも「日本の故郷」になり得るという点においてであろう。

留意すべきは、この点を批判したところにこそ、知子が「神話」と「日本の故郷」を同義とした考えと異なる「作者」の言う「神話」の特徴があるということである。

「作者」が知子に対して、「神話」という言葉を連呼するようになったのはきっかけがあった。「作者」は知子とともに戸隠神社の九頭龍社の前でその社名の由来とも言われる龍神伝説を思い起こしながら、自らが「太古」の風景の中に存在しているような夢を

はじめる。

この九頭龍社の御本体については、古来諸説紛々で、この美しい縁起も、その一つに過ぎないが、海神族を祀った、水の神さまだといふことは、おほよそ知れてゐるらしい。

このやうな山上に、龍神が住んでゐたのか。

してみると、「戸隠昔事縁起」にもあるやうに、知子と作者とが今歩いてゐる、この高原は、沼沢だった時があるのだらうか。更にその前には、湖水だったことがあるのだらうか。もしあつたとすれば、どれほど遠い太古のことか。

碧い鏡のやうな、山上の湖水に、鮮かに影を落して、岩峰のそそり立つ戸隠山の姿が、作者の心に見えて来た。その水の上に、白雲さへ漂ふ。

それは、まさしく神話だ。

なにか古い恐怖が、作者の体の底を厳そかに通る。それは、限りなく長い時の流れを一瞬に貫く稲妻のやうなものだ。

「限りなく長い時の流れを、一瞬に貫く」こと、「太古」と現在を重ね合わせることが「作者」の「神話」体験で重要な位置を占める。知子の言う「日本の故郷」では、こうした時間的なつながりよりも、共時的な「みんな一緒」になることがより重要視されていた。一方で、「作者」の「神話」体験は、知子をはじめ、他者との共有が難しい個人的な体験を超えることができず、その意味で知子のいう「みんな一緒」とは、ほど遠い現象となっている。

このように、「作者」の視点にたってみると、意味の異なる「日本の故郷」と「神話」が知子によって同義にされた理由はどのようなことだったのだろうか。そのことを追求するには、知子の思考に変化を促した「神楽」の場面に目を向ける必要がある。

第六節 旅人が「郷土」の向こうに「日本」を見る不可能性

第二章「戸隠の巫女」「巫女舞」(「婦人公論」一九三八年五月)には、「作者」と知子が桂子の舞う「神楽」を見る場面がある。

単調で無心であるゆゑに、それは典雅優麗で、遠い王朝の乙女の舞だ。

ふと知子を振り向いてみると、白い手を膝に握り合せてゐる。そして、深くうなだれた眦が濡れてゐる。

作者が眼をそらせる間もなく、知子は云つた。

「私——私も、ああして舞つたんですの。思ひ出しますの。」

その囁きは作者の胸に沁みた。知子の小さい巫女姿が、そこに見える。

それから、作者達の母も妹も、唳々たる楽の音に、緑袵紅裳を翻しながら、かうして舞つたことがあるかのやうに思はれて来る。

神韻縹渺とした日本の国土だ。

「もう長いこと、私、お神楽を見ませんでしたの。」

と、知子の純粋な声は微かに顫へてゐるやうだつた。

知子は、自分の巫女としての後継者である桂子の舞姿を見て、彼女にかつての自分を重ね合わせる。それは、「作者」の空想する「太古」と現在との距離から比べれば微々たるものかもしれないが、確かに時間を超えたつながりというものが表れている。「私——私も、ああして舞つたんですの。思ひ出しますの」という知子の発言からは、「作者」が見たという「知子の小さい巫女姿」を知子自身が見ていることを暗示している。

先述したように、九頭龍社の前で「作者」の行つた「太古」と現在を重ね合わせる夢想は、あくまでも「作者」の個人的な経験の域を超えることができないもので、そのために知子をはじめとする他者とは共有できるものを有していなかった。

では、「神楽」の場面における「作者」の行為はどのようなものだったのか。知子が神楽を見た後、「純粋な声は微かに顫へてゐる」とあるように、「作者」が知子の感慨を読み取ることができたのは、桂子が巫女として知子の後継であるという、はっきりとした継承の関係性が認められるからだろう。「それから、作者達の母も妹も、唳々たる楽の音に、緑袵紅裳を翻しながら、かうして舞つたことがあるかのやうに思はれて来る」、「神韻縹渺とした日本の国土だ」という発想は、一見なんの脈絡もない「作者」の個人的な夢想であるかのようにみえる。

しかし、「作者」は戸隠神社やそのなかの九頭龍社の起源を思い起こすとき、戸隠に伝わる「戸隠昔事縁起」だけでなく、「古事記」を自然と視野に入れている。

「古事記」では——この踊り、歌ひ、笑ふ騒ぎを、天照大御神が不審に思し召され、石戸を細目に開けて、御覧になつたところを、石戸の脇に隠れて待ち構へてゐた手力男神が、大御神の御手を取つて、お引き出し申し上げた。この時早く、布刀玉命が大御神のうしろに、注連縄を引き渡し、それから内へは、もう御入り遊ばせぬやうにした。

ところが、戸隠神社の縁起では、天照大御神が石戸を細目に開けて御覧になつた時、手力雄命が靈異の怪力で、いきなり石戸を引き開いて、投げ給ふと、その石戸は葦原中国に落ちて戸隠山となつた。だからこの山の又の名を、石戸山といふ。

巨人伝説の一つである。飛来伝説の一つである。

しかし、その伝説の研究や、縁起の詮索は、この小説の埒外として作者は、ただ伝説としても、縁起としても、これがいかにも傑作であると、雲の渦巻く岩峰を望んで感じれば、それでいい。

「古事記」には戸隠に関する記述が存在しないにもかかわらず、「作者」は、まず「古事記」について述べ、その後「戸隠昔事縁起」について言及し、両者を結びつけている。こうしたことから明らかなように、「作者」は、あくまでも天皇を中心とした日本統一の由来を記した「古事記」を念頭におくことで、戸隠地方の縁起である「戸隠昔事縁起」を捉えている。「郷土を知ることとは日本を知ることにもなる」という見立てのもとに『牧歌』が執筆されたことに立ち返ると、「戸隠昔事縁起」の独自性＝「郷土」を追究したうえで、「古事記」＝天皇によって統一された「日本」を捉え直すべきである。しかし、「戸隠昔事縁起」に取り込まれた「郷土」が「作者」によって追究されることはない。よって、「作者」は、「戸隠昔事縁起」について詳細に検討することはせず、「これがいかにも傑作である」と、雲の渦巻く岩峰を望んで感じれば、それでいい」というように、「古事記」と「戸隠昔事縁起」の繋がりのみを重視する姿勢を見せる。こうした両者の繋がりを重視する「作者」の発想には、「古事記」の伝承を受けた「作者」や「作者達」の母や妹が「戸隠昔事縁起」の伝承を受けた知子や通子とも繋がりをもちうるという飛躍が見られる。

しかし、『牧歌』における「作者」の「神話」体験に基づく連帯感とは、知子をはじめとする他者と共有されたとは言い難い。希求した連帯感が実現できなかったという事情があったからこそ、知子の「日本の故郷」という発言以降、川端は「故郷」、「ふるさと」ということを追求していったのではないか。それゆえに『牧歌』第三章の章題名も「ふるさ

とのうた」とされたのではないだろうか。

第七節 おわりに

ここまで見てきたように、『牧歌』は、「作者」の「神話」体験と知子から発せられる「日本の故郷」が物語の中心となっている。知子の「日本の故郷を書かうと思ひになつて、奥信濃までいらしてるんですのね」という言葉から、「作者」が信州を旅する意味が明確にされる。しかし、知子が「私は故郷を出て行かうとしてゐますのに……」と付け加えることで「日本の故郷」が戸隠にも存在しないことを「作者」は突きつけられる。そのような知子に対し、「作者」は、「故郷が書けたらいいが、まあ、あの故郷も、この故郷も、ただ素通りして歩いて、死ぬことでせうね。つくづく、あさましい根性ですよ」と言う。つまり、「作者」は、戸隠という独自の「郷土」から「日本の故郷」なるものを書き起こす願望が破れたことを認める。先に述べたように、「作者」は、知子とのこの会話以降、戸隠ではないトポスに「故郷」、「ふるさと」を追い求めることになる。それは、「作者」が今まで個人的に夢想していた戸隠における「神話」体験のなかで時間的なつながりを重視し、「限りなく長い時の流れを、一瞬に貫」き、「太古」と現在を重ね合わせることで「日本の故郷」を捉えることに限界を認め、知子のいう「みんな一緒」になることができる共時的な空間のなかに「日本の故郷」を見出そうとした結果であると考えられる。これは、「作者」の「神話」体験が知子をはじめとする「作者」以外の人たちと共有できず、「連帯感」を実現できなかったからである。「作者」は、こうした方向転換をすることで、知子が「作者」に発した「日本の故郷を書かうと思ひになつて、奥信濃までいらしてるんですのね」という目的を達成しようとしたのではないだろうか。知子のこの言葉を小説において、さらに明確にしようと試みた結果、第三章は「ふるさとのうた」と題されたのであろう。だが、この第三章「ふるさとのうた」は、昇華されることなく中絶というかたちで『牧歌』は、未完の小説として閉じられる。こうした中絶という結果からも明白なように、この試みは失敗している。これは、「旅人」である「作者」が固有の「郷土」としての戸隠から「日本」を書き起こすことに限界を認めたことを意味する。そしてその限界は、固有の「郷土」である戸隠に「日本の故郷」を見出したい願望と持つ「作者」と、同時代の戸隠には「日本の故郷」は存在しないとする地元の知子との齟齬に明確に表れている。つまり、『牧歌』は、旅人の立場である「作者」が信州という「郷土」を

追究することに限界が生じ、「故郷」なるものを見ることが叶わなかった物語だと解釈することができる。

川端は、『牧歌』と並行して同じ信州でありながら、戸隠とは異なる性格を持つ軽井沢を舞台とした小説『高原』²⁵を執筆している。『高原』におけるコスモポリタニズムを思わせる構想は、『牧歌』において川端がなし得ることができず、知子によって言及された「みんな一緒」になることが可能な空間を創造しようとした試みであると考えられる。川端は、一九三〇年代半ばにまず、時間的なつながりの追求よりも生まれ育った「故郷」とは異なったとしても、知子のいう「みんな一緒」になることのできる世界の創造を試みたのではないだろうか。それは、旅人という立場で固有の「郷土」から「日本の故郷」を書き起こすことに頓挫した結果、知子によって示された「日本の故郷」は実際に生まれ育った土地でなくても成立しうる、ということ川端自身が体現しようとした試みであったのではないだろうか。

1 『牧歌』の初出については、本論文序章の後に添付した「小説発表状況一覧」を参照された。

2 小林芳仁「『牧歌』論」（川端文学研究会編『川端康成研究叢書5』虚実の皮膜』教育出版センター、一九七九年三月、後「IX『牧歌』論」と改題して『川端康成の世界——美と仏教と児童文学と——』双文社出版、一九八五年一二月）に詳しい。小林は、初出と、『牧歌』の全編がはじめて一六巻本全集に収録された際に生じた章立ての修正と本文の改訂について整理したうえで、本文の改訂には、「時代的影響が反映されて」おり、「主に作品に登場する皇族方に対する修辭・敬語の簡略化、が目立つ」と指摘している。

3 『牧歌』の執筆期間が『雪国』と重なっていることは、金井景子「川端康成の郷土幻想——『牧歌』をめぐる一考察」（『媒』一九八四年一〇月）において、「さて、この時期には周知の通り、越後湯沢を舞台にした『雪国』の続稿、あるいは軽井沢に焦点を絞った『高原』も同時平行的に執筆されている」と言及されている。また、田村嘉勝も「『牧歌』——研究の現在と今後の展開——」（『川端文学の世界2』その発展』勉誠出版、一九九九年三月）において、「『雪国』発表が、途中『牧歌』発表をあいだにはさんでいたという事実は意外と知られていない」と指摘している。

4 この点については、本論文第六章「雪国」——「北越雪譜」の位相と地名回避の効果——において言及している。

5 拙論「川端康成の信濃——信濃に「故郷」を見る試み——」（大原祐治編「日本文学と故郷／郷土（二〇一三～二〇一五年度）千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書 第二九七集」二〇一六年二月）では、旧版『雪国』刊行から、「雪中火事」を発表するまでの「三年半の空白期間」に着目し、その間、川端は、信州に「故郷を見る試み」をしていたことを論じた。

6 川端香男里編「年譜」（三七卷本『川端康成全集 第三五卷』新潮社、一九八三年二月）

7 川端康成「信濃の話」（『文学界』一九三七年一〇月）

8 この頃の郷土の捉えられ方として、例えば白鳥庫吉は「日本民族の由来——郷土研究の出发点——」（『郷土』一九三〇年十一月）において、「我々にとつては各自の生れ故郷も郷土であるが、日本人としてはこの日本国が一つの大きな郷土である」と述べている。

9 『牧歌』第二章の戸隠を舞台としたところのみが「戸隠の巫女」として独立した形で採録された『高原』（甲鳥書林、一九四二年七月、甲鳥書房、一九六九年二月）は、信州を舞台とした小説と随筆がまとめられた本である。

10 深澤晴美「『婦人公論』「中央公論」における川端康成——時代との交点を探って——」（『和洋女子中学校・高等学校紀要』一九九九年四月）

11 中野重治「へわが文芸時評②」合法性と「牧歌」（『東京日日新聞』一九三七年六月二九日、後『楽しい雑誌第二』筑摩書房、一九四八年二月）

12 川端康成「作者の言葉」（『婦人公論』一九三七年五月）

13 注10 深澤晴美「『婦人公論』「中央公論」における川端康成——時代との交点を探って——」では、三七卷本『川端康成全集 補巻二卷』（新潮社、一九八四年五月）に収録された川端と藤田の書簡（一九三四年六月一四日付～一九七〇年九月一二日付）について言及し、藤田と川端の親しい関係性を指摘したうえで、「『牧歌』「日も月も」の発表、『級長の探偵』の刊行も、藤田の編集の下で為されていたことが確認できる」と「昭和八年一月入社、秋頃から「中央公論」で川端の担当となり、十年から「婦人公論」へ移動した藤田の存在を重視している。

14 注12に同じ。

15 拙稿「牧歌」研究史」（羽鳥徹哉、林武志、原善編『川端康成作品研究史集成』鼎書房、二〇二〇年九月）で『牧歌』の先行研究については、詳しく整理した。

16 川端康成「あとがき」（『川端康成選集 第九卷』改造社、一九三八年十二月）

17 注3 金井景子「川端康成の郷土幻想——『牧歌』をめぐる一考察」に同じ。

18 竹内清己「続・堀辰雄と川端康成——軽井沢時代、戦後——」（川端文学研究会編『川端文学への視界7』教育出版センター、一九九二年六月、後「不幸の最高の形式——邂逅・堀辰雄と川端康成——」と改題して『堀辰雄と昭和文学』三弥井書店、一九九二年六月）

19 田村嘉勝「雪国」に求めた「日本の故郷」——竹内清己氏の発表にヒントを得て——（長谷川泉、平山三男編「解釈と鑑賞別冊」川端康成「雪国」60周年」至文堂、一九九八年三月）では、戸隠というトポスに対する「作者」と知子の認識の違いを次のように整理している。

「作者」にとって「日本の故郷」は奥信濃であつたはずなのに、「知子」はその故郷を出ていこうとしている。東京に住む「作者」が、東京は既に軍事一色であるものの、信濃にはまだ『牧歌』があると信じてきたはずが、柏原の駅に降りて知子に会った瞬間に、「戦争ですね」という。東京で信濃を「見ていた作者」は、軍歌によって故郷を失った東京とは異なり、この奥信濃に「日本の故郷」が存在すると信じてやってきたのである。しかし、既に「知子」は、この「故郷を出て行かうとして」いるし、また、満州に渡った「知子」の兄に対しても、彼女は「ええ。兄は戦地で、反つて日本の故郷を見つけてゐるかも知れませんわ」という。「知子」にいわせると、この奥信濃にも「日本の故郷」はないということになる。

20 大原祐治「裂罅としての郷土／幻視される故郷（下）——川端康成「牧歌」について——」（『学習院高等科紀要』二〇〇六年七月、後「第三章 裂罅としての故郷／幻視される故郷——柳田國男と川端康成における「信州」——」と改題して『文学的記憶・一九四〇年前後——昭和期文学と戦争の記憶』翰林書房、二〇〇六年十一月）

21 成田龍一『「故郷」という物語——都市空間の歴史学——』（吉川弘文堂、一九九八年七月）

22 宇波彰『引用の想像力 新装版』（冬樹社、一九九一年五月）

23 小林秀雄「故郷を失った文学」（『文芸春秋』一九三三年五月）

24 注23に同じ。

25 『高原』については、本論文第二章「〈幻想〉の「^{ユウトビア}軽井沢」で見る〈日本〉——「高原」における日中戦争下の〈知識人〉／血のゆくえ——」において論じる。

第二章 〈幻想〉の「ユウ軽井沢」で見る〈日本〉
——『高原』における日中戦争下の〈知識人〉／血のゆくえ——

第一節 はじめに

『高原』は、一度結婚に失敗した三二歳の須田が日中戦争勃発直後の軽井沢で、姉の紹介で出会った洋子との縁談の日々を過ごした「一夏」を描いた連作小説である。

テキストは、三年に亘って次のように発表された。

初出	初刊以降
①「高原」(「文芸春秋」一九三七年一月)	『高原』一、二
②「風土記」(「改造」一九三七年一月)	三
③「高原」(「日本評論」一九三八年二月)	四
④「初秋高原」(「改造」一九三九年一〇月)	五
⑤「樅の家」(「公論」一九三九年二月)	六

①～⑤の初出に『高原』というタイトルが付され、章立てが整理されたうえで、始めて刊本に収録されたのは、『川端康成選集 第九巻』(改造社、一九三九年一月)においてであった¹⁾。これに倣い、本章においても特に断りなく『高原』と記した場合は、連作全体を指すものとする。

川端は、『高原』の生成について「あとがき」(『川端康成選集 第九巻』前掲)で以下のように述べている

この最終巻がことのほかおくれたのは、ただ私の怠慢のゆゑであつて、読者にも改造社にも深くお詫びしなければならぬ。それといふのも、「高原」や「花のワルツ」の完成を待ちたいがためであつた。(中略)

「高原」は、切り散らかして分載したのはまだしもいいとして、その執筆の年月が三ヶ年に亘つてゐる。おそらく首尾の整つてゐない点もあらう。最も困つたのは、軽井沢の三年の夏の印象が入りまじりさうでならなかつたことである。「高原」は支那事変の始まつた年の夏を書いてゐるが、その後の二度の夏を迎へる間には、事変の拡大につれ、また欧州戦争の勃発によつて軽井沢の様子も変つた。しかしこの作品の「時」は一夏に限つたつもりである。

川端の述べる通り、『高原』には明らかな季節の変化は見られず、物語内の時間は「支那事変の始まった」「一夏（より精確に言えば夏／＼初秋）に限られている。森山啓によると「小説は、「事変」を直接反映することが比較的遅れ」²。ため、一九三七年一月号の雑誌から日中戦争を反映したものが現れ始めるという。『高原』もこの月から雑誌への発表が始まることから、かなり早くに「事変」を取り込んだ小説であった。

まずは『高原』の主な先行研究を確認しておきたい。大森郁之助は、『高原』における「風土の意味」に着目し、テキストの舞台となる軽井沢を「他の風土によって代替し得ない」、「不可欠な構成要件」であるとし、「ここでの風土は、主人公にとって、〈異質〉として保たれ、隔てられて在るべき、〈異質〉」³であると結論づけた。一方、須田の背後に川端を措定し、須田の日中戦争観をテキストから読み取ること、川端における日中戦争を意味付ける論考も確認できる。羽鳥一英（徹哉）は『高原』を「川端としては珍しく現実的な筆致で、日本人と西洋人の人間性の相違などを考察した、文明批評的性格を持った小説」としながらも、その中心には「混血の美少女への、いかにも川端的なすべてを忘れたような感覚的憧憬」があり、「この世界にすべて人種差別がなくなり、混血の世界が現出したら、という夢」を確認できることから、「本質的なコスモポリタニズム」⁴を小説に見出している。小川和佑は、「川端康成の文明観は日中戦争に触発されていることは「高原」を読むかぎりにおいて確実である」⁵と『高原』に川端の文明観と日中戦争の関係性を読み取る。日中戦争下を軽井沢で過ごす須田の内心に注目した小林一郎は、『高原』における「軽井沢という信州の高原」と「戦争という、これ又、極めて異様な状態」に着目し、「自然と、洋子との間に醸し出す人間最後の青春に傾斜して行く須田の心」が「冷静に日本人と外国人の姿態との対比を通して、「戦争」という時代を越えて行くものを探つ」⁶た小説だと論じた。この小林の論点を引き継いだ森晴雄は、『高原』を「「根なし」の人々の集まりである軽井沢を舞台に戦争と須田の個人的な再婚をからませながら、日本と西洋の比較をし、二つの世界をまとめるものとして、また、須田自身の寂しさや孤独を紛らすものとして混血を見出し、自らの個人的な、また、社会的な考えのまとまりをつけようとしたもの」⁷であると論じ、「混血」を須田の「寂しさや孤独」という個人的な感覚を「紛らすもの」だと位置づけた。

二〇〇〇年代に入り、『高原』は新たな視点から論じられることになる。松本和也は『高原』が三年に亘り発表された「時差」に着目したうえで、その間の「文芸時評」を分析し、「昭和一〇年代の文学場」の様相を検討した。『高原』は、創刊間もない「公論」を除き、

既に著名な文芸誌や総合誌に発表されたため、同時評も多数確認できる。松本によると「日中戦争をモチーフとした初出『高原』連作および川端の積極性は、その後二年のうちに捨象され、川端らしい美的芸術として評価——位置を確保」していき、「特定の作家・作品（川端『高原』連作）に対しては、日中戦争の社会性や現実的具体性を捨象」することで「その内部に『美』を配置し、確保しようとする真逆の動き」⁸が見られるという。こうした川端のテキストから「美」を看取する評価は、現代の川端文学研究とも共通項を有しており、ステレオタイプの一端が感じられる。「日中戦争」が直接書き込まれた『高原』においても、小説に内在する同時代性が積極的に読みとられにくい傾向であったことが明らかにされた。松本と同様に、同時代性に着目した大橋諒也は、『高原』における「地方」の位相や「混血」に着目し、それらに関連する当時の言説を検討したうえで、「混ざり合う『血』が日本の要素を更に高める」という指摘をしている。

本章では、以上の先行研究の成果を踏まえ、『高原』が「支那事変の始まった」一九三七年の「一夏」を舞台にしたテキストであることに注目し、次の二点を明らかにすることを課題とする。一点目は、〈知識人〉の須田が「四十ヶ国程の人種」の「雑居」する日中戦争下の軽井沢というトポスで、〈西洋人〉をどのように見つめていたかという点である。二点目は、小説において複雑に提示されている同時代の血をめぐる議論について、結婚問題を抱えた須田がどのような思考を示していくかという点である。

そこで、『高原』の語り手である須田という人物についてあらかじめ確認しておきたい。須田には、「三十そこそこでありながら、早婚に失敗」した過去があり、姉の勧めた洋子との縁談のために、日中戦争勃発直後の「一夏」を軽井沢で過ごしている。「フランス法科」出身でありながら、「その方で就職出来なかつたので、私立の専門学校の英語教師の口にあつたのが現在まで続いて」いる。しかし、「英語教師」であるにもかかわらず、「外人達と、決して英語で話さうとはしな」といふ人物である。こうした経歴からも明らかなように、須田は日中戦争下を生きる〈知識人〉だといえる。そして、留意すべきことは、自らに「白人種崇拜の滓」が残っているという自覚があることである。勃発したばかりの日中戦争については、「毎日の新聞記事以上に知つてゐるわけではない」というように、自分から積極的に時局と関わっていく姿勢は見受けられない。こうした須田の言動からは、門屋博が『時局とインテリゲンチヤ』（全日本司法保護事業連盟、一九三八年四月）のなかで、一九三七年一月に中国（支那）の皇軍慰問から帰った直後に「日本に帰りましてから、私は、青年諸君、特に学生層の中に流れてゐる、戦争に対する無関心、消極主

義等を眺めまして、その気魄の低調さに失望しました」¹⁰と述べているような、当時の若い〈知識人〉たちが共有していた感覚を須田も持ち合わせていたことがうかがえる。

次に、日中戦争の勃発した一九三七年の〈知識人〉たちの様相を確認していきたい。河田和子によると、満州事変以降、日中戦争が始まった一九三七年は、「〈日本的なもの〉」に対する議論がもつとも隆盛した一年であったという¹¹。そして、河田は多様な見方が混在¹²した「日本的なもの」をめぐる議論のなかでも「外来文化、特に西洋由来のものを如何に内面化（＝日本化）して新しい日本の伝統や思考を形成していくかということが、文学者や哲学者ら知識人の間で思案されていたことは看過されやすい」¹³ことに注意を促している。こうした河田の指摘を裏付けけるものとして、例えば、小林秀雄は「事変の影響するところ、西洋模倣の行詰りを言ひ、日本独特の文化の建設を叫ぶ声高い説が沢山現れた」¹⁴ことを指摘している。文壇に目を向ければ、一九三七年には同時代における〈西洋〉と〈日本〉のあり方の本質に迫ろうとした横光利一の『旅愁』の新聞連載が開始されたことも特筆される¹⁵。つまり、日中戦争が勃発した一九三七年を生きる〈知識人〉たちは、それぞれの方法で〈西洋〉を経由し、あらためて〈日本〉なるものを発見しようとする渦中にいたのである。

こうした時代背景を踏まえたうえで、川端が〈知識人〉である須田を語り手に据え、一九三七年に時を限定し、日本の西洋ともいふべき軽井沢を舞台にしたうえで、血をめぐる議論を『高原』で展開した意味は、改めて考える必要がある。

次節では〈知識人〉の須田が日中戦争勃発直後の軽井沢というトポスをどのように捉えていたかについて検討していく。

第二節 〈幻想〉のユートピアとしての軽井沢

まずは、避暑地軽井沢とはどのような場所なのか、ということについて概観¹⁶しておきたい。

一八八六年、カナダ人宣教師のアレクサンダー・クロフト・ショーとスコットランド人で東京文科大学教授のジェームス・メインディクソンが軽井沢を訪れた。彼らが家族や友人に軽井沢を紹介することで、二人に続く外国人避暑客の別荘が建てられ、避暑地軽井沢は形成されていく。その先駆けとして、一八九一年イギリス公使館別荘が建つ。一八九三年には、横川——軽井沢間のアプト式鉄道が開通し、上野——直江津間が鉄道で結ばれ、

朝に東京を発つとその日のうちに軽井沢に到着することが可能となった。東京からのアクセスが容易になったことで、軽井沢は日本人にも注目されていくことになり、日本人の政治家、実業家らの別荘の建設も相次ぐようになる。小松史生子は、軽井沢のトポスの特性について以下のように述べている。

リゾート地開発の一方で、学問の地としても拓かれる軽井沢——それは文化というもの、が、教養（アカデミズム）と娯楽（エンターテイメント）の二面性を併せ持つ構造体であることを示す一端の表れである。そして、このような文化の二面的構造体を如実にアピールしたトポスは、軽井沢の他には日本列島においてほとんど見当たらない。このようなトポスであるが故に、軽井沢は追分方面を中心に、学士村とも言えるコミュニティが形成されており、室生犀星、堀辰雄、立原道造、川端康成、正宗白鳥等といった作家達に愛されたことは夙に有名である。彼らの文学がしばしば軽井沢を舞台に描かれることから、いつそう軽井沢に文化の理想郷を夢想するイメージの回路が、一九二〇～三〇年代にかけて固定し普及する¹⁷。

ここで小松は、軽井沢の持つ二面性を「教養」と「娯楽」の共存に見出し、その特性の延長上に「学士村」のコミュニティの形成を位置づけ、その構成員ともいふべき作家たちの小説には「軽井沢に文化の理想郷を夢想するイメージ」があるという共通項を見出している。

では『高原』は、このような軽井沢の持つイメージの延長上にある小説なのだろうか。日中開戦直後の軽井沢はどのように『高原』の作品世界に表れているのだろうか。これまでに『高原』における軽井沢については、「保たれる異質」¹⁸や「時局性を失った」空間¹⁹という捉え方がされており、松本和也も「軽井沢とは、半透明²⁰よろしく日中戦争という具体的現実を認知しつつも、その現実性を排し、間接化することで成立した空間として設定されており、作中人物も日中戦争に対してそのように処している」²⁰と整理している。各論者が指摘するように、軽井沢は直接戦場になることはなければ、物語内の時間は日中戦争勃発直後であり、戦いが激しくなる前の一九三七年の「一夏」に限定されている。

しかし、こうした特性を持ちつつも、軽井沢にも及ぶ時局の波は小説に書き留められている。本節では、〈知識人〉の須田が日中戦争下の軽井沢に身を置いていることに着目し、須田の眼を通して描かれた一九三七年の軽井沢における諸問題について検討していき

い。

『高原』において、日中戦争勃発前の軽井沢は、以下のように紹介されている。

軽井沢には、土地に別荘を持つ人々の避暑団といふものがあつて、町政や警察の上にも勢力を及ぼしてゐるが、以前は外人、それも宣教師が主であつたから、なにかと口喧しく几帳面なものだつたらしい。西洋人の避暑団が殆んど町政を握つて、店の品物の原価を調べては売価を制限した頃もあつたといふ。今もパブリック・コオトは日曜にとざされる。商店が休むのは基督教書店など一二軒に過ぎないが、元は大方の店が半ば強制的に日曜休業をさせられたといふ。教会は現在四つある。

やがて日本人の贅沢な避暑地となり、外人も大公使館員や商人が入り込むにつれて、宣教師達の山小屋風の別荘は追々日本人の手に買ひ取られてゆくけれども、秩序と公德を尊ぶ宣教師達の美風は残つてゐて、今も割と静かな賑はひである。自転車、乗馬、テニス、ゴルフ、水泳など、スポーツ風な遊びの外には、娯楽の設備が殆んどない。脂粉の匂ひは全くない。映画館とか喫茶店とか都会風な空気になじんでゐる子女はゐたたまれぬ程である。

まず、ここに表れているのは、日本のなかの〈西洋〉というべき避暑地軽井沢の姿である。この引用箇所が続いて、「醜いやうな西洋人崇拜は皆無に近く、外人は必要欠くべからざる色どりに過ぎない」というように、〈西洋人〉は、軽井沢というトポスに自然と溶け込む存在であると須田は認識している。こうした性格を持つ避暑地軽井沢においても、日中戦争の波動は、須田の〈西洋人〉への眼差しにも表れはじめる。

須田の姉は「通州の事」があつたので、「支那人には一切刃物を持たせぬ」という「奇怪な噂」を須田に伝える。「通州の事」とは、一九三七年七月二九日に起きた冀東防共自治政府保安隊が日本軍及び日本居留民を襲撃した事件のことである。八月一日の「信濃毎日新聞（夕）」においては、「通州の保安隊反乱／居留地に相当の死傷／我空再三に亘つて爆撃」²¹とあり、激しい応戦の報道がある。須田と姉は、会話のなかで、「支那人」に刃物を持たせないという提案をしたのは「外人」だったのではないかという結論になる。

日本人でなくてよかつたと思つた。外人にしても信じられぬことだが、或ひは外人ならさういふことがありさうな氣もした。

須田は支那人の立場に同情するといふよりも、なんとなく本能的に腹が立つた。白人の有色人種蔑視から生れた警戒心には、この刃物禁制のやうな非常識な現れが、ほかの土地にもあるからである。

須田は、「刃物禁制」²²について「本能的に腹を立」てているが、これは、「白人の有色人種蔑視」を「日本人」である須田自身が自覚し、「白人」のこのような振る舞いを「非常識」であると捉えているからである。ここで留意しておきたいことは、須田の思考は、刃物を取り上げられている中国人ではなく、「白人」の「外人」に向いていることだ。ここには、「秩序と公德を尊ぶ」側面は尊敬できても、「有色人種蔑視」をする「白人」とは決して相容れないという須田の感覚が如実に表出している。

「日本人でなくてよかった」という言葉から看取されるように、『高原』には、「白人種崇拜の滓」を残した〈知識人〉の須田が、軽井沢に「雑居」する〈西洋人〉の振る舞いを評価したうえで、〈日本〉を捉え直す思考が繰り返し描写されている。須田の脳裏にうずまくこのような思考は、先の引用でも「支那人」が媒介しているように、「日本人」対「白人」(＝〈西洋人〉)という単純な二項対立の構図に収斂しない。「四十ヶ国程の人種」が雑居する避暑地軽井沢に身を置いてこそ、須田の〈西洋人〉への眼差しはより広範な比較対象を有しながら、鋭敏で複雑に展開し、その過程を経て〈日本〉を捉え直していく。

『高原』には、「東洋学者」のロバート・ライシヤワ博士が上海における「支那空軍の租界爆撃」で没したことが新聞記事の引用²³によって挿入されている。さらに、博士が三十一歳ながら、母校のプリンストン大学で日本語の講座を担当していることや、「上代日本史」という大著を上梓したという経歴も併せて紹介されている²⁴。この上海租界で没したライシヤワ博士について、特に強調されていることは「博士ほど日本を知り日本に親しんだ学者は、アメリカにもさうはゐないので、まことに惜むべきだ」という点である。第二次上海事変が勃発し、甚大な被害が出ている²⁵なかで、『高原』ではその様子をテキストに取り込む際に、ロバート・ライシヤワ博士の訃報を知らせる新聞記事が選択されている。この意味については、「戦争のすぐれて現実的な局面である死傷者というモチーフ」が「外国人」によってのみ書き込まれていることから、「日中戦争は確かに認知され書きこまれながらも、その現実性に向き合う契機は周到に排されている」²⁶との指摘もある。

ここで、上海租界でのライシヤワ博士の死が『高原』に書き込まれた意味について考え

てみたい。連作第一作「高原」の掲載誌である「文芸春秋」（一九三七年十一月）の誌上では、博士の死が次のように取り上げられている。

然し博士と日本との関係を見る時、宿命の意図は更に深い。新聞は博士を親日家と報じたが、そんな生ぬるいものではないのである。博士は東京に生れ育ったその少年時代から通算すれば、三十で終ったその生涯の、実に三分の二を日本で過した。彼はこの得難い便益を私せず、その一生を献げて日本の理解と紹介とに尽し、その若さにも拘らず、既に米国に於ける日本学の第一人となつた。彼は米国に日本を正しく理解せしめる仕事を通して「世界の平和」に貢献する事を最大の念願としてゐた。この彼が吸ひよせられた様に来て、日本、のたづさは、戦禍の中に身を果てたのである。宿命といはざるを得ない²⁷。

右の引用の続きには、「従来も米国の大学に東洋学の講座はあつたが、講ぜられたのは専ら支那学で、日本に関するものは一つもな」く、「少く共一つの理由は適当な教授のなかつた」ためであり、「博士は正に待望の人」²⁸であつたとされており、博士が没したこゝへの無念が克明に記されている。

『高原』では、ロバート・ライシヤワ博士の父が「教派の監督でもあつたところから、支那空軍の租界爆撃のこの犠牲は軽井沢の外人を悲しませることが尚強かつた」と博士と軽井沢との関わりも無論言及されている。とはいえ、『高原』においてロバート・ライシヤワ博士の死がテキストに挿入された理由は、「日本を知り日本に親し」み、「米国に日本を正しく理解せしめる仕事」をなす存在であつた博士が没した〈知識人〉たちのなかに広がる衝撃にあると考えられる。そこには、〈西洋人〉と相容れることは決して不可能であると考えながら、「日本を正しく理解せしめる」存在であつたロバート・ライシヤワ博士の死に、強い衝撃を受けざるを得ない須田をはじめとした〈知識人〉たちの矛盾を垣間見ることができる。

『高原』には、日中戦争下の時局が通底しており、「急に強まつた戦時の空気は避暑地にも及ばぬはずはなく、軽井沢でも、本通に千人針の娘が立ち、応召者の見送りがあり、また別荘の人々だつて家族から出征兵を出してゐることは同じ」である。そのようななかでも、須田は軽井沢の「小山や林のなかの町」に「明るく静か」な様子を看取し、「日本の健康」なるものを見ている。それは、「軽井沢などへ来てゐるやうな外人よりは、日本

の娘達の方が圧倒的に明るく健か」である、という須田が「外人」と比較して「日本の娘達」を見た際に生じる感覚である。

日中戦争拡大の渦中にあつても、軽井沢に「日本の健康」なるものを見ている理由を須田は、姉との会話から見出す。

「そりやあ皆さん、根なしなんだもの。」

と、姉は一蹴した。

「根なし？」

「だつてさうでせう。ここに生活の根をおろしてるんぢやないんだもの。どつちかつて云へば、根のある人も根を切つてここへ軽い体で来てる。」

「そんなことは分かつてるさ。」

「軽井沢だつて化物の町だわ。人間のあるところは、どこだつてさうよ。」

須田は黙つて姉の顔を見た。

須田は三十二だが、西洋風な数へ方をする、死んだロバート・ライシヤワ博士と同年のわけだらう。比較的早く結婚してそれが破れてからは、その隙間を反つて空想的なもので満たしてゐるやうなところもある。

須田の姉は、避暑に訪れる人達を軽井沢には「生活の根」をおろしていない「根なし」であるという。つまり、ここにおいて軽井沢は、夏の間の一時的な保養地であることが強く打ち出されると同時に、須田の見る「日本の健康」なるものはあくまでも「空想」であることが突きつけられる。

こうした須田の「空想」と並行して、小説には、日中戦争による避暑地軽井沢の変化も書き込まれている。須田の見合い相手である洋子は、「南アメリカの小国の領事の自動車」を見かけた際に「「大国の外交官は、戦争で大方東京へ帰つて、あんな国の領事だけがひまなんですよのね」と、例年訪れている外国の要人が日中戦争のために避暑に来られない実状に言及する。一九三七年における諸外国の要人の避暑の実態を「信濃毎日新聞」から確認しておこう。七月一四日「家族だけの避暑地／あわたゞし名士連の往来」²⁹では「軽井沢の夏は今年は例年より早く蓋開けされ東京方面よりの出張商店も六月下旬から先を競つて乗り込んだが北支事変に崇られて其の後避暑客は一時中絶の形」となり、「尚例年最も出足の早い各国外交官も事変勃発のため英、米、独、土各大使館及びチエツコスローバ

キア、ポルトガル公使館の家族が来てゐるだけで大公使は未だ一人も顔を見せてゐない」と例年とは異なる避暑の様相を報道している。八月四日の「軽井沢便り／滞在中の名士」では、八月二日までに軽井沢滞在が確認された一二の国の要人に関する名簿³⁰が掲載されている。また八月二六日の「国際人コンクール／ソ連人は避暑がお嫌ひ？／今年は全世界人が落合ふ」には次のような報道が見られる。

今年は日支事変に影響されて近衛首相始め政界財界の有力者^マ中未だに來輕せぬもの多く外人避暑客が前年より減じて居るのも之れがためだが今年特異な現象としては新たにメキシコ、パナマ、サルヴァドル、アフガニスタン、シヤム、ニュージールランド、ノルエー、アルゼンチン、リトヴィアポリビヤ等の諸国人が來輕滞在して居るに反し例年二百名以上に上る支那人が僅に九十四名でソビエト人が一名も姿を見せぬ等である

こうした新聞報道からも明らかのように、避暑地軽井沢といえども、日中戦争の影響は確実に及んでいる。しかし、須田は「四十ヶ国程の人種が雑居して高原の爽涼を楽しみながら、目につく摩擦もなく夏を過してゐるのは、当然のことだが、考へやうによつては異常なこと」と認識しながらも、「夏ばかりでなく、軽井沢ばかりでなく、世界中到るところが年中かういふ風にあらゆる人種の自由な雑居であるならば、世界は今より平和であらうかとは、一応空想される」というように、日中戦争の拡大に伴い、「空想」は高まりを見せていく。須田は、軽井沢の雑居に「とにかくなにかしら地上の意味ある一点」を見出す願望を示しているが、須田が「空想」を伴いながら眼差す軽井沢も、「休養季節の消費生活による平和」でしかない現実が小説には書き込まれている。

須田と洋子は、アメリカ人と二世の日本娘が腕を組んで歩いている場面に出くわす。須田は、二世の日本娘について「官能的に盛り上つた背から腰への肉や、人工的に見開いたやうな眼は、一見して日本出来の体つきではない」というように、二世だと判断される特徴を鋭く洗い出す。

「第二世なんかはここへ来て、故郷へ帰つたやうな気がするかもしれませんね。」
「でも、幸福つてものがあるんでせうか。」

と云ひながら、洋子はちよつと頬を赤らめた。

「ないやうな気がなさいませんか？」

「混血児に近いですからね。しかし、世界中が混血児ばかりになつたらどうですか。遠い未来には、さうなるかもしれませんよ。」

「おお厭だ。」

この洋子との会話を須田は再度思い出し、以下のように考える。

しかし、さういふ遠い未来が、果してほんたうに来るであらうかと、須田は本気で考へてゐた。所詮は実現する日のなく、これもまたユウトピアの一つであらうか。外人の多い軽井沢にゐるからこそ、こんな夢想も生れるにちがひなかつた。

〈日本〉の血を有しながら、外国（どこの国かは名言されていない）で生きてきた二世にとって、「四十ヶ国程の人種が雑居」する軽井沢は、「故郷」になり得るのではないかという須田の言動は、一見「コスモポリタニズム」体现の願望とも受けとれる。しかし、「二世」を「混血児に近い」存在だと捉える須田が思考する軽井沢の雑居の問題は、「混血」に焦点化しながら小説の後半で追究されていく。混血については、第四節で後述するが、ここでは須田が人種の雑居する軽井沢を「二世」にとって「故郷」になりうると発想する点に注目しておきたい。

須田は、軽井沢で夏に一時的に行われている雑居を尊びながら、それを恒久的な営みとする不可能性も自覚しており、そうしたものは「ユウトピア」（『どこにもない場所』³¹）であることを再認識する。須田が雑居を「夢想」する要因は「外人の多い軽井沢にゐるからこそ」であるが、その軽井沢においても雑居に「摩擦」が生じていることがテキストには示されている。

軽井沢でも、例へばドイツ人はイギリス人やフランス人に厭がられ、あの闊達さうに見えるアメリカ人は、それが一番露骨で、隣りがドイツ人だと、別荘を借りるのを止めることもある程だから、さういふ偏見が相当アメリカに行き渡つてゐるならば、今後もヨーロッパの戦争の場合、アメリカがイギリスやフランス側に立つのは、自然の感情だと思はれる

平和を保っているかのような軽井沢においても、一九三七年の世界情勢を反映した「摩擦」は確実に生じており、そうした軽井沢の姿も須田は確実に内面化している。一見、須田は、日中戦争下という非常事態においても軽井沢で同時代の抱える課題と距離を置き、「空想」や「夢想」を伴いながら過ごしているように見受けられる。

しかし、人種が雑居する軽井沢に滞在するからこそ、須田は「白人種崇拜の滓」を残す〈知識人〉という立場から〈西洋人〉を観察し、〈日本〉を捉え直していく過程で「雑居」や「混血」の問題を位置づけていく。

つまり、須田は軽井沢に「空想」や「夢想」のみを見ているわけではない。〈西洋〉という存在を経由したうえで、〈日本〉を内面化するという同時代的課題を抱えた〈知識人〉の立場から、一貫して須田は軽井沢というトポスを見つめているのだ。

第三節 須田の血の継承

『高原』における血の議論は、主に二つの問題に集約される。一つは須田自身の血の継承であり、もう一つは、「混血」の問題である³²。

『高原』には、終始須田の結婚問題が描かれている。先述のとおり、そもそも須田の軽井沢滞在の目的は、洋子との縁談にある。大橋諒也は、須田にとっての結婚は「戦時下において国家が奨励した家制度に収まることができるかどうか——すなわち「社会的無用人」を脱することができるかどうかという岐路」³³だと指摘している。大橋の指摘の通り、一夏を軽井沢で過ごせるだけの余裕を持ち、生活のなかで頻繁に「空想」を取り込みながら過ごしている須田にとって、結婚とは現実的な生活に主軸を移すことであるだろう。

本節では、須田の結婚相手である洋子との関わりに着目し、須田自身の血の継承の願望が小説においてどのように表れているのかを論じていきたい。「三十二」の須田と「二十五」の洋子では、今後結婚の話がまとまった場合、二人の血を分けた子孫を残すということも十分に考えられる。

しかし、洋子との結婚問題においても日中戦争の影は色濃く表れ、それは洋子の友人である桂子の存在によって小説に明確に浮上する。桂子は、新婚間もない夫の出征を見送ると、オートバイで東京から軽井沢へやってくる。「第一乙」の須田は、そのような桂子の境遇を話す洋子から「あなたはいつ出征するかもしれないから」、「婚約も結婚もしてはならぬ」という警告を受けているかもしれないと捉える。その上で、須田は「この人と結

婚したらどんな風な家庭生活をすることになるのか見当がつかぬ」というように、洋子との結婚に微妙な態度を示している。しかし、洋子の肉体を目の前にした時、須田は自らの血を継承する願望に気付かざるを得ない。

もしものがあつた後で、このやうに美しい女が肉体で須田を思ひ出してくれたらといふことは、生命の溢れた空想だつた。

また、別れた妻には子供がなかったのだから、今洋子をつかまへなければ、自分の子孫をこの世に残しておくといふことは、遂に出来ないかもしれぬ。若い未亡人や孤児の世路艱難を未然に防がうなんて、種の保存の本能の前では、けちな道德ではなからうか。

須田の志向は、洋子の「肉体」に向いている。それは、洋子の「肉体」が須田の血を継承する「種の保存」ために必要不可欠だからである。こうした自らの願望を満たす観点から、須田は洋子を結婚相手に想定することを可能にしている。しかし、須田は、姉に洋子の印象を聞かれた際には「「本をなんにも読まないで、なんでも知つてるお嬢さんは、かなはんね」と洋子に対する姿勢を明らかにしており、快活な洋子と〈知識人〉である須田の交際がかみ合っているとは言い難い。洋子の言動は、しばしば須田に戸惑いを生み、二人のズレは増幅する。

須田と洋子は、英国の貴族で盲目の婆さんと道で出くわす。洋子によると、その婆さんは英国の貴族であるにもかかわらず、日本での慈善活動のために、普段から自分の生活を切り詰め、皆から尊敬される存在である。須田は、信仰のためであつたとしても、こうした生き方に感銘を受けていることを素直に洋子に伝える。すると洋子は、「戦争が一番いいんですつて、信者を獲得するには」と戦争が布教活動には絶好の機会であるという考えを示す。自分も出征するかもしれないという立場の須田は、洋子が「なんの感慨も批判もなささうな明るい声でこんなことを云ふ」ことが「不可解」であり、「つつましく夫の出征を見送る日本の女とは、同じ国の娘とは思へぬ程ちがふ」と益々「不可解」さを募らせる。また、戦争によって男性の人口が減少し、結婚難であることから、須田が再婚であることを洋子が問題にしていけないことに関しても、須田は次のように受け止めている。

洋子が須田の過去にこだはらないばかりでなく、彼女自身の思ひ出といふものも、恐

らく余りなつかしがるのがなさうに見えるのは、考へてみると、現在の生活も愛してゆかうといふ氣持のない、投げやりな冷たさのやうに受け取れるのだった。異人種と結婚するやうではないだらうか。

ついに須田は、洋子との結婚を「異人種と結婚するやう」であると捉える。須田のいう「異人種」については小説において特に説明は見られないが、これまで〈日本人〉と、〈西洋人〉に代表される「異人種」の差異を強調してきた須田にとつて、「異人種と結婚する」という表現は、かなり踏み込んだものであると考えられる。「三十そこそこ」でありながら、早婚に失敗した後のせい、須田は二十五の洋子と時代がちがふやうに思へる。結婚したら、絶えず細君の心理を氣にかけてゐなければならぬやうに思へる」というように、結婚に対する須田の杞憂は募るばかりである。そうであってもやはり、「種の保存」を望む須田には「洋子の若さ」が「胸に迫」り、「これに別れては、自分はどんなさびしいところへ行つてしまふか分らぬ」と思うほどに、血を継承することへの須田の願望は強い。

季節が秋に近づくにつれて、「洋子が美しい肉体で自分を思ひ出してくれたら」といふ思ひは、もう抑へやうがなくなつた須田は、ついに洋子に求婚をする。

しかし、洋子の応えは、結婚して須田の「生活を変へ」てほしいという須田の姉の「注文」が「むづかしい」ため返事を保留するというものだった。

洋子に課された須田の「生活」を変えるところはどのようなことだろうか。姉が須田に洋子との縁談を持つてきた理由は、須田が「細君と別れてからは、外出なども億劫になり、つい本を読んで暮すことが多く」なつたことから、「さういふ弟が氣に入らぬ」からだつた。それは換言すると「須田の生活を動かせようがため」だった。

つまり、「生活」を変えるところは、前妻と別れたことから、ますます社会的に機能していない弟を再婚によつて立ち直らせようとする姉の願望から生じた洋子への課題である。

須田の求婚に対する洋子の応えは、須田の生活を変える「自信がない」というものだった。またしても須田には「かういふ言葉をしつかり言ふ」洋子は「殆ど不可解」にうつる。

『高原』において須田と洋子の結婚問題の決着は、名言されていない。

しかし、洋子が須田の求婚を保留したこと、須田自身の血の継承の願望は破れたことが示唆される。そこには、「生活」が動くことなく、洋子の「美しい肉体」にも受け入れられず、自らの血の継承によつて〈日本〉の「種の保存」も果たし得ない日中戦争下で生きる若い〈知識人〉としての須田の姿が残されるだけである。

第四節 「混血」のゆくえ

『高原』には、須田が軽井沢で混血の令嬢に出会うことで〈日本〉の血を掬え直していく様相が描かれている。

まずは、「美しい異人娘」に向けられた須田の眼差しから確認していきたい。

須田は、洋子と桂子と共に出かけた外人の子供学校の音楽会で、軽井沢へ向かう汽車で乗り合わせた〈西洋人〉の「美しい娘」と再会する。その際、須田は彼女から「か弱く愛らし過ぎるやうでみながら狂的な色情を誘ふもの」を感じ取り、「色情がこんなに人間離れた神聖な姿で現れてゐるなら、その前に跪くのも当然」だとその美しさを称賛する。ここで留意したい点は、須田が「日本の娘には、到底かういふ美しさはない」としながらも、「それでゐて、日本の新しい美しさの象徴のやうな気もした」と捉えていることである。それは、人種が雑居する軽井沢だからこそ、〈日本〉においても出会うことが可能な「新しい」美しさであり、「最早洋子も桂子も問題ではな」というほどに須田を圧倒する。

しかし、須田は彼女の「首から円い背へかけて」ある一面のそばかすを見つけると、拒否反応から「くらくらと眼を閉ぢ」るしかない。そばかすは、日本人と比較して白人に表れやすい身体的な特徴であり、こうした部分を根拠に、須田は、はっきりと異人娘への嫌悪感を示している。須田が見た彼女の身体は、「襟首から背へかけて、肌にそばかすがあるといふよりも、そばかすが皮膚」であり、それは「薄色の大きいそばかすが、いつばいに重なり合つて、深海の蛇かなにかの肌を思はせる」というもので、「そばかすをまぢかに見ると、急に吐きさうにな」るほどである。このように、須田は、白人種の身体的な特徴であるそばかすに「吐きさう」なほど強烈な嫌悪を示すことで、「美しい異人娘」であっても到底受け入れ難い自らの感覚を克明に表出している。

こうしたスタンスの須田は、軽井沢で、〈日本〉の血を内在した混血に出会うことで、あらためて〈日本〉について捉え返すことを余儀なくされる。

世界中の文明国のうちで、何国人が一番純血であり、何国人が一番混血なのだろうか。

もし、須田が洋子ともう結婚してしまつてゐるのだしたら、あの時、雲場の池の藤

の木のところでも、

「日本ほど雑種の犬の多い国はありやしない。つい近年まで、犬つて言へば、まあ雑種ばかりだったのさ。純血の交配なんてことは、さっぱり考へなかつたのさ。さういふことに無神経な国民性かもしれないんだ。」

と、彼は不遠慮に言ふところだった。

これも、とつさに頭をかすめた意見に過ぎなかつたが、西洋の犬種が輸入されるまでは、犬の純血の保存や改良などに日本人が無頓着だったのは確かだ。秋田犬や各地の山の柴犬を急に珍重し出したのも、西洋の模倣と言へぬことはない。

ここには、須田の混血に対する捉え方が犬を事例として明瞭に表れている。日本人はかつて「純血」という概念にこだわりをもっていなかったが、「西洋の犬種」が輸入されたことで〈日本〉独自の「純血の保存」への意識が高まり、〈日本〉古来の犬種を珍重し出したという過程を辿った。

これは、本章冒頭で確認した日中戦争下の〈知識人〉たちが一度西洋を「内面化」したうえで、新たに〈日本〉を発見する過程と付合するものだと考えられる。この続きを確認していこう。

支那や朝鮮の文物を大胆に受け入れてこなしただうに、また、現代の和洋混淆の乱雑な文明のやうに、日本人には、異人種との交配にも、融通無礙などところがあるのだらうと、須田は考へてみた。それは民族が根をはびこらせるための、一つの強さだらうか。

ところが事実はその逆で、隣人に対してさへ小うるさくおせっかいで、物見高い日本人は、島国根性から異邦人を最も毛嫌ひする人種なのかもしれない。

須田は、〈日本人〉にとつて人種を越えた交配は、「民族が根をはびこらせる」強さとなりうる可能性に言及している。同時代状況を見渡せば、この時期、日本は満州への侵略を進めてある程度の時間が経過しており、東京文理科大学教授稻荷山資生の「五族協和であります、此の協和を満足に円滑に行ふには、五族の雑種を作る事だらうと思ひます」³⁴という〈知識人〉の言説も確認できる。人種を越えた交配によって「民族が根をはびこらせる」という須田の認識は、同時代状況を踏まえると、決して「空想」や「夢想」とい

う言葉で片付けられない問題を内包している。

一方、須田は、「島国根性」という特性から「異邦人を最も毛嫌ひ」とするという〈日本〉人の複雑な様相にも言及している。

つまり、須田は〈日本人〉として「民族が根をはびこらせる」には「異人種との交配」が優位となる可能性を認識しながらも、〈西洋〉の犬種が輸入されたことで、日本古来の犬種を重宝したように、〈純血〉種を守りたいという願望に対しても意識的である。こうした志向を持つ須田は、「混血の令嬢」に出会うことで〈日本〉の血を再認識していくこととなる。

須田と洋子は、前田家と細川家が所有する別荘の見学に出かける。その際、須田が両家に植えられている樅の木³⁵に感動していると、洋子がテニスの友達の家にある立派な樅の木を見に行くことを提案する。洋子の友達が「混血」だと聞いて行ってみる気になったことを「妙なこと」だと感じながらも、須田の「混血の令嬢」への興味は高まりを見せる。洋子によると、令嬢は日仏の「混血」であり、既にフランス人の母親を亡くしている。父親は老化に伴い「だんだん日本風」になっているのに対して、娘は母を失いながらも、内在するフランスの血によって「全然西洋式」で生きている。

従って、この混血の令嬢は、〈西洋〉を經由して〈日本〉を発見していく須田とは逆向きの、〈日本〉を經由して〈西洋〉を内面化しながら生きている存在といえる。

令嬢も神聖な美しさであつた。髪がたうもろこしの毛の枯れたやうに汚く、そのほかにはあまり混血児らしいところはないが、瞼の切れの鋭い眼、少し高い鼻、うひうひしい齒、さうして日本風な肌の色の頬に、なんとも言ひやうなく、地上離れた光があつた。

（中略）

父の絹商人はフランス女と結婚して、多分不自由な悲喜劇の生活を送つたであらうが、その二人の間に、混血でなければ見られぬ、このやうに美しい娘を生れさせたのは、なんの意志であらうかと、須田は考へてゐた。

洋子を自分と時代のちがふ、手のとどこかねる令嬢のやうに思つてゐたのなど、滑稽なことだつた。混血の令嬢と並べて見て、洋子があはれになつたのも、面白いことだつた。

須田の「混血の令嬢」に対する視線を検討する前に、羽鳥徹哉の『高原』の結末に対する言及を確認しておこう。

日本人は、(中略)自分を他に押し付け、周囲を日本化しようとするさもし根性でなく、むしろ他と融合し、融合混血の中に新しく自分を生かす大きな心を持たなくてはならないこと、それらを、女性への憧れという、表向きあくまで感覚的レベルを守りながら書いて見せようとしたのが「高原」である。最後の混血の令嬢は、この作品の時局批判、文化論、小説的テーマを統一融合する存在として提示され、作品の祈りの中心に置かれている。³⁶

羽鳥によると、「混血の令嬢」は『高原』の複数あるテーマを「統一融合」するものであるというが、果たしてそのように捉えられるだろうか。須田は、「混血の令嬢」の「混血児らしいところ」は「たうもろこしの毛」のような髪以外には認めずに、むしろ「神聖な美しさ」を容姿の「日本風」な特徴から抽出している。³⁷

つまり、『高原』の結末においても須田は、〈西洋人〉との混血である令嬢を見つめることで〈日本〉を内面化し、〈日本〉の血に志向している。

重ねて、特に留意すべきことは、「手のとどきかねる」と思っていた洋子とは比べものにならないほどに、須田は「混血の令嬢」を遠く次元の異なる存在として認識していることである。「混血の令嬢」は『高原』の「統一融合」の存在ではなく、〈日本〉の血を内在しているながらも、むしろ須田にとっては融合不可能な〈日本人〉とは差別化された存在として描かれているのである。

第五節 おわりに

本章では、日中戦争勃発直後の軽井沢で、「一夏」を過ごす須田が〈知識人〉としてあることから、日中戦争下の〈知識人〉たちが「日本的なもの」を志向し、〈西洋〉を内面化することで、〈日本〉を捉え直していこうとする同時代状況に着目した。

そこで、須田が「人種が雑居する」軽井沢というトポスにおいて、どのように〈西洋人〉を眼差していたのかという点と、小説に表出する血にまつわる議論について検討を行った。まずは、須田が軽井沢でどのように〈西洋人〉と対峙していたのかという点についてま

とめてみたい。私立の専門学校の英語教師の須田は、「白人種崇拜の滓」が残っていることを自認しながらも軽井沢で共に過ごす〈西洋人〉を根底から受け入れることはない。例えば、通州事件を理由にして、中国人に刃物禁制を課した「白人」には「本能的に腹を立」て、そのような「非常識な現れ」を決して受け入れられないという感覚を持っている。一方、日本生まれで、人生の半分以上を日本で過ごし、アメリカの大学で「東洋史」の講義を受け持つロバート・ライシヤワ博士が上海租界で没したことについては、〈西洋〉に〈日本〉を正しく伝える存在であつた博士の死に強い衝撃を受けるという矛盾も見受けられる。『高原』は、一見日中戦争とある程度の距離を保っているかに見える軽井沢を舞台としている。だが一方で、須田は〈西洋人〉と雑居した軽井沢に身を置いているからこそ、日中戦争下を生きる若い〈知識人〉が抱えていた〈西洋〉を内面化したうえで〈日本〉を捉え直していくという課題により直接的に向かい合うことを余儀なくされる。そうした渦中においては、決して〈西洋人〉に迎合しない姿勢を見せる須田においても、アメリカの大学で日本に関する「東洋史」を講ずることができた唯一の存在であるライシヤワ博士については、その存在を特別視せざるを得ない。こうした当時の若い〈知識人〉たちが抱えていた〈日本〉と〈西洋〉のせめぎ合いが小説には刻印されている。

須田は、「四十ヶ国程の人種が雑居」する軽井沢に、恒久的な「ユウトピア」を「空想」するが、それは〈幻想〉であることが突きつけられる。表向きには、平和を保っているかのような軽井沢においても、「雑居」による摩擦は同時代の世界情勢を反映しながら生じている。須田は、「二世」や「混血児」にとつて、「人種が雑居する」軽井沢が「故郷」になり得るトポスであるかもしれないと思案するが、やはりそれは「夢想」でしかないとの結論に至る。須田が「夢想」するいかなる人種にとつても「故郷」となりうる軽井沢の姿は、そこには存在しない。

次に、血にまつわる議論について振り返ってみたい。『高原』には、終始須田の結婚問題が描かれている。このことに関連して、小説には須田の「種の保存」への願望が表出している。須田は、軽井沢で五歳年下の洋子との見合いを重ねているが、「第一乙」であることから、この結婚を逃せば子孫を残すことは出来ないかもしれないという危機感を持っている。若く、快活な洋子の言動に、須田は「不可解さ」を感じ、「異人種と結婚するやう」だとの感覚を強く持つが、「洋子の若さ」が「胸に迫り」求婚をする。しかし、洋子は、須田の姉から課された、結婚によつて須田の「生活を変へ」という要望に応える「自信」がないとの理由から、返事を保留する。こうしたことから、須田自身の「種の保存」

「自らの血を継承することで〈日本〉の血を継承をする願望は、破れたことが示唆される。

須田は、元来犬の血統に無頓着だった日本人が、西洋の犬種が輸入されるようになってから、日本固有の犬種を「急に珍重し出した」ことを思い起こす。須田の関心は、一人の人間でありながら、〈日本〉の血と〈西洋〉の血を有する「混血」に向いていき、洋子の友人である日仏混血の令嬢に出会う。須田は、この令嬢の「神聖な美しさ」をあくまでも「日本風」な特徴から抽出する。その一方で、「洋子を自分と時代のちがふ、手のとどきかねる令嬢のやうに思つてゐたのなど、滑稽なことだった」と思うほどに、〈日本〉の血を有しながらも、混血として目の前に存在する令嬢を遠く次元の異なる存在として位置づける。

以上のように、日中戦争勃発直後の「四十ヶ国程の人種が雑居」する軽井沢における須田の〈西洋〉を見つめる眼差しと、血にまつわる議論に着目してきた。この両者の分析から共通して見えてくることは、須田が〈西洋〉を内面化したうえで、新たに〈日本〉を捉え直す志向に終始していることである。

言うまでもないが、こうした須田の志向は、戦後川端の作家イメージに付与された「日本的」や「伝統的」という文脈とは異なる日中戦争下において若い〈知識人〉たちが直面していた課題である。『高原』には、「コスモポリタニズム」とは逆向きの、同時代の若い〈知識人〉たちが共有していた〈西洋〉を内面化したうえでいかに〈日本〉の独自性を捉え直していくのか、という課題を模索する須田の姿が刻まれている。

1 序章において既に確認済みであるが、『高原』は、川端が戦中に執筆した小説のなかでは、比較的刊本に収められる機会に恵まれた。初刊に続いて、『寝顔』（有光社、一九四一年七月）、信州（主に軽井沢）を舞台にした小説と随筆を採録した『高原』（甲鳥書林、一九四二年七月、甲鳥書房、一九六九年二月）、一六巻本『川端康成全集 第七巻』（新潮社、一九四九年九月）、一〇巻本『川端康成選集 第四巻』（新潮社、一九五六年七月）、一二巻本『川端康成全集 第四巻』（新潮社、一九六〇年三月）、一九巻本『川端康成全集 第四巻』（新潮社、一九六九年十二月）、三七巻本『川端康成全集 第六巻』（新潮社、一九八一年四月）等に収録されている。

2 森山啓「本年度の小説」（『文芸』一九三七年十二月）

3 大森郁之助「『高原』における風土の意味」（『解釈』一九六九年五月）

- 4 羽鳥一英（徹哉）「昭和十年代文学と川端」（『国文学』一九七〇年二月）
- 5 小川和佑「川端康成における日本と西洋——作品集『高原』を中心に——」（『学苑』一九七五年六月）
- 6 小林一郎「『高原』論——時代背景を中心に——」（川端文学研究会編『川端康成研究叢書5』虚実の皮膜』教育出版センター、一九七九年三月）
- 7 森晴雄「『高原』論——「白扇」と「接吻」——」（川端文学研究会編『川端康成研究叢書補巻』作品論補説総索引ほか』教育出版センター、一九八三年六月）
- 8 松本和也「川端康成「高原」連作の同時代受容分析」（『国語と国文学』二〇一五年四月、後「第四章 川端康成「高原」連作受容の変遷——日中戦争の長期化／文学場の変容」と改題して『日中戦争開戦後の文学場 報告／芸術／戦場』神奈川大学出版会、二〇一八年三月）
- 9 大橋諒也「川端康成研究——同時代における「高原」の様相・軽井沢の時空より——」（『あいち国文』二〇一八年九月）
- 10 門屋博「一、日支事変とインテリゲンチヤ」（『時局とインテリゲンチヤ』全日本司法保護事業連盟、一九三八年四月）
- 11 河田和子「序章〈日本的なもの〉という問題機制」（『比較社会文化叢書XV』戦時下の文学と〈日本的なもの〉——横光利一と保田與重郎——』花書院、二〇〇九年三月）で指摘されている。古矢篤史「横光利一「旅愁」と「日本的なもの」の盧溝橋事件前夜——一九三七年の「文学的日本主義」とその「先験」への問い——」（『昭和文学研究』二〇一二年三月）においても、河田の論考を参照したうえで、「『日本的なもの』をめぐる諸作は一九三七年だけが突出した量を見せており、これを他の年のそれと同列に論じることには抵抗がある」と述べられている。
- 12 注11河田和子「序章〈日本的なもの〉という問題機制」に同じ。このなかで河田は、三木清「日本の性格とファッシズム」（『中央公論』一九三六年八月）を提示したうえで、この頃三木が志向していた〈日本的なもの〉を次のように整理している。

移入した外国文化が日本に「同化」⇨日本化され〈日本的なもの〉となったものとして、日本仏教が挙げられる。「支那」から移入され、祖先崇拜の神道と結合した日本仏教に対して、近代以降、西洋から移植した科学や文化は、まだ模倣に留まっており、それだけに西洋由来の文化や思想を如何に日本化（⇨内面化）して新たに〈日本的なもの〉を創出していくかが今後の課題になると三木は認識していた。

河田は、こうした三木の「西洋由来の文化や思想」を「(日本的なもの)」に昇華することへの希求は、同時代の〈知識人〉や文学者にも見られるものであり、横光利一も「移入した西洋文明をいかに日本化して(日本的なもの)」||新しい伝統を創出するかを思案していた」と指摘している。一方、三木や横光と異なる立場をとった保田与重郎は、「古典や国学に(日本的なもの)」を求め、「近代以前の日本人の思考や古典文芸を西洋由来の思考から捉えることを「文明開化の論理」として批判していた」と論じている。

13 注11 河田和子「序章(日本的なもの)」という問題機制」に同じ。

14 小林秀雄「満洲の印象」(「改造」一九三九年一月)

15 横光利一「旅愁」は「第一編」より「第五編」、「梅瓶」まで六部に分れているが、未完。「第一編」は、「東京日日新聞」、「大阪毎日新聞」一九三七年四月一四日(実際には一三日夕刊)から八月六日付(五日夕刊)に通算六五回掲載された。さらに「文芸春秋」(一九三九年五月〜七月)に三回連載された。以後、「梅瓶」(「人間」一九四六年四月)にいたるまで断続的に発表された。「旅愁」の発表については、日置俊次「旅愁」(井上謙、神谷忠孝、羽鳥徹哉編『横光利一事典』おうふう、二〇〇二年一〇月)を参照した。

16 小川和佑『〈文壇資料〉軽井沢』(講談社、一九八〇年二月)、小松史生子「軽井沢と避暑」(『〈コレクション〉モダン都市文化第52巻〉軽井沢と避暑』ゆまに書房、二〇〇九年一二月)を参照し、まとめた。その他に、穴戸實『軽井沢別荘史 避暑地百年の歩み』(住まいの図書館出版局、一九八七年六月)、桐山秀樹、吉村祐美『軽井沢という聖地』(NTT出版、二〇一二年五月)等を参照した。

17 注16 小松史生子「軽井沢と避暑」に同じ。

18 注3に同じ。

19 注9に同じ。

20 注8に同じ。

21 「信濃毎日新聞(夕)」(八月一日)同誌面には、「【天津三十日発】三十日午前九時駐屯軍司令部発表||通州方面の敵に対しては二十九日夕刻我が飛行機出動し爆撃を加へたり」とも報道されている。

22 『高原』に描かれた「支那人」に対する「刃物禁制」については、水上勉「解説」(『高原』中央公論社、一九八二年八月)に以下のような言及がある。

川端文学には、華麗な人々や怪しい人々も登場する。が、植木職人、大工、調理師、床屋、家事手伝、配達人など、いわゆる下積みの人々の登場しない小説は一篇とてな

いってよい。じつは、作者は、そういう人々に、温かい眼をもった文学者だった。高原生活でも、その日常がうかがえるのである。そのころに、避暑地に逃げ込んでくる外国人が多数いた。それらの外国人からしめだされる中国人の食堂や床屋で働く職人が、刃物をとりあげられる、という事実を私ははじめてこの小品集で知った。歴史学者といわれる人々が、はたして、昭和史のなかで、このような描き方で、無告の人々の悲しかった日常を的確に書きのこしたろうか。

23 谷口幸代「軽井沢と川端文学——実景と幻影の町——」（羽鳥徹哉編「解釈と鑑賞別冊」川端康成 旅とふるさと」至文堂、一九九九年一月）には、『高原』に取り込まれたロバート・ライシヤワア博士に関する新聞記事が「信濃毎日新聞（第二夕）」（一九三七年八月二十九日）であるとの指摘があり、論者も閲覧したところ、谷口の指摘の通り、同日の「軽井沢にも憂色 三十九ヶ国の外人挙つて 避難者へ救援の手」が典拠であることを確認した。

24 『高原』分載第二回目にあたる「風土記」（「改造」一九三七年十一月）の冒頭では、「上海で殺されたロバート・ライシヤワア博士は日本で生れた。日本のアメリカン・スクウルを経て、プリンストン大学を卒へ、東洋古代の文化史を研究し、まだ三十一歳の少壮学者ながら、出身大学で東洋史の講座を担当してゐた。同大学に初めて日本語の講座を開いたのも、この人だった。「上代日本史」といふ大冊二巻の著書がある」という博士の経歴が注23で言及した「新聞記事」が典拠となつて、小説に取り込まれている。

25 第二次上海事変の激しさは、一九三七年八月中旬以降の新聞において連日報道されている。例えば、「信濃毎日新聞」（八月一日）においては、これまでにない中国軍の本格的な抵抗により、初めて空中戦が展開されたことが「支那空軍爆撃開始／両軍猛烈に交戦／我が空軍も出動す」というタイトルで以下のように報道されている。



【上海十四日発至急報】支那爆撃機四台は黄浦江上空に現はれ午前十時碇泊中の軍艦〇、〇〇に目懸けて爆弾二発、商業学校地区に六発の爆弾を投下し更にわが陸戦隊本部上空に飛来し目下盛んに爆弾投下しつつあり更に午前十時過ぎには楊樹浦紡績工場地帯上空に現はれ河岸にある日清汽船繋留三隻の附近に爆弾を投下し黄浦江上盛んに

水煙を立てゝゐる敵の爆撃機一機は午前十時約五百米の高度を保って陸戦隊本部上空に現はれ陸戦隊は直ちに高射砲を以て射撃を加へてゐる支那爆撃機はわが総領事館及び旗艦〇〇を目懸けて爆弾の集中投下をなしたが一発も命中せず

【参考資料①】「上海参考略図」（「信濃毎日新聞」（八月一五日）より）

26 注 8 に同じ。

27 大島功「ライシヤワ博士の死」（「文芸春秋」一九三七年一月）

28 注 27 に同じ。

29 記事の副題に「事変勃発の軽井沢風景」とある。

30 「信濃毎日新聞」（一九三七年八月四日）には、軽井沢に滞在が確認された外国の要人の国籍が以下のように掲載されている。

芬公使ユーゴー・ワルネル△チエツコ公使ハヴリチエツク△トルコ大使ヒュースレス・ゲレデー△独大使ディルクセン△米大使グルー△メキシコ公使フランシスコ・デュー・アギューラー△アフガニスタン公使ハビブラ・カンタルジ△ポーランド公使デロメール△サルバドル総領事レオン・シグエンサ△芬蘭名誉領事ビーアール・ベリツク△チリ公使館商務参事官テ・ラ・バラ△ベルギー大使館書記官イーヴエンス・デクト

31 トマス・モア（平井正穂訳）『ユートピア』（岩波書店、一九五七年一〇月）なお、論者は、岩波文庫版『ユートピア』（七八刷、二〇一〇年五月）を参照した。この他に、川端香男里『ユートピアの幻想』（講談社、一九九三年一〇月）も参照した。

32 本章「第一節 はじめに」で挙げたように、注 9 大橋諒也「川端康成研究——同時代における「高原」の様相・軽井沢の時空より——」では、小説発表当時の「混血」、「血統」をめぐる言説を分析したうで、小説内における「血」の問題が検討されている。

33 注 9 に同じ。

34 稲荷山資生「民族協和と混血」（学徒至誠会編『学徒至誠会派遣団報告 昭和11年度満州篇』学徒至誠会、一九三七年四月）

35 『高原』の結末における「樅の木」の役割については、川端の他のテキストも視野に入れて、再考する必要があると考えられる。山田吉郎「樹木と精霊の系譜——川端康成「不死」論——」（川端文学研究会編『論集』川端康成——掌の小説』おうふう、二〇〇一年三月）では、川端の掌の小説「不死」（「朝日新聞」PR版、一九六三年八月四日）について、霊である老人と娘が「大樹に棲みついてしまう」ことから「なぜ樹木でなければなら

ないのか」という点に着目した論を展開している。山田によると、川端の小説に「樹木への融合、転生への志向がある意味でおのずからなる形態をとって作品世界に根をおろしてくるのは、戦乱の予兆やあるいは老いを意識してくる昭和十年代以降のこと」であるという。ただし、山田はこの頃急に川端が樹木に対する関心を深めていったのではなく、川端と樹木の最も早い時期の関わりを「小学校の頃から樹の上で読書する習慣」にあると指摘している。

一九三〇年代の川端の樹木への関心は、随筆にも書き留められており、「信濃の話」(『文学界』一九三七年一〇月)には「なんにも知らん赤ん坊がお母さんに花を見せられてこれが百合だと教へらえる心と、百合についてあらゆることを知りつくした神の心と、この二つを合はせて百合を見て行くのが文学であります。先程も言ひました通り、木の名前を覚えるのが文学なのぢやない。名前を覚えます時の眼の働きが文学なんであります」というように、「木の名前」を覚えるときの「目の働き」に関心を示しながら、自らの文学観を語っている。

36 羽鳥徹哉「『高原』について」(『研究選書55』作家川端の展開』教育出版センター、一九九三年三月)

37 注9 大橋諒也「川端康成研究——同時代における「高原」の様相・軽井沢の時空より——」では、混血の令嬢の母親がフランス人であることに着目している。そのうえで、『高原』執筆当時のフランス映画の流行に言及し、「フランス文化には政治性という文脈があまり見出されていなかった」という指摘をしている。また、混血の令嬢の「フランスの「血」が強く出ている髪」については、「須田の価値観はむしろ「日本風」の方に主軸が置かれ、フランスの要素はあくまでそれを補佐するものとして機能しているのではないか」と指摘がある。この点については本章でも令嬢の「神聖な美しさ」を須田が「日本風」から見出しているという点は、同様の視座を有しているが、「フランス」の要素については、須田がむしろ純「日本風」とは異なるものを積極的に看取していると考えている。

第三章

「言葉」を与えるということ——『美しい旅』——

第一節 はじめに

『美しい旅』の正編は、「少女の友」に一九三九年七月から一九四一年四月まで二一回発表され、続編も同じく「少女の友」に一九四一年九月から一九四二年一〇月まで一一回発表された¹。その後、続編を含まない形で複数回単行本化がなされている²。続編を含めたかたちの『美しい旅』を読むことが可能になったのは、川端没後に刊行された三七巻本『川端康成全集 第二〇巻』（新潮社、一九八一年十二月）においてであった。

まずはじめに『美しい旅』の内容を確認しておく。

『美しい旅』正編の中心人物である盲聾啞の少女花子（六歳）は、東京から山歩きに来た百田明子（女学校四年）と達男（中学一年）の姉弟と出会う。達男は、胃けいれんをきっかけに、山間部の駅の駅長である花子の父に助けられ、姉弟と花子の家族の交流が始まる。達男は、花子に直接文字や数字を教える。花子の父の死をきっかけに、花子とお母さまが東京へ移住することで、盲聾啞教育に関する話題が取り込まれていく。その際、明子の女学校時代の「お姉さま」で、聾学校の教員を務める月岡先生が登場し、花子のお母さまに花子の教育に関するアドバイスを与えていく。続編では、月岡先生が満州へ旅立ち、花子は物語から後退することになる。続編の中心となる内容は、月岡先生が満州から送ってくる手紙の紹介や、帰国の船上で読まれる満州の子どもが「日本語」で書いた綴方の話題である。

先に確認したように、川端の没後まで続編が単行本に採録されなかった『美しい旅』が先行研究ではどのように捉えられてきたか確認していきたい。羽鳥徹哉は、『美しい旅』を「可哀想な子供達への思いやり小説、啓蒙小説、教育小説的なもの」³だと述べており、同様の立場で、須藤宏明も「多分に教育啓蒙的」で、「弱い立場の人を励ますために書かれたもの」⁴だと評価している。

しかし、『美しい旅』の続編を確認すると、「教育」的な小説という側面だけを評価することは首肯し難く、川端の国策への接近も考慮に入れざるを得ない。遠藤寛子は、「昭和一五年七月号」から「中原氏の掲載禁止命令で『美しい旅』のさし絵も、初山滋氏に変わった」と、中原淳一が「少女の友」を退出したことに関連づけて、「抒情的な小説から、障害児教育の現場を取材したドキュメント」に小説の内容が変化したことを指摘し、その要因として「障害児教育など、政府には無用のこととされたのだろう」⁵という推測をしている。

以上の論者たちは『美しい旅』を正編に重きをおいて評価した上で、川端が時代に迎合した可能性を認めない立場に立っている。

久藤理は、戦時下における川端の綴方選評の分析をしたうえで、「植民地での教育活動の呼びかけなど、戦争加担の責任が明確なものもみられる川端の戦時下の活動にあって、文体への信念が川端を国策イデオロギーへの無惨な加担からかうじて救っている」⁶。と綴方選評の仕事が川端をイデオロギーへの耽溺から救済したと指摘している。

三浦卓は、続編も含めて検討したうえで、『少女の友』の場で盲聾啞者の少女をめぐる物語と満洲に関する記述を一つの小説の中で結び付けた「美しい旅」を参照しただけでも、戦時体制を補完した可能性は否定できず、「【引用者注：遠藤論を受けて】「抒情的」といったあいまいな言葉で『少女の友』の場と川端を繋ぐことは、川端の少女小説が『少女の友』のコミュニティーでこそ支持された、ということを取り落とすことになり、川端への既存の評価を基準に時代の被害者とすることを可能にしている」⁷というように、『美しい旅』を「少女の友」というメディア上で発表し、盲聾啞の少女花子と満洲という異質な両者を結び付けたあり方は、川端が戦時体制を補完した可能性を示唆するものと指摘している。

以上の先行論を踏まえ、本章では、『美しい旅』における「言葉」ないし「文字」の扱われ方について検討することを課題とする。加えて、『美しい旅』の続編も含めてを考察することで、正編と続編の関係性についても考えていきたい。

第二節 動物と人間の間？

正編において、「言葉」を教授される主体は盲聾啞の少女花子であるが、まずは「言葉」を与えられる前の花子がどのように描写されているかについて確認しておこう。次の引用は、『美しい旅』の冒頭である。ここでは、花子が犬のカロと小鳥と共に描写されている。

カロが耳をぴんと立てた。花子はカロの肩をおさへた。カロは花子のいひつけをよく聞く。飛び上つて小鳥を追ひさうだつたけれど、またおとなしく前足をのばした。そして、合歓の枝を見上げた。

花子はカロの頭にさはつてみた。犬の首の向く方に、小鳥もある。

それから、小鳥のとまつた枝がゆれるのも、なんとなく花子に分る。幹まで動くは

ずはないのに、小鳥のあることが、花子の背に伝はつて来る。——花子はうれしい。しかし四十雀は、さきに行つた小鳥達の鳴声に呼ばれて、梢の方へあがつてゆくと、今にも合歓の木から飛び立ちさうだつた。

花子は、こはい顔になつた。いきなり、えらい勢ひで飛び上つた。なにか叫んだ。突然気がちがつたやうだつた。猿が怒つたやうだつた。

花子は小鳥をつかむつもりだつたのだらうか。

(行つてはいけない。)

と、小鳥に言ひたいのだつた。

目と耳が不自由であつても、花子には、犬や小鳥の動きや、植物の微細な揺れを感じとる能力があり、花子なりの世界が確立されている。また、自らの考えや感情の表し方を知らない花子の振る舞いは、「猿が怒つたやう」や「花子の虫」と例えられ、「えたいの知れない、かんしやく」、「手のつけやうがない」と表現されている。『美しい旅』の冒頭では、花子と犬のカロの関係性は、極めて友好的に描写されている。

なにか胸がこみあげて来て、わつと花子は飛び上つたのだつた。

さびしいけどものが泣くやうな、奇怪な叫声だつた。

あんまり高く飛んだから、花子はよろよろと地に落ちた。

カロはびつくりして逃げたけれど、かはいさうにと言ふ風に寄つて来て、尾を振つた。

花子はその犬を、ぐわんと蹴つた。

カロは蹴られた首を二三度振つただけで、また体をすり寄せて来た。

「言葉」の有無は、文学研究において、人間と動物の「恣意的」な境界線として指摘されてきた。そうした視座に立つと、「言葉」を持たないうえに、その行動を動物によって形容される花子は、人間と動物の境界線上にいるような、人間とはコミュニケーションが難しい存在として描写されているといえる。

もう一つ注目すべきことは、「言葉」を持たない花子の内面が（ ）内や——の後に表記されるかたちで、しばしば語り手によって補足されることである。この時点で、「言葉」（表現方法）を持たないはずの花子の内面を語り手が正確に言い得ているのか、読者は判

断する術を持たない。しかし、そうであるからこそ、花子は意思表示をする「言葉」を持たない存在であることが浮き彫りになり、コミュニケーションツールを持たないことが強調されている側面がある。

つまり、花子が動物と共に描写されることも、不確定な花子の内面が語り手によって語られることも、小説の冒頭においては、花子が「言葉」を持たず、コミュニケーションが不可能な存在であることを殊更強調して描写するためだと考えられる。

次に、花子が初めて明子と達男姉弟と対面した場面を見ていきたい。山歩きから東京へ帰るために、花子のお父さまが駅長を務める山間部の駅に戻ってきた達男は、おなかの調子が悪いため、花子のお父さまの家で休ませてもらうことになった。そこで花子を見つけた明子は、「はつと異様な感じ」を受け、花子を「魂の抜けた人形」のようだと感じる。花子が盲聾啞であることを知らない達男は、痛い腹を抱えて花子の方に飛んでいく。驚いた花子は「奇怪な叫び声」をあげ、「猿のやう」に達男を「引掻い」てしまう。驚きながらも「引掻かれても、痛いのがわかんないよ。おなかの方が、よけい痛いや」という達男の優しい「言葉」も花子に伝わるはずはなく、「いいつと花子は歯をむき出して、達男の頭を滅多打ち」にする。お父さまが止めに入るが、花子は姉の明子も殴ってしまう。その時、花子のお母さまは次のように姉弟に謝る。

「ほんとにすみませんでした。この子は、人並ぢやないものですから、あんな乱暴して困りますの。眼も見えませんし……。それで……。」（中略）

「六つになりますけれど、さういふ風ですから、智恵のつきやうがなくて、赤ん坊とおんなじですよ。」

ここでも花子は、お母さまによって「人並」ではなく、「言葉」を持たないことから、「智恵のつきやうがな」い存在だと説明される。しかし、花子が初めてよその人である明子に抱かれたことをきっかけに、姉弟と花子の交流は本格的にはじまることとなる。

達男が、盲聾啞の花子が好き嫌いをどのように判断しているのかを花子のお母さまに尋ねると、お母さまは次のように応えた。「感じよ、それは……この子にだつて、いろいろな感じはあるんですよ。眼も耳もふさがつてゐて、人なみの智慧が育たないかはりに、却つて感じの鋭いところは、あるでせうと思ひますの。やつぱり一人の人間ですもの。一方に足りないものがあれば、そのかはりのものを、ちゃんと神さまが下さつてゐるんぢや

ないかしら……。』。花子は「言葉」や「文字」を持たない変わりに、鋭い「感じ」を持っていることが再度明示されている。そして、お母さまは、花子はコミュニケーションが難しい存在であることを認めながらも「一人の人間」として生きていくことを望んでいる。このやりとりの後に、「(やつぱり一人の人間……)」といふ、お母様の言葉を、達男は胸のなかで、くりかへしてみた」というように、達男は、花子の教育を担う存在としての自覚を深めていく。

以上のように、『美しい旅』の冒頭では、花子が動物と一緒に描写されることで、「言葉」を持たない存在であることが明確に提示される。一方で花子の世界は、鋭い手の感覚や「感じ」といった研ぎ澄まされた感覚によって形成されている。

しかし、花子は、明子と達男姉弟と出会ったことが転機となり、「文字」や「言葉」を与えられることになる。「言葉」の教授によつて、花子の人生は大きく変質することになるのだ。

第三節 花子の教育を担う達男

次に、花子に直接「言葉」を教授する達男がどのように描写されているのかに注目していきたい。達男の描写の変遷を辿ることは、『美しい旅』における「言葉」の教授の実態を把握するために有効だと考えられる。

達男は、湖水に花子の置かれている状況を見出す。

「湖水は花子ちゃんに似てるよ。いろんなことをお話したいのだけれど、ものが言へないのさ。月や雲をうつしてゐるけれど、湖水はなんにも見えないのさ。湖水は眠つてゐるんだよ。」

湖水の童話でも考へるやうに、達男は言った。

「湖水は可哀想だよ。湖水は胸のなかで、心でいっぱいなのだけれど、だれも分つてくれないのさ。ただの水がたまつてゐるだけだと、人は思つてるんだよ。だけど、湖水は目を覚ますよ。」

花子の「胸のなか」にも「心」があるにもかかわらず、コミュニケーションがとれないことを達男は「可哀想」だと捉えている。一方、湖水の水に触れて驚いた花子が「胸まで

動かして、なにか話してゐるつもり」であつても、具体的に何も伝えられない様子に、「だけれど、今にきつとわかるやうになる。わかるやうに、僕がしてやるよ」と、達男は花子に「言葉」や「文字」というコミュニケーションツールを与える決意をする。

達男は、花子に文字を書かせることに成功する。その方法は、達男が花子の手を握り、砂の上に何度も「ハナコ」という文字と一緒に書くことで、花子に「文字」を認識させるというものである。花子は、片仮名の「ハナコ」という「文字」を習得し、自分が生きる世の中に「文字」があることを知る。この出来事がきっかけとなり、達男は、花子に「言葉」を教授する存在となる。

花子のお母さまは、「猿芝居の猿が字を書くのと同じやうに」花子が達男から教えられたものが「言葉」をあらわす「文字」であることを理解してはいないのではないかという危惧をする。一方、花子のお父さまは「花子が、一つでも言葉を覚えたら、この世界の謎を解く、鍵をみつけたやうなものだ。魂が目を覚ましたことになる」と花子の「言葉」の習得を喜ぶ。加えて、「字を書くたびに、好きな達男さんや、明子さんを思ひ出して、愛情が感じられたら、花子の心もやさしくなると思ふね」というように、「言葉」や「文字」を習得することによって、花子の内面が変化することに期待を寄せるようになる。このお父さまの期待は、現実のものとして表れる。東京に帰った明子と達男姉弟から花子に片仮名の形をしたおもちゃが送られてきた。お母さまは、達男からの贈り物だということの花子にわからせるために、達男が花子にしたように手を握って文字を書かせる。

（達男の親切なおくりものだと、どうしてわからせよう。）

お母さまは、痛い腹をかかへて、部屋を飛び廻つたり、花子の両脇を持つて高く差上げたり、達男の真似をして、それから、花子の指をつかまへて、「ハナコ」と書かせると、

「アア、アツ。」と、花子は喜びの声をあげた。達男のことがわかつたのである。

花子の頬はかがやいたやうだつた。

そして一層熱心に、木の片仮名にさはつてみて、とうとう「ナ」といふ字を見つけ出した。（中略）

「ハ」という字も、「コ」という字も、かうなればもう花子は、直ぐに見つけ出した。

「言葉」と「文字」を習得することで、花子の内面が変化するきっかけをつくつたのは、

達男である。正編の前半において、達男は自己の表現方法や、他者とのコミュニケーションツールを全く持たない花子に「文字」や「言葉」を教えることで、花子の内面を豊かにする教育を施す存在として描写されている。「少女の友」の読者においても、「花子が字を覚えられたので自分の事のように嬉しかった」と花子が「文字」を習得したことについて、歓迎する意見が寄せられる。

しかし、達男の描写は、徐々に変遷を辿ることになる。花子のお父さまが病死したことで、東京に移ってきたお母さまと花子は、達男とともに盲学校の見学に出かける。そこで達男は、「先生、アメリカには、盲でつんぼの子供の学校があるのに、日本には、どうしてないんです」というように、日本の盲聾啞教育の遅れを嘆き、盲学校の先生に質問を投げかける。このような達男に対して、盲学校の先生は「君が、立派に教へてくれると、日本のためにもなる。日本には、聾で盲の子供が教育されたといふ例は、まだ聞いたことがないから、もし君がこのお嬢ちゃんに成功してくれると、道をひらいたことになりますよ」、「君は、日本ではじめてのいい教師になつてもらひたいですね」というように、「日本」のために、花子に盲聾啞教育を施すべきだと意見を述べる。

つまり、これまであくまでも花子の内面を豊かにすべく教育を施していた達男は、ここに来て「日本」のために盲聾啞教育に関わる〈皇国少年〉の位置を与えられてしまう。

こうした役割を担わされた達男に向けて、盲学校の牧野先生は、ヘレン・ケラーが卒業したパアキンス盲学校や、ドイツのオベルリン・ハウスについて紹介する。

ここで、一九三七年にヘレン・ケラーが来日した際に、対面を果たした盲の子どもの綴方を見てみよう。

ケラー先生は「マイフレンド」といつてから、ケラー先生は「私ら人間で一番うれしいことはやさしい心、親切な心で人のためにつくすことです」とお話をなさつたさ

うです。ヘレン・ケラー先生の言葉をよく心にとめて僕も一生懸命はげみ、立派な皇

国の民になりたいと思ひます。¹⁰

こうした資料からは、盲教育や聾教育の現場においても、「言葉」を重視することで、〈皇国の民〉を育てようという姿勢をうかがい知ることができる。達男は、本来花子の内面を豊かにするために、「文字」や「言葉」を教えていた。そこには本来共有していなかった「文字」や「言葉」を花子に、一方的に教育してしまうという暴力性が生じていると

も捉えられる。しかし、ここで最も留意すべきことは、達男のその行為が時局にコミットし、〈皇国少年〉としての達男に「言葉」＝「日本語」を教授される花子は、「日本」の〈皇国の民〉としてコントロールが可能な存在にされてしまうということである。

達男と花子のお母さまは、盲学校、聾学校の両校において、花子への教育についてアドバイスを受ける。

I 盲学校の先生の言葉

「ええ。教育は、盲の子供よりも、つんぼの子供の方が、むづかしいやうですよ。耳が聞えない子は、人間には言葉があるといふことを知らないで育ちますからね。言葉がないと、考へるといふことが出来ない。智慧がつかないわけですね。聾教育の第一歩は、世のなかに言葉といふものがあることを教へるので、それが納得出来たら、もう魂の戸を開けたやうなものです。」

「さうです。」と達男は、また大きな声を出した。

II 聾学校の先生の言葉

「西洋でもね、つんぼで盲の子供は、聾学校へ入れた方がよいか、盲学校へ入れた方がよいか、つまり、つんぼの子供として教育するのがよいか、盲の子として教育するのがよいか、なかなか議論があつたんですよ。しかし、まあ第一に、つんぼの子供として教育しなければならないと言ふ人が多いやうですね。なによりも言葉を教へることが大切ですからね。言葉を知らない、教育は進められません。言葉のない子供に言葉を持たせるのは、聾学校の方でせう。盲学校の子供は予科へ来る時に、もうたくさん言葉を知ってますからね。」

達男は、盲教育、聾教育に携わる先生たちから、何より花子に「言葉」を教授することの重要性を説かれる。ますます意欲的になる達男は、「早く花子ちゃんに、口話法を教へたいな。先生、どんな風にするんですか」と、花子の教育にますます積極的に参加する意志を示す。達男が花子に言葉を教授することが『美しい旅』において、どのような意味をもっていくかは、第五節で後述する。

次に、達男の姉の明子がテキストにおいてどのような位置を与えられているのか確認していきたい。

達男が花子に直接「言葉」を教えるという行為を担うのに対して、明子は花子に「言葉」を教えるということはない。その意味で、三浦卓が指摘しているように、女学生の明子は『少女の友』の読者と近い価値観を持つ人物として造型されている」¹¹といえる。明子は、直接花子に「言葉」を教えることはなくとも、「東京の名医にみせて、もし、眼が見えるやうに、耳が聞えるやうに、口がきけるやうになつたら、どんなにすばらしいだらう」というように、花子と一定の距離をとりながら、花子を見守る存在として配置されている。花子のお父さまの容体が悪くなり、死が近い際には、「花子のお母さまは、大人に話すやうなことを言ふ」というように、明子は、花子のお母さまの相談役になるなど、花子のお母さまの精神的な支えとしての役割も負っている。

一方で、明子の女学校時代の先輩で「お姉さま」と呼ぶ月岡先生が豊学校の教員になったことを「月岡さんのやうにおきれいな方が、どうしてつنب学校なんかへいらしたんだらうって、同窓会のみなさんもおどろいてらしたわ」と、花子のお母さまに口走ったことにより、「ほんたうに悪いことを、うつかり言つてしまった」と明子は反省の様子を見せ、「ふだん花子ちゃんに、いくらよくしてゐても、そんなのは、うはべだけの同情だと思つた」というように、明子の内面の揺らぎも描かれている。

こうした花子への視線に、揺らぎが見られる明子に対して、お姉さまである月岡先生は、「私達は四六時中、眼も見えるし、耳も聞えるから、かへつて、目や耳のありがたさを、忘れてゐますのよ」という言葉をかけ、さらに、「花子ちゃんを、可哀想な子供とばかり考へちや、だめよ。私達よりも立派な魂を、持つてゐるかもしれませんのね。その魂を、みんなで揺り起してやりませう」と明子を含めた「みんな」で花子の教育に当たることを要求する。

しかし、続編において、花子の「立派な魂」を揺り起こす一員として、明子が花子の教育に従事する機会は訪れない。

続編では、満州に旅立った月岡先生が前景化するのに対して、花子、達男と同様に明子も後退していく。従つて、続編においては人物の配置が大きく異なる。

正編と同様に続編においても「言葉」を教授される対象が提示される。それは、満州の子どもたちである。つまり、『美しい旅』は、「言葉」を与えるという一貫した課題が正編と続編を貫くものとして描かれているといえる。

第四節 満州からの手紙——「続編」

『美しい旅』正編の連載中には、「幼い花子ちゃんはどうなになつて行くでせう」¹²や「どんな風に大きくなつて行くかと早く先の先がみたくて」¹³というように、花子の成長を望む声が「少女の友」の読者投稿欄「トモチャンクラブ」には多く寄せられていた。

また、川端自身も正編を終了した際「少女の友」で、「『美しい旅』の幼女篇を、一先づ終ります」¹⁴とことわり、「少女の友」の予告にも「川端先生は引きつづいて四月号から美しい旅の少女篇をお書き下さいます花子が人生行路の少女期をどんな風に歩むか私達も愛情と期待を以て見守りませう」¹⁵と読者に向けて、物語が続き、成長した花子が登場する予定であることを告知している。また、川端は随筆において「主人公は、盲で、聾で、哑の幼女、十三ヶ月続けて、まだ、六つの子がやつと七つになつたばかり、早く読者と同じ女学生の年頃に、成長してくれぬと、作者も困るわけなのに、一向発展しない」、「この幼い子が、結婚するまで書けば、何年かかるか分らぬので、一先づ幼女篇を終り、少女篇、青春篇として、いづれ続けるつもり」¹⁶と『美しい旅』を書き続けることに意欲を見せている。

川端は、『美しい旅』の正編と続編を発表するまでの間に二度満州に渡っている¹⁷。『美しい旅』の花子を中心に描かれた正編と、月岡先生の満州行きが描かれた続編の間に、断層が生じていると受けとられる背景には、川端の渡満体験が続編に反映されていると捉えられてきたからである。

しかし、作家の行動のみに着目するのではなく、予定していた花子の成長を斥けてまで続編には何が書かれているのかをテキストのなかから看取する方が、『美しい旅』の正編と続編の関係性を考える際には必要なことだと考えられる¹⁸。

続編は、月岡先生が満州へ旅行へ出かけ、満州から明子と花子のお母さま宛に送られて来た手紙を明子が紹介していく形で進行する。

満州にいる月岡先生から送られてくる手紙には、多くの日本言説が頻出し、盲聾哑教育に留まらず、日本人が満州にいかに関わるか、という同時代の課題が表出したものとして読むことが可能である。

先回りして言えば、月岡先生は、日本人が満州の教育を主導することについて、批判的な眼差しは、持ち合わせていない。むしろ、教育をはじめ、日本人が中心となって、満州国を作っていくことを肯定し、積極的な発言を繰り返していく。

月岡先生から明子に送られてきた手紙には、満州の古い盲学校として有名な「重明女学

校」が「明治三十五年」から宣教師達の努力で続いてきたことが書かれている。月岡先生は、そうした学校の成り立ちに触れて、「満洲のかういふ仕事は、いつまでも、西洋の婦人にまかせておかないで、日本の私達が、受けついでゆかねばなりません」というように、満洲の盲聾哑教育に日本人が積極的に加わることの必要性を述べる。正編においては、ヘレン・ケラーをはじめ、アメリカの盲聾哑教育を称揚する記述も見られたが、一九四一年九月から再開される続編においては、直後に第二次世界大戦に突入するという時代背景もあり、西洋の盲聾哑教育を賛美する記述は見られなくなる。

月岡先生が花子のお母さまへ宛てた手紙では、「いい日本人の教師が、もつともつと、満洲へ来てほしいといふことを、第一番に感じました。土地を開拓するといつしよに、こちらの人の心を、開拓しなければなりません」という考えを述べ、その根拠として、「満洲の教育も、急に進んで来ましたが、日本にくらべますと、お話になりません。学校のない村、国民学校へも行けない子供が、字を知らない人が、どんなに多いか」、「盲やつんぼの子供の教育には、たうてい手がまはりません」というように、日本と比較して、教育そのものが行き届いていない満洲の現状を嘆いている。満洲国通信社編『満洲国現勢 康徳六年版』（クレス出版、二〇〇〇年一〇月）所収の「聾哑学校の接収経営」によれば、「従来満洲に於ては人口三千万中聾哑者は三千人と概算されるが、聾哑教育に関する施設皆無にして、王道楽土を標榜して居る我国に於て極めて遺憾」であることから、新京に聾哑学校が設立されたと掲載されている。そこには、「現在教師六名、生徒六十名」とあり、月岡先生の手紙にあるように、満洲において盲学校や聾学校といった教育機関は、ほとんど存在せず、設立された場合にも人員は十分とは言い難かった。

一方で、「こちらの不幸な子供達を救ふために、いち早く、大陸へ渡つて来た日本人に会つて私は深い尊敬を感じます」というように、満洲の教育を開拓した日本人が月岡先生の手紙には紹介されている。

奉天の盲目の木山先生は、「十九の年」に目が悪くなり、高等学校の二年生で学校を辞めて農業に従事するうちに完全に視力を失った。その後、大学へ入って「最優等」で卒業し、日本で盲学校の教師を勤めた後、満洲に渡ったという人物である。木山先生の尽力で、奉天に盲学校と、盲人福祉協会が設立された。さらに木山先生は、「満洲は農業の国だし、盲も農家の子供が多いでせうから、農業を第一に教へたいんです」と満洲の未来にまで目を向けている点に、月岡先生は感嘆している。こうした木山先生の言動が実現した場合には、盲の子どもたちが満洲の労働力になることを意味するが、そうした点にも、日

本人を中心に満洲の教育が展開されることにも、月岡先生は特に疑問を呈すことはない。むしろ日本人が中心となつて、満洲国を推進していくことに積極的な様子が読み取れる。

満洲を旅行した月岡先生は、自らの旅を次のように総括する。

満洲国の真中に、一本の線を引いて、その線の上を、汽車で走つただけのやうな旅――。

しかし、こんなに短い旅でも、月岡さんは、まるで自分が、新しい日本人になつたやうな、力強いものを感じた。

力強い満洲国を見るといふことは、力強い日本を見ることなのだった。

満洲国は、日本人にとつて、ただ、見るもの聞くものが珍しいといふ、外国ではない。日本人が、ほかの民族と一つになつて、今、この新しい国を、建ててゐるのだった。――言はずと知れたことだが、その国へ自分が行つて、実際に見ると、ほんたうにわかつて、若々しい国家と民族との力が、胸にあふれるのだった。自分も大陸に来て働きたくなるのだった。

たとへば、月岡さんが満洲へ渡つて、聾学校の先生になつたとすると、その日から、月岡さんは、満洲国の国民である。さうして、元通り、日本の国民であることに、変りはない。

これから、学校をつくり、生徒を集めるといふやうな、満洲の聾学校の方が、処女地をひらく喜びもあるし、自分の理想も生かせるだらうし、若い者は力いっぱい働けさうだと、月岡さんは思つた。

このように、月岡先生は、満洲への思いを募らせながらも、「東京で教へることも、この満洲国に関係がないとは言へない。今は、日本と満洲国とが、それほど一つに結ばれてゐる」、「日本の聾の子供を、よく教へることは、やがて、満洲の聾の子供を、救ふことにも、役立つだらう」と満洲と自分の接点を見出すことで、今後も日本で聾啞教育に従事する決心をする。

本節で確認してきたように、続編の前半は、満洲にいる月岡先生から送られてくる手紙が内容の中心だった。「少女の友」の「トモチャンクラブ」においては、続編が開始されてからも、「半分できつてしまへば私は気の毒な花子さんがどうなつて行く事でせうか心配でたまらないのです。学問や口話が出来るまではどうか続けて下さいませ。不自由な花

子さんが一日も早く口話が出来るやうになる日たのしみ待つて居ります。月岡先生も花子さんのために指導なさつて下さる事でせう」⁹⁾という投稿も見受けられたが、ついに月岡先生が直接花子の教育を担うことなく『美しい旅』は未完の小説として閉じられる。

『美しい旅』続編の後半は、満州から帰る船上で月岡先生が読む「綴方」の話題へとシフトしていく。この「綴方」は、満州に生きる五族の子どもたちによつて全編「日本語」で記されたものである。つまり、各民族が本来有していた言葉を奪つたうえで植え付けた「日本語」で書かせたものである。正編において、盲聾啞の少女花子が「言葉」や「文字」を獲得するということは、自己表現の方法やコミュニケーションツールを獲得することであり、内面を豊かにすることが期待された。一方で、同時代に「日本語」を教授するということは、〈皇国の民〉を育てる重要な手段であることも表出した。続編の前半においては、渡満した月岡先生によつて、満州の日本語教育を推進する重要性が語られた。こうして展開してきた『美しい旅』の結末部に、「綴方」が登場する意味はどのようなところにあるのだろうか。次節ではこの点に注目していきたい。

第五節 「言葉」Ⅱ「日本語」を与えてしまうこと——綴方との関連から——

月岡先生が日本に戻る船で読んでいた綴方の概要は、次のようなものである。

満洲国の五族——日本人、満人、朝鮮人、蒙古人、白系ロシア人の国民学校児童から、綴方の上手な男の子と女の子を、それぞれ二人ずつ選んで、合はせて十名の代表が、満洲国の「綴方使節」として、日本を訪れた時の旅行記を、この本に集めてある。

満人の子供も、朝鮮人の子供も、蒙古人の子供も、白系ロシアの子供も、みんな日本語で書いてゐる。

先にも述べた通り、月岡先生が読む「綴方日本」は、五族の子どもたちに「国語」として「日本語」を強要したうえで、書かせたものである。一見、ここで唐突に「綴方」の話題が登場するように見受けられるが、「綴方」の登場は、『美しい旅』が人に「言葉」Ⅱ「日本語」を教授することで〈皇国の民〉を育てていくという正編と共通した話題をさらに追究したものだと捉えることができる。つまり、「綴方日本」の登場は、『美しい旅』が正編、続編を通じて「日本語」を与えることで〈皇国の民〉を育てるといふ物語である

ことを開示する役割を果たしていると考えられるのだ。川端の綴方への関心は、既に先行論で指摘がなされており²⁰、「少女の友」でも作文評の選者を務めていたことも知られている。

また、大村次信編『満洲国の私たち』（中央公論社、一九四二年一二月）の選者を務めた際に、川端によって記された「序文」における「新しい国を建てた五つの民族の青少年が、自分達の生活記録を綴つて、年鑑の文集を編むなどといふ美しさは、満洲国のほかに、現在世界のどこにあらうか」や「満洲国の百般を紹介する文学は多いけれども、日本内地人の満洲に対する認識と理解とは、なほ身につかぬ」、「満洲に生育し、或ひは移民した、日本民族の子供や若者が、今このやうに生きてみると、彼等自身の文章で」満洲の現状を伝えたいという願望を読むと、『美しい旅』における「綴方日本」の登場は自明のこのやうにも思われる。

しかし、ここでも川端の綴方への興味のみ注目するのではなく、『美しい旅』のテキストにおいて「綴方」がどのように描かれているのかを確認する必要があると考えられる。

続編の後半は、月岡先生が「綴方日本」を読み、その内容が引用され、その引用に月岡先生の感想が付されるという形で展開していく。そこで言及される「綴方」は、月岡先生による選択であることが推測される。「綴方日本」で紹介される「綴方使節」は五族の男女一人ずつで構成されている。月岡先生が「綴方日本」から読みとるものは、満洲で育った子どもたちの満洲に対する「愛国の心」にある。例えば、白系ロシア人の女のアンナ・ウイエツカヤの綴方からは、彼女が満洲へ帰ってくる喜びを読み、「白系ロシア人の少女にも、満洲は自分の国——帰つて来ると、こんなにうれしい」、「日本から帰つたのを、こんなによるこんである。さう思つて読むと、アンナの綴方には、新しい満洲の愛国の心があるやうだ」というように、白系ロシア人に、「日本語」で満洲への「愛国の心」を表現させるという、そこにはあくまでも日本側の立場から見た五族協和の理想ともいうべきものが書き留められてる。また、月岡先生が見た満洲の日本語教育については、次のやうに語られている。

満洲の国民学校では、みんな日本語を教へてゐる。（中略）

小さい子供が、「二つのちがつた言葉」を、いちどきに習ふといふことは、月岡さんをおどろかせた。

一年生の二学期にもなると、もうたいていのことは、話せるといふのにも、びつく

りした。

月岡さんの教へてゐる子供達は、日本人でありながら、日本の言葉を、片言のやうにしか話せない。

つんぽでおしで、言葉を持たない子供達に、言葉を与へようとしてゐる月岡さんは、言葉がどんなに力があるものか、誰よりもよく知つてゐる。

「綴方日本」を読むことで、月岡先生は「言葉」Ⅱ「日本語」の力を再認識し、盲聾啞者の花子や聾学校の自らの生徒と日本で関わっていく道を見出す。当時の資料からは、月岡先生の手紙にあるように、満州の「日本語教育」が困難な様子もうかがわれる。

満洲国の日本語教育の前途には、まだまだいろいろな難関が横たわつてゐる。日系教師の得難いことや、満系教師の日本語の力と陶冶力の十分でないことや、教授法に練達の士がまばらなことや、日本語習得の場面が日語の時間に限られてゐることや、その他生活環境から得られることの極めて少いことなどがさうである。²¹

こうした困難とともに、日本語教育の定着がままならないという現実もあった²²ようだが、月岡先生は、満州の子どもたちが植え付けられた日本語を強要されている点には全く触れず、「日本語」を習得する様子を「言葉」の力を再確認する。

花子はお母さまとともに月岡先生の帰りを東京駅のプラットホームで待っている。そこで花子は、達男に習った「センセ」という言葉を月岡先生に向けて発する。「花子ちゃん、センセ、つて言つたの？え、花子ちゃん、センセ、つて言つたの？」と月岡先生は、喜び、「ニツポン！ ニツポン！」と、力をこめて言ひながら、花子に頬ずりをする。月岡先生は、花子が「「センセ」と発音した事に対して、「「ニツポン！」と応えて喜ぶ姿勢を見せる。月岡先生が満州に出発するとき、見送りの東京駅のホームに置いてけぼりで、しばらく登場の機会がなかった花子は、ここで再登場し、「「センセ」と発音すること、月岡先生を喜ばせることとなる。

ここで整理すると、続編の後半においては、満州に暮らす五族の子どもたちが全て日本語で書いた「綴方日本」が登場し、また花子が「「センセ」と発音すること、月岡先生は、満州のために日本で聾啞児の教育をするという自らの選択が前進したことを喜ぶ。つまり、花子が話す「「センセ」」に対して、月岡先生が「「ニツポン！」」と応答する

ことは、花子が「日本語」を解することによって「ニッポン」の〈皇国の民〉になり得ることに月岡先生が確信を持ち、そのことに対して喜びを表していると捉えることが可能であろう。

第六節 おわりに

『美しい旅』の正編は、当初盲聾の少女の花子を中心とした内容であった。花子は「文字」や「言葉」を習得しなくても触覚や感じ、振動などで感じる確立された世界を持っていた。しかし、達男によって初めて「ハナコ」や「カハ」という文字を教えられたことで、自己表現とコミュニケーションが可能な存在となった。ここにも、花子へ一方的に言葉を授けてしまうという暴力性は、生じているものの、花子のお父さまが「字を書くたびに、好きな達男さんや、明子さんを、思ひ出して、愛情を感じられたら、花子の心も、やさしくなると思ふね」と言ったように、「文字」を覚え、「言葉」を習得することは、花子の人生を豊かにする側面があった。そのため、「少女の友」の読者からは、花子が読話や口話を覚え、学校に通い、月岡先生のもとで豊かに成長していくことを望む投稿も多く見られた。しかし、達男が〈皇国少年〉の位置を与えられたことで、花子が「日本語」を解することは、〈皇国の民〉を育てる重要な手段が与えられたことも意味した。

続編において、月岡先生が満州に旅立ったことで、花子の存在感は後退し、満州の盲教育や聾教育が紹介され、日本と満州がいかに関わっていくかという同時代の抱える課題が小説に一気に浮上する。そこには、「日本語」を用いることで、満州を開拓していくという当時の理想ともいえるべきものが書き込まれている。続編の後半においては、五つの民族の子どもによって全て日本語で書かれた「綴方日本」が登場し、それに月岡先生の感想が付されるというものに小説の内容は変質していった。月岡先生が満州から帰ってきた際には、花子が「センセ」という言葉で月岡先生を迎える。花子は言葉を与えられる以前の「猿のやう」に感情を爆発させることもなければ、大泣きをすることもなく、盲聾の少女ではないかのように月岡先生を違和感なく迎える。そうした花子に、月岡先生が発した言葉は「ニッポン」というものだった。これは、石剛がいう「言語イデオロギーの拡張により日本語が「国体」や「日本精神」などの権化としてもちあげられ、日本語の普及はとりもなおさず日本精神や皇道の「光被」だと強調された結果、言葉の本来もつコミュニケーションのための機能がかえっておろそかにされてしまう傾向」²³そのものであると考

えられる。

このように、「文字」と「言葉」に着目して、『美しい旅』の正編と続編を読んでいくと、「言葉」＝「日本語」を教授することで、花子と満州の子どもたちを〈皇国の民〉にしていくという共通項が見えてくる。よって、続編の後半で唐突に出てくるかのような「綴方」の話題は、『美しい旅』が正編、続編を通じて「日本語」を与えることで〈皇国の民〉を育てるという物語であることを開示する存在であるといえる。

これまでは、続編が単行本に収録されなかったことや、正編と続編の間に川端の渡満体験があったこと、花子が物語から後退していったことなど、『美しい旅』の正編と続編の間には断層があると見なされてきた。

正編と続編の間に生じているかに見える断層は、『美しい旅』の正編のみを単行本化する際に関わったメディアの関係者や、戦後の川端の言説、あるいは研究者によって表出させられたものだと考えられる。『美しい旅』には、花子と満州の子どもたちのように、「言葉」や「文字」を共有していないものに、一方的に「日本語」を教育してしまうことへの暴力性が正編、続編を通して両編に共通して内包されている。しかし、ここで留意すべきことは、もともと「言葉」を持たない盲聾啞の少女の花子に言葉を与えることと、各民族の言葉を奪ったうえで満州の子どもたちに「日本語」を植え付ける意味は、全く異なるはずだということである。こうした両者の背景の違いが重視されることなく、同時代において「日本語」を解することの重要性が描かれていることは、追究されるべきことであろう。正編と続編の間に断層を見出し、正編を積極的に「教育小説」と捉えて評価し、続編を捨象することは、正編のなかに既に表出しているハンディキャップを抱えた盲聾啞の少女である花子をも〈皇国の民〉とすべく「日本語」を与える、という観点を見落とすことになる。『美しい旅』は、「教育小説」という側面だけではなく、こうした問題も内包した小説なのだ。

ここで今一度ヘレン・ケラーの存在について触れておきたい。川端は、『美しい旅』の執筆について以下のように言及している。

ヘレン・ケラーの全集を読んだことも、この作品を書く一つの動機であつたにはちがひないが、花子はヘレン・ケラーの日本化では決してない。さういふ一人の人物を書かうとするのではない。しかし、これを書きながらヘレン・ケラー全集を幾度も読んだことは、無論である。²⁴

川端は、花子が「ヘレン・ケラーの日本化では決してない」と断りながらも、「ヘレン・ケラー全集を幾度も読」みながら『美しい旅』を執筆したことに言及している。ヘレン・ケラーは、存命中、三回来日を果たしている²⁵が、一九三七年五月四日～八月一〇日までの初来日の直前には、全五巻の全集が刊行²⁶され、まさにヘレン・ケラーブームともいうべきものが巻き起こっていた。当時の新聞を繙くと講演会の日程や彼女の動向が連日報道されていたことが確認できる。なかでも注目すべきは、一九三七年七月二三日の「東京朝日新聞」に掲載された「ケラー女史大連へ」という記事である。ヘレン・ケラーが大連でどのような活動を行ったかについては、詳細な調査を要するが、『美しい旅』の続編でも言及されていた「重明盲学校」や、その他には「大連盲啞学校」を訪問していたことが確認できる²⁷。ここで留意しておきたいことは、後世の目から見ると異質とも見える『美しい旅』における盲聾啞の少女花子と満州の接続という事象が、「三重苦の聖女」ヘレン・ケラーと満州の繋がりによって既に示されているということである。本章第三節で取り上げた盲学校の生徒が記したように、ヘレン・ケラーの言葉の持つ力の大きさは、注目すべきものがあつた。『美しい旅』が執筆された同時代において、盲聾啞の少女の花子が「言葉」Ⅱ「日本語」を獲得し、〈皇国の民〉として「言葉」を発していくことは、ヘレン・ケラーと同等、それ以上の影響力を持つ存在が「日本」に誕生することも意味するのである。

川端の一九三〇・四〇年代のあり方や、戦後の戦争にまつわる川端の発言、研究者の評価の仕方も併せて、『美しい旅』の続編が川端の死後まで捨象されてきた事実については追求されるべきものを多分に孕んでいる。

本章は、「言葉」Ⅱ「日本語」の教授という点に着目し、『美しい旅』正編と続編を読み進めてきた。そこから見えてきたことは、『美しい旅』は、全編を通じて、「教育小説」に留まらない当時のイデオロギーを内包した小説であるということだ。

1 本論文序章の後に添付した「小説発表状況一覧」を参照されたい。

2 川端康成『美しい旅』（実業之日本社、一九四二年七月）等。

3 羽鳥徹哉「解説」（浅井清編『児童文学大系 第二三巻』ほるぷ出版、一九七七年一

月)

4 須藤宏明 「盲目の人を動機にした川端康成の小説論——「温泉場の事」を中心に——」
(川端文学研究会編『川端文学への視界9』教育出版センター、一九九四年六月、後「盲人を動機にした川端文学——「温泉場の事」「母の眼」——」と改題して『疎外論——日本近代文学に表れた疎外者の研究——』おうふう、二〇〇二年三月)

5 遠藤寛子 『少女の友』とその時代——編集者の勇氣 内山基——』(本の泉社、二〇〇四年一月)

6 久藤理 「少女小説・綴方・植民地主義——『美しい旅』と川端康成の戦時下——」(川端文学研究会編『川端文学への視界21』銀の鈴社、二〇〇六年六月) この論文のなかで久藤は、戦時下に川端が携わった綴方の作品選考や選評を次のように整理している。

戦時下の川端は、「婦人公論」小品欄選評(昭12・1—12)、「新女苑」コント欄選評(昭13・12—18・11)、『模範綴方全集』(中央公論社、昭14・5—6)の作品選考、「少女の友」綴方欄選評(昭16・1—18・12)、『満州国各民族創作選集1』(創元社、昭17・6)の作品選考、「満州国の私たち」(中央公論社、昭17・12)の作品選考、「英霊の遺文」(『東京新聞』昭17・12・8—15、昭18・12・6—12、昭19・12・10—15)など、創作・綴方の作品選考・選評という仕事に熱心に取り組んでいる。戦後も長く続けられる綴方の選評という川端の文学活動は、戦争体制下の世相が強まっていた時局との深い関わりの中で始められたものであった。

7 三浦卓 『少女の友』のコミュニティと川端康成「美しい旅」——〈障害者〉から〈満洲〉へ——』(『日本近代文学』二〇〇九年五月)

8 大原祐治 「動物・ことば・時間——〈動物と人間の文学誌〉のための覚え書き」(『千葉大学人文社会科学研究』二〇一六年三月)、村上克尚『動物の声、他者の声 日本戦後文学の倫理』(新曜社、二〇一七年九月)等を参照した。

9 兵庫 眞砂郁子の投稿「トモチヤンクラブ」(『少女の友』一九四〇年一月)

10 彦坂恵 「ヘレン・ケラー先生を迎へて」(檀田祐也『海の見える丘…聾啞教師の手記』厚生閣、一九四〇年一二月)

11 注7に同じ。

12 滋賀 星加世子の投稿「トモチヤンクラブ」(『少女の友』一九三九年九月)

13 東京 明浦美千帆の投稿「トモチヤンクラブ」(『少女の友』一九四〇年八月)

14 川端康成 「美しい旅」21 「望みの海」(『少女の友』一九四一年三月)

15 「予告「美しい旅」—少女篇—」（『少女の友』一九四一年三月）

16 川端康成「旅中片信」（『文学界』一九四〇年七月）

17 川端の渡満の詳細に関しては、奥出健「川端康成——戦時下の満洲の旅をめぐつて——」（『國學院雑誌』二〇〇四年一月）、李聖傑『早稲田大学モノグラフ 106』川端康成の「魔界」に関する研究—その生成を中心に—』（早稲田大学出版部、二〇一四年三月）を参照した。

18 兵藤正之助「川端康成論——「名人」を中心に——」（『関東学院大学文学部紀要』一九八四年一二月、後『川端康成論』春秋社、一九八八年四月）では、川端の満洲に関連する言説について検討されている。川端の「新京から北京へ」（『少女の友』一九四一年八月）と、「満洲の本」（『文学界』一九四二年三月）については、「まず両者に共通しているのは、そもそも満洲国なる国家が、いかなる経緯の中から生まれ、どのような政治権力によって牛耳られているかの認識が全く欠如していると感じられることだ。当時の政府筋からの日満支民協和による王道楽土の建設というたい文句をきわめて楽天的に鵜呑みにしたような文章である」と批判的に論じられている。

19 東京 小出トヨの投稿「トモチヤンクラブ」（『少女の友』一九四二年四月）

20 注 6 に同じ。

21 松尾茂「満洲国に於ける日本語教育の現状」（『日本語』一九四四年四月）

22 徐敏民『戦前中国における日本語教育』（エムティ出版、一九九六年一月）では、「一九三八年から実施された新学制によって、満州での日本語教育は制度化されるようになり、「新学制」が制定後、満洲における二重国語制を法制化され、日本語と満州語（中国語）または蒙古語とが共に国語であったが、公用語は日本語とされた」ことにより、生じた日本語教育の問題点について次のように整理されている。

第一 国語と位置づけられた日本語教育としての内容から生じた問題について言えば、母国語との関係によって生じたものと、生活内容、民族性の相違によって生じたものの二つにわけることができる。国語との関係によって生じた問題は第一に日本語生活の場面がきわめて狭いことがあげられる。言語生活において児童、生徒が日本語と中国語の二重生活をしているというよりは、言語生活の大部分が中国語で行われて、ほとんど教室ないし教師との対話以外に、中国語でやっているという実情によるものであった。それは生徒自身の日本語がともかく母国語である中国語の性質構造に引きつけられて日本語が歪められることによって、純粋な日本語の習得が困難であったため

である。このような現状は発音、文字、語彙、語法の上にもそれぞれ見られた。

23 石剛『増補版 植民地支配と日本語 台湾、満洲国、大陸占領地における言語政策』

(三元社、二〇〇三年一月)

24 川端康成「あとがき」(『美しい旅』実業之日本社、一九四二年七月)

25 ヘレン・ケラーの来日については、阿佐博「ヘレン・ケラーの来日がもたらしたもの」

(『視覚障害』一九九八年七月)等を参照した。

26 ヘレン・ケラー全集(全五巻)の出版

ヘレン・ケラー(岩橋武夫、芥川潤訳)『私の生涯(其の一)』(三省堂、一九三六年一月)

ヘレン・ケラー(岩橋武夫、児玉國之助訳)『私の生涯(其の二)』(三省堂、一九三六年一月)

ヘレン・ケラー(岩橋武夫、児玉國之助訳)『私の生涯(其の三)』(三省堂、一九三七年一月)

ヘレン・ケラー(岩橋武夫、遠藤貞吉、荻野目博道訳)『私の住む世界』(三省堂、一九三七年二月)

ヘレン・ケラー(岩橋武夫、島史也、荻野目博道訳)『私の宗教』(三省堂、一九三七年三月)

27 「ヘレン・ケラー女史全日本巡回講演日程表(満鮮を含む)昭和十二年」(岩橋英行

『社会福祉法人 日本ライトハウス四十年史』社会福祉法人 日本ライトハウス、一九六二年一〇月)

第四章

〈旅行〉から〈旅〉への遡行——『旅への誘ひ』——

第一節 はじめに

三島由紀夫から「永遠の旅人」と評されたことに代表されるように、川端康成と〈旅〉は不可分な形で語られてきた。その〈旅〉がタイトルに含まれた小説『旅への誘ひ』は、一九四〇年一月から九月にかけて「新女苑」に掲載された²⁾。「出発の章」、「箱根・熱海の章」、「蒲郡の章」、「東海道の章」の四章で構成されたこの小説は、作者生前の刊本に収められることはなく、初出が発表されてから約四〇年後、川端没後に刊行された三七巻本『川端康成全集 第二三巻』(新潮社、一九八一年二月)において初めて収録されたが、それ以降は、刊本に収められることはなく現在に至っている。

『旅への誘ひ』は、三度にわたる旅の出来事を物語内容とする小説である。語り手である「四十前」の作家の上杉は、同居する園子から、上杉のかつての新婚旅行先に行きたいと懇願される。園子は亡き妻絹代のいここにあたる女性である(「出発の章」)。園子の懇願によって、上杉は園子と、絹代の遺児である早苗を連れて、かつての新婚旅行先である箱根・熱海への旅に出発する。この最初の旅行をめぐる叙述は当初、「旅行案内書」のごとく当時の観光をめぐるコンテキストが色濃く書き込まれる形で始まるが、旅の途中、熱海ホテル滞在中に上杉の憧憬の対象となる市河明子に出会うことで、新婚旅行の反復の旅に変化がもたらされる(「箱根・熱海の章」)。次の蒲郡への旅は、上杉が明子を追いかけるために出発したものだ³⁾と明かされる(「蒲郡の章」)。最後の旅は、園子に騙される形で、上杉が東海道を巡る旅に出発し、東海道と古典に関係する書物を携えながら、明子を追う旅が展開される(「東海道の章」)。

『旅への誘ひ』を唯一収録した三七巻本『川端康成全集 第二三巻』(前掲)「解題」で「作品の主要部分の主題」は「別の作品」すなわち「東海道」の「後半へと吸収され」と説明されて以来、先行論において『旅への誘ひ』は、三年後に発表された『東海道』(「満洲日日新聞」一九四三年七月二〇日〜一〇月三十一日)⁴⁾の「前駆」をなす小説だとみなされてきた⁵⁾。『東海道』も長らく刊本に収められることはなかったが、一九七五年六月に『天授の子』(新潮社)に採録された⁶⁾。このようなテキストの露出における対照性と比例するように、研究史においても『旅への誘ひ』と比較して『東海道』の方に重点が置かれてきた。『旅への誘ひ』には「戦中の古典への傾倒」も確認されることから、「川端文学展開の上で重要な作品」⁷⁾と指摘されたこともあったものの、長らく『旅への誘ひ』に関する具体的な研究が進まなかった背景には、以上のような経緯がある。

多からぬ先行論においてとりわけ注目されてきたのは、『旅への誘ひ』と『東海道』の両方に登場する市河明子の存在とその役割についてである。深澤晴美は、『旅への誘ひ』連載に先駆けて同誌に発表された「神秘」⁷という小文に注目し、川端がこの小文のなかで記した「崇拜すべき女性」を描きたいという願望が市河明子に「体现」されたことを指摘している。また、深澤は続けて、明子が上杉に「地に伏したいやうな悲しみ」を感じさせ、その「美しい手で身体はどこかにさはつてもらひながら自滅してしまひたいやうな悔い」を起こさせる人物として形象されていることにも注目し、明子の魅力を楽しむ上杉に、後年の「みづうみ」(「新潮」一九五四年一月〜二月)等で頻出する「(魔界)の住人の先駆的側面」⁸を読み取っている。山田吉郎は、市河明子の描かれ方に重点を置いて『東海道』と『旅への誘ひ』の比較検討を試み、『旅への誘ひ』における市河明子が「単なるエロスを惹起するだけの存在ではなく、東海道をめぐる古人の風雅の中におのずと溶け込む存在」⁹であると分析した。一方、三浦卓は、川端が一九四〇年前後(昭和一〇年代)に、「主要な(仕事)」の舞台であった「女性を対象とした雑誌」に発表したテクスト群を存命中に三回刊行した全集に収めなかったことについて「都合のいい(作品)」によって恣意的な自らの文学史を創造」¹⁰したとして、川端の姿勢を批判している。『旅への誘ひ』もまた「女性を対象とした雑誌」に発表された小説にほかならず、それゆえに研究史において『東海道』のヴァリアントと見なされ、顧みられる機会に恵まれてこなかったと言わざるを得ない。

しかしながら、『旅への誘ひ』には〈旅〉をめぐる小説発表当時のコンテキストが多分に取り込まれており、こうした点からも小説空間と同時代との関連性について分析することで、この作品に固有の価値を見出すことは十分に可能であろう。『東海道』との関連を考えるにしても、なぜ『旅への誘ひ』における「東海道の章」の続きが放棄された上で、改めて『東海道』と題した別の小説に組み替えられなければならないのか、ということについて具体的なテクストの分析を通して検討することが必要ではないだろうか。

以上の問題意識から、本稿は、一九四〇年前後における〈旅〉をめぐるコンテキストを手がかりに、『旅への誘ひ』を読み直したうえで、『東海道』との接続について検討することを課題とする。

第二節 新婚旅行の表象／市河明子の登場による旅の変質

『旅への誘ひ』は、次のように始まる。

妻の絹代の一週忌も過ぎた。

園子は或夜上杉に、彼が絹代と新婚旅行した宿屋へ、つれて行つてくれと言ひ出した。

このように、上杉の最初の〈旅への誘ひ〉は、園子の懇願によるものだった。上杉は園子の申し出に対し、「こんなことをせがむのも、園子の媚態であらうか」という思いを持つ。先述の通り、園子は、上杉の亡き妻絹代のいところにあたる娘だが、孤児であったために絹代の実家に養われてきた。病床の絹代に代わり、子どもの早苗の面倒を見るために、絹代が亡くなる前から上杉の家に住み込んでいたが、「盲目の流れに身をまかせてゐるやうなところがあつて、園子のからだの奇怪に激しい愛は、上杉に女性の宿命のあはれさを感じさせた」というように、絹代が亡くなってから一年以上たつにもかかわらず、上杉と園子は同居を続け、不安定な関係を継続している。

上杉は、かつての新婚旅行を反復する旅を「破廉恥な旅行」と蔑みながらも、園子に誘われるままに出発する。行き先は、新婚旅行としては「平凡なコース」の箱根と熱海で、宿泊先は「宮の下富士屋ホテルと熱海ホテル」というように、小説には具体的な地名や宿泊ホテルが明示されていくのである。

ここで確認しておきたいことは、『旅への誘ひ』が発表された当時の新婚旅行に関する文脈である。山本鉷太郎によれば「明治、大正時代、いや、昭和一桁でも、新婚旅行などは裕福な特権階級にのみ許されたぜいたく事」であつて、「明治生まれの人々は、ほとんどが新婚旅行らしい旅行をしていない」という実状があり、行き先については、「戦前、新婚旅行といえば、東京の人たちはせいぜい箱根か伊豆、湯河原、熱海、日光、伊香保、塩原温泉あたり」¹²であつたとされる。小説発表時（一九四〇年）から、物語内の時間を逆算していくと、「四十前」の上杉は「明治生まれの人々」に該当し、その新婚旅行は、いわゆる「裕福な」、「東京の人たち」の定番コースを訪れるものだったといえるだろう。

さらに『旅への誘ひ』の初出誌「新女苑」にも目を向けておきたい。「少女雑誌と婦人雑誌の中心的存在」¹²を目指して刊行された「新女苑」は、その翌年には既に「高女及び女師の（中略）高学年」において最も愛読された雑誌であつた¹³。つまり、「新女苑」の読者層は、婚期を控える女性が大半を占めていた。「新女苑」の「小品欄」選評を務めて

いた川端は、読者による投稿について「婚期の人が多いせゐか、恋愛や結婚に関する作品が相変らず大部分を占めてゐる」¹⁴と分析している。こうした『旅への誘ひ』発表前の川端の発言からは、「新女苑」の読者が「結婚」に大きな関心を占めているということに意識的であつたことがうかがえる。実際、「新女苑」の紙面には、読者投稿欄に限らず、結婚に関する議論が頻繁に掲載されていた¹⁵。例えば、丘文子「花嫁列車同乗記」という文章では「此の夜の、列車内を、湯河原を、熱海を、一生の美しい思ひ出として抱く人たによ、幸あれ！」¹⁶というように『旅への誘ひ』と同様に、具体的な観光地名を出しながら、新婚旅行の在りようを紹介している。このことは、同時代の旅行雑誌「旅」（一九三六年九月）において「新婚旅行の恰好な旅行地」として東京から出発する「箱根、伊豆廻遊コース」¹⁷が紹介されていたこととも付合しており、実際上杉の新婚旅行もこのコースに準拠している。『旅への誘ひ』における新婚旅行の表象は、一九四〇年前後における新婚旅行にまつわるツーリズム¹⁸と婚期を控える読者層を考慮した「新女苑」の誌面と連動したものだと考えられる。

先回りして言うなら、上杉たちが「箱根・熱海の章」で宿泊する「富士屋ホテル」と「熱海ホテル」は、一九三四年に鉄道省から刊行された『観光地と洋式ホテル』¹⁹にも掲載された当時の最先端のホテルだった。これらの実在するホテルについて具体名を出しながら小説のなかで詳述することは、婚期を控えた「新女苑」の読者たちの関心に応え、新婚旅行への憧れをより一層喚起するものであつたと考えられる。

つまり、『旅への誘ひ』は、当時の新婚旅行のコンテキストを多分に取り込むことで、「新女苑」の読者のための新婚旅行の「案内書」のような役割を果たしていたのである。従つて、これまで注目を集めてきた「東海道の章」より以前の「箱根・熱海の章」で展開される新婚旅行の観光をめぐるコンテキストの取り込みには、注目すべきものがある。

では、新婚旅行の観光をめぐるコンテキストは、テキストにいかにして取り込まれ、どのように機能したのだろうか。

「箱根・熱海の章」において上杉と園子、早苗の三人は、上杉と絹代の新婚旅行を反復する旅に出発する。その行程は、汽車で東京を出発し、小田原から車に乗り換えるというものだった。

さう言へば、宮の下富士屋ホテルも、絹代と新婚旅行に来た時は、まだ増築前であつたのを、上杉は思ひ出した。もしかして、絹代と泊まつた部屋に通されたら、皮

肉過ぎると、びくついてゐた上杉は、新館の花御殿の方に泊ることにした。

さうと知らない園子は、花御殿の方が豪華なので、機嫌をよくしてゐたが、一日三食つき五十円といふ部屋を見ると、さすがにおちけづいた。

園子は、豪華な花御殿に「贅沢な新婚旅行だったのね。東京の近くで、一番いいホテルでせう？」という反応をする。『富士屋ホテル八十年史』によると、花御殿は、「斯くて昭和十一年六月十日竣工」²⁰とあり、ここから読み取れることは、テキストに富士屋ホテルの増築状況を取り入れることで、上杉と絹代のかつての新婚旅行と、園子と訪れている反復の旅との間に横たわる時差が強調されていることである。加えて、上杉が絹代と泊まった部屋を避けて、新しい花御殿への宿泊を選択することは、かつての新婚旅行と反復の旅の間に微妙なズレを生み、園子との旅は必ずしも正確な反復の旅ではないということを明示している。花御殿の内部についても屋根の用材の配合や、調度品の紹介、「四十余りの部屋それぞれに、日本の花の名前がつけてあるので、花御殿といふ」と名前の由来の説明も見られ、各部屋につけられている「日本の花の名前」も列挙されている²¹。このような「旅行案内書」さながらの描写は、やはり「新女苑」の読者を意識してのことだと考えられる。

また、熱海への移動に関しても、「絹代との新婚旅行の時には芦の湖畔の箱根ホテルに一晚泊まつ」たのに対し、今回の反復の旅では、元箱根でバスを乗り換え、箱根峠を十国峠へ登り、真っ直ぐに熱海に向かうことを選択している。ここでも上杉は、かつての新婚旅行とは旅程を微妙にずらすことで、新婚旅行の反復という大枠は維持しながらも、かつての新婚旅行との差別化をより明確にしている。

しかし、上杉のなかでかつての新婚旅行と反復の旅が鮮やかに重なる瞬間が訪れる。

このやうにゆつたりの裾の線を流した富士は——園子にもたれかかつて居眠りしてゐた早苗でさへ、ほつと息を吞んで振り仰いだほどだった。

園子の外套の衿から派手なマフラがのぞいてゐる、そこへ頬をよせかけて、うつとり富士に見とれる、幼い女の子の眼は、無心に純粹の極みだった。

この大きい景色のなかに浮ぶ一点、生きたものの美しさ——その早苗の眼は母に似てゐる。

この時ほど、上杉は死んだ妻の絹代を、はげしく思ひ出したことはなかった。瞬間

ではあつたが、絹代が上杉の胸を貫いて通つたやうに感じた。

上杉は、「富士を仰ぐ早苗の眼」から、「心に絹代が強くよみがへつて来」という体験をする。それまでの上杉は、自らの意志で、かつての新婚旅行と反復の旅との間に微妙なズレを生じさせ、二回の旅の差別化を図ってきた。しかし、悠久にそこにある富士の前では、上杉の二つの旅は否応なく重なり、絹代の血を分けた「早苗の眼」に映る「富士」によって、絹代との記憶が蘇る。このとき園子は一時的に旅の部外者となり「風景などに心をひかれないただし、寝不足の後らしく、ぐつたりと黙つてゐる」と描写され後景化される。新婚旅行の三日目に、絹代が「十国峠の眺めにわれを忘れて、娘らしい身振りを、上杉の前で初めてのびのびと出し」たことを思い返した上杉は、亡き妻絹代と真剣に向き合うことを余儀なくされる。一方で、現実的に「お互に寄り添つて生きてゐる」園子とも向き合わざるを得ないと自覚する。反復の旅を「破廉恥」だと考えるのは、上杉の「けちな道徳家の思ひ上りに過ぎ」ず、「死んだ絹代に遠慮して、生きてゐる園子を粗末にあつかふ」ことは、「生命の冒険にちがひな」という思いに至る。そのようなことを考える上杉は、「案外この旅行が、いつしよに生きる者の園子を、上杉にはつきり植ゑつけることになりさう」だという思いを起こす。

十国峠から眺める「富士」は、今の上杉の立場とともに、上杉の記憶のなかにある絹代を思い出す根本的な事象として小説に浮上している。戸川秋骨が「十国峠まで行くのが、かなりの仕事であり、其処の眺めも鑑賞に値ひする」²²と紹介しているように、既に定着した観光地だった十国峠から眺める「富士」の情景は、上杉が二人の女性と向き合う契機としても機能している。

上杉たちは、熱海ホテルに到着する。上杉は、かつての新婚旅行においては「三階の洋間」に泊まつたが、反復の旅では「少し滞在して原稿を書くつもり」²³だと言ひ、「日本間に宿泊した。ここでも上杉は、自らの意志で二度の旅の間に微妙なズレを生じさせている。熱海ホテルは、「熱海でも最も新婚旅行の多い宿」であり、「婚礼月の吉日には、二三十組もの「新婚さん」が泊る」と紹介されている。上杉たちが宿泊した日も「新婚旅行らしいのも、三組ほどあり、「園子はそれらの花嫁と、年もおほかたおなじ」であるのに、全く異なる立場で上杉と一緒に滞在しており、上杉と園子の不安定な関係性は徐々に強調されていく。

留意すべきことは、上杉と園子の不安定さが強調されていく根本的な要因には、熱海ホ

テルから登場する令嬢・市河明子が関係することである。明子は、養生のために長期に滞在していた。上杉は、明子が話し出す様を「突然美しい音楽を聞くやう」だと感じ、その声は「清らかな音楽」に聞こえる。

少年の初恋に似て、なんといふことであらうと思つたけれど、地に伏したいやうな悲しみが、いきいきとあふれて来るのは、たうていおさへきれなかつた。

最初に明子を見た時から、既に上杉の明子への憧憬は極まっている。このような上杉の様子に「目ざとい」園子は、「なにか追ひ立てられるやうに、上杉をもとめ」る。二人の関係は、ますます不安定さを増し、園子は上杉のために明子の「手を握つてみせる」と言い出す。そのような園子に対し、上杉は、園子の真意をはかりかねながらも、「どういふつもりなのかと、上杉が考へるいとまもないうちに、園子の魅力がまっはりついて来」る。このように、上杉は明子への強い憧憬とともに、抑えがたい園子の魅力とも対峙すること余儀なくされ、上杉の欲望は二重化し、さらに屈折していくのである。

上杉のかつての新婚旅行を反復する箱根と熱海の旅は、当時の観光をめぐるコンテクストを織り交ぜながら、「旅行案内書」さながらの旅が展開されてきた。しかし、熱海ホテルにおいて上杉の憧憬の対象となる市河明子が登場することで、旅は大きく変質する。つまり、ここに至って『旅への誘ひ』という小説は、亡妻との新婚旅行を亡妻のいとこと反復するという、いささか淫靡な設定のもとに展開される観光案内といった当初の枠組みを踏み越え始めるのである。しかし、一方で、上杉の欲望の二重化が強くなればなるほどに全くタイプの違う園子と明子の個性と魅力が際立ち、女性の多様な性質がコントラストとしてテキストに提示されることにもなる。例えば、園子が上杉にこれからも「……御一緒において下さいませ」と懇願した際には「たとひ行く末、園子とどうならうとも」「独りの女がさう言ったことは、生涯忘れられるものであるまい」というように、これまで媚態を示すタイプの女性として描かれてきた園子に、上杉がありがたみを素直に表すという機会をもたらし、「いつしよに生きる者の園子」の輪郭がよりはっきりと浮上する。

上杉にとって、年末の蒲郡への〈旅への誘ひ〉は、明子によるものであった。上杉は、熱海ホテルのボオイから明子が「正月の熱海は雑沓するから蒲郡へ行く」ということを聞き、明子を追って蒲郡へ向かったのである。「蒲郡の章」においても上杉たちが常磐館²³に宿泊することが記され、明子が楽焼屋の窯を訪ねるといった観光をめぐるコンテクスト

の描写は、継続される。しかし、「箱根・熱海の章」のような「新婚旅行」の反復という明確な目的が消滅していることもあり、物語内容と観光をめぐるコンテクストとの積極的な重なりはみられない。「蒲郡の章」の結末では、明子が東海道に関係する「海道記」を読んでいることが素描され、それが「東海道の章」へのプロローグの役割を果たしている。

第三節 岡本かの子「東海道五十三次」の重み

ここで、先行論において重要視されてきた『旅への誘ひ』の最終章にあたる「東海道の章」と、小説『東海道』との接点を再検討するため、一度『旅への誘ひ』から離れて小説『東海道』について確認する。

『東海道』の物語内容は、以下の通りである。語り手の植田建吉は、東海道筋の旧家に生まれ、静岡で高等学校の国語教師を務めていた折に『日本の旅人』という本を執筆した。その内容は「古典にあらはれた、日本人の旅の心を調べたもの」で、「日本の国土に対する愛情を確かめるのに、これが自分の方法だと、ひそかに信じて書いた」ものだった。植田は現在、妻と娘の絹子と大磯に住んでおり、絹子に東海道を往還した小野小町や、菅原孝標女の文学やその生涯について、東海道にまつわる古典を媒介にしながら語っていく。一昨年、植田は絹子や元教え子たちと吐月峰を訪れた際に、住職から同じ日に『日本の旅人』を読んで「いい手紙」をくれた市河明子が来ていたことを聞かされる。この吐月峰の話題から、植田が語る古典は、王朝から中世のものへと変化する。

この小説と『旅への誘ひ』との接点が、ともに「市河明子」という同名の女性が登場していることにあるのは明らかであるが、それ以上に注目すべきなのは、東海道と古典にまつわる「本」が重要な役割を担っている点である。

『旅への誘ひ』の最終章「東海道の章」は、三河屋に滞在する明子から、園子に送られた手紙からはじまる。

「東海道の一筋も知らぬ人、風雅に覚束なし。」

と、はじめに芭蕉の言葉を書いた絵葉書は、箱根小涌谷の桜で、園子あてのものだった。

思ひがけなく、それは明子からだった。

——私もすっかり健康を回復したらしいから、自分の体を試験するつもりで、春の

東海道を少し歩いてみたい。大方半年も家を離れてゐると、それも身について、私の故郷は私が育った東京ではなくて、どこかの田舎にあるやうに思へて来る。旅をしてゐるのではなくて、故郷をさがし歩いてゐるのかと思ふ時がある。

さういふ意味の文面だった。

この明子からの手紙で注目すべき点は、明子が旅をすることを、そのまま「故郷をさがし歩いてゐるのかと思ふ時があ」り、次の旅は東海道を「歩いて」みたいと書き付けていることである。この点を踏まえて、明子と上杉の旅が東海道と古典にまつわる本によつて交錯していくことを確認していきたい。

明子からの手紙を見た園子は、上杉に「哀願するかのやうに、明子のあとを追つて行け」と繰り返す。そのような園子に耐えきれなくなった上杉は、古本の展覧会に出かけ、「東海道に係のある本」を「眼をつぶるやうに」買い集める。こうして、上杉は明子と同様に、「東海道に係のある本」と親和性の高い人物へと変化する。園子は、早苗と三河屋に行くので「すぐにいらして頂戴」と書いた置き手紙をすることで、上杉を箱根へ出発させるが、三河屋に園子の姿は無い。

つまり、上杉は園子にだまされるかたちで東海道の旅へ出発させられる。『旅への誘ひ』における三度の〈旅への誘ひ〉は、全て女性たちによつてなされるのである。

上杉は、明子を追う旅に出発したにもかかわらず、「僕は明子さんの後を追はうとする」と、一層園子が哀れに思へて、一刻も早く帰りたくなる。さうして反対の方へ行く。自分の悲しみを深め、園子への愛を強めるためかのやうに……」と園子への思いも強く内在させながら西に進む。

留意すべきは、明子を追う上杉の旅の行程は、歌枕の「宇津の谷と、小夜の中山と、これから二つの峠を越えるつもり」というように、これまでの観光地を巡る旅とは全く異なるものとなっていくことである。明子の行き先の手がかりは、三河屋から下りのバスに乗ったことの外には、蒲郡で「海道記」を読んでいたという以外みあたらない。上杉は、歌枕をめぐる探訪が特徴としてあげられる「海道記」を手がかりに、こうした旅程を進むのだと考えられる。

ここに至つて『旅への誘ひ』は、近代的な〈旅行〉から逸脱し、東海道と古典にまつわる本を携えての〈旅〉へと転換がなされるのである。山本光正は、東海道旅行において鉄道の旅が当然になると「旧道特に東海道への回帰」がみられ、大正期には東海道の旅の記

録が集中していることに着目し、「大正期における東海道旅行を総括するもの」として岡本かの子の『東海道五十三次』²⁴を位置づけている²⁵。この指摘からは『旅への誘ひ』における近代的な〈旅行〉からの〈旅〉への転換は、同時代の文脈と連動したものであることが推察される。こうした事情を踏まえ、『旅への誘ひ』に『東海道五十三次』の引用が挿入された意味を考えたい。そのうえで『旅への誘ひ』と『東海道』との接点を改めて洗い出してみたい。

吐月峰に到着した上杉は、寺院の玄関先の棚に「岡本かの子の短篇小説集」を見つける。

「その本は……？」

「この本はな、寺のことが書いてあるといふので、今朝ほど、東京のお嬢さんがくられて行きました。」（中略）

「あなたも東京からおいでしましたか。」

「ええ。僕もその本を持っていますよ。」

と、上杉は同じ小説集を、リュック・サックから出して、

「（東海道五十三次）といふ小説でせう？」

「さうさう（東海道五十三次）……。」

そして僧は急にいいない態度で、上杉を奥へ案内した。

「めづらしいお嬢さんでした。竹細工を送つてほしいといふので、ところ書きももらつてありますがな。」

「市河明子といふ人でせう？」

「おや、あなたはおつれさんですか。」

上杉は、『東海道五十三次』を明子が置いていったものと直感的に感じとる。上杉も明子と同様に『東海道五十三次』を携えて吐月峰にやってきたのだった。結果的に、『東海道五十三次』は、『海道記』とともに、明子を追う上杉を吐月峰へ導いたといえる。そして、吐月峰は市河明子とともに『旅への誘ひ』と小説『東海道』の両方に描かれる重要なクロスポイントとなる。

岡本かの子の小説『東海道五十三次』は、語り手の「私」が二〇年前の婚約時から数えて、主人と行った四回の東海道の旅を四回目の旅の途中から回想して語る物語である²⁶。「本文の後景に織り込まれた典拠、ひいては日本文芸の伝統的美意識との連なりも顧

慮されながら読まれてきた」²⁷という小説で、訪れた東海道の土地にまつわる故事が「私」と主人の会話のなかに取り込まれながら進行していく。『東海道五十三次』のなかでも、『旅への誘ひ』と最も関係が深いのは、「結婚の相談が纏まつて間もない頃」に行った一回目の静岡から島田までの旅である。川端は、『旅への誘ひ』連載中に発表した随筆のなかで、実際に東海道旅行に赴き、「吐月峰柴屋寺に行く。歩きながら、岡本かの子女史の「東海道五十三次」吐月峰と宇津ノ谷峠の章を、くりかへし読む」²⁸と語っており、「東海道五十三次」に描かれた四回の旅のなかでも、一回目の旅にもっとも関心を持っていたことがうかがえる。

まずは『旅への誘ひ』において『東海道五十三次』がどのような現れ方をしているのか確認していこう。以下の引用は、上杉が吐月峰で「短篇小説の頁を膝に開いたまま、小さい庭を見」ているところである。

——室町も末になつて、乱世のあひだに、連歌などといふ閑文字が弄ばれたことはおもしろい。東国の武士のなかに流行して、都から連歌師が下つて来ると、城に招いて、連歌一座を所望するが、それが明日合戦に出かける人達の城であつたといふやうなことも連歌師の旅行記に書かれてゐる。連歌師のなかには、京都方面から関東への間諜や連絡係の役目をつとめた者もあつたらしいけれども東国の武将達の風雅を擁護する心に頼つての往来が多かつた。そのために、連歌師の文章で、当時の東海道の風物がかなり書き遺されてゐる。しかし、そのやうなことよりも、宗長といふ連歌師が東国に下つて来ても、なほ廃残の京都の文化を忘れかね、ここに上方の自然に似た山懷を見つけ出して、その蔭に蝸牛のやうな生活を営んだことを考へてみた。少女の未練のやうなものを感じていぢらしかつた。

そんな風に、岡本かの子の「東海道五十三次」には書かれてゐる。

右の引用のように、『旅への誘ひ』には、『東海道五十三次』における主人公が吐月峰を開山した宗長に因んだ「連歌」と「連歌師」について「私」に語る部分がほぼ原文のまま引用されている。

『旅への誘ひ』では、この『東海道五十三次』の引用を枕に、宗長の生涯が紹介される。山田吉郎は、小説『東海道』での市河明子は「作品の中ほどにわずかに顔を出す存在にすぎない」が「より直接的には明子が登場した吐月峰の場面以後、にわかに古典随想的色彩

が強められ、宗祇・三条西実隆・足利義尚・藤原定家・源頼朝等中世の文学を背負う人々が語られてゆく」²⁹ことを指摘している。この指摘から看取されることは、『東海道』における市河明子の存在が、それまで王朝文学について語ってきた小説を「中世の文学を背負う人々」を語る小説へと変質させる役割を担っているということだ。そしてこのような小説内容の変質の根本には、『旅への誘ひ』において明子が所持していた岡本かの子の『東海道五十三次』の存在が重要な位置を占めていると推察されるのである。

川端は『東海道五十三次』について次のように語っている。

寺の建物は、四百三十年ばかり昔のままと言ふ。その座敷で休みながら、また「東海道五十三次」を読み、実景を照し合せる。自分も手帳に写生する。女史は記憶に頼つて書いたとみえ、すこしちがふところもある。吐月峰を山とし、トンネルを汽車のトンネルと思ひちがひしてゐるなど、女史存命ならば、話して直してもらふのに、今やそのまちがひはまちがひのままをよしとし、そこに却つて故人を弔ふ心、新たなのみ。故人会遊の寺に礼拝す。³⁰

川端は、実際に吐月峰を訪れたことで、『東海道五十三次』における吐月峰の描写をかがの子が「記憶に頼つて書いた」ため「すこしちがふ」ことに気がついている。瀬戸内晴美は、『東海道五十三次』執筆の背景を「かねがね一平から東海道の面白さを聞かせられていたかの子が、一、二度行つた経験を思い出し、ある時、一気に興がのつて書き上げたものであろう」³¹と推察している。この推察に対し、佐々木さよは「現地の地形と違つていることをあとで知るとしても、違いが何の障りになることなく、我々のうちにある親しさのようなものをもって風景を感じさせてしまう」³²という『東海道五十三次』の特徴を述べている。さらに藤田祐史は「私」が実際に辿つた街道に加えて（中略）自身は旅をしていない街道についても既に語つた地名と重ならないように言及」³³するという小説の構造を明らかにしている。各論者の指摘に共通することは、『東海道五十三次』が読者に東海道を鮮やかに想起させ得るという特徴を持つ小説だということだ。このようなことを可能にした要因には、『東海道五十三次』に引用される東海道にまつわる古典の機能が果たす役割がある³⁴と考えられる。テキストに東海道にまつわる古典を引用することで読者に東海道を想起させるという方法は、『旅への誘ひ』においても見出すことができる。

例えば、『旅への誘ひ』では、上杉（明子も同様に）は、吐月峰の僧に「蕨の細道」が

通行可能か尋ねるが、今は誰も通る人がいないので道がわからなくなり、通行が難しいことを伝えられる。ここで上杉には「寛政九年に出版された『東海道名所図会』の著者の秋里籬島でさへ、二人の手引の者をつれて、探索してゐる」ことが思い出され、秋里籬島『東海道名所図会 四』（一七九七年）の「宇津山」から蔦の細道に関する記述が『旅への誘ひ』にはそのまま引用されている。

上杉自身は、蔦の細道に実際に足を踏み入れたわけではない。しかし、「この籬島の文章など、昔の人としては、蔦の細道の最も忠実な報告にちがひない」というように、上杉自身も古典から蔦の細道を想起しながら語ること、読者にも蔦の細道の情景を伝えるという方法がとられている。

『東海道五十三次』と『旅への誘ひ』において、東海道にまつわる古典をテキストに引用することで、語り手が実際に旅した場所に限定することなく東海道を語り、その土地を読者に想起させるという方法は、『旅への誘ひ』の局所に見られるだけではない。そうした方法は、語り手の植田が吐月峰にしか赴かず、東海道にまつわる古典を媒介として東海道を語る小説『東海道』に如実に引き継がれていくと考えられる。従って、『旅への誘ひ』と『東海道』の接点は、両方の小説に登場する市河明子だけに収斂されるのではなく、語り手が実際に旅をした場所に限定することなく古典（＝東海道を描いた先行する文学作品）を媒介にしながら東海道を語るという岡本かの子『東海道五十三次』にも確認されるのである。

そして、『旅への誘ひ』『東海道の章』において、東海道にまつわる古典を携えながら東海道を歩く〈旅〉を続ける明子が「故郷を探し歩いてゐる」という感覚を示すことについては、旅先が古典文学の山積する東海道であることから、その古典文学を媒介にすることで、東海道に抽象的な「故郷」なるものを想起する可能性を提示していると考えられる。

第四節 おわりに

本稿では、これまで小説『東海道』に従属するものとして捉えられてきた『旅への誘ひ』に固有の価値を見出すことに主眼をおいてきた。

「箱根・熱海の章」においては「新女苑」の読者の関心に添う形で、新婚旅行をめぐるコンテキストを多分に取り込み、観光案内さながらの旅行が展開される様相を確認した。先行論で重要視されてきた「東海道の章」においては、『東海道』との接点は、両小説に

登場する市河明子のみに収斂されるのではなく、『旅への誘ひ』と『東海道』の両テキストの古典の取り込み方が、岡本かの子の『東海道五十三次』の方法を引き継いでいる点を指摘した。具体的には東海道にまつわる古典をテキストに挿入することで、語り手が実際に旅した場所に限定することなく東海道を語り、東海道にまつわる古典の引用を元に、読者に東海道を想起させるという『東海道五十三次』の小説の方法を『旅への誘ひ』にも同様に見出した。

『旅への誘ひ』について今一度振り返ると次のようになる。

『旅への誘ひ』において、園子の懇願から亡妻との新婚旅行を反芻するための旅に出たはずの上杉は、一方で亡妻とは重ならない生身の園子の存在感を意識しはじめるが、その園子が媒介することによって、明子という別の女性の面影を追い始めてしまう。その明子の存在は、生身の女性としての存在感を強く漂わせる園子とは異なり、古典や岡本かの子の本を媒介としたブッキッシュで観念的なものである。このような明子と園子を併存させることが難しくなったからこそ、『旅への誘ひ』は中絶される結果となり、古典への関心の部分を切り出すことで、『東海道』が新たに書かれることになったと考えられる。

このように整理していくと、『旅への誘ひ』において上杉を旅へと駆り立て、終始直接的に関わり続けているのは園子である。上杉が明子を追いかけるために出発した蒲郡への旅を除いては、旅のきっかけは園子によってもたらされている。小説の結末を確認してみよう。

明子のうしろ姿が見えたら、声をかけずに、黙って見送つてゐて、さうして東京へ帰らう。そのやうな感傷にも、上杉はすがすがしく心が明るむのだった。

上杉は、明子を見かけたとしても「黙って見送」る意志を示していることから、今後明子とは関わりを持たず、園子と早苗のいる東京へ帰り、生身の園子と人生を共にしていくことが暗示されて『旅への誘ひ』は閉じられる。上杉は明子を追いかけている旅の最中であっても「僕は明子さんの後を追はうとすると、一層園子が哀れに思へて、一刻も早く帰りたいくなる。さうして反対の方へ行く。自分の悲しみを深め、園子への愛を強めるためかのやうに……」と、明子を追うほどに園子への愛を深めていく。

結局、上杉が選択したのは、教養を持ち合わせた観念的な存在の明子ではなく、若く、日常的に早苗の養育に携わり、自らの欲望にも応えてくる「いつしよに生きる者」として

の園子だった。上杉は、憧憬を抱いていた明子を最終的には放棄し、園子の元へ戻ることが示唆される。

このように、上杉が明子を経由しながらも、結局は園子との実生活＝早苗も含めた家庭に回収されるような構図を持つ『旅への誘ひ』が、一九四〇年に当時の結婚適齢期を控えた読者を多く持つ「新女苑」に発表された意味については別途考察が必要だろう。

これまで『東海道』との接点に注目が集まってきた『旅への誘ひ』であるが、固有の小説として評価すべき課題は残されているように見受けられる。

最後に、『旅への誘ひ』が「新女苑」の読者に何を発していたのかという点について考えてみたい。川端は、女性と土地の強い結びつきを希求していた。ここで川端の『女性文章』序という文章を見ていきたい。この川端康成編『女性文章』（満洲文芸春秋社、一九四五年一月）とは以下のような本である。

昭和十二年は「婦人公論」、昭和十三年から十八年十一月までは「新女苑」で、私は投書の小品文の選を続けてきた。その七年間に私の選び出した文章から、さらに選び出したのが、この集である。一般女性の文章おほよそ二三万のうちから、この四十篇を選んだことになるだろう。

川端は、この『女性文章』序で、「婦人公論」、『旅への誘ひ』の初出誌である「新女苑」において女性読者からの投書の選評に関わり、「事実、民族と国土との魂はこれら無名の女の散文にも流れて不滅だった」ということを述べている。そして「格別の教育も受けてゐない」、「二万葉集」の読人知らずの歌を、今の世の女性の散文で成すが、私の願いでもあつた³⁵という願望を明かしている。ここからは、「民族と国土の魂」なるものを女性から読み取ろうとする川端の姿勢がうかがわれる。

若い女性の読者を想定し、新婚旅行、観光案内のごとく書かれた「箱根・熱海の章」、「蒲郡の章」と「東海道の章」には、一貫して東海道という街道にフォーカスしているという共通点がある。「箱根・熱海の章」と「蒲郡の章」の章では、「新女苑」の読者である若い女性たちの興味に応え、新婚旅行や観光にまつわるコンテキストを多分に織り込み、物語を展開した。一方、「東海道の章」では、古典文学を小説に取り込むことで、東海道は、実際に訪れたことがなくても（訪れたことがない者にとっても）その土地を想起する特性をもつトポスであることが示されている。本論文第一章で論じた『牧歌』も初出誌

は「婦人公論」という女性を読者に想定した雑誌であった。しかし、『牧歌』は、戸隠神社の神官の娘（知子）と戸隠という土地の強い結びつきを旅人の「作者」が希求する点は看取できるものの、信州教育をはじめとする「郷土資料」を大量にテキストに引用するなど、「婦人公論」というメディアの読者に配慮して書かれたとは言い難い小説である。一方、『旅への誘ひ』は、女性の投書の選評を通して、読者層をより意識したうえで、川端が東海道というトポスの特性を女性読者に提示するという明確な目的をもって書かれた小説だといえるだろう。そうした目的は、『旅への誘ひ』において完遂し得なかった。ゆえに、先行する文学である古典を取り込むことで東海道というトポスを読者に想起させるという方法は、三年後に『東海道』（満洲日日新聞）一九四三年七月二〇～一〇月三十一日）において再度展開されるのであろう。その際、同時代における東海道の観光地としての側面は捨象され、読者層となる満州にいる日本人を明確に意識し、東海道を往還した人々の古典文学を大量に小説に取り込むことで、「故国」を提示するという方法がより徹底されたと考えられる。『旅への誘ひ』執筆時点において川端は、「新女苑」の若い女性の読者に配慮する姿勢を見せながら、古典文学が集積する東海道は「民族と国土の魂」が存在するトポスであることをまずは示したのではないだろうか。こうした点からも明らかのように、『旅への誘ひ』は、川端がメディアの特性を活かしたうえで、読者である若い女性たちに明確なメッセージを発していた小説といえる。これまで『東海道』に従属するものとして捉えられてきた『旅への誘ひ』は、川端が希求する女性と土地との結びつきを考える際においても、独自の価値を持つ小説といえるだろう。

1 三島由紀夫「永遠の旅人——川端康成氏の人と作品」（『別冊文芸春秋』一九五六年四月）

2 第一回「旅への誘ひ」「出発の章」（『新女苑』一九四〇年一月）

第二回「旅への誘ひ」「箱根・熱海の章」（『新女苑』一九四〇年二月）

第三回「旅への誘ひ」「箱根・熱海の章（つづき）」（『新女苑』一九四〇年三月）

第四回「旅への誘ひ」「蒲郡の章」（『新女苑』一九四〇年五月）

第六（五）回「旅への誘ひ」「蒲郡の章（つづき）」（『新女苑』一九四〇年六月）

第七（六）回「旅への誘ひ」「東海道の章」（『新女苑』一九四〇年七月）

第八（七）回「旅への誘ひ」「東海道の章（つづき）」（『新女苑』一九四〇年八月）

第九^マ(八)回「旅への誘ひ」「東海道の章(つゞき)」(「新女苑」一九四〇年九月)

3 『東海道』については、本論文の第五章で論じる。

4 山田吉郎「川端康成『東海道』の構造——『旅への誘ひ』との対比を視座として——」

(『川端文学の世界2』その発展) 勉誠出版、一九九九年三月) は「まず、注目すべきことは、『東海道』がその下敷きとなるような稿本的作品を有しているということであろう。

『東海道』は、昭和十八年七月二十日から十月三十一日まで「満洲日日新聞」に連載されたのであるが(中略)、それより三年ほど前の昭和十五年、川端は「新女苑」(1～9月)に『旅への誘ひ』という小説を連載している。この作品は登場人物や古典の取り入れ方に『東海道』と少なからぬ類似点があり、とくにその第四章「東海道の章」は明らかに『東海道』の前駆をなしている」と指摘している。

5 川端康成『天授の子』(新潮社、一九七五年六月)には、『東海道』の他に『故園』、『感傷の塔』、『天授の子』が採録され、いずれも初めての単行本への収録だった。

6 深澤晴美「『新女苑』における川端康成——戦時下の側面」(「和洋九段女子中学校・高等学校紀要」一九九七年三月)

7 川端康成「神秘(仮題)」(「新女苑」一九三九年二月) 深澤晴美が注6において川端の全集未収録文の新資料として発表した。

仮りに題して神秘といふが、普通の意味の神秘なるものを書くとするのではない。女性崇拜といふやうな意味を、この言葉によつて現はさうと考へたのである。前から私は神聖な女性、女性のうちにある聖なるものを書いてみたいと思つてゐた。その材料はまだ十分に熟してはゐないけれどもとにかく着手してみよう。

日本の文学の女性は大体卑俗であつて、青春の泉となるべき聖なる高さが乏しいやうである。遺憾なことの一つである。私自身も今のところ、崇拜すべき女性を現実には知らぬので、書きにくいと思ふが、試みのうちからなにか生れて来るかもしれない。

8 注6に同じ。

9 注4に同じ。

10 三浦卓「(私たちだけの世界)の行方——『少女の友』の読者ネットワークと川端康成——」(「近代文学合同研究会論集第3号(講談社) ネットワークと読者」二〇〇六年二月)

11 山本鉦太郎「新婚旅行変遷史」(「旅」一九九五年十二月) さらに山本は、このエッセイにおいて「旅」(一九四九年一月)で明治生まれの当時の著名人に実施した「新婚旅行

はどちらへいらつしやいましたか」という以下のアンケートの紹介している。「●西条八十（詩人）明治25年生「当時はそんな余裕もない生活でした」／●野村胡堂（作家）明治15年生「鎌倉、江ノ島」／●子母沢寛（作家）明治25年生「廿幾年前ひどい貧乏で、新婚旅行どころではありませんでした」／●土岐善麿（歌人）明治18年生「貧乏な新聞記者でしたから新婚旅行などしませんでした」／●柳原白蓮（歌人）明治18年生「新婚旅行はどこちらへも参りませんでした」／●山川菊栄（評論家）明治23年生「新婚旅行など思いもよらないことでした」／●菊田一夫（劇作家）明治41年生「忙がしくて何処へも行きませんでした」／●徳川夢声（声優）明治27年生「結婚の翌日（それとも翌々日？）私たちは多磨墓地の帰り小金井堤を散歩した」／●井上友一郎（作家）明治41年生「湯河原」／●近藤日出造（漫画家）明治41年生「新婚旅行先、銀座資生堂」／●長谷川伸（劇作家）明治17年生「結婚式をあげたることなし」

12 内山基「創刊のことば」（「新女苑」一九三七年一月）

13 小林さえ「女子青年の読物調査」（「教育」岩波書店、一九三八年十一月）

14 川端康成「「新女苑」コント欄「選評」（「新女苑」一九三九年四月）

15 例えば、「新女苑」には以下のような結婚に関する議論が掲載されていた。「杉山平助「結婚について（1）」（「新女苑」一九三七年一月）／杉山平助「結婚せんとする人に（2）」（「新女苑」一九三七年二月）／丘文子「花嫁学校ユーモア訪問」（「新女苑」一九三七年二月）／杉山平助「結婚せんとする人に（3）」（「新女苑」一九三七年三月）／安部磯雄「結婚の機会を待望して居る女子へ」（「新女苑」一九三七年五月）／菊池寛「結婚をあせるな」（「新女苑」一九三七年八月）／杉山平助他「座談会 結婚の本当の準備」（「新女苑」一九三七年八月）／丘文子「新婚家庭ユーモア訪問」（「新女苑」一九三八年一月）／芹沢光治良他「結婚前五ヶ年計画」（「新女苑」一九三八年五月）」

16 丘文子「花嫁列車同乗記」（「新女苑」一九三九年六月）

17 「新婚旅行と恰好な旅行地」（「旅」一九三九年九月）には七つの「新婚旅行プラン」が掲載されており、東京から出発し、宮下、箱根ホテル、湯ヶ島、今井浜に宿泊し、熱海を経由して東京に帰着する「箱根、伊豆廻遊コース」が紹介されている。実際に上杉の新婚旅行は、湯ヶ島や今井浜は訪れていないが、熱海に宿泊し、このコースと重なる行程となっている。

18 小杉放庵他「私の新婚旅行時代」（「旅」一九四〇年一月）等を参照した。

19 鉄道省編『観光地と洋式ホテル』（鉄道省、一九三四年月不明）

20 「新館花御殿建設」(山口堅吉編『富士屋ホテル八十年史』非売品 富士屋ホテル株式会社、一九五八年七月)

21 『旅への誘ひ』において富士屋ホテルの部屋の名前については「あぢさゐ、時計草、のうぜんかづら、南天、萩、ちやうじ、山吹、牡丹、藤、はちす、すひかづら、ばら、あけび、桃、梅、桜、くちなし、木蓮、ねむの木、しやくなげ、椿、つつじ——といふ風に、絨毯もその部屋の名の花模様が織り出してあつた」と紹介されている。

22 戸川秋骨「十国峠・籠坂峠・長尾峠」(深田久弥編『峠』青木書店、一九三九年八月)

23 砂本文彦「1930年代の国際観光政策により建設された「国際観光ホテル」について」(『日本建築学会計画系論文集』一九九八年八月)によると、常磐館を有する蒲郡ホテルも一九三四年に開業したばかりの「国際観光ホテル」だった。

24 岡本かの子「東海道五十三次」は「新日本」(一九三八年八月)に発表され、『老妓抄』(中央公論、一九三九年三月)に収められた。

25 山本光正「鉄道の発達と旧道への回帰 東海道を歩くということ」(『国立歴史民俗博物館研究報告』一九九九年三月)には、大正期に集中した画家や漫画家を中心に行われた東海道旅行が「大正四年」頃から行われるようになり、「それは大正一〇年に行われた岡本一平を中心とする「東京漫画会」同人一八名の東海道旅行で一段落する」とある。

26 宮内淳子「街道を語る人々——岡本かの子『東海道五十三次』——」(『日本文学』一九九一年十一月)では、『東海道五十三次』における語り手の位置について「日本語の性格として時制だけで時の経過は計れないが、終わりに置かれた名古屋から桑名に向かう旅程はほとんどが「ある」で結ばれているのに対し、初めての東海道の旅を語る中には「その頃は『成功』などといふ言葉が特に取出されて流行し」という回顧や、「それは多分、四月も末か、五月に入つたとしたら、まだいくらかも経たない時分と記憶する。」といった思ひ出を探る様子のあることから、語り手の現在は初めての東海道行きから二十年余り経つた結びの部分にあると考えられる」とあり、本論は、この宮内論に賛同する立場をとる。

27 外村彰「岡本かの子「東海道五十三次」——“時代”の隠喩を視座として——」(『昭和文学研究』二〇〇五年三月、後「第二章「東海道五十三次」——“時代”の隠喩を視座として——」として『岡本かの子の小説へひたこころ』の形象』おうふう、二〇〇五年九月)

28 川端康成「旅中片信」(『文学界』一九四〇年七月)

29 注4に同じ。

30 注28に同じ。

31 瀬戸内晴美『かの子療乱』（講談社、一九七〇年五月）

32 佐々木さよ「旅」の創造——岡本かの子『東海道五十三次』——」（『文芸と批評』一九九二年四月）

33 藤田祐史「岡本かの子「東海道五十三次」論——芭蕉の句を視点に」（『跨境／日本語文学研究』二〇一七年十二月）

34 注32に同じ。このなかで佐々木さよは「東海道の旅から創造された文学が長い歴史の中を継承されて古典となり、それを情愛の通い路として二人【引用者注…「私」と主人】は利用する。その通路が成り立つのは、たとえばある古典作品から同じ感慨を導き出せるからである。言い換えるなら、その作品に対する発想や感じ方に一種の普遍化された固定化があるからということである。作中に頻出する古典や伝説は、この意味で重要になる。また、空想によって旅を描いたこの小説においては空想を成立させるよすがとなっている」と『東海道五十三次』における古典の役割について述べている。

35 「新女苑」の投書に対して素朴な文章を求める川端の姿勢については、小平麻衣子「教養の再編と『新女苑』——川端康成の投稿指導にふれて——」（『日本近代文学』二〇一四年五月）において「女性たちの文学的創作の閑域は、理想郷ともなる。だがこれらが、政治や経済活動からの締め出しを、文化的・心理的問題にすり替えて慰撫する構造であることも言うを俟たない」とその姿勢が批判されている。

第五章

「外地」メディアと小説——『東海道』の射程——

第一節 はじめに

川端康成の小説『東海道』は、一九四三年七月二〇日から一〇月三一日まで「満洲日日新聞」に連載された。一日遅れで、「満洲日日新聞」の大連版である「大連日日新聞」にも掲載された。『東海道』のテキストには、次のような事情がある。

新聞の連載は四十八回を数えたが、当時の戦局激化、用紙事情のため中断された。原稿は第五十四回分まで書かれ、満洲に送られたらしいが、その行方は分らない。ただ夫人の手による原稿の写しが第五十回分から第五十四回分まで残っていて、その分は本書に収録してある。(本書で言えば百八十三ページ五行目からである。)それで第四十九回分だけが欠けていることになる。

これは、『東海道』の初刊川端康成『天授の子』(新潮社、一九七五年六月)に収録された川端香男里氏による「覚書」である。本章において『東海道』のテキストは、初出である「満洲日日新聞」を参照するが、「第五十回から第五十四回分まで」については、初刊を参照した。

まずは、「満洲日日新聞」を発行していた満洲という土地について概観していきたい。一八九八年、帝政ロシアは、清から遼東半島の南端を租借し、東清鉄道南部線と都市の建設を進めた。ポーツマス条約によって、日本はこの地を手に入れ、「大連」と改名し、ロシアの計画を引き継ぎ、さらに都市建設を進めていった。都市の経営は、南満洲鉄道株式会社(満鉄)にうつり、満鉄は、インフラ整備から図書館や学校の経営まで主要な行政事業を担った。一九三一年九月一日、柳条湖事件に端を発して満洲事変が勃発、満洲全土を日本が占領した。その後、関東軍主導のもと中華民国からの独立を宣言し、一九三二年三月一日に満洲国が建国された。満鉄から発行されていた「新聞」が『東海道』の初出メディアである「満洲日日新聞」である。

次に「満洲日日新聞」について確認しておきたい。栄元は、「満洲日日新聞」発刊の事情について以下のように説明している。

満鉄初代総裁に就任した後藤新平は、鉄道のほか新聞、印刷、教育、文化事業に当初から強い関心を示していた。このようにして、満鉄は「満洲ノ開発ニ資スルト同時ニ

会社事業ノ機関タラシムル目的ヲ以」【引用者注…南満洲鉄道株式会社『南満洲鉄道株式会社十年史』（原書房復刻、一九七四年）】で、一九〇七年十一月三日に大連で機関紙『満洲日日新聞』（以下『満日』と略す）を創刊した。

『満日』は、大連を中心とする中国東北地方（満洲）における最大規模の日本語新聞として一九四五年まで発行され、約四〇年間の発行期間は日本の満洲経営の期間とほぼ一致している。³

このように、満洲において、「満洲日日新聞」というメディアが日本語を解する者に果たす役割は、非常に重要なものであったと考えられる。そこで、「満洲日日新聞」の読者層について考えてみたい。徐敏民は、満洲における日本語教育の実状について「一九三八年から実施された新学制に基づいて、それまで中国語、蒙古語と並べてきた日本語は「満洲国」の第一「国語」の地位に引き上げられ」たものの、「四十年にわたって日本語理解者の推定率が一〇％位」で、「満洲では、日本語の常用者が皆無」⁴だったということを述べている。これらのことを考え合わせると、「満洲日日新聞」の読者層は、日本から満洲に渡った日本人や、満洲で生まれながらも家庭では日本語を常用していた二世たち、日本語を解する一部の中国人たち等に限定されるだろう。これに沿って『東海道』の読者層についても考えてみると、上代から近世に至る古典が多量に引用されて展開される『東海道』を読むことができる人たちは、更に絞られてくると思われる。

『東海道』のテキスト分析に入る前に、「満洲日日新聞」と川端康成との関係を確認しておこう。川端康成は、一九四一年の春と秋に二度満洲へ渡航している。川端自身が明らかにしているように、春の一度目の満洲渡航の目的は、満洲日日新聞社・満洲棋院共同主催の「全満素人囲碁選手権大会」観戦のためだった。秋の旅は、関東軍による招待であった⁵。この二度にわたる川端の満洲への旅は、「満洲日日新聞」で詳細に報道された⁶。

川端の満洲訪問は、『東海道』執筆の二年前になるが、ここで注意しておきたいことは、川端は、自身の満洲訪問が報道される経験を通して、満洲における「満洲日日新聞」というメディアの働きや、その規模について知り得ていたということだ。よって、これまであまり注目されてきたことではないが、『東海道』という小説が「満洲日日新聞」というメディア上で発表されたことは、さらに注目されるべきことである。

先に確認したように、『東海道』が収められた『天授の子』（新潮社、一九七五年六月）が刊行されたのは、『東海道』の初出から約三二年後のことだった。同書の「解説」で佐

伯彰一は、「東海道」は、その名のみ聞えていて、ついぞ現物を読んだという人の皆無というに近い、幻の作品であった。戦争中に満洲の新聞に連載されて中絶したという小説で、もともと内地の大方の当時の文学読者の目には触れにくいものであった」と指摘している。川端は「内地」とその外側ということについて、意識的だったことを後に明かしている。以下に引用する『決定版 雪国』（創元社、一九四八年一月）の「あとがき」に着目したい。そこには、一度刊行した旧版『雪国』（創元社、一九三七年六月）に続編を書いた理由が次のように語られている。

私の作品のうちでこの「雪国」は多くの読者を持った方だが、日本の国の外で日本人に読まれた時に懷郷の情を一人そそるらしいといふことを戦争中に知った。これは私の自覚を深めた。

これは、あくまでも『雪国』⁸についての川端の言及であるが、川端が「日本の国の外」にいる「日本人」に自らの作品が読まれ、読者が「懷郷の情」をそそられる、ということにある程度自覚的だったということをうかがい知ることができる。

話を『東海道』に戻す。『東海道』が発表されたのは、最初に本になった旧版『雪国』と『決定版 雪国』が刊行される間の時期にあたる。『東海道』が「満洲日日新聞」の紙面に発表されていたことを考え合わせると、佐伯彰一が指摘したように、「日本の国の外」にいる人たちを川端が読者として想定していたということは明確であるだろう。

先にも確認したように、これまで『東海道』の初出メディアが「満洲日日新聞」であるということは、それほど注目されてこなかった。このような同時代性に着目しながら『東海道』を読むことで、これまでとは違う『東海道』へのアプローチが可能になるはずだ。

第二節 川端康成と古典

『東海道』は、上代から近世に至る多くの古典がテキストに引用されながら展開している。そこで、川端と古典の関わりについて確認しておきたい。

川端が茨木中学時代、ひいては幼少期から古典を愛読していたことは有名である¹⁰が、ヨーロッパから渡来した様々な文学潮流を吸収し、新感覚派として文壇にデビューした作家川端は、いつ頃から古典を再読し、古典がテキストに引用されるようになるのだろうか。

一九三六年に発表された随筆「本に拠る感想」において川端は次のように述べている。

近頃必要あつて、いささか日本の古典文芸を読み散らした。それはまだ短篇小説の僅に過ぎない。また、秩序も計画もない、氣随な読方である。朝に洒落本を読み、夕に竹取を読むたびである。そして、史上の価値や先人の批評よりも、自分の眼の先立つは、私が一作家だからであらうが、例へば王朝や江戸の小説も、今日の私達の作品を見るとあまり変らぬ読方をした結果は、概して失望すべきであつた。虚しい寂しさが私に深まつた。極限すれば、新に感ずるところあつたのは、日本的な修辭法のみである。¹¹

川端はこの頃古典に再接近している様子を明かしている。「本に拠る感想」では続いて、「古典の味は今日私達に決して甘くはない。その甘さも、ふと目ざむれば、自らの悪血を飲む苦さである」と述べている。この時期の川端の随筆からは、古典に接近している様子をうかがうことは可能であるが、戦後よく指摘される川端の古典への「陶醉」¹²はまだ見られない。しかし、「本に拠る感想」が発表された同年に川端は、内務省警保局長松本学の呼びかけによってつくられた文芸懇話会¹³の機関誌「文芸懇話会」で、自ら「日本古典文芸と現代文芸」という特集を組み、編集を行っている。その「編輯当番記」において「私は文壇的な雑誌を作らうと思つたのではなかった。また、古典に還れと唱へる者でもない」と述べている。一九三〇～四〇年代にかけて多くの作家が古典を愛読しいわゆる「日本回歸」の機運が高まつた¹⁴ことはよく知られているが、川端も一九三六年の時点で多くの古典作品を読む機会を自ら作っていた。さらに、翌年の一九三七年八月に刊行された『現代語訳国文学全集第三卷』竹取物語他二篇』（非凡閣）においては、「竹取物語」・「堤中納言物語」・「とりかへばや物語」の現代語訳にも取り組んだ¹⁵。そしてこの年、川端が古典を直接小説のなかに引用したもつとも早い時期のものとして『牧歌』（「婦人公論」一九三七年六月～一九三八年十二月）を挙げることができる。この『牧歌』においては、「古事記」や「戸隠昔事縁起」、戸隠神社の祝詞、近世の俳句など多数の古典がテキストに引用されている。

一九三七年に発表された『牧歌』と一九四三年に発表された『東海道』には、早くから類似点が指摘されてきた。佐伯彰一は、『牧歌』と『東海道』について以下のようにまとめている。

もつともこの長篇【引用者注…『東海道』】の少し前に「牧歌」（『婦人公論』連載）という、雰囲気も筆法も相通う作品があった。これは信州を舞台とした地誌風な小説で、語り手と若い女性の動きが、そのまま信州、とくに戸隠地方の地理と歴史をたどり明らかにするプロセスにつながっていた。¹⁶

また、佐伯は続けて『牧歌』と『東海道』との共通点を次のように指摘する。「戦争中の作品らしく、祖国回帰、伝統強調の姿勢が表面に出たという所もないではないけれど、物々しくこわ張ったナショナリズムぐらいこの作家に縁遠いものはない。一貫して流れているのは、旅への思いであり、旅心の歌である」。

次に、他の『牧歌』評も確認してみよう。小林芳仁は、「牧歌」について「反戦文学として注目すべき」¹⁷だと評価している。これは、川端と同時代のナショナリズムとの距離を指摘した佐伯の『牧歌』評と通底するものである。次の金井景子の指摘は重要である。

（『牧歌』において）「あえて言うならば問題は彼【引用者注…川端】が固有の郷土の向う側に日本を見たこと自体にあるのではなく、幻視した日本が「古事記」の神々の世界という当時の同時代的イメージを超え得なかったことにある」¹⁸。この金井の指摘のように、川端は『牧歌』という小説のなかで、古典を引用しながら、近代に生きる『牧歌』の語り手である「作者」が「古事記」の世界、つまり「日本の故郷」を希求する様子を描く。しかし、『牧歌』の「作者」は、発表当時の一九三七年において「古事記」の世界であるはずの戸隠を訪ねながらも、そこに「日本の故郷」を見つけることは叶わなかった。

森本穫は、川端の古典受容について、川端の随筆「真珠船」（「読書人」一九四四年三月）に着目することで、この時期の「中世への没頭ぶり」¹⁹を確認している。

『牧歌』の他にも、敗戦後に発表された「反橋」三部作（「反橋」（「風雪別冊」一九四八年一〇月）、「しぐれ」（「文芸往来」一九四九年一月）、「住吉」（「個性」一九四九年四月））や、ノーベル賞を受賞した際のスピーチ「美しい日本の私」（「朝日新聞」他一九四八年一二月一六日）などにも古典への言及や引用が見出されるが、これらは『東海道』以後の発表であるため、稿を改めて論じることとしたい。

第三節 『東海道』の中の古典

次に、『東海道』の先行研究について確認しておく。『東海道』の先行研究は多くはない。その意味で、『東海道』は、研究史においてあまり言及されてこなかった小説だといえることができる。稲垣真美は、「川端には珍しい歌論が展開されていて、貴重な一編となっている」²⁰というように、川端の歌論として『東海道』を捉えている。福田淳子は、『東海道』を「戦争批判」²¹を書いた小説として評価している。また、福田は『東海道』を論じた別の論考では、「川端は『東海道』を心の原風景として過去と現在との融合を果たす植田を通して、古来から続く文学の歴史を〈心の河〉と捉え、また自分もその流れに加わることで、作家として〈旅にかへつ〉て行く願いを表明していた、と言つても過言ではあるまい」²²と川端文学における『東海道』の占める大きさについて言及している。河野基樹は、『東海道』に登場する歌人たちを「『勤皇の歌人』」と捉え、『東海道』を「皇統崇慕」²³の小説として捉えている。森本稜は、『東海道』を「日本の伝統文化」²⁴を体現した小説として評価している。

このように確認していくと、管見によれば同時代のコンテキストとの関係を重視して『東海道』を論じた先行研究は見受けられない。

続いて、川端自身の『東海道』に関する言説を確認していく。「『東海道』作者の言葉」には、川端の以下のような発言がある。

「母国」と題する小説を本紙に書くはずであつたが、作者としての準備がまだ整はず、また今の戦争が完全な勝利に帰した時の方が書きよいので、しばらく延期し、別作「東海道」を書いてみることにした。²⁵

このように、川端は「本紙」つまり、「満洲日日新聞」に、「母国」という小説を発表する構想があつたことを明かしている（後にも「母国」という名前の小説は川端によって書かれることはなかったが）。続いて引用部分に続く「『東海道』作者の言葉」のなかで、『東海道』について、「今は私の好みにまかせて、ささやかな東海道記を綴るに過ぎない」と述べながらも「無論東海道も必死に戦つてゐる」と当時の東海道の様子を交えながら、「満洲国の読者は、作者と共に東海道を旅する心で、故国の風光を偲んでくれればよい。一千年以上、私達先祖が東海道来往の歴史と伝説とがある」というように、川端は、明らかに「満洲国」にいる人々を読者として想定していた。更に、「その古人の足跡を深くさぐることも、小説としては不可能であるが、その数知れぬ日本人の旅情は、これを書きな

がら振り返つてみたい。春の花盛りの東海道に私は出発する」と締められ、この文章の結末部分は、いつもの川端の調子で、自分の小説から「旅情」を感じてほしいというものに収斂している。

しかし、ここから読み取るべきことは、川端に「満洲日日新聞」紙上で「母国」という小説を発表する構想があったこと、『東海道』の読者は「満洲国」にいる日本人たちである、ということ川端が明確に意識していたことである。

先に、『東海道』には、上代から近世までの古典が引用されていることを確認したが、川端が「故国の風光を偲んでくれればよい」という意図で古典を引用するという方法は、必ずしも「故国の風光を偲」ぶというような甘美なものだけには収まらない。戦時中、和歌、特に「万葉集」は、戦争に利用されるという局面が加速していく。品田悦一が「時局の荒波は万葉ブームをも呑みこみ、『万葉集』を『古事記』『日本書紀』と並ぶ軍国日本の聖典に祭り上げていった」²⁶と指摘するように、「万葉集」をはじめとする古典は、「国威発揚」のために利用されていく。一九四二年には、日本文学報国会が「愛国尽忠の赤誠を歌った短歌を通して日本精神の真髄を国民の心臓に浸透せしめんため、健全な国民生活の朗詠に適した万葉より明治維新に至るまでの珠玉篇を集め」²⁷、「愛国百人一首」を選定し、発表したことも忘れることはできない。

そして、歌人に留まらず、近代作家たちにも古典、特に和歌に関連する様々な言及がこの頃見られるようになる。なかでも、注目すべきは『東海道』においてもかなりの紙幅を割いて言及されている源実朝を近代作家たちが評価していくことである。代表的なものとしては、『東海道』と同年に小林秀雄によって雑誌「文学界」に発表された随筆「実朝」²⁸をあげることができる。この随筆で小林は、「金槐集」が彼の幾歳までの作であらうと、この驚くほどの秀作を鏤めた雑然たる集成に、実朝という人間に本質的な或る充実した無秩序を、僕が感じ取るのを妨げない」と称賛した。実朝と「万葉集」の関係性については、一九二九年佐佐木信綱が「定家所伝本金槐集」を発見したことによって、それまでの定説が覆った。その話題について、『東海道』のテキストでは、次のように説明されている。

佐佐木信綱博士が昭和四年五月定家所伝の「金槐集」を発見してから、その奥書の日附によつて、「金槐集」は実朝が二十二の十二月十八日までの歌だとわかつた。

おどろくべきことであつた。

定家の贈つた「万葉集」が、実朝の万葉調の母胎だといふ、従前の説は、これでく

つがへつたわけである。定家秘蔵の「万葉」が鎌倉に着いたのは、その年の十一月二十三日だから、「金槐集」のまとまるまでに、わづか一月しかない。

実朝はそれ以前に、「万葉」を持つてゐたか、いろんな歌書に抄出の「万葉」の歌を見てゐたかで、万葉調の歌も作つてゐたことが、定家本の「金槐集」で明らかになった。（『満洲日日新聞』一九四三年一〇月三〇日）

従来の説が覆り、実朝が定家から贈られた「万葉集」を受け取ったのは、「金槐集」をまとめるわずか一ヶ月前であることが明らかになった。

小林秀雄は、こうした事情に触れながらも、随筆「実朝」において「彼【引用者注…実朝】と「万葉」との深いつながりを説く人が絶えぬのは、あらゆる真摯な歌人の故郷としての「万葉」の驚くべき普遍性を語るものと考えていい」と述べている。

このように、『東海道』が発表された頃には、国威発揚のために和歌が利用され、源実朝の「山はさけ海はあせなむ世なりとも君にふたごころわがあらめやも」の歌が評価されたことに代表するように、和歌の働きも高まりを見せていた。多量の和歌を引用した『東海道』を『満洲日日新聞』に連載した川端は、『東海道』を読むことで、満州にいる日本人が「故国の風光を偲んでくれればよい」ということを述べているが、文壇のこのような状況を考え合わせた際に、この川端の言葉は、結果的に様々な問題を孕んでいる。

特に、『東海道』における源実朝についての言及には、注意する必要があると思われる。

例えば、実朝の歌を引用した後に、「これらの歌は、もう「万葉」を学ぶなどといふことは越えて、実朝独歩のものであつた」と、実朝のなかにある「万葉」の独自性を認め、近代において実朝を再評価した先駆者である正岡子規の「幾百とせ君の名苔に埋れぬそれと思へばいたましかな嗚呼」を引用している。なぜ実朝の歌を「実朝独歩」のものともみなしたかについては、『東海道』のテキストの中に、「歌人としての実朝も、習作の途上で斃れたのだが、ほんたうの本歌取りなど出来なかつたところから、かへつて実朝らしい万葉ぶりが生れた」と説明している。つまり、実朝が若死にしたために、「本歌取り」を十分に習得し得なかつたからこそ、そこに「実朝らしい万葉ぶり」が生まれたと評価するのである。さらに、「実朝が真実歌つたのは、万葉ぶりの数少い歌だけだつたと、後の世の人は「金槐集」の大方を捨てて、むしろ実朝を純粹に生かした」というようにやはり実朝を評価する点は、実朝のなかに「万葉ぶり」を見出している点にある。実朝のなかに「万葉」を見出すという点は、小林秀雄や齋藤茂吉など同時代の作家たちの実朝評と同様の傾

向にあるといえるだろう。

このように、同時代の文脈のなかで『東海道』を読んでいくと、当時の国威発揚に利用されていた「万葉集」の「万葉ぶり」を実朝の歌に見るという点において、川端の見方は他の作家たちと大差がないように思われる。よって、『東海道』は「故国の風光を偲」ぶというような甘美な響きだけでは留まらない同時代性を多分に含んでいるということができらるだろう。

第四節 『東海道』における地方・郷土

『東海道』には、「地方」や「郷土」という言葉が頻出する。そこで以下、これらの言葉に注目してテクストを読み進めていくことにしたい。

『東海道』の冒頭は、以下のように始まる。

植田健吉は高等学校の国語の教師をしてゐた時分に、「日本の旅人」といふ本を書いたことがある。

古典にあらはれた、日本人の旅の心を調べたもので、言はば文学史の領分の仕事だった。

植田は歴史や地理には、素人に過ぎなかった。

しかし昔の人が旅したことも歴史であり、昔の人の歩いた土地が地理であつた。また、旅の古い記録は、名所歌や紀行文学とは限らなかった。

植田の仕事も「古事記」や「風土記」からはじまるが、それらは歴史の書、地理の書として、つくられたのだつた。「平家物語」や「太平記」なども、歴史物語だつた。

自然、植田の「日本の旅人」も文学の領分を食み出してゐた。そして、歴史では交通史、地理では郷土地理に、最も多く触れてゐた。

研究としては、無論、茫漠で、雑駁で、植田自身も、学問と言ふほどの著書でなく、旅行好きな天性がさせた、道楽仕事だと考へてゐた。

けれども、日本の国土に対する愛情を確かめるのに、これが自分の方法だと、ひそかに信じて書いたのだつた。（『満洲日日新聞』一九四三年七月二〇日）

このように、植田が「日本の旅人」という本を執筆した動機は、「日本の国土に対する

愛情を確かめるため」であることが『東海道』の冒頭で明らかにされている。こうした文脈の中で『東海道』のテキストには「地方」や「郷土」という言葉や概念が散見される。そこで、これらの言葉がもつ意義について考えていきたい。

植田は、娘の絹子に小野小町の出身地と東海道の旅路について「小町が、出羽の国の采女だったとすると、東海道どころぢやない、まだその先きの、奥の細道が遠いし、旅も難儀だった」というように話す。宮中に仕えた小野小町を「出羽の国」という土地の固有名詞を出して地方出身者であることを強調している。また、清少納言、紫式部、和泉式部、赤染衛門、伊勢大輔、小式部内侍、孝標女の宮仕えしたときの年齢を列挙して、「植田が言ひたいのは、彼女らがみな、地方官の娘であり、妻であつたといふことだつた」ということを記してみたり、「万葉集の大歌人にも、地方官が多かつた」、「平安宮廷の女流作家たちが、地方官の娘や妻である」というように、万葉の大歌人たちや、都で宮仕えをした女たちが「地方」の出身者であつたことが強調されている。

この地方出身者が都で宮仕えをして国を支えるという構図は、同時代の文脈と重ね合わせると、地方出身者が満州という「外地」においてその国を支えることで、それは同時に「内地」の都を支えることと相似をなしているといえるのではないだろうか。

「県歩行の、旅人の血と思ひとは、彼女らの何処にあるのだらうか」というように、血脈に意識を置いたり、明確な答えは出なくとも「いはば田舎者のやうな女だけが、なぜ王朝の栄華を書き残したのだらうか」というように、田舎の地方出身者たちが都の栄華を書き残したことにについて思いを巡らせている記述もある。また彼女たちを「永遠の旅人」と捉え、「彼女らの墓は、国々にある、郷土に帰つたといへるかも知れない」というように、都において国を支える立場であつた彼女たちの魂は、彼女達の「郷土」に帰つたと考えていることを植田は言及している。

これも同時代の文脈のなかで考えると満州において国を支える立場の人たちの魂も必ず「郷土」、つまり、「内地」という「国土」に帰着するという意味が内包された記述ではないだろうか。

また、女性だけでなく、「六歌仙を「古今集」の先人とした、紀貫之もまた、「土佐日記」の地方官であつた」、「道綱母の父も地方官であつた。孝標と同じ上総や常陸の国司だつたこともある。父が陸奥守として、小町の生れたといふ国へ下るのを、娘は「蜻蛉日記」のなかで見送つてゐる」というように、男性と地方との結びつきも描かれている。

そして、「旅人業平の姿よりも、業平が旅して歩いた土地の姿が思はれるのだつた。東

海道に生れて育った植田には懐郷でもあるが、国土といふ思慕にもつながった」という植田の思いも明かされる。『東海道』の語り手の植田は、業平という人の姿よりも、業平を通して「業平が旅して歩いた土地」に思いを巡らせる。そしてそれはそのまま「国土という思慕」にスライドする。

つまり、ここにおいても東海道という限定された土地（街道）を思い起こすことがそのまま「国」を思うレベルへ昇華している。これは『東海道』の冒頭で示されているような東海道を往還した「古典にあらはれた、日本人の旅の心」を書くことは、「日本の国土に対する愛情を確かめるため」だという植田の「日本の旅人」の執筆動機と付合する。

『東海道』には、「日本の国土」に対する「思慕」や執着が色濃く描かれているということが出来るだろう。

第五節 おわりに

『東海道』は、戦時下における「満洲日日新聞」に発表された小説であるが、直接的に国威を発揚するような表現や戦争を讃美するような文言は見受けられない。

しかし、中国東北地方最大規模の日本語新聞「満洲日日新聞」という初出メディアの性質と、川端が読者層を理解したうえで、大量の古典を引用し、「日本の国土に対する愛情を確かめる」ための小説を発表したこと、同時代の他の作家と同様の観点から、結果的に国威発揚に利用されていた源実朝の「万葉ぶり」を評価する記述がテキストに散見されることは見逃すことはできない。特に「山はさけ海はあせなむ世なりとも君にふたごころわがあらめやも」の歌は、「戦時下文化運動の金字塔」³⁰とされていた現実もあり、同時代においてこうした実朝の側面を評価する記述については特に注目すべきものがある。

加えて、「地方」や「郷土」という言葉を頻出させながら、東海道を往還した「古典にあらはれた、日本人の旅の心」を描くことで、満州にいる読者に「内地」という土地への「懐郷」の情を促す「日本の国土に対する愛情」が明確に書き込まれている小説だといえるだろう。

これらのことを考えると、われわれは、「反戦文学」という評価には収斂されない『東海道』という小説のなかに刻み込まれた同時代性に直面せずにはいけないのである。

本章で論じたように、『東海道』は総じて時代と共鳴しながら織り成されており、それは、この小説が時局への迎合か抵抗かという事後的な価値基準によって容易に裁断するこ

とのできないような複雑さを帯びている。この小説の初出が「満洲日日新聞」である事実
に立ち戻るなら、テキストの随所に「古典」に関する記述が散りばめられいたことの意味
は問い直されるべきだろう。加えて、テキストに取り込まれた「古典」が同時代の文脈の
なかでどのような評価を受けていたのかについても併せて追究することが求められる。

『東海道』が「満洲日日新聞」に発表されてから、刊本に収録されるまで戦後三〇年以
上にわたって、なぜ封印されなければならなかったのかについても戦時下の川端の足取り
と併せて研究の深化が求められる領域であることは間違いない。同様に、川端が生前なぜ
『東海道』を一度も刊本に収録しなかったのか、ということについても追究すべきであろ
う。戦後に構築された川端が「日本的」で「伝統的」な美の体現者であるという作家像の
固定化と、『東海道』が長きにわたり埋もれていたことは、決して無関係ではない。

川端は、『東海道』において、「外地」＝満洲の読者に東海道を往還した古典にあらわ
れた人物たちのあり方を通して、「日本の国土に対する愛情」を想起させる小説を書いた
のではないだろうか。

1 満洲の成り立ちについては、小泉京美「満洲のモダニズム」（小泉京美編『コレクション・モダン都市文化第85巻』満洲のモダニズム）ゆまに書房、二〇一三年六月）を参照し、
まとめた。その他に、川村湊『満洲国』（現代書館、二〇一一年四月）等を参照した。
2 「満洲日日新聞」の成り立ちと、満洲における日本語新聞については、李相哲『満洲に
おける日本人経営新聞の歴史』（凱風社、二〇〇〇年五月）に詳しい。

3 栄元「植民地日本語新聞の事業活動——大連・満洲日日新聞社による「在満児童母国見
学団」をめぐる——」（総研大文化科学研究）二〇一六年三月）

4 徐敏民『戦前中国における日本語教育』（エムティ出版、一九九六年一月）

5 川端は「敗戦のころ」（『新潮』一九五五年八月）のなかで自身の満州行きについて「軍
報道班員としても私は外地に出なかった。役に立たないと見られてゐたのである。しかし、
十六年の春と秋の二度、満洲から北支へ行つた。春は満洲日日新聞の呉清源氏招待に随行、
一行に別れて後、熱河から北京にはいった。熱河は三枝朝四郎氏の同行を得て幸ひした。
秋は関東軍の招待で、故山本実彦氏、故高田保氏、大宅壮一氏が同行だった。黒河、ハイ
ラルなどに軍用機で飛んだ。二度とも報道的な旅行記はなにも書かなかつた」と明かして
いる。

6 川端二度の渡満における日程、「満洲日日新聞」の報道については、李聖傑『「早稲田大学モノグラフ」¹⁰⁶』川端康成の「魔界」に関する研究——その生成を中心に——』（早稲田大学出版部、二〇一四年三月）を参照した。

7 佐伯彰一「解説」（川端康成『天授の子』新潮社、一九七五年六月）

8 『雪国』の成立については、本論文序章、第六章を参照されたい。

9 注7に同じ。

10 この点については、川端康成「美しい日本の私」（『朝日新聞』他一九六八年二月一日）などで言及されている。

11 川端康成「本に抱える感想」（『東京日日新聞』一九三六年三月二一日）

12 川端は、「哀愁」（『社会』一九四七年一〇月）において「戦争中に私は東京へ往復の電車と灯火管制の寝床とで昔の『湖月抄本源氏物語』を読んだ。（中略）かうして私が長物語のほぼ半ば二十二帖まで読みすすんだところで、日本は降伏した。「源氏」の妙な読み方をしたことは、しかし私に深い印象を残した。電車のなかでときどき「源氏」に恍惚と陶酔してゐる自分に気がついて私は驚いたものである」と戦中の「源氏物語」体験について述べている。

13 文芸懇話会は、一九三四年一月に官民合同の文学団体として、斎藤実内閣の警保局長松本学らと直木三十五、菊池寛、山本有三、三上於菟吉、白井喬二、吉川英治らによって成立した。文芸懇話会については、海野福寿「一九三〇年代の文芸統制——松本学と文芸懇話会」（『駿台史学』一九八一年三月）等を参照した。なお、川端が編集を担当したした機関紙「文芸懇話会」は、一九三六年五月号である。

14 十川信介『近代日本文学案内』（岩波書店、二〇〇八年四月）を参照した。

15 「竹取物語」・「堤中納言物語」・「とりかへばや物語」の現代語訳については、平山城児「1 非凡閣版『現代語訳国文学全集』の事情」（『川端康成 余白を埋める』研文出版、二〇〇三年六月）において、「非凡閣版の『現代語訳国文学全集』第三巻に名目上川端康成訳として収められたもののうち、「竹取物語」は川端が「友人」に依頼し、「堤中納言物語」と全編の「解説」は塩田良平に依頼した」という証言があり、代作の可能性が指摘されているが、川端康成の名前で刊行されているという事情があるため、本論文では川端の現代語訳として解釈する。

16 注7に同じ。

17 小林芳仁「『牧歌』論」（川端文学研究会編『川端康成研究叢書5』虚実の皮膜』教育

出版センター、一九七九年三月、後「IX「牧歌」論」と改題して『川端康成の世界——美と仏教と児童文学と——』双文社出版、一九八五年三月）

18 金井景子「川端康成の郷土幻想——『牧歌』をめぐる一考察」（『媒』一九八四年一月）

19 森本穫「戦時下の川端康成——その古典受容を中心として——」（『安田女子大学文学部日本文学科国語国文論集』一九七七年八月）森本は、この論考に添付した「戦時下の川端康成（附表）「東海道」引用古典・人物の索引」において、『東海道』、『反橋』三部作に引用される古典について整理を行っている。

20 稲垣眞美「川端康成著『東海道』に見る歌論——源実朝と足利義尚の「調べ」——」（『短歌研究』二〇〇二年七月）

21 福田淳子「内に向かう視線——川端の知覚をめぐる——」（『江古田文学』一九九九年一月）福田は、この論考のなかで、「東海道」は特に中世の悲劇に傾斜した書き方をしている。そして、殆どが三十歳前後で没している北條氏や足利將軍の死亡年齢を列举し、その短命ぶりに言及しているのである。終戦の年の平均寿命は、男二三・九歳、女三七・五歳だった。川端が寿命ということを意識してこの時代を作中に出したとすれば、こんなにも明白な戦争批判はあるまい」と評している。

22 福田淳子『東海道』をめぐる——心の「旅」に映し出される真実」（羽鳥徹哉編「〈解釈と鑑賞別冊〉川端康成 旅とふるさと」至文堂、一九九九年十一月、後「第八章「東海道」をめぐる——心の「旅」に映し出される真実」として『川端康成をめぐるアダプテーションの展開——小説・映画・オペラ』フィルムアート社、二〇一八年三月）

23 河野基樹「東海道」——皇統崇慕の文学——」（『川端文学研究会編「川端文学への視界22」銀の鈴社、二〇〇七年六月）

24 森本穫「第四章 戦時下の川端康成——自己変革の時代（二）」（『魔界の住人川端康成その生涯と文学【上】』勉誠出版、二〇一四年九月）

25 川端康成「東海道」の作者の言葉」（『満洲日日新聞』一九四三年七月一三日）

26 品田悦一『斎藤茂吉——あかあかと一本の道とほりたり——』（ミネルヴァ書房、二〇一〇年六月）

27 「日本精神の生活化 “愛国百人一首の選定”」（『日本学芸新聞』一九四二年九月一五日）

28 小林秀雄「実朝」（『文学界』一九四三年二月、五月、六月）

29 注28に同じ。

30 「鎌倉に実朝の歌碑建立」〔日本学芸新聞〕一九四二年八月一五日

第六章 『雪国』——『北越雪譜』の位相と地名回避の効果——

第一節 はじめに

『雪国』は、『千羽鶴』、『古都』とともに、一九六八年ノーベル賞受賞¹の際に作家川端康成の名前とともに広く認知され、川端文学において最も高名なテキストといえる²。多言語への翻訳³や映画化⁴、ツーリズム⁵との関わりなど、テキストの流布には複数の要因が認められる。

研究の立場から見ても、『雪国』を対象とした論考は盛んに発表されており、研究史や論集はこれまで複数回刊行されている⁶。最新の論集である片山倫太郎編『川端康成作品論集成 第四巻『雪国』』（おうふう、二〇一一年二月）には、編者の片山によって、一九三四年末から二〇〇七年末までの『雪国』を論じた「都合六〇三本の文献リスト」が掲載され、多岐に亘る論点が整理されている⁷。この論集刊行後にも『雪国』に関する論考の発表はコンスタントに続いている⁸。

ノーベル文学賞受賞を端緒として、川端が国際社会から「日本的」な作家として評価され、日本の研究者たちがその評価軸を引き継いだことで、『雪国』から「日本」や「伝統」を看取する論考が多く見受けられるようになった⁹。

こうした傾向について三浦卓は、一九三五年から発表が始まった『雪国』と、戦後に発表されたテキスト群から一律に「日本」を見出してきた研究の方向性について、「戦後の川端のあり方を事後的に当てはめた」¹⁰とその問題点を指摘している。また、仁平政人も『雪国』を「日本性」や「伝統性」といった枠組みで位置づける評価¹¹が繰り返されてきたことに着目したうえで、「本作のプレオリジナル【引用者注：『雪国』初出】は発表当時の文化的・社会的な文脈と豊かな交通を示しており、複雑な改稿過程を経て成立した現行テキストにあってもそうした要素は作中で見過ごしがたい位置を占めている」¹²と『雪国』には、同時代のコンテキストが多分に織り込まれている点に注意を促している。

ここで、まずは『雪国』の先行論において、「日本」や「伝統」という視点がどのように見出されてきたのかについて確認しておこう。中村光夫は、「ちょうど、お能のワキと彼の夢の具象として現われるシテとの間に劇的な葛藤が起らないように、島村と駒子の関係は、背景の葉子の位置をも含めて、はじめから終りまで、何の進展も見せません」¹²というように、『雪国』の構造を能舞台の枠組みを持ち込むことで捉えている。この延長

上で、竹内清己は、『雪国』冒頭の「国境の長いトンネル」は、能楽舞台でいえば橋懸かり、神社でいえば参道であり、「雪国」が本舞台であり神社境内である」¹³というように、中村の論考を更新し、小説における「空間」に「日本の伝統様式」を見出している。杉井和子は、川端文学の根底にある「別離のモチーフ」が「あはれ」という人間的な感情が身・体・感・覚・を・通・じ・て・強・く・押・し・出・さ・れ・て・い・る」点に『源氏物語』の「帚木三帖」と川端文学の共通点を指摘したうえで、「女の真剣さにかからめとられる構図」に『源氏』と『雪国』の「相似」を見出す¹⁴。また、大久保喬樹は、『雪国』における「豊富な自然意識」に着目したうえで、「物語（虚構）」と「舞台となる土地の習俗の紹介とが組み合わせる形式は、古来風土記等から始まって『平家物語』の道行き文にまで至る伝統をやはり踏襲したもの」¹⁵であると捉え、『雪国』と「伝統」を結びつけている。田村嘉勝は並行して執筆された『雪国』と『牧歌』（「婦人公論」一九三七年六月～一九三八年十二月）を比較したうえで、『牧歌』の語り手である「作者」と同様に、『雪国』の島村も「日本の故郷」を求めて雪国に行った」¹⁶というように両テキストの共通項を「日本の故郷」を希求する物語であると指摘している。こうした『雪国』から「日本」や「伝統」を看取する先行論は、繰り返し発表されてきた。

一方、先掲の仁平の論考¹⁷において言及されているように、近年、『雪国』に執筆当時のコンテクストを読み取る先行論も見受けられる。野坂昭雄は、『雪国』の執筆が開始された一九三四年頃の越後湯沢¹⁸が「鉄道敷設や道路建設を基盤とした交通機関の発展」に伴い、「観光地として管理」¹⁹されていたことを指摘し、小説から当時のインフラの整備と観光の関係性を読み取っている。山田利一も『雪国』における同時代のコンテクストに注目し、『雪国』は「鉄道と観光開発の関係についても雄弁に語っており、日本の観光史を探るうえで貴重な資料」であるというように、発表当時の「ほぼ完べきな現代が描かれている」²⁰点に着目している。

このように、先行研究においては、『雪国』から「日本」や「伝統」を看取する立場と、執筆当時の同時代的状況を読み取る立場が混在している。後者においては、小説に描かれた越後湯沢の上越線開通による鉄道の敷設と観光に注目が集まっている。

既に序章で確認済みではあるが、論の展開上、簡略に『雪国』の成立過程について確認しておこう。

『雪国』は、各雑誌に断続的に分載された①「夕景色の鏡」（『文芸春秋』一九三五年

一月)、②「白い朝の鏡」(「改造」一九三五年一月)、③「物語」(「日本評論」一九三五年一月)、④「徒勞」(「日本評論」一九三五年二月)、⑤「萱の花」(「中央公論」一九三六年八月)、⑥「火の枕」(「文芸春秋」一九三六年一月)、⑦「手毬歌」(「改造」一九三七年五月)までを加筆修正し、⑧「新稿」(日本近代文学館蔵「肉筆原稿」)を加えて、⑨旧版『雪国』(創元社、一九三七年六月)として最初の単行本が刊行された。それから「三年半の空白期間」を経て、続稿となる⑩「雪中火事」(「公論」一九四〇年二月)と⑪「天の河」(「文芸春秋」一九四一年八月)が書き継がれたが、この二編は戦後、⑫「雪国抄」(「暁鐘」一九四六年五月)、⑬「続雪国」(「小説新潮」一九四七年一月)として改稿された。旧版『雪国』に、⑫「雪国抄」と⑬「続雪国」を加え、⑭『決定版 雪国』(創元社、一九四八年十二月)が刊行された。この『決定版 雪国』においてテキストは、確定した。ただし、『決定版 雪国』以降も、刊本に採録の際には細かな改稿が行れ、その後⑮定本『雪国』(牧羊社、一九七一年八月)が刊行されている²¹。

本論文においては、①「夕景色の鏡」が発表された一九三五年から、テキストの内容が確定した⑭『決定版 雪国』が刊行された一九四八年までの一四年間を『雪国』の成立期間と捉える。この間、日中戦争、太平洋戦争、終戦をまたいで『雪国』の執筆は続けられた。こうした状況下における『雪国』の受容について川端は次のように述べている。

私の作品のうちでこの「雪国」は多くの愛読者を持った方だが、日本の国の外で日本人に読まれた時に懐郷の情を一入そそるらしいといふことを戦争中に知った。これは私の自覚を深めた。

昭和十二年に創元社から出版し、その後改造社版の私の選集や一二の文庫本にも転載した「雪国」は実は未完であつた。どこで切つてもいいやうな作品であるが、始めと終りとの照応が悪いし、また火事の場合は中頃前を書く時から頭にあつたので、未完のままなのは絶えず心がかりであつた。しかし、本にまでなつて一度この作品を片づけて立ち去つた気持も強く、残りは僅かながら書きづらかつた。²²

川端は『雪国』が「日本の国の外」で読まれた際に、「懐郷の情」を喚起させる小説であることを旧版『雪国』刊行後の「戦争中」に意識を深め、その後、元々構想としてあ

った「火事の場面」を加筆したという時系列を明らかにしている²³。

そこで、旧版『雪国』の結末が記された⑧「新稿」（日本近代文学館蔵「肉筆原稿」）を確認すると、⑨旧版『雪国』（創元社、一九三七年六月）の最後の一文「薄く雪をつけた杉林は、その杉の一つ一つがくつきりと目立つて、鋭く天を指しながら地の雪に立つた。」の後に、旧版『雪国』では削除された島村が乗る自動車に駒子が飛び乗る場面が既に確認できる。この場面は、「火事の場面」に出くわす伏線を果たしており、旧版『雪国』には取り込まれなかったが、「雪中火事」以降（改稿にあたる⑫「雪国抄」、⑭『決定版雪国』、⑮定本『雪国』）には描かれている。

ここから見えてくることは、先に引用した川端の言葉の通り、旧版『雪国』は、「火事の場面」を書かずに、構想の途中までをまとめたものであるということだ。旧版『雪国』刊行から三年半後、川端は続稿にあたる、「雪中火事」（「公論」一九四〇年十二月）を発表した。

「雪中火事」の内容を確認すると、前半部分は「昔の本」として鈴木牧之の『北越雪譜』から「縮」にまつわる話題が大量に取り込まれている。この「縮」の話題が枕となつて、島村は「雪国の村」から「縮の産地」に出かけ、「昔の本」に書かれた土地を訪問する。その後、島村が「雪国の村」に戻り、車に乗っていると、小料理屋の菊村の前にいた駒子が島村の車に飛び乗る。坂の行きどまりで二人は車から降りて話をするが、「突然うしろに擦り半鐘が鳴り出」すことで「火事の場面」に遭遇する。

つまり、「雪中火事」には、元々川端の構想にあった「火事の場面」の前に、『北越雪譜』が挿入されている。このように辿っていくと、『北越雪譜』は、『雪国』の執筆再開に、かなり大きな意味合いを持っていたことが推測される。

以上を踏まえ、本章では、「雪中火事」と『北越雪譜』の関連を手がかりに、『雪国』を捉え直すことを課題とする。

「雪中火事」が戦後「雪国抄」に改稿された際に、『北越雪譜』からの取り込みは、大幅に削除・整理されることになり、この点については別途分析が必要である。しかし、そうであったとしても、『北越雪譜』が取り込まれた形で「雪中火事」が執筆されたことで、『雪国』に続稿がもたらされたことは、『雪国』の成立においても見過ごしがたい位置を占めている。本章で特に注目したいことは、「雪中火事」に取り込まれる際に『北越雪譜』の置かれていた同時代状況との関連である。

第二節 「雪中火事」における『北越雪譜』の位相

「雪中火事」に取り込まれた『北越雪譜』は、越後の鈴木牧之（一七七〇年～一八四二年）²⁴による著作である。『北越雪譜』が出版に至るには、長年にわたる紆余曲折がある²⁵。牧之は『北越雪譜』の出版を志した際に、当初江戸の山東京伝、曲亭馬琴らに資料提供をし、執筆を依頼したものの京伝、馬琴ともに多忙のため叶わなかった。その後、山東京山の協力を得て、一八三七（天保八）年秋に初編巻上中下の三巻の出版に至る。このとき、牧之が最初に京伝への出版依頼を行ってから、既に三〇年以上の月日が流れ、牧之は六七歳になっていた。

牧之と京山の往復書簡集を分析した市島謙吉は、牧之が『北越雪譜』の出版を望んだ要因を「郷国の雪に興味を感じてゐた所から、何とかして全国に第一位を占むる郷里の雪を、江戸を始め九州辺の雪の多く積らぬ国に住む人達へ知らせたい。殊に雪国特有の風俗習慣、さては用具までも全国に紹介して見たいといふ考を起し」²⁶たためだと述べている。『北越雪譜』は、「雪国特有の風俗習慣」を全国へと知らしめ、「江戸に於ても幾百軒の貸本屋全部が、此書幾部かを備へ置くにあらざれば營業の出来なかつた程」²⁷の人気を博したという。

江戸の世において大変な人気を誇った『北越雪譜』は、活字化され、一九三六年一月岩波文庫から刊行された。そこには、岩波文庫の校訂を担った岡田武松（中央氣象台長）が氣象学上の立場から『北越雪譜』の価値を見出し、氏の推薦によって岩波文庫として刊行された経緯がある²⁸。

『北越雪譜』が岩波文庫から刊行された反響を牧之のひ孫にあたる鈴木卯三郎は次のように述べている。

近時郷土文化研究熱が高まつて来た際、この文庫の発行が大方の歓迎をうけ、わたくしの知人やその他さまざまの人から、批評讃辞を寄せられ、その意外の反響に驚いて居る。²⁹

鈴木卯三郎の指摘にあるように、当時の「郷土文化研究熱」の高まりによって、『北越

雪譜』が岩波文庫として刊行されたことは歓迎されている。ここで、『北越雪譜』の刊行がどのように周知されたかを確認するために、広告文を確認してみよう。

越後湯澤の人、鈴木牧之の著す『北越雪譜』は、我々山やスキーを愛好する者達にはあまねく知れわたつてゐるが、その原本に接することは中々容易ではない。又偶然古本屋でそれを発見しても今では二〇円近い呼び値である。それが今度岩波文庫から、上中下、三編、春夏秋冬の合計七冊を全部まとめて僅か四〇銭と云ふ驚くべき廉い値で発売されたことは我々にとつても実に喜ばしいことだ。単に値段のこつばかりでなく、読みにくい昔の原本から活字体となつて復刻されたことはオリジナルの古風には接し得ぬとしても、読み易い点は有難いことである。大雪の話、怖い吹雪の実例、雪国の鳥獣の話、雪国の人の生活や風俗習慣等が次々と万遍なく現れて来て、その面白味は、正に巻を措くあたはずと云ふのであらう。³⁰

「雪国の人の生活や風俗習慣等が次々と万遍なく現れて」くる『北越雪譜』。この広告文は、小山書店から刊行された「新風土記叢書」シリーズ³¹の宇野浩二『大阪』（第一編、一九三六年四月）、佐藤春夫『熊野路』（第二編、一九三六年四月）の広告と並んで掲載されている。「新風土記叢書」は、「その地出身若しくは親知の文学者芸術家に依頼して、全日本の特色ある都市、郷里、地方の人情生活風土山水をまざまざと読者の前に活現せしめ」³²ることを目的に刊行された。広告に、地方の「郷土」や「風土」を広く読者に知らしめる性格の新刊に関する情報が複数掲載されることは、同時代の「郷土文化研究熱」に応える出版状況を表している。

川端も一九三〇年代における「郷土研究」や「郷土運動」の高まりに関心を持つ一人だった。この時期の川端は、第一章で確認したように、「信濃は郷土の研究といふことが全国第一に発達」していることを挙げ、「郷土を知ることとは日本を知ることにもなる」³³という見立てのもと、信州を歩き回り、「郷土文獻」³⁴を渉猟し、信州の「郷土」を多分に取り込んだ『牧歌』（「婦人公論」一九三七年六月〜一九三八年十二月）の執筆を行った。加えて、『牧歌』と並行して執筆していた『高原』の第二回分載のタイトルを「風土記」（一九三七年十一月）としたことも思い起こされる。こうした点からも、川端の「郷土」への関心は見過ごしがたい位置を占めている。一九三〇年代の「郷土」の様相につ

いては、既にさまざまな議論³⁵がなされているが、大原祐治は、この時期の特有の「郷土研究」、「郷土教育」の目的が「郷土」意識を涵養することによって、それをそのまま同心円状に「国民的自覚」へとスライドさせる」³⁶ことにあると指摘している。この頃の「郷土研究」や「郷土教育」は、川端の言葉と重なるように、「郷土を知ることとは日本を知ることになる」という目論見のもとに展開されていた。

つまり、一九三〇年代の「郷土教育」、「郷土研究」には、個々人の「故郷」をある程度の共同性を持つ「郷土」に置き換えたうえで、さらにその「郷土」を「国家」への帰属意識へと接続していくという同時代状況がある。

川端は「雪中火事」への『北越雪譜』の取り込みについて、次のように述べている。

縮のことは勿論鈴木牧之の「北越雪譜」によつた。創元社から旧版「雪国」を出してから後に、私はこの本を読んだ。前に読んでゐれば、「北越雪譜」のなかの風俗や景物を「雪国」のなかに取り入れたかもしれないと思ふ³⁷。

この川端の言葉からは、『北越雪譜』が「風俗」や「景物」を体現する「郷土資料」としての価値を十分に有すると認識したうえで、「雪中火事」に取り込んでいることがうかがわれる。川端は、『北越雪譜』を旧版『雪国』刊行後に読んだと述べているが、正確にはいつどのような形（版本か、岩波文庫か）で読んだのかは判然としない。

しかし、「郷土」を探求することが、そのまま「日本」という国への帰属意識へと接続されていく同時代状況に鑑みると、「郷土資料」としての性格が強い『北越雪譜』の取り込みは、旧版『雪国』刊行後に、読者から伝えられた『雪国』が「懐郷の情を一入そそる」という小説の特性をさらに補強する役割をも担ったと考えられる。

ここで留意すべきことは、一九三〇年代の「郷土」への関心が高まりを見せていく同時代的文脈のなかで、「郷土」資料としての性格が強い『北越雪譜』の「雪中火事」への取り込みがなされたということである。

次の引用は、「雪中火事」発表の前年にあたる一九三九年の越後湯沢と、その周辺の町の様相について述べられたものである。

湯澤は人も知る通り、上越線が出来てから年々めざましい発展をとげて、今では北

越第一の溫柔郷となつてゐるが、牧之の生きてゐた明和頃には、まだ余りひらけてゐなかつたと見えて、塩澤の近くでありながら、「北越雪譜」の中に、殆ど一言半句も言及されてゐない。繰り返し、繰り返し、降り積る雪のおぞましさを説き雪に閉ざされた生活の味気なさを嘆いた牧之が、今日こゝの雪量を慕うて殺到するスキーヤーの群れの跳躍乱舞を見たならば、何と述懐するだらうか。――時代は多いに変わったのである。（中略）

ところで、越後縮布のことは、牧之も「北越雪譜」の中に詳しく記してゐるので、それをこゝに受売する勇氣はない。たゞ、それを探ることに多少の興味を覚えた所以は、その織物が現在どうなつてゐるかといふ点についてであつた。

牧之の記したところによると、この織物の出たのは南北中の魚沼三郡に限られ柄や色などはそれぞれ所にて専門的にきまつてゐたといふことであるが、今では、小千谷、六日町、塩澤を中心とする三つの地域に狭められてしまつた。このうち小千谷は機械織によるラミーが主で、昔風の手織をやつてゐるところは塩澤と六日町に限られる³⁸。

ここからは、一九三一年の上越線開通によつて観光地化する越後湯沢とは対照的に、時代の変化による規模縮小はみられるものの、「昔風の手織」が残る周辺の町の様相が確認できる。「雪中火事」に戻つて考えても、島村が逗留し、同時代を生きる島村の視点で語られる「雪国の村」と、島村が「郷土資料」としての性格が強い『北越雪譜』Ⅱ「昔の本」を内面化したうえで語る「縮の産地」では、自ずと土地の描写は異なってくる。

「雪中火事」における『北越雪譜』の取り込みに着目した先行論もいくつか確認できる。

湧田佑は、「この「雪国」に関する限り、この川端文学の本質ともいふべきものが、小説の骨格と展開に必要として飽くことなく求めていったのは「北越雪譜」の諸要素だった」³⁹

と『北越雪譜』の影響を「雪中火事」に限らず、『雪国』の全体に見出した。高橋有恒は、「やはり川端は、「北越雪譜」とは無関係に「雪国」を書き始め、そして昭和12年に一旦本にして出した後で、「北越雪譜」に触れ、そこから多量のことを摂取したのである」⁴⁰

と湧田に反論した。北原保雄は、日本語学の立場から「雪中火事」と、その改稿を分析し、「ほとんどすべてを『北越雪譜』によりながら、あたかも自分の書いた文章のように見せようとして、部分部分に細工を施しているので、表現に破綻が生じ、失敗に終わっている

ところが多いのも、残念である」⁴¹と川端の『雪国』への「雪中火事」の取り込み方を批判している。河村清一郎は、『北越雪譜』と「雪中火事」の本文を校合し、『雪国』における『北越雪譜』の意味付けを検討した。河村は、この論考で「終章【引用者注…旧版『雪国』以降の部分】の内容は、「縮」についての着想をもとに構成されて」おり、「駒子の愛における、ひたむきさが、「縮」の持つ涼しさや美しさになぞらえられる反面、人間の愛のはかなさが「縮」の持つ確かさに対称させられ」、「そこからストーリーは新しい局面を見出していく」⁴²と『北越雪譜』が『雪国』の結末を導く重要な役割を担っていることを指摘している。また、上田渡は島村の「昔の本」を読むという読書体験に着目し、「島村にとっての現実認識は、常にかじめ言語化されたものを読むことから形成され、それを批評し、修正することで自己の固有な体験として内面化される」⁴³ことから、「昔の本」が島村の「現実認識」を喚起している点を読み取っている。

以上を踏まえ、「雪中火事」に取り込まれた『北越雪譜』の位相について考えていきたい。

まずは、初出誌「雪中火事」に取り込まれた『北越雪譜』の分量について確認しよう。「雪中火事」は、「公論」（一九四〇年十二月）の二九〇頁から三〇〇頁まで一一頁に亘って掲載されており、「雪中火事」全体が一七七行で、そのうち『北越雪譜』からの取り込みだと判断可能な部分は六二行にものぼる⁴⁴（『北越雪譜』の「雪中火事」への取り込みについては、脚注の末に本文対照表を添付した）。

「雪中火事」では、「雪国の村」に逗留している島村が、「昔の本」に描かれている「縮の産地」へ出かける。『北越雪譜』から取り込まれる「縮の産地」にまつわる内容が、島村によって「昔の人も本に書いてゐる」と断られたうえで語られる。その際、『北越雪譜』の書名は明らかにされない。

「雪中火事」の前半部分（初出二九〇頁から二九三頁八行目）において島村が「縮の産地」到着前に「昔の本」から語られる内容は、「村里」で織られる「縮」の話題に集約される。この土地では「嫁を選ぶにも機織りの技量が第一で器量は二の次」とされたほど「機織りの技術」は、重要な位置を占めていた。さらに、「子供のうちに織り習ひ、およそ十五六から二十四五までの女の若さでなければ品のいい縮は出来な」と考えられていたことから、特にこの年頃の織子たちは、懸命に縮を織った。「深い雪のなかでほかにすることもない月日の手仕事だから尚念を入れて、製品には愛着もこもつ」ていたと

いう。長い時間をかけて極めて丁寧に縮が織られていた。

「昔の娘の手織の仕事を考へてみるうちに、島村は駒子の愛情を感じることもあつた」というように、織子による辛苦の「手織の仕事」に、島村は、駒子から自分へ向けられる愛情を重ねる。駒子がいくら切実に迫つてきても島村はそれに応える術を持たない。そこで島村は「この温泉場から出発するはずみをつけるつもりもいづらかあつて、縮の産地」へ向かう。

「雪中火事」の中頃（初出二九四頁一一行目から）、島村が「縮の産地」に到着後は、「縮の産地」の町の様相や気候を説明する際に、「昔の本」に書いてある内容が語られる。

I

駅を下りてしばらく歩くと昔の宿場らしい町通があつた。家々の庇を長く張り出して、その端の柱は道路に立ち並んでゐた。雪のあひだは庇の下が往来となるわけだらう。

両側の家から道の真中へ雪を積むので、雪の堤をとどころくり抜いて、道に向ふ側へ渡る。胎内潜といふ。（「雪中火事」）

II

木の葉が落ちて風がめつきり冷たくなるころ、寒々とした曇り日が続く。雪催ひである。そのあひだに遠近の高い山が白く染まる。これを嶽廻りといふ。また海のあるところは海が鳴り、山の深いところは山が鳴る。遠雷のやうである。これを胴鳴りといふ。嶽廻りを見、胴鳴りを聞いて、雪が遠くないことを知る。

昔の本にさう書かれてゐるのを島村は思ひ出した。（「雪中火事」）

III

昔の人も唐の秦韜玉の村女の詩などを引いて、他人を装はすためにわづかな価で辛苦すると本に書いてゐる。機織女を抱へて織らせる家がないのは、一反の縮を織るまでにずゐぶん手がかかつて手間賃を計算すると合はないからだといふ。錢勘定は別としても、雪の底で手仕事に根をつめた女達の暮しは、その製作品の縮のやうに爽かで明るくはなかつたにちがひない。

さう思はれるに十分な町の印象だった。（「雪中火事」）

IⅢの島村の語りにはすべて『北越雪譜』の内容が含まれている⁴⁵。島村の「縮の産地」への訪問は、日帰りであり、時間にするとわずか数時間のことである。その短時間の訪問で、その土地の「風物」や「景物」を深く内面化したうえで語ることは困難だと考えられる。しかし、「雪中火事」においては、越後の人である鈴木牧之が著したその土地を描いた先行する文学である『北越雪譜』を島村が内面化し、語ることで、訪問の時期とは異なる「木の葉が落ちて風がめつきりつめたくなるころ」への言及も可能になるし、機織りに辛苦する織子たちの切実さや、観光地化する「雪国の村」とは異なる「縮の産地」の様相もテクストに反映することが可能になったといえる。

こうした『北越雪譜』の取り込みは、「雪中火事」において越後の「郷土」を克明に刻み込んだ。「雪中火事」が「雪国抄」に改稿された際には、苦心する縮の織子にまつわる話題（初出二九一頁一〇行目から二九二頁一八行目）は削除されたが、それ以降の『北越雪譜』からの取り込みは、改稿後も踏襲されている。

ここで留意すべき点は、「郷土資料」としての性格が強い『北越雪譜』の内容を取り込む際にも、その典拠は、「昔の本」としか説明されておらず、『北越雪譜』に頻出する「魚沼」や「塩澤」という地名が「村里」や「ある村」に置き換えられ、「郷土」にとって最も重要な情報であるはずの地名が捨象されていることである。

つまり、「雪中火事」においては、雪深い「ある村」の「郷土」が「昔の本」からの取り込みによって克明に体现されているということになる。ただし、地名を回避するという方法は、「雪中火事」に限らず、『雪国』の全編を貫く問題でもある。

こうした視点に立脚すると、「雪国の村」の地名が明らかにされていないことに反して、島村が「東京」から「雪国の村」を訪れていることは、繰り返し提示されていることが思い当たる。

従って、「雪国の村」は、東京に対置する場所として措定されている。

次節においては、地名を記さないことⅡ地名の回避は、『雪国』においてどのような意味をもつのか考えてみたい。

第三節 『雪国』の地名回避と対置する東京

『雪国』の「雪国の村」には特定の地名が示されていない。この点について、例えば大久保喬樹は「(雪国)とは、単なる(某町)、(※※村)というような、現実の固有地名を避けるだけの中性的(無性的)呼称を超えて、積極的な異世界の呼称なのである」⁴⁶と、いうように、地名の回避は積極的に「異世界」を召喚する効果があると捉えている。多くの先行論では、島村が赴き、駒子と過ごす地名が回避された「雪国の村」は、「異世界」や「夢幻の世界」⁴⁷と捉えられ、「非現実的」で抽象度の高い空間として位置づけられてきた。

しかし、なぜ「雪国の村」の地名が回避されたのか、という点を探る議論は、管見のところほとんど見られない。こうしたなかで、たつみ都志は「雪国の村」の地名回避に注目し、次のような問題提起を行った。「どうしても気にかかることがある。それは、越後湯沢というモデル地がありながらわざと固有名詞をつかわず雪国のある温泉場と韜晦した普遍性のある村、〈場〉としての意味の解読である」⁴⁸。そこでたつみは、「雪国の村」を「便宜的にY」としてその空間を分析し、「Y」という空間が駒子との関係性を深めていくなかで、島村の「日常」化する様相を明らかにしている⁴⁹。このたつみの先行論について須藤宏明は「何故固有名詞を剥奪したのかという問題には直接触れられてはいない」⁵⁰と批判し、作家論と、テクスト分析の両面から「固有名詞」の「剥奪」について分析を行っている。須藤は、川端が『雪国』発表前には「伊豆の踊子」や「浅草紅団」というタイトルに地名を入れた小説を頻繁に発表してきたにもかかわらず、「雪国の村」に地名を与えなかった要因を「地名が読者の想像を奪うという欠点を克服するため」だと指摘している。続けて、須藤は『雪国』で実践された「具体性を排除する抽象化の方法の模索」を経て、川端が『眠れる美女』や『片腕』で「詮索不可能な空間」を設定するに至ったと述べ、『雪国』を地名を回避するという方法を実践した先駆的な小説だと位置づけている。

須藤の指摘にあるように、『雪国』において「雪国の村」の地名が回避されたことは、小説に描かれた空間Ⅱ「雪国の村」がどこであるかを読者が自由に想起することを可能にした。川端のもとに寄せられた「日本の国の外で日本人に読まれた時に懐郷の情を一人そそる」という点においても、読者は、地名が回避されることで、東京(中央)から離れた地方(周縁)のどこかに「雪国の村」を設定することになり、各々で「雪国の村」

に断片的であつたとしてもそれぞれの「故郷」を描きながら小説を読むことが可能になったとも捉えられる。旧版『雪国』までの内容を振り返ると、小説の舞台はほぼ島村の逗留する「雪国の村」の宿の室内であることから、深くその土地を描く必要性がなかったとも考えられるが、旧版『雪国』刊行後に執筆された本論文第一章から第五章において取り上げた小説は、作品舞台となる土地の固有名詞を前面に押し出したものであることに思い至る。なかでも「郷土資料」を取り込む、ということに注目するならば、第一章で取り上げた『牧歌』と『雪国』の関係性について考える必要があるだろう。先行論においても『牧歌』と『雪国』の関係性を指摘するものがあり、なかでも金井景子は、『牧歌』は、大量の郷土文献を持ち込み、「作者」に徹して土地の歴史を丹念に繙き、無告の民の営みを書き残すことで、「日本の故郷」を浮かび上がらせようとした小説であつたが、中絶という形で閉じられ、その『牧歌』の蹉跌が「固有名詞を可能な限り捨象」した『雪国』へと接続していく⁵¹という重要な指摘を行っている。『牧歌』は、旅人である「作者」が信州の「郷土」に深く立ち入る努力をすることで、同時代の特色とも言える「郷土を知ることにもなる」という「郷土」を「国家」への帰属意識へと接続していくというスタンスが貫かれた小説だといえる。そうした他作品との相互関係のなかで『雪国』の「雪中火事」には、「郷土資料」である『北越雪譜』が取り込まれたと考えられる。しかし、『牧歌』の語り手である「作者」はあくまで旅人であり、信州という「郷土」を深く捉え、その先に「日本の故郷」なるものを浮上させることはできなかった。よって、「雪中火事」においては、『北越雪譜』という「郷土資料」を取り込むことで、旧版『雪国』を読んだ読者から寄せられた「懐郷の情」をさらに小説に書き入れたという川端の願望を垣間見ることは可能である。しかし、島村も『牧歌』の「作者」と同様に、「旅人」という立場であり、その土地に生きる人と同等に「郷土」を捉えられるはずがないことも川端は『牧歌』の執筆経験から心得ていたと考えられる。そのため、「郷土資料」の『北越雪譜』を取り込む際にも、徹底して地名の回避を行つたと考えられる。

従って、『雪国』という小説において地名が終始回避されていることは、重大な意味を持つ。

さて、「雪国の村」に反して、テキストにおいて固有名詞を与えられた地名がある。先に確認した通り、それは東京である。ここでは、東京が『雪国』においてどのような位

置づけられているかを分析することで、「雪国の村」の地名が回避されている効果について考えてみたい。

まずは、『雪国』の主要な登場人物たちと東京との接点を確認していこう。島村にとって東京は家族と暮らしながら、「西洋舞踊」の研究をする生活の場としてある。駒子には東京に「お酌」に出た過去がある。行男は、東京に出て「夜学に通つてゐた」が、体への無理がたたたり、母の郷里である「雪国の村」に帰郷した。葉子は、東京に赴き、病身の行男の看病をしていた。

このように羅列してみただけでも東京は、『雪国』の主要な登場人物と接点を持つトポスとしてあり、移動手段のインフラの整備により、東京と何かしらの接点を持つ読者も多数であることが想起される。

『雪国』に描かれたトポスに着目したたつみ都志は、駒子にとって東京は「売られて行つた」場所であることから、「東京への、ある反感」を読み取り、東京というトポスは「魔法にかけられて自分の「王子」になっている島村の魔法がとけてしまう忌まわしいところ」⁵²だと措定する。こうしたたつみの指摘する駒子の東京へのまなざしからも明らかのように、『雪国』のなかには、東京（中央）——「雪国の村」（地方）という明らかな構図がある。

では、ここからは、駒子がどのような時に東京という言葉を発するのか分析をしていこう。駒子が東京という地名を発するのは、東京に「お酌」に出ていたという自分の身の上を語る場合と、島村に向けて自分の心情を吐露をする場合に分類できる。「泊ることがあつても、駒子はもう強いて夜明け前に帰らうとはしなくなつた」という程に、駒子と島村の関係が深まりを増していくと、駒子は、自分の本心とは逆説的な言葉を発する。「あんたもう東京へ帰るんでせう。駅を見に行くの」や「つらいわ。ねえ。あんたもう東京へ帰んなさい。つらいわ。」というように、島村が東京の人であることを再認識するような言葉を発する。「つらい」心情を吐露する駒子に対して、島村は「いつまでゐたつて、君をどうしてあげること、僕には出来ないんじゃないか」と冷静に応答する。

駒子の口からは、自分たちの関係は、恒久的なものではなく、島村が「雪国の村」を訪れている時にのみ成立するものであるから、東京は、島村の帰る場所であることがあらためて強く提示される。

次に、東京に生きる島村と、「雪国の村」に生きる駒子のありようがより明確に対比して描かれている場面を見てみよう。駒子は、島村の前で「勸進帳」を披露する。島村は、葉子を持ってきた風呂敷包みのなかに「杵家彌七の文化三味線譜が二十冊ばかり」入っていることを見つけ、「こんなもので稽古したの？」と駒子に向かって素直に驚きをぶつける。駒子は、東京で「お酌」に出ていた際に稽古させてもらったのは主に「踊」であり、歌もラジオかどこかで聞き覚え、「我流」で習得してきたことを伝える。一方、島村は「東京の下町育ちで、幼い時から歌舞伎になじみ、学生の頃は日本踊の研究に耽り、やがて踊の批評も書いたほどであるから、長唄の文句くらいは覚え、自づと耳慣れてゐた。そうした境遇から、駒子が努力を重ねて身につけてきたことは、島村にとっては幼少期から身近なものだった。

こうした互いの背景の違いから、島村は「雪国の村」(地方)で、懸命に生きる駒子を目の当たりにする。

いつも山峡の大きい自然を、自らは知らぬながら相手として孤独に稽古するが、彼女の習はしであつたゆゑ、撥の強くなるは自然である。その孤独は哀愁を踏み破つて、野生の意力を宿してゐた。幾分下地があるとは云へ、複雑な曲を音譜で独習し、譜を離れて弾きこなせるまでには、強い意志の努力が重なつてゐるにちがひない。

島村には虚しい徒労とも思はれる、遠い憧憬とも哀れまれる。駒子の生き方が、彼女自身への価値で、凜と糸の音に溢れ出るのであらう。

「雪国の村」で習得した駒子の奏でる「勸進帳」に島村は圧倒される。「勸進帳」は、東京に育った島村にとって「耳慣れ」ていたはずのものであった。しかし、「雪国の村」において東京育ちではない駒子が「自然」と対峙しながら「強い意志の努力」で「勸進帳」を弾きこなしていることに、島村は三味線の技術を超越した駒子の「生き方」そのものに価値を見出している。

さて、東京に生まれた知識人たちの一九三〇年代の精神状況を分析した評論に、小林秀雄の「故郷を失つた文学」(「文芸春秋」一九三三年五月)がある。

私は自分を江戸つ児だと思つた事もなし、江戸趣味などといふものも全く持ち合は

せてゐないが、自分でも気のつかない所に、やはり江戸っ児気質とでもいふやうなものが宿つてゐるのかも知れない。だが、さういふ事情は私にはどうでもいゝ事で、嘗てさういふ事情が私を悩ましたことはない。私の心にはいつもと奇妙な感情がつき纏つてゐて離れないでゐる。言つてみれば東京に生れながら東京に生れたといふ事がどうしても合点出来ない、又言つてみれば自分には故郷といふものがない、といふやうな一種不安な感情である。この感情には、ロマンティックな要素は微塵もない、といふ事は容易に解つて貰へさうに思はれるが、それと同時に、この感情には、ほんたうにリアリティックな要素も少しもない、といふ事はさう容易に解つて貰へさうにも思はれない。

この評論で小林は、東京で育ちながらも「江戸趣味などといふもの」を持ち合わせておらず、「西洋の影響」が色濃い東京に生まれ育つた自分には「故郷」というものが判然としないという精神状況を明らかにしている。

『雪国』に話を戻すと、「東京の下町」で生まれ育つた島村は、「幼い時から歌舞伎になじみ、学生の頃は日本踊の研究に耽り、やがて踊の批評」まで書いており、当初「東京の下町育ち」というバックボーンを積極的に活かした人生を過ごしてきた。

しかし、「日本踊の伝統の眠りにも新しい試みのひとりよがりにも当然不満がなまなましく強まると共に」、研究対象を「西洋舞踊に鞍替へ」した。島村の「西洋舞踊」の研究は、「踊そのもの」を見るのではなく、「舞踊譜や写真や解説から舞踊家の実際の動きを思ひ浮べる」というものだった。島村は、研究の対象を「西洋舞踊」に転換することで、東京で生まれ育つたことからは「日本踊」から自ら離れている。こうした点からも、「東京育ち」の島村の精神状況には、何らかの「揺らぎ」が生じていると捉えられる。つまり、小林の評論にある東京に育つた知識人たちが共有した「故郷を失つた精神」を島村も持つ人物であつたと考えられる。そうした視点に立つと、駒子と過ごす「雪国の村」は、「異世界」や「夢幻の世界」とは異なる、同時代の知識人たちが希求した東京に對置する「故郷」になり得る「郷土」が刻まれたトポスである必要がある。地名を回避しながらも、「雪国の村」は、断片的であつたとしても「故郷」を看取できる「東京」

に對置する普遍的なトポスとなることを可能にしたのである。『牧歌』において旅人の立場である「作者」は、固有名詞が与えられた信州という具体的な「郷土」には「日本の

故郷」なるものを浮かび上がらせることはできなかった。一方、『雪国』における地方にあたる「雪国の村」は地名が回避された空間であるからこそ、東京という故郷に「揺らぎ」をおぼえる旅人島村を寛容に受け止めるトポスとなり得たのであろう。

第四節 おわりに

以上のように、本章では、「雪中火事」に取り込まれた『北越雪譜』が置かれていた同時代状況や、『雪国』の主要な舞台である「雪国の村」の地名が回避された効果について検討してきた。

まずは、「雪中火事」に取り込まれた『北越雪譜』について振り返ってみたい。一度単行本となった旧版『雪国』（創元社、一九三七年六月）刊行後、続稿の「雪中火事」（公論一九四〇年一二月）には、多分に『北越雪譜』の内容が取り込まれた。『北越雪譜』が旧版『雪国』刊行の前年、一九三六年一月に初めて岩波文庫として刊行された際には、当時の「郷土文化研究熱」の高まりによって、「歓迎」を受けたという注目すべき状況がある。

こうした「歓迎」は、一九三〇年代の「郷土教育」、「郷土研究」が盛んに行われていた同時代状況と明確に付合する。この時期の「郷土教育」、「郷土研究」には、個人の「故郷」をある程度の共同性を持つ「郷土」に置き換えたうえで、「郷土」を「国家」への帰属意識へと接続していくという特徴が見られる。川端は、旧版『雪国』を読んだ読者から、『雪国』が「懐郷の情を一入そそる」小説であることを伝えられたことで、続稿執筆の「自覚を深め」ていくが、こうした同時代状況に鑑みると、「郷土資料」としての性格が強い『北越雪譜』の「雪中火事」への取り込みは、より具体的な「郷土」をテキストに内包する役割を果たし、「懐郷の情を一入そそる」という『雪国』の特性を補強する役割も担ったと考えられる。『北越雪譜』は、「郷土資料」としての性格が強いものであるが、「雪中火事」に取り込む際には、地名が徹底的に回避されている。

ただし、島村が逗留する「雪国の村」の地名の回避は、『北越雪譜』に限らず、『雪国』の全体を通じて貫かれていることでもある。

「郷土資料」を小説のなかに取り込むという方法は、「雪中火事」に先行して書かれた『牧歌』にも見られることである。『牧歌』の語り手の旅人である「作者」は、信州の「郷土」に深く立ち入る努力をすることで、同時代の特色とも言える「郷土を知ることとは日

本を知ることにもなる」という「郷土」を「国家」への帰属意識へと接続していくというスタンスを貫き、その延長上に「日本の故郷」なるものを浮上させることを目指した。しかし、『牧歌』の「作者」はあくまでも旅人であり、固有名詞が与えられている信州という「郷土」を深く捉え、その先に「日本の故郷」なるものを浮上させることは叶わなかった。「雪中火事」における『北越雪譜』の取り込みは、そうした他作品との相互関係のなかで模索されたと考えられる。しかし、『牧歌』の「作者」と同様に、旅人であり、東京生まれの島村は、雪国の郷土を深く捉えることが難しいことから、『雪国』における「雪国の村」の固有名詞は回避されたと考えられる。

そこで、「雪国の村」に反して、固有の地名として言及される東京について分析すると、
とで、「雪国の村」の地名が回避されることで生じる効果について考察した。具体的には、東京というトポスを媒介にして、立場の違いが強調される島村と駒子における東京のあり方を検討した。

駒子は、島村との関係がいよいよ深まりを見せても、島村とはどうにもなれないことを自覚しており、そのつらさを吐露する際に、島村に対して、「東京へ帰んなさい」という言葉を発する。テキストにおいて既に提示されていることではあるが、島村にとっての東京は、あくまでも帰る場所であることが駒子の言葉によって明確にされる。

『雪国』の同時代に執筆された小林秀雄の「故郷を失った文学」には、東京育ちの小林が「西洋の影響」が色濃い東京に生まれ育ったため、「自分には故郷といふものがない」という感覚を示す。島村は、以前、「東京育ち」を理由に親しんできた「日本踊」の研究をしていたものの、自ら「日本踊」とは距離をとり、研究対象を「西洋舞踊」に「鞍替へ」したという人物である。そこには、「東京」で育った島村の精神の「揺らぎ」が確認される。

そうした東京Ⅱ「故郷」と自ら距離をとる島村の逗留先となるのが地名が回避された「雪国の村」である。こうした視点に立つと、地名が回避された「雪国の村」は、非現実的な空間としてではなく、東京に對置する具体的な「郷土」として意味を持つトポスである必要がある。テキストにおいて雪国の固有の地名を回避することは、旅人という立場の島村にもその土地の「郷土」を深く語らせる可能性を残すことである。そして、同時代状況に鑑みると、「郷土」を捉えることは、その「郷土」に「故郷」を創造することを意味する。『牧歌』において旅人の立場である「作者」は、固有名詞が与えられた信

州という具体的な「郷土」には「日本の故郷」なるものを浮かび上がらせることはできなかった。一方、『雪国』における「雪国の村」は地名が回避された空間であるからこそ、東京という故郷に「揺らぎ」をおぼえる旅人島村を寛容に受け止めるトポスとなり得たのだ。

『雪国』には、一四年に亘る執筆期間があり、本章で検討した同時代のコンテキストは、そのごく一部である。従って、『雪国』に内包された同時代のコンテキストについては、さらに検討する余地を多分に残していると考えられる。本章は、「雪中火事」に取り込まれた『北越雪譜』の置かれていた同時代状況の検討を出発点として、『雪国』を捉え直し、そのうえで、地名を回避すること、旅人という立場の島村にとっても「雪国の村」に「故郷」を創造する可能性について論じたものである。

1 川端のノーベル文学賞が決定した翌日の「朝日新聞」（一九六八年一〇月一八日）では「スウェーデン王立アカデミーのエステルリンク前常任事務局長は十七日、ノーベル文学賞授賞者の氏名発表にさいし、慣例に反して川端氏についてなんの説明も加えず、アカデミーの授賞理由のほか代表作として「雪国」「千羽鶴」「古都」の三作品の題名をあげたにすぎなかった」とある。

2 三浦卓「非現実的な見方」の困難——川端康成・創元社版『雪国』をめぐる——」（『近代文学合同研究会論集』二〇一三年一月）では、「重松清さんと読む 百年読書会」（『朝日新聞』二〇〇九年二月二七日）を挙げて『雪国』が「〈冒頭は知られているが最後まで読まれたことがない名作ランキング〉の上位常連」であることを紹介したうえで、「知名度ほどには読まれていないのもまた事実」である点を指摘している。

3 国際交流基金データベース「Japanese Literature in Translation Search」
https://www.jpfl.go.jp/JF_Content/InformationSearchService を参照（閲覧日：二〇二〇年九月一四日）したところ、『雪国』は、少なくとも三七の言語に翻訳されている。

4 『雪国』はこれまで一九五七年豊田四郎監督作品（東宝）と一九六五年大庭秀雄監督作品（松竹）の二度映画化されている。

5 川端康成「あとがき」（『決定版 雪国』創元社、一九四八年二月）には、「『雪国』が愛読されるにつれて、場所やモデルを見たがる物好きもあり、温泉宿の宣伝にまで使はれ

るやうになつた」とある。

6 林武志『『雪国』研究史』（『川端康成作品研究史』教育出版センター、一九八四年二月）、岩田光子編『近代文学研究叢書22』川端康成『雪国』作品論集成ⅠⅢ（大空社、一九九六年十一月）などが挙げられる。

7 片山倫太郎『『雪国』研究史』（片山倫太郎編『川端康成作品論集成 第四卷『雪国』』（おうふう、二〇一一年二月）では、これまでの『雪国』論の論点を「語りの構造分析／島村その他の形象と存在性／象徴としての自然／話型と伝統／作品の構造／文章、文体／映画との連関／構想にまつわる実証研究」の八つに整理している。片山は、『雪国』が「日本近代文学を代表」する「メルクマール」として注目され、さまざまな視点から「研究論文」が量産されているものの「異なるアプローチからの成果が連関付けられ、統合される気運が未だ乏しいのも事実」というように、『雪国』研究における問題点を指摘している。

8 二〇〇八年以降の『雪国』の研究動向については、川端康成学会（旧川端文学研究会）の年報、川端文学研究会編『川端文学への視界24』（銀の鈴社、二〇〇九年六月）／川端康成学会編『川端文学への視界35』（叡知の海出版、二〇二〇年七月）所収の「川端康成研究展望」及び「川端康成研究文献目録」を参照した。なお、二〇一一年に学会の名称が川端文学研究会から川端康成学会へと変更され、二〇一八年に年報の出版元も銀の鈴社から叡知の海出版へ変更された。

9 この点については、序章で述べたため、本章で詳細は割愛する。

10 注2に同じ。

11 仁平政人「『旅行』する言葉、「山歩き」する身体——川端康成『雪国』論序説——」

（『日本文学』二〇一七年六月）

12 中村光夫「川端康成論（3）——好色について」（『文学界』一九五七年九月、後「川端康成論Ⅰ」と改題して『《論考》川端康成研究』筑摩書房、一九七八年四月）

13 竹内清己「日本文学としての『雪国』——空間システムと伝統様式——」（長谷川泉、

平山三男編『《解釈と鑑賞別冊》川端康成「雪国」60周年』至文堂、一九九八年三月）

14 杉井和子「『帚木三帖』と『雪国』——川端康成の描く別離と死——」（千葉俊二編

『《講座源氏物語研究第6巻》近代文学における源氏物語』おうふう、二〇〇七年八月）

15 大久保喬樹「日本回帰する自然（Ⅰ）」（『論集』東京女子大学紀要、一九九五年九月、後「日本回帰する自然（Ⅰ）——昭和十年前後——」と改題して『森羅変容 近代日本文

学と自然』小沢書店、一九九六年十二月)

16 田村嘉勝「『雪国』に求めた「日本の故郷」——竹内清己氏の発表にヒントを得て

——」(長谷川泉、平山三男編「『解釈と鑑賞別冊』川端康成「雪国」60周年」至文堂、一九九八年三月)

17 注11に同じ。

18 「雪国の村」に特定の地名は与えられていないが、平山三男編『川端康成『雪国』湯沢事典』(湯沢町教育委員会、一九九七年四月)などの実証研究から、「雪国の村」は越後湯沢であることが定説となっている。また川端も「雪国」の場所は越後の湯沢温泉である」(「あとがき」『雪国』岩波文庫、一九五二年十二月)と述べている。

19 野坂昭雄『『雪国』における映像と女性との関わりについて』(『山口国文』二〇〇三年三月)

20 山田利一「観光と文学 文学作品からたどる観光の歴史」(『岐阜市立女子短期大学研究紀要』二〇一二年三月)

21 川端康成「あとがき」(定本『雪国』牧羊社、一九七一年八月)には、定本においては、「加筆、改竄、削除などは避け」、長期間の執筆によって生じた「用字、仮名づかひなどに多少の差異が生じたのを、この版でなるべく統一した」とある。論者も『決定版 雪国』と定本の校合作業を行ったところ、川端の言葉の通り、『決定版 雪国』から定本にいたる内容に、変化は確認されなかった。

22 川端康成「あとがき」(『決定版 雪国』創元社、一九四八年十二月)

23 平山三男は、一連の実証研究「『雪国』の虚と実——「雪中火事」の新資料報告——」

(「解釈」一九七七年一月)や、注18『川端康成『雪国』湯沢事典』において、川端が越後湯沢滞在中の一九三五年一〇月二二日午後七時四〇分に発生した「有限会社 湯澤乾繭場 劇場旭座」の火事を目撃したことで、『雪国』に火事の場面を描く構想が起きたことを論じている。また、川端も一九三五年一〇月二三日付当時「改造」の編集者だった水島治男宛書簡に「雪に埋れた活動小屋の火事で幕を閉ぢようかと、昨夜火事(繭の乾燥場に活動写真あつて焼きました。)を見て思ひつきました」と書いている。(引用は『川端康成全集 補巻二巻』新潮社、一九八四年五月に拠る)

24 市島謙吉「五 北越雪譜の出版さるゝまで」(『随筆春城六種』早稲田大学出版部、一九二七年八月)では、牧之について次のように紹介されている。

鈴木牧之は天保の末頃まで在世した人で、生地 of 越後南魚沼郡は郷人一般の知る如

く雪で名高い北越の中にも特に雪の深い土地で、若しも越後に就て問はんとすれば、此地方の人をして答へしむるが最も適任といはねばならぬ。牧之はたま／＼斯うした雪深い中に生れた。そして家には相当の資産も有し、又幼少から文芸に志があつて詩も賦する、狂歌も詠ずる、俳句も作れば画もかくといふ、多才多芸の人であつた。

なお、『北越雪譜』が刊行された際の事情について、相馬御風『北越雪譜』とその著者『砂に坐して語る』厚生閣、一九三四年四月）は、「此の書は前後両編とも山東京伝の弟京山の名を補修者としてつらね、挿絵はその子京水が牧之のに筆を入れたり、又自ら新たに画いたりしたものである」と、牧之単独の著作ではないことが説明されている。

25 注 24 市島謙吉「五 北越雪譜の出版さるゝまで」には、『北越雪譜』が出版に至るまでの紆余曲折が次のように説明されている。

なんでも牧之がこの志【引用者注…『北越雪譜』出版の志】を起し、そして宿志を達する迄には、少なくとも三十年の長年月を要したと聞いてゐる。京伝——馬琴——京山を経て、兎も角前篇の脱稿出版されたのが牧之六十七歳の時であるから、如何にも永い歳月を費したもので、一の著述をするにしても当時はなか／＼容易ではなかつた消息が、これ【引用者注…牧之と京山の往復書簡】によつても察せらるゝ。

市島によれば、牧之からの依頼は、京伝、馬琴以外にも岡田玉山、鈴木芙蓉にもなされたが、結果的には京山、京水親子の協力を得た。また、「著作に経験なき牧之は、京伝の如き文名を世に馳せてゐる著作家に囑し、此に材料を与へて代筆を乞ひ、江湖に其書を流布しよう」と謀つた」というように、当初依頼した京伝から馬琴に至るまで、資料提供のうえで、代筆を依頼していた。

26 注 24 市島謙吉「五 北越雪譜の出版さるゝまで」に同じ。

27 注 24 市島謙吉「五 北越雪譜の出版さるゝまで」に同じ。

28 鈴木卯三郎「鈴木牧之の遺稿——『北越雪譜』——」（『読書感興』一九三六年四月）

29 注 28 に同じ。

30 「新刊紹介」（『山と溪谷』一九三六年七月）

31 「新風土記叢書」については、紅野敏郎「『新風土記叢書』とその周辺」（『文学』一九八三年一〇月）、山口浩行「旅人が見る故郷——風土記としての『津軽』」（『日本近代文学』二〇〇二年一〇月）、高橋孝次『明石』と『津軽』——新風土記叢書の「郷土」（大原祐治編「日本文学と故郷／郷土（二〇一三～二〇一五年度）千葉大学大学院人文社会科学研究プロジェクト報告書 第二九七集」（二〇一六年二月）を参照した。また、

「新風土記叢書」が出版される契機となった和辻哲郎『風土 人間学的考察』（岩波書店、一九三五年九月）も参照した。

32 「新風土記叢書」広告文（『東京朝日新聞』一九三六年三月二日）

33 川端康成「信濃の話」（『文学界』一九三七年一〇月）

34 『牧歌』に取り込まれた信州の「郷土文献」については、田村嘉勝「川端康成「牧歌」と信地御巡幸」（『言文』一九九二年一月）、田村嘉勝「川端康成「牧歌」と信地郷土文献——郷土文献の作品化——」（『言文』一九九五年二月）を参照した。

35 成田龍一『「故郷」という物語——都市空間の中の歴史学——』（吉川弘文館、一九九八年七月）、郷土研究会編『郷土——表象と実践——』（嵯峨野書院、二〇〇三年六月）、伊藤純一郎『増補 郷土教育運動の研究』（思想閣出版、二〇〇八年五月）等を参照した。

36 大原祐治「裂罅としての郷土／幻視される故郷（下）——川端康成「牧歌」について——」（『学習院高等科紀要』二〇〇六年七月、後「第三章 裂罅としての故郷／幻視される故郷——柳田國男と川端康成における「信州」——」と改題して『文学的記憶・一九四〇年前後——昭和期文学と戦争の記憶』翰林書房、二〇〇六年十一月）

37 川端康成「あとがき」（『雪国』岩波文庫、一九五二年十二月）

38 酒本麟吾「『北越雪譜』の郷土」（『旅』一九三九年十二月）

39 湧田佑「川端文学への新視点——「雪国」は「北越雪譜」のパロディである」（『すばる』一九八四年六月）

40 高橋有恒「湧田佑氏の「川端文学への新視点」について——「雪国」と「北越雪譜」——」（川端文学研究会編『川端文学への視界』教育出版センター、一九八五年一月）

41 北原保雄『『雪国』の文章・続』（『日本語論』一九九四年一〇月、後『青葉は青いか』大修館書店、一九九七年二月）

42 河村清一郎「『雪国』と「北越雪譜」」（『明治大学人文科学研究紀要』一九六九年二月）また、河村は「『雪中火事』と「天の河」——「雪国」・結末の改稿をめぐって——」（『金城国文』一九六五年一月）においても「『雪中火事』と「北越雪譜」の関係性について論じている。

43 上田渡『『雪国』——物語の構造化をこえて——』（長谷川泉、平山三男編（『解釈と鑑賞別冊』川端康成「雪国」60周年）至文堂、一九九八年三月）

44 「雪中火事」の島村が「縮の産地」から戻った後の部分（初出二九六頁一二行目から）については、駒子との短い会話が連ねられ、少ない字数で改行がなされることから、前半

部分の『北越雪譜』の取り込みは、行数以上に多量な印象を受ける。

45 Iは『北越雪譜初編卷之上』『胎内潜』、IIは『北越雪譜初編卷之上』『雪意』、IIIは『北越雪譜初編卷之中』『織婦』の内容が「雪中火事」の本文に取り込まれている。

46 注15に同じ。

47 注12に同じ。

48 たつみ都志「川端康成「雪国」におけるトポス——日常からの脱却——」（昭和文学研究）一九九五年二月）

49 注48に同じ。

50 須藤宏明『『雪国』における空間論——「越後湯沢」という地名の拒否をめぐって

——」（長谷川泉、平山三男編「〈解釈と鑑賞別冊〉川端康成「雪国」60周年」至文堂、一九九八年三月、後「越後湯沢という地名拒否——『雪国』——」と改題して『疎外論——日本近代文学に表れた疎外者の研究——』おうふう、二〇〇二年三月）

51 金井景子「川端康成の郷土幻想——『牧歌』をめぐる一考察」（『媒』一九八四年一〇月）

52 注48に同じ。

* 「新稿」（日本近代文学館蔵「肉筆原稿」）の所在については、平山三男氏にご教授を賜った。厚く御礼申し上げます。

『北越雪譜』、「雪中火事」、「雪国抄」 本文対照表

「北越雪譜」	「雪中火事」	「雪国抄」
雪中に糸となし、雪中に織り、雪水に洒ぎ、雪中に曬す。雪ありて縮あり、されば越後縮は雪と人と氣力相半して名産の名あり。魚沼郡の雪は縮の親といふべし。(初編卷之中「續繪」)	雪のなかで糸をつくり、雪のなかで織り、雪の水に洗ひ、雪の上に晒す。續み始めてから織り終るまで、すべては雪のなかであつた。雪ありて縮あり、雪は縮の親といふべしと、昔の人も本に書いてゐる。	雪のなかで糸をつくり、雪のなかで織り、雪の水に洗ひ、雪の上に晒す。續み始めてから織り終るまで、すべては雪のなかであつた。雪ありて縮あり、雪は縮の親といふべしと、昔の人も本に書いてゐる。
市場とてちぢみの市あるは、まへにいへる堀の内十日町小千谷塩沢の四ヶ所也。初市を里言にすだれあきといふ。雪がこひの簾の明をいふ也、四月のはじめに有。堀の内よりはじむ、次に小千谷、次に十日町、次に塩沢、いづれも三日づゝ間を置いてあり。年によりて一定ならず右四ヶ所の外には市場なし。十日町には三都呉服問屋の定宿ありて縮をこゝに買。市日には遠近の村々より男女をいはず所持のちぢみに名所を記したる紙札をつけて市場に持より、その品を買人に見せて売買の値段定れば鑑符をわたし、その市はてゝ金に換ふ。およそ半年あまり縮の事に辛苦したるは此初市の為なれば、縮売はさら也、こゝに群るもの人の波をうたせ、足々を踏れ、肩々を磨る。万の品々もこゝに店をかまへ物を売る。遠く来りたるものは宿をもとむるもあれば、家毎に人つどひ、香具師の看物業売の弁舌、人の足をとゞめて錐を立てき所もあらぬやう也。此初市の日は繁花の地の梟饒にもをさく劣ず。右にいふ四度の市をはりてのちも	雪がこひの簾をあけて、雪解の春のころ、昔は縮の初市が立つた^マいふ。はるばる縮を買ひに来る三都の呉服問屋の定宿さへあつたし、娘達が半年あまり、丹精こめて縮を織り上げたのもこの初市のためだから、遠近の村里の男女が寄り集まつて来て、見世物や物売りの店も並び、繁華な町の祭の日のやうな賑はひだつた。縮には名と所を書いた紙札をつけて、その出来栄えを一番二番といふ風に品定めた。どこのだれが織つた縮は初市でいくらに売れた、よほど手があがつたなどと評判の立つのが誉れで、そのために嫁にほしいと言はれる娘もあつた。値段よりも名を争ふので手間を惜まなかつた。市に縮を持つて行くのは雪のなから運命の春をもとめて行くやうなものであつたらうか。	雪がこひの簾をあけて、雪解の春のころ、昔は縮の初市が立つたといふ。はるばる縮を買ひに来る三都の呉服問屋の定宿さへあつたし、娘達が半年の丹精で織り上げたのもこの初市のためだから、遠近の村里の男女が寄り集まつて来て、見世物や物賣の店も並び町の祭のやうに賑はつたといふ。縮には織子の名と所を書いた紙札をつけて、その出来栄えを一番二番といふ風に品定めた。

「北越雪譜」	「雪中火事」	「雪国抄」
在々より毎日問屋へ来りてちぢみをうる、又ちぢみ仲買のものが在々いたりてもかふ也、六月十五日迄を夏ちぢみといひ十七日より翌年の初市までを冬ちぢみといふ。縮精疎の位を一番二番といふ。価の高下およそは定あれども、その年々によりてすこしづゝのたがひあり。市の日にその相場年の氣運につれて自然さだまる。相場よければ三ばんのちぢみ二ばんにのぼり、二ばんは一ばんに位す。前にもいへるごとくちぢみは手間賃を論ぜざるものゆゑ、誰がおりたるちぢみは初市に何程に売たり、よほど手があがりたりなどいはるゝを誉とし、或はその技によりて娶にもらはんといはるゝ娘もあれば、利を次にして名を争ふ。 このゆゑに市にちぢみを持ゆくは兵士の戦場にむかふがごとし。さてちぢみの相場は大やうは穀相場におなじうして事は前後す。年凶なれば穀は上り縮は下る。年豊なれば縮は上り穀は下る。豊凶の万物に係る事此一を以て知るべし。されば万年豊年をいのらざらめや。(初編卷之中「縮の市」)	縮の産地では嫁を選ぶにも機織りの技量が第一で器量は二の次としたといふ。子供のうちに織り習ひ、およそ十五六から二十四五までの女の若さでなければ品のいい縮は出来なかつた。年を取つては機面のつやが失はれた。縮の価ひは安いものだが、	嫁選びにもなつた。子供のうちに織り習つて、さうして十五六から二十四五までの女の若さでなければ、品のいい縮は出来なかつた。年を取つては機面のつやが失れた。娘達は指折りの織子の数に入らうとしてわざを磨いただらうし、旧暦の十月から糸を読み始め

「北越雪譜」	「雪中火事」	「雪国抄」
工を好せず、老に臨では綺面に光沢なくして品質くだりて見ゆ。貴重品の専用はさら也、極品の詭物は其品に能熟なる上手をえらび、何方の誰々と指にをらるゝゆゑ、そのかずには入らばやとて各々技を励む事也。かゝる辛苦は僅の価の為に他人にする辛苦也。(初編卷之中「織婦」)	どこの誰それと指を折られる織子の数に入らうとして娘達はわざを磨くのであつた。旧暦の十月から糸を績み初めて明る年の二月半ばに晒し終るといふ風に、深い雪のなかでほかにすることもない月日の手仕事だから尚念を入れて、製品には愛着もこもつたであらう。	て明る年の二月半に晒し終るといふ風に、ほかにすることも無い雪ごもりの月日の手仕事だから念を入れ、製品には愛着もこもつたらう。
縮は右村里の婦女らが雪中に籠り居る間の手業也。およそは来年売べきちぢみをことしの十月より糸をうみはじめて次の年二月なかばに晒しをはる。白縮はうち見たる所はおやすきやうなれば、たゞ人は文あるものほどにはおもはざれども、手練はよく見ゆるもの也。村々の婦女たちがちぢみに丹精を尽す事なかゝゝ小冊には尽しがたし。(初編卷之中「縮の種類」)		
ひとゝせある村の娘、はじめて上々のちぢみをあつらへられしゆゑ大によろこび、金匁を論ぜず、ことさらに手際をみせて名をとらばやとて、績はじめより人の手をからず、丹精の日数を歴て見事に織おろしたるを、さらしやより母が持きたりしときゝて、娘ははやく見たく物をしかけたるをもちおきてひらき見れば、いかにして匆ほどなる煤いろの暈あるをみて、母さまいかにせんなかなしやとて縮を顔にあてゝ哭倒れけるが、これより発狂となり、さまゝの浪言をのゝしりて家内を狂ひはし	ある村の娘がはじめて上々の縮をあつらへられたので、今度こそ手際を見せたいものと丹精してみごとに織りおろしたが、母親が晒屋から受け取つて来てくれたのを見ると、どうしたところか一文銭ほどの大きさに煤色のしみがついてゐた。娘は縮に顔をあてて泣き伏した。そしてそのまま気が狂つた。さういふこともあつたと伝へられる。	削除

「北越雪譜」 るを見て、両親娘が丹精したる心の内をおもひやりて哭になきけり。見る人々もあはれがりてみな袖をぬらしけるとぞ。友人なにがしがものがたりせり。(初編卷之中「織婦の発狂」)		
糸に作るにも座を定め体を囲位る事績におなじ。縷綸その道具その手術その次第の順、その名に呼物許多種々あり、繁細の事を詳にせんはくどくしければ言ず。そもくうみはじむるよりおりをはるまでの手作すべ雪中に在、上品に用ふる処の毛よりも細き糸を綴兆舒疾してあつかふ事、雪中に籠り居る天然の湿氣を得ざれば為し難し。湿氣を失へば糸折る事あり。をれしところ力より断る事あり、是故に上品の糸をあつかふ所は強き火氣を近付ず、時により織るに後て二月の半にいたり、暖氣を得て雪中の湿氣薄き時は大なる鉢やうの物に雪を盛て機の前に置、その湿氣をかりて織る事もあり。(初編卷之中「縷綸」)	「雪中火事」 また機織り場を神聖なところとしたのも自然である。縮を用ゐる麻を績むにはその座を定めにおいて、姿勢を正し、呼吸に合して手を働かせた。だらしないやり方では心もしづまらぬから糸に細い太いが出来る。糸に絡むのもやはり同じやうに座を清めてかかるのであつた。上等の縮につかふ毛よりも細い糸は家を埋めるやうな雪の天然の湿氣のなかでないと縮めたり伸したりするのに折れる恐れがあつた。いい糸をあつかふ時は強い火氣を近づけなかつた。織りおかれて春暖のために雪の湿氣が薄れてからは、鉢などに雪を盛つて機の前に置くこともあつた。	
貴重専用の縮をおるには、家の辺りにつもりし雪をもその心して掘すて、住居の内にてなるたけ烟の入らぬ明りもよき一間をよくく清め、あたらしき筵をしきならべ四方に注連をひきわたし、その中央に機を建る、是を御機屋と唱へて神の在がごとく畏尊ひ、織人の外他人を入れず、織女は別火を食し、御機にかゝる時は衣服をあらため、塩垢離をとり、盥漱ぎことかく	高貴の御用の縮を織るには、家のうちで煙の入らぬ一間を選んでよく清め、新しい筵を敷きつめ、四方に注連を引き渡して、中央に機を立てる。これを御機屋と言つて、そこに神靈が宿るかのやうに尊いものとした。織子のほかの人を入れない。織子は別火の食事をする。毎日御機にかかる時は衣服を改め、塩垢離を取り、手を洗ひ口で漱いで、身を清める。つきのけがれを忌	削除

「北越雪譜」	「雪中火事」	「雪国抄」
く身を清む、日毎にかくのごとし。紅潮をいむ事は勿論也。他の娘らなど今日は誰どの、御機屋を拝にまゐるなどやうにいふ也。至極上手の女にあらざれば、此おはたやを建る事なければ、他の婦女らがこれを羨事、比論ば階下にありて昇殿の位をうらやむがごとし。(初編巻之中「御機屋」)	むのは無論であつた。よほど上手な織子でないとこの御機屋を立てることは出来ぬのだから、よその娘達は羨みもし敬ひもして、今日はだれその御機屋を拝みに行くなどと言つたものだ。	
神は敬ふによりて威をますとは宜なる哉。かりそめの物も守りとして敬ひ信ずれば霊ある事空しからず、人のはきすてたる草鞋だに衆人の信ぜしによりて、のち／＼は草鞋天王とて祭りし事、五雑組に見えたり。ましてや神々しきを敬ば霊威ある冥々の天道は人の知を以てはかりしるべからず。こゝに或村の娘、例の御はたやにありて心を澄し、おはたをおりて居たりしに、傍の窓をほと／＼と音なふものあり、心にそれとおぼへあれば立よりてひらき見るに、はたして心を通す男也。をりふし人目の関もなかりしかば、心うれしくおはたやをいでゝ家の後にいたり、窓のもとに立たる男を將て木小屋に入ぬ。やがて娘の母皈り来りおはたやに娘のをらぬを見ていぶかり、しきりにその名をよびければ、かの木小屋にきゝつて遽驚き男は逃去り、娘は心顛倒して身を穢たるも打忘れおはたやにかけ入り、そのまゝ御機によりて織んとしけるに、倏急仰向に倒れ落、血を吐て絶	ある村の娘がこの御機屋で心を澄ませて織つてゐるところへ、ほとほと窓を叩く者があつた。娘はそれとおぼえがあるので窓をあけてみると、やはり心を通はせてゐる男だつた。ちやうど人目のないのを幸ひに、御機屋を出て、窓の下に立つてゐた男を木小屋へ連れこんだ。そのうちに娘の母親が歸つて来て、御機屋に娘の見えないのをいぶかりながら、しきりと名を呼んだ。木小屋のなかで聞きつけて男はあわてて逃げた。娘は驚きのあまり身を汚したこともうつかりして御機屋に駆けこむと、そのまま機に上つて織り続けようとしたところが、あつと仰向けに倒れ落ちて、血を吐いて氣を失つた。母親が抱き起してみると、息があるといふだけで死んだやうだつた。医者を呼んで手当をしてもしるしがなく、二親も近所の人達もただ泣くばかりで手をつかねて死を待つよりしかたがなかつた。そこへ一人の若い男が来て、さも恥しうに人のうしろに座ると、なにか言ひか	削除

「北越雪譜」	「雪中火事」	「雪国抄」
入けり。母此状態を見て大にお どろきはしりよりて助け起し、 まづ御はたやよりいだしさま ぐにいたはりしが、氣息ある のみにて死したるがごとし。父 は同村のなにがしが家に在しを よびかへし、医をまねきて薬な ど与へしがそのしるしもなく、 両親はさら也、あたりよりはせ よりしものども、娘の側に在て なみださしぐみつゝ手を束て死 を俟のみ也。しかるにひとりの 男来り、さも恥らふさまにて人 の後に座し欲言としていはず、 頭を低て泪をおとしけり、人々 これをみれば同村の某が次男也 けり。此男やがて膝をすゝめ娘 の母に對ひ声をひそめていふや う、今はなにをかつゝみ申さん、 我は娘御と二世の約束をしたる もの也。さきのほど人なきを見 てむすめごを誘ひいだししに、 おん身のかへり給ひしこゑにお それわれは逃さりしが、むすめ ごがかゝる災ありしと聞てつら く思ふに、穢したる身をわす れて畏きおん機にかゝり給ひた る御罰ならん。これもと我なし たる罪なれば、人はしらずとも 余処目に見んはそらおそろしく、 命をかけて契りたることばにも たがへりとおもふから、むすめ ごの命に代りて神に御罰を詫候 はん。さるにても此まゝにてむ すめごが死給はゞ我が命をめさ れ候へ、こゝにをられ候人々こ そよき証人なれといひつゝ、赤 裸になりて髪をもさばき井のも	かつては言ひ出しかねた様子で、 うなだれながら涙を落してゐた。 見ると同じ村のなにがしの次男 であつた。やがてこの男は娘の 母親にあひゞきのことを白状し て、娘の不思議なわづらひもけ がれた身で御機にかかつた神罰 だらうが、もとは自分の罪だか ら、娘の代りにわが命を召し給 へと言ふなり素つ裸になつて井 戸端へ走り出して水を浴び、雪 の上に跪いて、なにか唱へなが ら祈つた。寒気が肌を貫く真冬 のことで今にも凍え死しさうな ありさまだつた。見てゐた人達 もみなそれに誘ひこまれて水を 浴びて祈つた。娘は目が覚めた やうに起き上つて母を呼んだ。 娘は年も十七だつたから、その 男と婚礼させて、ほどなく男の 子を産んだといふ。そんなこと もあつたと昔の本に書いてある。	

「北越雪譜」	「雪中火事」	「雪国抄」
とにはしり寄したゝかに水を浴、 雪の上に蹲居てなにやらん唱へ ていのりけり。時しも寒氣肌を 貫くをりふしなれば、凍も死す べきありさま也。ふたおやはさ ら也人々もはじめてそれと知り、 実にもとてみなくおなじく水 を浴ていのりけり。神明かの男 が実心を憐み、人々のいのりを も納受まゝけん、かの娘目の 覚たるがごとくおきあがり母を よびければ、衆奇異のおもひを なし、むすめの側にあつまりて いにくといふ。娘はかゝるや うを見てこはなに事ぞといふ。 母はうれしくしかくのよしい ひければ、むすめは御機により しとは覚えしがのちはしらずと いふ。母はあまりのうれしさに かの男にもあはせんとせしに、 いつか立さりけん見えずなりぬ。 かくて娘四五日はなやみしがや がて常並の身になりけり。歳も 十七なればかねて簪をと思ひを りたるをりからなれば、かのし のび男が実心に愛て早速媒の橋 をわたし、姻礼もめでたくとゝ のひて程なく男子をまうけけり。 其家今猶栄ゆ。神の御罰が夫婦 の縁となりしも奇偶といふべし。 こは我が幼かりし時の事也き、 筆のついでに記して御機屋の靈 威ある事をわかふどにしらしむ。 あなかしこ。畏べし、慎むべし。		
(初編卷之中「御機屋の靈威」) 曬屋とてこれをもみ業とす、 又おりたる家にてさらすもあれ ど稀なり。さらしやはその家の	さて織り上げた縮を織子の家 で晒すといふことは少く、たい がい晒屋に出す。旧の一月から	晒屋は昔からあつた。織子が銘 々の家で晒すといふことは少く、 たいがい晒屋に出した。白縮は織

「北越雪譜」	「雪中火事」	「雪国抄」
辺又程よき所を見立、そこに仮小屋を造り物をも置、また休息の処とす。晒人は男女ともうちまじり身を清める事織女の如くす。さらすは正月より二月中の為業也。此頃ははまだ田も圃も平一面の雪の上なれば、たはたの上をさらし場とするもあり、日の内にさらし場を踏へしたる処あれば、手頃の板に柄をつけたる物にて雪の上を平かにならしおく也。かくせざれば夜の間に凍つきてふみへしたる処そのまゝ岩のごとくになるゆゑ也。晒場には一点の塵もあらせざれば、白砂の塩浜のごとし。さて白ちゞみはおろしたるまゝをさらす、余のちゞみは糸につくりたるを拐にかけてさらす。その拐とは細き丸竹を三四尺ほどの弓になしてその弦に糸をかけ、拐ながら竿にかけわたしてさらす也。白ちゞみは平地の雪の上にもさらし、又高さ三尺あまり長さは布ほどになし、横幅は勝手にまかせ土手のやうに雪にてつくり、その上にちゞみをのばしならべてさらすもあり、かくせざれば狗など蹈越てちゞみをけがすゆゑ也。こゝに拐をならべてさらしもする也。みなその場所の便利にしたがふゆゑ一定ならず。さて晒しやうは縮にもあれ糸にもあれ、一夜灰汁に浸しおき、明の朝幾度も水に洗ひ絞りあげてまへのごとくさらす也。貴重尊用の縮をさらすはこれらとはおなじくせず、	二月にかけて晒すので、一面の雪に蔽はれた、田や畑の上を晒し場とすることもある。白縮は織りおろしてから晒し、ほかの縮は糸につくつたのを拐^{かせ}にかけて晒す。特に白縮は雪の上へぢかにのばして晒す。これには男も女にまじつて働くが身を清めてかかるのは織女の場合も同じだ。また高貴の御用は晒し場も別にする。足跡などで晒し場の雪にくぼみが出来るとその日のうちに平らかにならしておく。雪は夜なかに凍みついて、くぼみのついたまま岩のやうになつてしまふからだ。 縮^マしろ糸にしる、夜通し灰汁に浸しておいたのを明る朝幾度も水に洗つて絞りあげて、また前のやうに晒すのである。これを幾日も繰り返す。さうして白縮をいよいよ晒し終らうとするところへ、朝日が出てあかあかとさす景色はたとへるものがなく、暖国の人に見せたいと、昔の人は書いてゐる。	りおろしてから晒し、色のある縮は糸につくつたのを拐にかけて晒す。白縮は雪へぢかにのばして晒す。旧の一月から二月にかけて晒すので、田や畑を埋めつくした雪の上を晒場にすることもあるといふ。 布にしる糸にしる、夜通し灰汁に浸しておいたのを明る朝幾度も水で洗つては絞り上げて晒す。これを幾日も繰り返すのだつた。さうして白縮をいよいよ晒し終らうとするところへ朝日が出てあかあかとさす景色はたとへるものがなく、暖国の人に見せたいと、昔の人も書いてゐる。

「北越雪譜」	「雪中火事」	「雪国抄」
別にさらし場をもうけ、よろづに心を用ひてさらす事御機をおるに同じ。我国にては地中の水気雪のために発動ざるにや、雪中には雨まれ也、春はことさら也。それゆゑ件のごとく日にさらす晴のつゞく事あり。さて灰汁にひたしてはさらす事、毎日おなじ事をなして幾日を歴て白々をなしたるのちさらしをはる。やがてさらしをはらんとする白ちゞみをさらすをりから、朝日のあかくと昇て玉屑平上に列たる水晶白布に紅映したる景色、ものにたとへがたし。かゝる光景は雪にまれなる暖国の風雅人に見せたくぞおもはるゝ。(初編卷之中「縮を曬す」)	駅を下りてしばらく歩くと昔の宿場らしい町通があつた。家々の庇を長く張り出して、その端の柱は道路に立ち並んでゐた。雪のあひだは庇の下が往来となるわけだらう。	しばらく歩くと昔の宿場らしい町通に出た。
宿場と唱る所は家の前に庇を長くのばして架る、大小の人家すべてかくのごとし。雪中はさら也、平日も往来とす。これによりて雪中の街は用なきが如くなれば、人家の雪をこゝに積。次第に重て両側の家の間に雪の堤を築たるが如し。こゝに於て所々に雪の洞をひらき、庇より庇に通ふ、これを里言に胎内潜といふ、又間夫ともいふ。(初編卷之上「胎内潜」)	両側の家から道の真中へ雪を積むので、雪の堤をとどころくり抜いて、道の向ふ側へ渡る。胎内潜といふ。	隣から隣へ連なつてゐるから、屋根の雪は道の真中へおろすより捨場がない。実際は大屋根から道の雪の堤へ投げ上げるのだ。向う側へ渡るのには雪の堤をとどころくりぬいてトンネルをつくる。胎内くぐりとこの地方ではいふらしい。
我国の雪意は暖国に均しからず。およそ九月の半より霜を置	木の葉が落ちて風がめつかり冷たくなるころ、寒々とした曇	この国では木の葉が落ちて風が冷くなるころ、寒々と曇り日が続

「北越雪譜」	「雪中火事」	「雪国抄」
て寒気次第に烈く、九月の末に至ば殺風肌を侵て冬枯の諸木葉を落し、天色曇として日の光を看ざる事連日は雪の意也。天氣朦朧たる事数日にして遠近の高山に白を点じて雪を觀せしむ。これを里言に嶽廻といふ。又海ある所は海鳴り、山ふかき処は山なる、遠雷の如し。これを里言に胴鳴りといふ。これを見これを聞て、雪の遠からざるをしる。(初編卷之上「雪意」)	り日が続く。雪催ひである。そのあひだに遠近の高い山が白く染まる。これを嶽廻りといふ。また海のあるところは、海が鳴り、山の深いところは山が鳴る。遠雷のやうである。これを胴鳴りといふ。嶽廻りを見、胴鳴りを聞いて、雪が遠くないことを知る。昔の本にさう書かれてゐるのを島村は思ひ出した。	く。雪催ひである。遠近の高い山が白くなる。これを嶽廻りといふ。また海のあるところは海が鳴り、山の深いところは山が鳴る。遠雷のやうである。これを胴鳴りといふ。嶽廻りを見、胴鳴りを聞いて、雪が遠くないことを知る。昔の本にさう書かれてゐるのを島村は思ひ出した。
かゝる辛苦は僅の価の為に他人にする辛苦也。唐の秦韜玉が村女の詩に、最恨むは年々金線を圧て他人の為に嫁の衣装を作るといひしは宜なる哉々々。 凡織物を專業とする所にては、織人を抱へおきて織するを利とす。縮においては別に无き一国の名産なれども、織婦を抱へおきておらする家なし。これいかんとなれば縮を一端になすまでに人の手を勞する事かぞへ尽しがたし。なか／＼手間に賃錢を当て算量事にはあらず、雪中に籠居婦女等が手を空くせざるのみの活業也。(初編卷之中「織婦」)	昔の人も唐の秦韜玉の村女の詩などを引いて、他人を装はすためにわづかな価で辛苦すると本に書いてゐる。機織り女を抱へて織らせる家がないのは、一反の縮を織るまでにずゐぶん手がかかつて手間賃を計算すると合はないからだといふ。錢勘定は別としても、雪の底で手仕事に根をつめた女達の暮しは、その製作品の縮のやうに明るくはなかつたにちがひない。	雪の底で手仕事に根をつめた織子達の暮しは、その製作品の縮のやうに爽かで明るいものではなかつた。さう思はれるに十分な古町の印象だつた。縮のことを書いた昔の本にも唐の秦韜玉の詩などが引かれてゐるが、機織女を抱へてまで織らせる家がなかつたのは、一反の縮を織るのにずゐぶん手間がかかつて、錢勘定では合はないからだといふ。
上品に用ふる処の毛よりも細き糸を綴兆舒疾してあつかふ事、雪中に籠り居る天然の湿氣を得ざれば為し難し。湿氣を失へば糸折る事あり。をれしところ力よわり断る事あり、是故に上品の糸をあつかふ所は強き火氣を近付ず、時により織るに後て二一	毛より細い麻糸は天然の雪の湿氣がないとあつかひにくく、陰冷の時がよいといふ。寒中に織つた麻が暑中に着て肌に涼しいのは陰陽の自然といふ。	毛よりも細い麻糸は天然の雪の湿氣がないとあつかひにくく、陰冷の季節がよいのださうで、寒中に織つた麻が暑中に着て涼しいのは陰陽の自然だといふ言ひ方を昔の人はしてゐる。

「北越雪譜」	「雪中火事」	「雪国抄」
月の半にいたり、暖氣を得て雪中の湿氣薄き時は大なる鉢やうの物に雪を盛て機の前に置、その湿氣をかりて織る事もあり。これらの事に付て熟思に、絹を織には蚕の糸ゆゑ陽熱を好、布を織には麻の糸ゆゑ陰冷を好む。さて絹は寒に用ひて温ならしめ、布は暑に用て冷かならしむ。是は天然に陰陽の氣運に属する所ならんか。（初編卷之中「縷綸」）		

＊『北越雪譜』の本文は、鈴木牧之編撰、京山人百樹刪定、岡田武松校訂『北越雪譜』（岩波書店、一九三六年一月）の六一刷（岩波文庫、二〇〇六年六月）を参照した。

＊表の作成にあたり、河村清一郎「雪国」と「北越雪譜」（「明治大学人文科学研究所紀要」一九六九年二月）を参考とした。

終章

第一節 各章の結論

第一章 交錯する「日本の故郷」と「神話」——『牧歌』——

『牧歌』は、「作者」の「神話」体験と知子から発せられる「日本の故郷」が物語の中心となっている。知子の「日本の故郷を書かうとお思ひになつて、奥信濃までいらしてゐるんですね」という言葉から、「作者」が信州を旅する意味が明確にされる。つまり、「作者」は、古くからの「神話」が残る戸隠という具体的な「郷土」に「日本の故郷」を見出すことを希求していた。しかし、知子が「私は故郷を出て行かうとしてゐすのに……」と応え、自分も兄の出征した「支那」へ行きたいと希望することで、「作者」は戸隠にもはや「日本の故郷」なるものを見出すことが困難であることを突きつけられる。「故郷が書けたらいいが、まあ、あの故郷も、この故郷も、ただ素通りして歩いて、死ぬことでせうね。つくづく、あさましい根性ですよ」と言う「作者」は、旅人である自分が具体的な「郷土」から「故郷」なるものを見出す不可能性を悟る。そうした状況なのか、知子は、「二・四事件」によつて自らが育った「故郷」で生きづらくなった兄が、戦地に行つて「みんな一緒」になつてこそ、生まれ育った「故郷」とは異なる共時的な空間に「日本の故郷」なるものを創造する可能性に言及する。この知子の「日本の故郷」に対する発想は、「神話」から連なる時間的なつながりがを重視し、戸隠という具体的な「郷土」に「日本の故郷」を見出すことを希求していた「作者」の発想とは全く異なるものだった。こうして、時間的なつながりを重視し、「神話」が残る戸隠に「日本の故郷」を見出せなくなつてしまつた「作者」は、知子の言う「みんな一緒」になることで創造される「日本の故郷」を追い求めるようになる。このようなことから、『牧歌』第三章は「ふるさとのうた」とされるが、『牧歌』が未完の小説であることから推測されるように、この試みが『牧歌』で達成されているとは言い難い。

川端は、『牧歌』と並行して、同じ信州でありながら、戸隠とは異なる性格を持つ軽井沢を舞台とした小説『高原』を執筆している。『高原』におけるコスモポリタニズムを思わせる構想は、『牧歌』において川端がなし得ることができず、知子によつて言及された「みんな一緒」になることが可能な空間を書こうとした結果であると考えられる。川端は、『牧歌』の執筆を通して、旅人の立場の人間が具体的な「郷土」に「日本の故郷」を見出すことの不可能性を悟つたのではないだろうか。こうした経験から、生まれ育った「故郷」とは異なる場所であっても、知子のいう「みんな一緒」になることのできる空間の創造を

『高原』において試みたのではないだろうか。それは、知子によって示された「日本の故郷」は、実際に生まれ育った土地でなくても成立しうる、ということを川端自身が体現しようとした試みであったと考えられる。

第二章 〈幻想〉の「^{ユウトピア}軽井沢」で見る〈日本〉——『高原』における日中戦争下の〈知

識人〉／血のゆくえ——

『高原』は、一度結婚に失敗した三二歳の須田が日中戦争勃発直後の軽井沢で、姉の紹介で出会った洋子との縁談の日々を過ごした「一夏」を描いた連作小説である。本章では、須田が〈知識人〉としてあることから、日中戦争下の〈知識人〉たちが「日本的なもの」を志向し、〈西洋〉を内面化することで、〈日本〉を捉え直していこうとする同時代状況に着目した。

そこで、須田が「人種が雑居する」軽井沢というトposにおいて、どのように〈西洋人〉を眼差していたのかという点と、テキストに表出する血にまつわる議論について検討を行った。

須田は、「白人種崇拜の滓」が残っていることを自認しているが、軽井沢で共に過ごす〈西洋人〉を根底から受け入れることはない。しかし、アメリカの大学で唯一日本に関する「東洋史」を講ずることができたライシヤワア博士が上海租界で没した際には、〈西洋〉に〈日本〉を正しく伝える存在であった博士の死に強い衝撃を受けるという矛盾も見受けられる。須田は、「四十ヶ国程の人種が雑居」する軽井沢に、恒久的な「ユウトピア」を「空想」し、「二世」や「混血児」にとつて、「人種が雑居する」軽井沢は、「故郷」になり得るトposであるかもしれないと「夢想」する。しかし、平和に見える軽井沢にも、同時代の世界状況を反映した摩擦は生じており、やはりそれも〈幻想〉であるとの結論に至る。

『高原』の全編を通じて、須田は、血をめぐる議論に関心を寄せる。そもそも『高原』には、一貫して須田の結婚問題が描かれており、日中戦争下において「第一乙」である須田の「種の保存」への願望が表出している。しかし、見合い相手の洋子が結婚の返事を保留したことで、須田自身の「種の保存」Ⅱ〈日本〉の血を継承をする願望は破れたことが示唆される。

須田は、洋子の友人である日仏混血の令嬢に出会い、令嬢の「神聖な美しさ」をあくまでも「日本風」な特徴から抽出する。その一方で、「洋子を自分と時代のちがふ、手のと

どきかねる令嬢のやうに思つてゐたのなど、滑稽なことだつた」と思うほどに、〈日本〉の血を有しながらも、混血として目の前に存在する令嬢を遠く次元の異なるの存在として位置づける。

以上のように、第二章では、日中戦争勃発直後の「四十ヶ国程の人種が雑居」する軽井沢に身を置く須田の〈西洋〉を見つめる眼差しと、血にまつわる議論に着目してきた。この両者の分析から共通して見えてくることは、須田が〈西洋〉を内面化したうえで、新たに〈日本〉を捉え直す志向に終始していることである。『高原』には、「コスモポリタニズム」とは逆向きの、同時代の知識人たちと共通の課題を模索する〈知識人〉須田の姿が刻まれている。

第三章 「言葉」を与えるということ——『美しい旅』——

『美しい旅』では、小説が発表された同時代において「日本語」を与えることがどのような意味を持つのかという点について検討を行った。

『美しい旅』の正編は、当初盲聾の少女の花子を中心とした内容であつた。花子は、「文字」や「言葉」を持たなくても触覚や振動などで感じる独自の確立された世界で生きていたが、達男から「文字」を教えられたことで、自己表現やコミュニケーションが可能となった。元々コミュニケーションツールを持たない花子が「言葉」や「文字」を習得することは、花子の人生を豊かにする側面もあつた。「少女の友」の読者からは、花子が読話や口話を覚え、学校に通い、月岡先生のもとで成長していくことを望む投稿も多く見られた。しかし、花子に「言葉」や「文字」を教える達男の行為が時局にコミットし、〈皇国少年〉としての達男に「言葉」＝「日本語」を教授される花子は、「日本」の〈皇国の民〉としてコントロールが可能な存在にされてしまった。

続編においては、花子の存在は後退し、月岡先生が満州に旅立つたことで、満州の盲教育や聾教育の紹介を通して、日本と満州がいかにかかわるかという問題が小説のなかに浮上する。続編の後半では、月岡先生が日本に戻る船上で読む「綴方日本」が登場する。これは、各民族の言葉を奪つたうえで、五族の子どもたちに「日本語」の使用を強要して書かせたものである。つまり、この「綴方日本」は、『美しい旅』が正編、続編を通して「日本語」を与えることで、〈皇国の民〉を育てる物語であることを開示する存在であるといえる。しかし、もともと「言葉」を持たない盲聾の少女の花子に「言葉」を与えることと、各民族の「言葉」を奪つたうえで満州の子どもたちに「日本語」を植え付ける意味は、

全く異なるはずである。こうした両者の背景の違いが重視されることなく、同時代において「日本語」を解することの重要性が描かれているところに『美しい旅』の問題がある。つまり、正編を積極的に「教育小説」と捉えて評価し、続編を捨象することは、正編のなかに既に表出している盲聾啞の少女である花子をも〈皇国の民〉とすべく「日本語」を与える、という観点を見落とすことになる。

同時代の文脈において『美しい旅』を捉えるうえで、ヘレン・ケラーの存在を忘れてはならない。ヘレン・ケラーは、一九三七年に初来日を果たしている。川端は、その直前に刊行された『ヘレン・ケラー全集』を「幾度も読んだ」ことを明かしている。ヘレン・ケラーは、初来日の際に満州へも渡っている。後世の目から見ると異質とも見える『美しい旅』における盲聾啞の少女花子と満州の接続は、「三重苦の聖女」とよばれたヘレン・ケラーによって既に示されていた。同時代においてヘレン・ケラーの「言葉」が持つ力の大さは、来日の際に行った講演活動や、新聞報道などによって共有されていた。盲聾啞の少女の花子が「言葉」＝「日本語」を獲得し、〈皇国の民〉として「言葉」を発していくことは、ヘレン・ケラーと同等、それ以上の影響力を持つ存在が「日本」に誕生することも意味する。

『美しい旅』は、全編を通じて、「教育小説」に留まらない当時のイデオロギーを内包したものだと捉えられるべきである。

第四章 〈旅行〉から〈旅〉への遡行——『旅への誘ひ』——

『旅への誘ひ』は、これまで『東海道』に吸収された小説として評価されてきたが、固有の価値を見出すことに主眼を置いて論を展開した。

「箱根・熱海の章」では「新女苑」の読者の関心に添う形で新婚旅行をめぐるコンテキストを多分に取り込み、観光案内さながらの旅行が展開される様相を確認した。先行論において重要視されてきた「東海道の章」においては、『東海道』との接点は、両小説に登場する市河明子のみに収斂されるのではなく、『旅への誘ひ』と『東海道』の両テクストの古典の取り込み方が、岡本かの子の『東海道五十三次』の方法を引き継いでいる点を指摘した。具体的には、小説に東海道にまつわる古典を挿入することで、読者に東海道を想起させるという『東海道五十三次』の方法が『旅への誘ひ』にも同様に見られることを明らかにした。

『旅への誘ひ』は、川端が「新女苑」というメディアと読者層である若い女性を明確に

意識して書いた小説である。川端の『『女性文章』序』（川端康成編『女性文章』満州文芸春秋社、一九四五年一月）からは、「婦人公論」と「新女苑」の小品文の選評を通じて、女性の文章から「民族と国土の魂」なるものを読み取ろうとする姿勢がうかがわれる。若い女性の読者を想定し、新婚旅行、観光案内のごとく書かれた「箱根・熱海の章」、「蒲郡の章」と「東海道の章」には、一貫して東海道という街道にフォーカスしているという共通点がある。「箱根・熱海の章」と「蒲郡の章」の章では、「新女苑」の読者である若い女性たちの興味に応え、新婚旅行や観光にまつわるコンテキストを多分に織り込み、物語が展開された。一方、「東海道の章」では、古典文学を小説に取り込むことで、東海道は、実際に訪れたことがなくても（訪れたことがない者でも）その土地を想起しうる特性をもつトポスであることが示されている。『旅への誘ひ』執筆時点において川端は、「新女苑」の若い女性の読者に配慮する姿勢を見せながら、古典文学が集積する東海道は「民族と国土の魂」が存在するトポスであることをまずは示したのではないだろうか。こうした点からも明らかのように、『旅への誘ひ』は、川端がメディアの特性を活かしたうえで、読者である若い女性たちに明確なメッセージを発していた小説といえる。これまで『東海道』に従属するものとして捉えられてきた『旅への誘ひ』は、川端が希求する女性と土地との結びつきを考える際においても、独自の価値を持つ小説といえるだろう。

第五章 「外地」メディアと小説——『東海道』の射程——

『東海道』は、戦時下における「満洲日日新聞」に発表された小説であるが、直接的に国威を発揚するような表現や戦争を讃美するような文言は見受けられない。

しかし、川端が中国東北地方最大規模の日本語新聞「満洲日日新聞」という初出メディアの性質と読者層を理解したうえで、大量の古典を引用し、「日本の国土に対する愛情を確かめる」ための小説を発表したこと、同時代の他の作家と同様の観点から、結果的に国威発揚に利用されていた源実朝の「万葉ぶり」を評価する記述がテキストに散見されることを見逃すことはできない。

加えて、「地方」や「郷土」という言葉を頻出させ、東海道を往還した「古典にあらはれた、日本人の旅の心」を描くことで、満州にいる読者に「内地」という土地への「懐郷」を促す「日本の国土に対する愛情」が明確に書き込まれている小説といえる。

これらのことを考えると、われわれは、「反戦文学」という評価には収斂されない『東海道』というテキストのなかに刻み込まれた同時代性に直面せずにはいけない。

『東海道』は総じて時代と共鳴しながら織り成されている。それは、この小説が時局への迎合か抵抗かという事後的な価値基準によって容易に裁断することのできないような複雑さを帯びている。

初出メディアが「満洲日日新聞」であることに着目し、想定される満洲の読者に、川端が「日本の国土に対する愛情」をどのような形で発信していたかについて、テキストにおける「内地」や「郷土」の話題と、源実朝に見られる「万葉ぶり」を評価する同時代の文壇の状況、古典を取り込む意味を検討することで明らかにした。川端は、『東海道』において、「外地」＝満洲の読者に向けて、古典にあらわれた東海道を往還した人物たちを通して、「日本の国土に対する愛情」を想起させる小説を書いたのではないだろうか。

第六章 『雪国』——『北越雪譜』の位相と地名回避の効果——

『雪国』を同時代の文脈のなかで読むことを意識し、一度単行本になった旧版『雪国』（創元社、一九三七年六月）の続稿「雪中火事」（「公論」一九四〇年十二月）に取り込まれた『北越雪譜』が置かれていた同時代状況や、『雪国』の主要な舞台である「雪国の村」の地名が回避された効果について検討した。

「雪中火事」には、多分に『北越雪譜』の内容が取り込まれた。『北越雪譜』が旧版『雪国』刊行の前年、一九三六年一月に初めて岩波文庫として刊行された際には、当時の「郷土文化研究熱」の高まりによって、「歓迎」を受けたという状況がある。

こうした「歓迎」は、一九三〇年代の「郷土教育」、「郷土研究」が盛んに行われていた同時代状況と明確に付合する。この時期の「郷土教育」、「郷土研究」には、個人の「故郷」をある程度の共同性を持つ「郷土」に置き換えたうえで、「郷土」を「国家」への帰属意識へと接続していくという特徴が見られる。川端は、旧版『雪国』を読んだ読者から、『雪国』が「懐郷の情を一入そる」小説であることを伝えられ、続稿執筆の「自覚を深め」ていく。同時代状況に鑑みると、「郷土資料」としての性格が強い『北越雪譜』の「雪中火事」への取り込みは、「懐郷の情を一入そる」という『雪国』の特性を補強する役割も担ったと考えられる。しかし、ここで留意すべきことは、地名が散見される『北越雪譜』を「雪中火事」に取り込む際にも、川端は、地名を回避したことである。この地名の回避は、『北越雪譜』に限らず、『雪国』全体を通じて貫かれていることでもある。

『雪国』において「雪国の村」の地名が回避されたことは、小説に描かれた空間Ⅱ「雪国の村」がどこであるかを読者が自由に想起することを可能にした。川端のもとに寄せられた「日本の国の外で日本人に読まれた時に懐郷の情を一入そる」という点においても、読者は、地名が回避されることで、東京（中央）から離れた地方（周縁）のどこかに「雪国の村」を設定することになり、各々で「雪国の村」に断片的であつたとしてもそれぞれの「故郷」を想起しながら小説を読むことが可能になったとも捉えられる。「郷土資料」を小説のなかに取り込むという方法は、「雪中火事」に先行して書かれた『牧歌』にも見られる。『牧歌』の語り手で、旅人である「作者」は、信州の「郷土」に深く立ち入る努力をすることで、同時代の特色である「郷土」を「国家」への帰属意識へ接続していくというスタンスを貫き、その延長上に「日本の故郷」なるものを浮上させることを目指した。しかし、『牧歌』の「作者」はあくまでも旅人であることから、固有名詞が与えられている信州という「郷土」を深く捉え、その先に「日本の故郷」なるものを浮上させることは叶わなかった。「雪中火事」における地名を回避したうえでの『北越雪譜』の取り込みは、そうした他作品との相互関係のなかで模索されたと考えられる。そこで、「雪国の村」に反して、固有の地名として言及される東京について分析し、「雪国の村」の地名が回避されることで生じる効果について明らかにした。具体的には、東京というトポスを媒介にして、立場の違いが強調される島村と駒子のあり方を検討した。駒子は、島村とはどうにもなれないことを自覚しており、そのつらさを吐露する際に、島村に対して、「東京へ帰んなさい」という言葉を発する。テキストにおいて既に提示されていることではあるが、島村にとって東京は、あくまでも帰る場所であることが駒子の言葉によって明確にされる。

『雪国』と同時代に執筆された小林秀雄の「故郷を失つた文学」には、東京育ちの小林が「西洋の影響」が色濃い東京に生まれ育つたため、「自分には故郷といふものがない」という感覚を示す。島村は、以前、「東京育ち」を理由に親しんできた「日本踊」の研究をしていたものの、自ら「日本踊」とは距離をとり、研究対象を「西洋舞踊」に「鞍替へ」したという人物である。そこには、「東京」で育つた島村の精神の「揺らぎ」が確認される。

そうした東京Ⅱ「故郷」と自ら距離をとる島村の逗留先となるのが地名が回避された「雪国の村」である。こうした視点に立つと、地名が回避された「雪国の村」は、非現

実的な空間としてではなく、東京に対置する具体的な「郷土」として意味を持つトポスである必要がある。テキストにおいて「雪国の村」の固有の地名を回避することは、旅人という立場の島村にもその土地の「郷土」を深く語らせる可能性を残すことである。そして、同時代状況に鑑みると、「郷土」を捉えることは、その「郷土」に「故郷」を創造することを意味する。『牧歌』において旅人の「作者」は、固有名詞が与えられた信州という具体的な「郷土」には「日本の故郷」なるものを浮かび上がらせることは叶わなかった。一方、『雪国』における「雪国の村」は地名が回避された空間であるからこそ、東京という故郷に「揺らぎ」をおぼえる旅人島村を寛容に受け止めるトポスとなり得たのだ。

第二節 本論文の結論

本論文は、『雪国』生成期間にあたる一九三〇・四〇年代（詳細には、一九三五年一月から一九四八年一二月）に発表された『雪国』を含む六編の小説を分析することで、川端文学がいかに時代に呼応しながら生成されてきたかについて、明らかにすることを課題とした。こうした課題を設定し、六編の小説を分析してなによりも指摘しなければならぬことは、戦時下にあたる一九三〇・四〇年代の川端文学は、同時代のコンテキストを色濃く内包しているということである。従って、『雪国』を特別視し、同時代性を捨象したうえで、この期間を『雪国』に集約して語る評価は適切とは言えない。次に指摘すべきことは、戦時下という非常時においても、発表メディアと読者層を明確に意識しながら、発表媒体に即した筆致で小説を発表していく川端の姿勢である。

本論文は、副題を「一九三〇・四〇年代『雪国』生成期間における同時代との交点」としているが、この副題は、これまで『雪国』に収斂して語られてきた『雪国』生成期間」を批判的に捉え直し、この期間に並行して執筆された他の小説を分析したうえで、その相互関係を検討し、捉え直す試みとしてある。よって、これまで脱歴史化して語られてきた『雪国』をもう一度同時代の文脈に戻し、第一章から第五章までに検討した小説についても同時代の文脈のなかで読むことを心がけた。

こうした背景には、序章でも確認したように、川端には長らく「日本的」で「伝統的」な美の体現者であるという作家像が定着し、具体的なテキスト分析がなされないままに研

究史が構成されてきたという重大な問題が存在している。ノーベル賞受賞や、旺盛な社会活動、メディアによる日本の象徴としての作家像の形成など、川端康成は、現に神格化されてきた。特に、『雪国』生成期間にあたる戦時下は、川端の文学的営為が『雪国』に収斂して語られるということが続いて来た。こうして展開してきた川端研究は、同時期に発表されたその他の小説を忘却してきた。

本論文は、川端が『雪国』生成期間に発表した全ての小説を検討したものではないし、戦争にまつわる諸々の課題を小説に内包した川端の責任を追及するものではない。ここでもっとも指摘しておきたいことは、序章でも示した通り、本論文で検討した『雪国』生成期間に並行して執筆された五編の小説では、旅人の立場の語り手が「郷土」や「国土」という土地と、そこに生きる人々を糾合し、同時代的な視点から、「日本」なるものを見出すとする試みが展開されることである。こうした共通点をもつ小説群は、多分に同時代のコンテクストを内包しており、戦後に形作られた「日本的」で「伝統的」な美の体現者としての川端の作家像が固定化するなかで埋もれていった。一九三〇・四〇年代を実際に生きていた川端が、小説に同時代の課題を内包することは、当然のことである。本論文においては、同時代の文脈のなかで六編の小説を検討し、戦時下を生きた川端が小説において行っていた試みを提示することができたと思われる。

一九三〇年代特有の背景として、個々の「故郷」をある程度の共同性を持つ「郷土」に置き換え、さらにその「郷土」を「国家」への帰属意識へと接続していくという同時代状況があることは本論のなかで確認した。川端の『雪国』生成期間に執筆された小説では、こうした試みを「旅人」がその土地にまつわる先行する文献（郷土資料や古典文学）を小説に取り入れることで実践していた。先行する文献を重視し、「郷土」から「日本」のなかにある「故郷」なるものを具現化しようとする試みは、柳田國男の民俗学に代表される郷土研究の方法とはおのずから異なるものであった。

川端の独自の方法として、「旅人」によって「郷土」研究がなされることを述べたが、本論文で取り上げた六編の小説は、程度の差はあれど、いずれもそうした側面を有している。

『牧歌』で固有の「郷土」である信州戸隠に、「神話」の時代から通じる「日本の故郷」を求めたことも、『高原』の軽井沢（知識人）の須田に（西洋）を内面化することを通じて（日本）を追究させたことも、全てこの時代を生きる川端から生じた課題である。『美しい旅』においては、正編と続編が「言葉」＝「日本語」を与えるという一点で結ばれて

いることを見逃すことができない。そこでは、もともと言葉を持たない盲聾啞の少女花子と、持っていた言葉を奪われたうえで「日本語」を植え付けられた満州の子どものたちの背景の違いが考慮されることなく、「日本語」を与えて〈皇国の民〉を育てることの重要性が語られる。言うまでもないが、ここにも「日本語」を与えることで、〈皇国の民〉を育てるという同時代の課題が内包されている。『旅への誘ひ』では、「新女苑」の読者層を考慮したうえで書かれた新婚旅行案内ともいえる記述が、明子の読む東海道にまつわる本を通して古典への言及に接続した。古典文学が集積する東海道は、実際に訪れたことがなくとも（訪れたことがない者でも）その土地を想起しうる特徴をもつトポスであることが若い女性の読者たちに示された。『東海道』は、これまで川端の古典受容の枠組みで検討されてきた小説である。本論文においては、初出メディアを考慮したことで、川端は満州にいる日本人に、東海道を往還した旅人が残した古典文学を通して「日本の国土に対する愛情」を伝えていたことを明らかにした。その際、当時、国威発揚のために利用されていた源実朝を評価する記述があることは見落とすことができない。『東海道』のような刊本に収録されづらい未整理なテキストであっても、初出を参照し、発表メディアやその読者層を考慮することで、川端が小説を通じて同時代に生きる読者に何を提示してきたのか、ということが浮上してきた。『雪国』は、「日本的」や「伝統的」な小説と捉えられてきたにもかかわらず、同時代の文脈という意味では脱歴史化して評価されてきたらしいがある。そこで、並行して執筆されていた小説と同様に、「郷土資料」の『北越雪譜』が小説に取り込まれた点に注目した。その際、地名を回避する効果について論じ、地名を回避することは、「郷土」に深く立ち入ることが困難な東京から来た旅人の島村にもその土地の「郷土」を語らせる可能性を残すことを指摘した。同時代の文脈のなかで考えると、地名が回避されながらも「郷土」が示された「雪国の村」は、断片的であっても「故郷」を看取できる東京に対置するトポスであることを明らかにした。

こうした分析から再度指摘したいことは、川端の『雪国』生成期間は、『雪国』のみに収斂して語ることを許されるものではないということだ。従って、一つ一つの小説から「日本的」で「伝統的」な美の体现者だけには、到底収まらない同時代の文脈を小説に取り込む作家川端康成の姿勢を読み取るべきである。『東海道』のテキストにあるように、「人間は、その人が生きた時代以外の、なにものでもない」のである。そうした視点を明確に持ちながら小説を読むことで、初めて西洋から与えられた評価を更新することが可能になると考えられる。

第三節 今後の課題

本論文は、戦中、戦後に跨がる『雪国』生成期間の小説を検討することを課題としてきたが、戦後に発表された小説については、検討することが及ばなかった。特に川端の古典への傾倒がはつきりと表れてくる「反橋」三部作と呼ばれる「反橋」（「別冊風雪」一九四八年一〇月）、「しぐれ」（「文芸往来」一九四九年一月）、「住吉」（「個性」一九四九年四月）の検討や、鹿児島県鹿屋に海軍報道班員として赴いた経験を基に執筆された「生命の樹」（「婦人文庫」一九四六年七月）の検討など、『雪国』生成期間を捉える際の課題はまだ残っている。

本論文をまとめる過程で、川端の戦時下を検討するにあたり、『名人』¹の存在も考慮するべきであるとあらためて考えるところである。吉田秀樹に次のような指摘がある。

戦中から敗戦、戦後へかけて多くの年月を要した作品として、『雪国』と『名人』はよく併挙される。ただ、『名人』は『雪国』に比べ、戦時下の様相が一段と厳しさを増してから小説として着手され、戦中と戦後の時間的距離がある程度出たところで推敲が再開されたという点で、川端に於ける戦中と戦後の差あるいは連続性を考察しようとする場合、『雪国』より測定し易い手掛かりを残しているとも言えそうである。

²

『名人』は、少なくとも四回の書き直しが施されており、「四十一」章版、「四十七」章版という二種類のテキストが存在している。こうした複雑な成立過程と、度重なる推敲、『雪国』と同時代に執筆されているという共通項からも、『名人』を検討することも必要である³。

また、移りゆく時代の文壇のなかで、川端がどのような働きを求められ、それに応えようとしていたかなど検討すべき課題は山積している。例えば、『雪国』の執筆を始める前年の一九三四年に、川端は、斎藤実内閣の警保局長松本学が中心となって成立した官民合同の文学団体である文芸懇話会⁴への参加も果たしている。こうした団体への参加に川端がどのような姿勢で臨んでいたかについては、まだ検討の余地があると考えられる。加えて、川端と満州との関わりについても、検討していきたい。

今後何よりも小説を分析することで、川端文学を相対化していくことを目標としながら、研究を進めていきたいと考えている。

1 近藤裕子「名人」（羽鳥徹哉、原善編『川端康成全作品研究事典』勉誠出版、一九九八年六月）によれば、『名人』には、次のような複雑な成立過程がある。

【初出】「名人」成立には、長期にわたる加筆と推敲のプロセスがあり、以下のような複数のプレオリジナルが存在する。「本因坊名人引退碁観戦記」（『東京日日新聞』昭13・7・23〜12・29）の連載後、昭和十五年一月の名人逝去を受け「本因坊秀哉名人」（『囲碁春秋』昭15・8〜10）を連載するが、川端自身の病いにより中断。二年後、新たに書き改めた「名人」を発表（『八雲』第一輯、昭17・8）。続けて、「夕日」（『日本評論』昭18・8、12、昭19・3）を、さらに戦後になって「花」（『世界文芸』昭22・4）と「未亡人」（『改造』昭23・1）を書き継ぐ。これらプレオリジナル「名人」に満足できず、四たび同じテーマに挑んだのが、現行の「名人」連作（「名人」——『新潮』昭26・8、「名人生涯」——『世界』昭27・1、「名人供養」——『世界』昭27・5）。二年後「名人余香」（『世界』昭29・5）が書き継がれた。

【初刊】『呉清源棋談・名人』（文芸春秋新社、昭29・7・10）なお、「八雲」版の「名人」は『哀愁』（細川書店、昭24・12・10）が初刊。

2 吉田秀樹「川端康成、戦中から戦後への創作意識をめぐって——『名人』推敲を一手掛かりに——」（『昭和文学研究』一九八八年七月、後「戦中から戦後への創作意識をめぐって——『名人』『英霊の遺文』『女の手』『哀愁』——」と改題して『川端康成——東京のシルエット』龍書房、二〇一三年一二月）

3 福田淳子「『本因坊名人引退碁観戦記』から小説『名人』へ——川端康成と戦時下における新聞のメディア戦略」（『学苑』二〇一六年二月、後「第七章『本因坊名人引退碁観戦記』から小説『名人』へ——川端康成と戦時下における新聞のメディア戦略」として『川端康成をめぐるアダプテーションの展開——小説・映画・オペラ』フィルムアート社、二〇一八年三月）では、「引退碁観戦記」の掲載が昭和13年、すなわち支那事変当時の新聞というメディアであったことに注目し、引退碁が持つ意味や川端が観戦記を担当することになった経緯など、同時代的な事実関係を整理し、『名人』執筆に至るまでの背景」が考

察されており、参照した。

4 川端と文芸懇話会の関係性については、福田淳子、杵渕由香、堀内京、佐藤翔哉「川端康成文学館所蔵 未発表書簡二通（横光利一宛、文学界宛）をめぐる」（川端康成学会編『川端文学への視界30』銀の鈴社、二〇一五年六月）において、「二、文芸懇話会」を部分執筆したが、川端が文芸懇話会にいかに関与していたかについては検討の余地が多分にあり、今後の課題としたい。なお、最新の文芸懇話会に関する研究として、村山龍『〈宮澤賢治〉という現象 戦時へ向かう一九三〇年代の文学運動』（花鳥社、二〇一九年五月）を参照した。

参考文献一覧

序章

【書籍】

- 三枝康高『川端康成』（有信堂、一九六八年一月）
- 川嶋至『川端康成の世界』（講談社、一九六九年一〇月）
- 中村光夫『中村光夫全集 第六卷』（筑摩書房、一九七二年二月）
- 川端康成『天授の子』（新潮社、一九七五年六月）
- 中村光夫『《論考》 川端康成』（筑摩書房、一九七八年四月）
- 三七巻本『川端康成全集 第一〇巻』（新潮社、一九八〇年四月）
- 三七巻本『川端康成全集 第二三巻』（新潮社、一九八一年二月）
- 三七巻本『川端康成全集 第六巻』（新潮社、一九八一年四月）
- 三七巻本『川端康成全集 第一巻』（新潮社、一九八一年一〇月）
- 三七巻本『川端康成全集 第二〇巻』（新潮社、一九八一年二月）
- 三七巻本『川端康成全集 第三五巻』（新潮社、一九八三年二月）
- 柄谷行人編著『近代日本の批評・昭和篇「上」』（福武書店、一九九〇年一二月）
- 長谷川泉『長谷川泉著作選⑤ 川端康成論考』（明治書院、一九九一年一月）
- 羽鳥徹哉『《研究選書55》 作家川端の展開』（教育出版センター、一九九三年三月）
- 平山三男編著『遺稿『雪国抄』影印本文と注釈・論考』（至文堂一九九三年九月）
- 羽鳥徹哉、原善編『川端康成全作品研究事典』（勉誠出版、一九九八年六月）
- 原善『川端康成——その遠近法』（大修館書店、一九九九年四月）
- ハルオ・シラネ、鈴木登美編『創造された古典——カノン形成・国民国家・日本文学』（新曜社、一九九九年四月）
- 田村充正、馬場重行、原善編『《川端文学の世界5》 その思想』（勉誠出版、一九九九年五月）
- 川端文学研究会編『《論集》 川端康成——掌の小説』（おうふう、二〇〇一年三月）
- 田村充正『《雪国》は小説なのか——比較文学試論——』（中央公論新社、二〇〇二年六月）
- 大久保喬樹『川端康成——美しい日本の私——』（ミネルヴァ書房、二〇〇四年四月）
- 仁平政人『川端康成の方法——二〇世紀モダニズムと「日本」言説の構成——』（東北大

学出版会、二〇一一年九月)

馬場重行編『川端康成作品論集成 第七卷『千羽鶴』(おうふう、二〇一二年一月)

田村充正編『川端康成作品論集成 第八卷『山の音』(おうふう、二〇一三年一月)

李聖傑『(早稲田大学モノグラフ¹⁰⁶) 川端康成の「魔界」に関する研究——その生成を中心に——』(早稲田大学出版部、二〇一四年三月)

小谷野敦、深澤晴美編『川端康成詳細年譜』(勉誠出版、二〇一六年八月)

坂井セシル、紅野謙介、十重田裕一、マイケル・ボードアシム、和田博文編『川端康成スタディーズ 21世紀に読み継ぐために』(笠間書院、二〇一六年二月)

【新聞、雑誌、論文】

川端康成「あとがき」(『川端康成選集 第九卷』改造社、一九三九年二月)

川端康成「満洲国の文学」(『芸文』一九四四年七月)

川端康成「片岡鉄兵の死」(『新文学』一九四五年三月)

川端康成「島木健作追悼」(『新潮』一九四五年一月)

小田切秀雄「文学における戦争責任の追及」(『新日本文学』一九四六年六月)

川端康成「哀愁」(『社会』一九四七年一〇月)

川端康成「横光利一弔辞」(『人間』一九四八年二月)

川端康成「東京裁判判決の日」(『社会』一九四九年一月)

川端康成「敗戦のころ」(『新潮』一九五五年八月)

三好行雄「昭和一〇年代の文学——芸術的抵抗の一形式にふれつつ——」(唐木順三ら著

『日本文学講座 第六卷』一九五五年九月)

「川端康成氏にノーベル賞」(『朝日新聞』一九六八年一〇月一八日)

川端康成「美しい日本の私」(『朝日新聞』他一九六八年二月一六日)

中村光夫「川端文学の特質」(『中村光夫全集 第六卷』筑摩書房、一九七二年二月)

田村嘉勝「川端康成の戦争体験——「反橋」三部作から——」(『言文』一九七九年一〇月)

羽鳥徹哉「川端康成と戦争」(『解釈と鑑賞』一九八一年四月)

林武志「川端康成における「戦争」(『解釈と鑑賞』一九八一年四月)

平山三男「「哀愁」論——川端に於ける戦争の意味——」(川端文学研究会編『川端康成研究叢書¹⁰』孤影の哀愁』教育出版センター、一九八一年一〇月)

川端香男里編「年譜」(二七七巻本『川端康成全集 第三五巻』新潮社、一九八三年二月)

佐々木京子「太平洋戦争期における川端康成——肉親ものへの傾倒について——」（『国語論文論集』安田女子大学文学部、一九八五年三月）

柄谷行人「近代日本の批評 昭和前期Ⅰ」（柄谷行人編著『近代日本の批評・昭和篇「上」』福武書店、一九九〇年十二月）

長谷川泉「十五年戦争下の川端康成」（『社会文学』一九九一年七月）

深澤晴美『『新女苑』における川端康成——戦時下の側面』（『和洋九段女子中学校・高等学校紀要』一九九七年三月）

山中正樹「川端康成の戦後・序説——川端康成と敗戦——」（『桜花学園大学研究紀要』一九九九年三月）

野寄勉「戦争観」（田村充正、馬場重行、原善編『『川端文学の世界5』その思想』勉誠出版、一九九九年五月）

田村嘉勝「川端康成と「哀愁」——戦後文学への架橋として——」（『奥羽大学文学部紀要』一九九九年十二月）

鈴木伸一「川端康成の政治観——時局認識に関する一考察——」（『二松』二〇〇〇年三月）

羽鳥徹哉「掌の小説について」（川端文学研究会編『『論集』川端康成——掌の小説』おうふう、二〇〇一年三月）

チャールズ・カベル「戦時期の日本文学——ナショナリズムにおける女性像の構成——」（黄順姫編『20世紀におけるナショナリズム、スポーツ、身体文化 平成12—13年度成果報告書 戦後身体文化における日本・韓国比較研究』国際会議報告書、筑波大学社会科学系、二〇〇一年三月）

山本芳明「特集にあたって」（『文学』二〇〇四年一月）

十重田裕一「つくられる「日本」の作家の肖像——高度経済成長期の川端康成」（『文学』二〇〇四年一月）

山中正樹「『十五年戦争』と作家「川端康成」（覚え書き）——昭和十年代の「作品」を中心に——」（『桜花学園大学人文学部研究紀要』二〇〇五年三月）

三浦卓『『少女の友』のコミュニティと川端康成「美しい旅」——〈障害者〉から〈満洲〉へ——』（『日本近代文学』二〇〇九年五月）

仁平政人「無言のまほりを廻る——川端康成「無言」論——」（『日本文芸論稿』二〇〇九年一月）

長濱拓磨「川端康成「生命の樹」論——戦後文学と聖書」(「キリスト教文学研究」二〇一二年五月)

三浦卓「単行本『哀愁』の構造——川端康成の戦前／戦後再考にむけて」(川端康成学会編『川端文学への視界29』銀の鈴社、二〇一四年六月)

大木ひさよ「川端康成とノーベル文学賞——スウェーデンアカデミー所蔵の選考資料をめぐって——」(「京都語文」二〇一四年一月)

三浦卓「川端康成「生命の樹」と「婦人文庫」という場 かつての「少女の友」読者の戦後」(「文芸研究」二〇一五年十二月)

姜惠彬『川端康成初期作品研究』(筑波大学博士(文学)学位請求論文、二〇一六年三月)

坂井セシル「1川端康成と21世紀文学 カノンの効果をめぐって」(坂井セシル、紅野謙介、十重田裕一、マイケル・ボードラッシュ、和田博文編『川端康成スタディーズ 21世紀に読み継ぐために』笠間書院、二〇一六年十二月)

仁平政人「「旅行」する言葉、「山歩き」する身体——川端康成『雪国』論序説——」(「日本文学」二〇一七年六月)

吉武信彦「ノーベル賞の国際政治学——ノーベル文学賞と日本、1958～1967年の日本人候補に関する基礎的研究(1)——」(「地域政策研究」二〇一九年二月)

向井弘樹「ノーベル賞 日本人受賞者列伝 川端康成の巻——③」(「月刊 VERDA」二〇一九年二月)

待田晋哉「川端康成ノーベル賞受賞秘話」(「中央公論」二〇一九年三月)

第一章 交錯する「日本の」故郷」と「神話」——『牧歌』——

【書籍】

栗岩英治編『戸隠案内』(戸隠神社社中協和会、一九一六年五月)

乙部泉三郎『信濃御巡幸録』(信濃毎日新聞社、一九三三年三月)

信濃教育会編『信濃教育会五十年史』(信濃毎日新聞社、一九三五年五月)

津村信夫『戸隠の絵本』(ぐろりあ・そさえて、一九四〇年一〇月)

川端康成『高原』(甲鳥書林、一九四二年七月)

中野重治『楽しき雑談第二』(筑摩書房、一九四八年二月)

宮沢嘉穂『戸隠譚』(戸隠史説刊行会、一九六四年八月)

川端康成『高原』(甲鳥書房、一九六九年二月)

川端康成『天授の子』（新潮社、一九七五年六月）

三七巻本『川端康成全集 第六巻』（新潮社、一九八一年四月）

長谷川泉『心象幻想——川端文学へのいざない——』（アートプロデュース社、一九八一年四月）

三七巻本『川端康成全集 第三五巻』（新潮社、一九八三年二月）

三七巻本『川端康成全集 補巻二巻』（新潮社、一九八四年五月）

小林芳仁『川端康成の世界——美と仏教と児童文学と——』（双文社出版、一九八五年二月）

兵藤正之助『川端康成論』（春秋社、一九八八年四月）

宇波彰『引用の想像力 新装版』（冬樹社、一九九一年五月）

長谷川泉『〈長谷川泉著作選⑤〉川端康成論考』（明治書院、一九九一年十一月）

竹内清己『堀辰雄と昭和文学』（三弥井書店、一九九二年六月）

羽鳥徹哉『〈研究選書55〉作家川端の展開』（教育出版センター、一九九三年三月）

川俣従道『川端康成と信州』（あすか書房、一九九六年一月）

高橋英夫『神話の森の中で』（小沢書店、一九九七年三月）

成田龍一『「故郷」という物語——都市空間の歴史学——』（吉川弘文堂、一九九八年七月）

長谷川泉『川端康成燦遺映』（至文堂、一九九八年九月）

田村充正、馬場重行、原善編『〈川端文学の世界5〉その思想』（勉誠出版、一九九九年五月）

川端文学研究会編『世界の中の川端文学』（おうふう、一九九九年十一月）

長谷川泉『続川端康成燦遺映』（至文堂、二〇〇〇年五月）

成田龍一、藤井淑禎、安井眞奈美、内田隆三、岩田重則『故郷の喪失と再生』（青弓社、二〇〇〇年五月）

長野県歴史教育者協議会編『満蒙開拓青年義勇軍と信濃教育会』（大月書店、二〇〇〇年十二月）

郷土研究会編『郷土——表象と実践——』（嵯峨野書院、二〇〇三年六月）

川俣従道『哀愁を旅行く人——川端文学の諸相』（ポロンテ、二〇〇六年二月）

大原祐治『文学的記憶・一九四〇年前後——昭和期文学と戦争の記憶』（翰林書房、二〇〇六年十一月）

伊藤純郎『増補 郷土教育運動の研究』（思文閣出版、二〇〇八年五月）

小林信介『人びとはなぜ満州へ渡ったのか——長野県社会運動と移民』（世界思想社、二〇一五年三月）

【新聞、雑誌、論文】

白鳥庫吉「日本民族の由来——郷土研究の出発点——」（『郷土』一九三〇年十一月）

小林秀雄「故郷を失った文学」（『文芸春秋』一九三三年五月）

川端康成「神津牧場行」（『スキート』一九三六年一〇月）

川端康成「平穩温泉だより」（『文学界』一九三六年一二月）

川端康成「作者の言葉」（『婦人公論』一九三七年五月）

中野重治「へわが文芸時評②」合法性と「牧歌」（『東京日日新聞』一九三七年六月二九日）

中野重治「へわが文芸時評③」作家の困難と「謎の日本」（『東京日日新聞』一九三七年六月三〇日）

川端康成「信濃の話」（『文学界』一九三七年一〇月）

川端康成「あとがき」（『川端康成選集 第九卷』改造社、一九三九年一二月）

久保田正文「信濃教育」は何をのこしたか——教育先進県百年のあゆみ——」（『展望』一九六八年六月）

羽鳥一英（徹哉）「昭和十年代文学と川端」（『国文学』一九七〇年二月）

久保田正文「時評 文学」川端康成「牧歌」追想」（『教育』一九七二年六月）

佐伯彰一「解説」（川端康成『天授の子』新潮社、一九七五年六月）

小林芳仁『『牧歌』論』（川端文学研究会編『川端康成研究叢書5』虚実の皮膜』教育出版センター、一九七九年三月）

小林芳仁「『牧歌』所感」（『川端文学研究』一九八〇年一月）

羽鳥徹哉「川端康成と戦争」（『解釈と鑑賞』一九八一年四月）

山森訓「『牧歌』の周辺——川端康成と戸隠——」（『信濃教育』一九八二年九月）

川端香男里編「年譜」（三七七巻本『川端康成全集 第三五巻』新潮社、一九八三年二月）

金井景子「川端康成の郷土幻想——『牧歌』をめぐる一考察」（『媒』一九八四年一〇月）

兵藤正之助「川端康成論——「名人」を中心に——」（『関東学院大学文学部紀要』一九八四年一二月）

原善「牧歌」（『国文学』一九八七年一二月）

長谷川泉「十五年戦争下の川端康成」(『社会文学』一九九一年七月)

田村嘉勝「川端康成「牧歌」と信地御巡幸」(『言文』一九九二年一月)

竹内清己「続・堀辰雄と川端康成——軽井沢時代、戦後——」(川端文学研究会編『川端文学への視界7』教育出版センター、一九九二年六月)

田村嘉勝「川端康成「牧歌」と信地郷土文献——郷土文献の作品化——」(『言文』一九九五年十二月)

田村嘉勝「『雪国』に求めた「日本の故郷」——竹内清己氏の発表にヒントを得て——」(長谷川泉、平山三男編「〈解釈と鑑賞別冊〉川端康成「雪国」60周年」至文堂、一九八八年三月)

長谷川泉「『牧歌』論」(川端文学研究会編『川端文学への視界13』教育出版センター、一九九八年六月)

田村嘉勝「『牧歌』——研究の現在と今後の展開——」(田村充正、馬場重行、原善編『川端文学の世界2』その発展』勉誠出版、一九九九年三月)

深澤晴美「『婦人公論』「中央公論」における川端康成——時代との交点を探って——」(『和洋九段女子中学校・高等学校紀要』一九九九年四月)

川俣従道「教育観」(田村充正、馬場重行、原善編『川端文学の世界5』その思想』勉誠出版、一九九九年五月)

奥村紀美「皇室観」(同右)

高比良直美「故郷観」(同右)

奥出健「国家観」(同右)

三田英彬「自然観」(同右)

黒崎峰孝「宗教観」(同右)

野寄勉「戦争観」(同右)

田村嘉勝「『牧歌』引用資料の虚構化か？」(川端文学研究会編『川端文学への視界14』教育出版センター、一九九九年六月)

川俣従道「『牧歌』の女性像」(川端文学研究会編『川端文学への視界15』グローバルメディア、二〇〇〇年六月)

川俣従道「『牧歌』第三章「ふるさとのうた」」(川端文学研究会編『川端文学への視界18』銀の鈴社、二〇〇三年六月)

山中正樹「『十五年戦争』と作家「川端康成」(覚え書き)——昭和十年代の「作品」を

中心に——」(「桜花学園大学人文学部研究紀要」二〇〇五年三月)

大原祐治「裂罅としての郷土／幻視される故郷(下)——川端康成「牧歌」について——」

(「学習院高等科紀要」二〇〇六年七月)

堀内京「川端康成の信濃——信濃に「故郷」を見る試み——」(「千葉大学大学院人文社

会科学研究科研究プロジェクト報告書 第二九七集」二〇一六年二月)

深澤晴美「川端康成における芭蕉／「雪国」の〈天の河〉再考——川端康成全集未収録文
に触れて——」(「芸術至上主義文芸」二〇一八年十一月)

堀内京「「牧歌」研究史」(羽鳥徹哉、林武志、原善編『川端康成作品研究史集成』鼎書
房、二〇二〇年九月)

第二章 〈幻想〉の「ユウトピア軽井沢」で見る〈日本〉——『高原』における日中戦争下の〈知識

人〉／血のゆくえ——

【書籍】

門屋博『時局とインテリゲンチヤ』(全日本司法保護事業連盟、一九三八年四月)

『川端康成選集 第九卷』(改造社、一九三九年十二月)

川端康成『寝顔』(有光社、一九四一年七月)

川端康成『高原』(甲鳥書林、一九四二年七月)

一六卷本『川端康成全集 第七卷』(新潮社、一九四九年九月)

一〇卷本『川端康成選集 第四卷』(新潮社、一九五六年七月)

トマス・モア(平井正穂訳)『ユートピア』(岩波書店、一九五七年一〇月)

一二卷本『川端康成全集 第四卷』(新潮社、一九六〇年三月)

川端康成『高原』(甲鳥書房、一九六九年二月)

一九卷本『川端康成全集 第四卷』(新潮社、一九六九年十二月)

小川和佑『〈文壇資料〉軽井沢』(講談社、一九八〇年二月)

三七卷本『川端康成学会全集 第六卷』(新潮社、一九八一年四月)

宍戸實『軽井沢別荘史 避暑地百年の歩み』(住まいの図書館出版局、一九八七年六月)

『軽井沢町誌 歴史編(近・現代編)』(軽井沢町誌刊行委員会、一九八八年三月)

竹内清己『堀辰雄と昭和文学』(三弥井書店、一九九二年六月)

羽鳥徹哉『〈研究選書55〉作家川端の展開』(教育出版センター、一九九三年三月)

川端香男里『ユートピアの幻想』(講談社、一九九三年一〇月)

井上謙、神谷忠孝、羽鳥徹哉編『横光利一事典』（おうふう、二〇〇二年一〇月）

河田和子『〈比較社会文化叢書XV〉戦時下の文学と〈日本的なもの〉——横光利一と保田

與重郎——』（花書院、二〇〇九年三月）

小松史生子編『〈コレクション・モダン都市文化第52巻〉軽井沢と避暑』（ゆまに書房、

二〇〇九年一二月）

成田龍一『増補 〈歴史〉はいかに語られるか 一九三〇年代「国民の物語」批判』（筑

摩書房、二〇一〇年三月）

桐山秀樹、吉村祐美『軽井沢という聖地』（NTT出版、二〇一二年五月）

藤島岳、大井清吉、清水寛、津曲裕次、松矢勝宏、北澤清司編『特別支援教育史・人物事

典』（日本図書センター、二〇一五年六月）

松本和也『日中戦争開戦後の文学場 報告／芸術／戦場』（神奈川大学出版会、二〇一八年三月）

五味渕典嗣『プロパガンダの文学 日中戦争下の表現者たち』（共和国、二〇一八年五月）

【新聞、雑誌、論文】

三木清「日本の性格とファシズム」（『中央公論』一九三六年八月）

稻荷山資生「民族協和と混血」（『学徒至誠会編』『学徒至誠会派遣団報告 昭和11年度 満

州篇』学徒至誠会、一九三七年四月）

「家族だけの避暑地／あわたゞし名士連の往来」（『信濃毎日新聞』一九三七年七月一四日）

「通川の保安隊反乱／居留地に相当の死傷／我空再三に亘つて爆撃」（『信濃毎日新聞（夕）』

一九三七年八月一日）

「軽井沢便り／滞在中の名士」（『信濃毎日新聞』一九三七年八月四日）

「支那空軍爆撃開始／両軍猛烈に交戦／我が空軍も出動す」（『信濃毎日新聞』一九三七年八月一五日）

「国際人コンクール／ソ連人は避暑がお嫌ひ？／今年は全世界人が落合ふ」（『信濃毎日新聞』一九三七年八月二六日）

「軽井沢にも憂色 三十九ヶ国の外人挙つて 避難者へ救援の手」（『信濃毎日新聞（第二夕）』一九三七年八月二九日）

大島功「ライシヤワ博士の死」（『文芸春秋』一九三七年一月）

森山啓「本年度の小説」（『文芸』一九三七年一二月）

小林秀雄「満洲の印象」(「改造」一九三九年一月)

川端康成「あとがき」(『川端康成選集 第九巻』改造社、一九三九年十二月)

大森郁之助「「高原」における風土の意味」(「解釈」一九六九年五月)

羽鳥一英(徹哉)「昭和十年代文学と川端」(「国文学」一九七〇年二月)

小川和佑「川端康成における日本と西洋——作品集『高原』を中心に——」(「学苑」一九七五年六月)

小林一郎「「高原」論——時代背景を中心に——」(川端文学研究会編『川端康成研究叢書5』虚実の皮膜』教育出版センター、一九七九年三月)

水上勉「解説」(川端康成『高原』中央公論社、一九八二年八月)

森晴雄「「高原」論——「白扇」と「接吻」——」(川端文学研究会編『川端康成研究叢書補巻』作品論補説総索引ほか』教育出版センター、一九八三年六月)

竹内清己「続・堀辰雄と川端康成——軽井沢時代、戦後——」(川端文学研究会編『川端文学への視界7』教育出版センター、一九九二年六月)

谷口幸代「軽井沢と川端文学——実景と幻影の町——」(羽鳥徹哉編「解釈と鑑賞別冊」川端康成 旅とふるさと」至文堂、一九九九年十一月)

山田吉郎「樹木と精霊の系譜——川端康成「不死」論——」(川端文学研究会編『論集』川端康成——掌の小説』おうふう、二〇〇一年三月)

日置俊次「旅愁」(井上謙、神谷忠孝、羽鳥徹哉編『横光利一事典』おうふう、二〇〇二年一〇月)

小松史生子「軽井沢と避暑」(小松史生子編『コレクション・モダン都市文化第52巻』軽井沢と避暑』ゆまに書房、二〇〇九年十二月)

古矢篤史「横光利一「旅愁」と「日本的なもの」の盧溝橋事件前夜——一九三七年の「文学的日本主義」とその「先験」への問い——」(「昭和文学研究」二〇一二年三月)

松本和也「川端康成「高原」連作の同時代受容分析」(「国語と国文学」二〇一五年四月)
大橋諒也「川端康成研究——同時代における「高原」の様相・軽井沢の時空より——」(「あいち国文」二〇一八年九月)

第三章 「言葉」を与えるということ——『美しい旅』——

【書籍】

ヘレン・ケラー(岩橋武夫、芥川潤訳)『私の生涯(其の一)』(三省堂、一九三六年一

月)

ヘレン・ケラー(岩橋武夫、児玉國之進訳)『私の生涯(其の二)』(三省堂、一九三六年
一二月)

ヘレン・ケラー(岩橋武夫、児玉國之進訳)『私の生涯(其の三)』(三省堂、一九三七年
一月)

ヘレン・ケラー(岩橋武夫、遠藤貞吉、荻野目博道訳)『私の住む世界』(三省堂、一九
三七年二月)

ヘレン・ケラー(岩橋武夫、島史也、荻野目博道訳)『私の宗教』(三省堂、一九三七年
三月)

川端康成『美しい旅』(実業之日本社、一九四二年七月)

大村次信編『満洲国の私たち』(中央公論社、一九四二年一二月)

秋山ちえ子『お勝手口からごめんなさい』(春陽堂書店、一九五七年一〇月)

岩橋英行『社会福祉法人 日本ライトハウス四十年史』(社会福祉法人 日本ライトハウ
ス、一九六二年一〇月)

三七巻本『川端康成全集 第二〇巻』(新潮社、一九八一年一二月)

川端秀子『川端康成とともに』(新潮社、一九八三年四月)

兵藤正之助『川端康成論』(春秋社、一九八八年四月)

川村湊『異郷の昭和文学』(岩波書店、一九九〇年一〇月)

徐敏民『戦前中国における日本語教育』(エムティ出版、一九九六年一月)

川村湊『文学から見る「満洲」「五族協和」の夢と現実』(吉川弘文館、一九九八年一二
月)

満洲国通信社編『満洲国現勢 康德六年版』(クレス出版、二〇〇〇年一〇月)

須藤宏明『疎外論——日本近代文学に表れた疎外者の研究——』(おうふう、二〇〇二年
三月)

石剛『増補版 植民地支配と日本語 台湾、満洲国、大陸占領地における言語政策』(三
元社、二〇〇三年一月)

遠藤寛子『『少女の友』とその時代——編集者の勇氣 内山基——』(本の泉社、二〇〇
四年一月)

佐藤卓己『言論統制——情報官・鈴木庫三と教育の国防国家——』(中央公論社、二〇〇
四年八月)

久米依子『「少女小説」の生成 ジェンダー・ポリティクス of 世紀』（青弓社、二〇一三年六月）

李聖傑『「早稲田大学モノグラフ」¹⁰⁶ 川端康成の「魔界」に関する研究——その生成を中心に——』（早稲田大学出版部、二〇一四年三月）

村上克尚『動物の声、他者の声 日本戦後文学の倫理』（新曜社、二〇一七年九月）

是澤博昭『軍国少年・少女の誕生とメディア——子ども達の日満親善交流』（世織書房、二〇一八年三月）

清水寛『太平洋戦争下の全国の障害児学校——被害と翼賛』（新日本出版社、二〇一八年一〇月）

【新聞、雑誌、論文】

丸山千代「ヘレン・ケラーと語りて想ふ」（「新女苑」一九三七年六月）

滋賀 星加世子の投稿「トモチャンクラブ」（「少女の友」一九三九年九月）

兵庫 眞砂郁子の投稿「トモチャンクラブ」（「少女の友」一九四〇年一月）

川端康成「旅中片信」（「文学界」一九四〇年七月）

東京 明浦美千帆の投稿「トモチャンクラブ」（「少女の友」一九四〇年八月）

彦坂恵「ヘレン・ケラー先生を迎へて」（櫃田祐也『海に見える丘…聾啞教師の手記』厚生閣、一九四〇年一二月）

「予告「美しい旅」——少女篇——」（「少女の友」一九四一年三月）

東京 小出トヨの投稿「トモチャンクラブ」（「少女の友」一九四二年四月）

川端康成「あとがき」（『美しい旅』実業之日本社、一九四二年七月）

川端康成『満洲国の私たち』序（大村次信編『満洲国の私たち』中央公論社、一九四二年一二月）

川端康成「櫃田祐也『美佐子と教師』序」（櫃田祐也『美佐子と教師』鶴書房、一九四三年五月）

松尾茂「満洲国に於ける日本語教育の現状」（「日本語」一九四四年四月）

羽鳥徹哉「解説」（浅井清編『児童文学大系 第二三卷』ほるぷ出版、一九七七年一月）

兵藤正之助「川端康成論——「名人」を中心に——」（「関東学院大学文学部紀要」一九八四年一二月）

小松教之「〈資料〉満洲国赤十字社新京聾啞学院」（「発達障害研究」一九八九年五月）

佐藤隆博、戸崎敬子「旧満洲日本人学校における「特別学級」の実態（Ⅱ）——満洲教育

専門学校附属小学校(奉天千代田小学校)の事例を中心に——」(「高知大学教育学部研究報告」一九九一年一〇月)

須藤宏明「盲目の人を動機にした川端康成の小説論——「温泉場の事」を中心に——」(川端文学研究会編『川端文学への視界9』教育出版センター、一九九四年六月)

深澤晴美「少女倶楽部」「少女の友」における川端康成(付・全集未収録文六篇)」(「芸術至上主義文芸」一九九六年十二月)

阿佐博「特集」ヘレン・ケラーの来日をもたらしたもの」(「視覚障害」一九九八年七月)
奥出健「川端康成——戦時下の満洲の旅をめぐって——」(「國學院雑誌」二〇〇四年一月)

久藤理「少女小説・綴方・植民地主義——『美しい旅』と川端康成の戦時下——」(川端文学研究会編『川端文学への視界21』銀の鈴社、二〇〇六年六月)

水谷真紀「時局下の少女美——『少女の友』における主筆・作家・言論統制——」(「昭和文学研究」二〇〇六年九月)

三浦卓「『少女の友』のコミュニティと川端康成「美しい旅」——〈障害者〉から〈満洲〉へ——」(「日本近代文学」二〇〇九年五月)

魏晨「川端康成と綴方——戦時中の帝国主義とつながる回路」(「超域的日本文化研究」二〇一四年三月)

大原祐治「動物・ことば・時間——〈動物と人間の文学誌〉のための覚え書き」(「千葉大学人文社会科学研究」二〇一六年三月)

池田匡史、黒川麻実「旧満洲国における国語教育営為——郷土教育の視点から——」(「教育研究ジャーナル」二〇二〇年三月)

第四章 〈旅行〉から〈旅〉への遡行——『旅への誘ひ』——

【書籍】

鉄道省編『観光地と洋式ホテル』(鉄道省、一九三四年月不明)

川端康成編『女性文章』(満州文芸春秋社、一九四五年一月)

山口堅吉編『富士屋ホテル八十年史』非売品(富士屋ホテル株式会社、一九五八年七月)

瀬戸内晴美『かの子撩乱』(講談社、一九七〇年五月)

川端康成『天授の子』(新潮社、一九七五年六月)

三七巻本『川端康成全集 第二三巻』(新潮社、一九八一年二月)

外村彰『岡本かの子の小説〈ひたごころ〉の形象』（おうふう、二〇〇五年九月）

山本光正『東海道の創造力』（臨川書店、二〇〇八年七月）

老川慶喜『日本鉄道史 大正・昭和戦前篇——日露戦争後から敗戦まで——』（中央公論新社、二〇一六年一月）

【新聞、雑誌、論文】

内山基「創刊のことば」（『新女苑』一九三七年一月）

杉山平助「結婚について（1）」（『新女苑』一九三七年一月）

杉山平助「結婚せんとする人に（2）」（『新女苑』一九三七年二月）

丘文子「花嫁学校ユーモア訪問」（『新女苑』一九三七年二月）

杉山平助「結婚せんとする人に（3）」（『新女苑』一九三七年三月）

安部磯雄「結婚の機会を待望して居る女子へ」（『新女苑』一九三七年五月）

菊池寛「結婚をあせるな」（『新女苑』一九三七年八月）

杉山平助他「座談会 結婚の本当の準備」（『新女苑』一九三七年八月）

丘文子「新婚家庭ユーモア訪問」（『新女苑』一九三八年一月）

芹沢光治良他「結婚前五ヶ年計画」（『新女苑』一九三八年五月）

岡本かの子「東海道五十三次」（『新日本』一九三八年八月）

小林さえ「女子青年の読物調査」（『教育』岩波書店、一九三八年十一月）

川端康成「『新女苑』コント欄「選評」（『新女苑』一九三九年四月）

丘文子「花嫁列車同乗記」（『新女苑』一九三九年六月）

戸川秋骨「十国峠・籠坂峠・長尾峠」（深田久弥編『峠』青木書店、一九三九年八月）

「新婚旅行と恰好な旅行地」（『旅』一九三九年九月）

川端康成「神秘（仮題）」（『新女苑』一九三九年十二月）

小杉放庵他「私の新婚旅行時代」（『旅』一九四〇年一月）

川端康成「旅中片信」（『文学界』一九四〇年七月）

川端康成『『女性文章』序』（川端康成編『女性文章』満洲文芸春秋社、一九四五年一月）

西条八十他「新婚旅行はどちらへいらつしやいましたか」（『旅』一九四九年十一月）

三島由紀夫「永遠の旅人——川端康成氏の人と作品」（『別冊文芸春秋』一九五六年四月）

宮内淳子「街道を語る人々——岡本かの子『東海道五十三次』——」（『日本文学』一九九一年二月）

佐々木さよ「『旅』の創造——岡本かの子『東海道五十三次』——」（『文芸と批評』一九

九二年四月)

山本鉦太郎「新婚旅行変遷史」(「旅」一九九五年十二月)

野田直恵「岡本かの子『東海道五十三次』試論」(「国文学論叢」一九九七年二月)

深澤晴美『『新女苑』における川端康成——戦時下の側面』(「和洋九段女子中学校・高等学校紀要」一九九七年三月)

砂本文彦「1930年代の国際観光政策により建設された「国際観光ホテル」について」(「日本建築学会計画系論文集」一九九八年八月)

山田吉郎「川端康成『東海道』の構造——『旅への誘ひ』との対比を視座として——」(「田村充正、馬場重行、原善編『川端文学の世界2』その発展』勉強出版、一九九九年三月)

山本光正「鉄道の発達と旧道への回帰 東海道を歩くということ」(「国立歴史民俗博物館研究報告」一九九九年三月)

深澤晴美「熱海、東伊豆、箱根と川端文学」(羽鳥徹哉編「『解釈と鑑賞別冊』川端康成旅とふるさと」至文堂、一九九九年二月)

外村彰「岡本かの子『東海道五十三次』——“時代”の隠喩を視座として——」(「昭和文学研究」二〇〇五年三月)

三浦卓「〈私たちだけの世界〉の行方——『少女の友』の読者ネットワークと川端康成——」(「近代文学合同研究会論集第3号〈講談社〉ネットワークと読者」二〇〇六年二月)

岡本勝「岡本かの子『東海道五十三次』」(「解釈と鑑賞」二〇〇七年四月)

石田あゆ「『若い女性』雑誌にみる戦時と戦後——『新女苑』を中心として」(「マス・コミュニケーション研究」二〇一〇年一月)

小平麻衣子「教養の再編と『新女苑』——川端康成の投稿指導にふれて——」(「日本近代文学」二〇一四年五月)

内田裕太「川端康成『朝雲』の方法——その〈伝統〉的視座をめぐって——」(「文学研究論集」二〇一六年九月)

藤田祐史「岡本かの子『東海道五十三次』論——芭蕉の句を視点に」(「跨境／日本語文学研究」二〇一七年十二月)

第五章 「外地」メディアと小説——『東海道』の射程——

【書籍】

川端康成『〈現代語訳国文学全集第三巻〉竹取物語他二篇』（非凡閣、一九三七年八月）

田中好、和田篤憲『東海道』（好文館書店、一九三八年四月）

石黒修『日本語の世界化——國語の発展と國語制作——』（修文館、一九四一年一二月）

川田順『愛國百人一首評釈』（朝日新聞社、一九四三年五月）

武田祐吉『愛國精神と和歌』（啓明会事務所、一九四三年九月）

川端康成『決定版 雪国』（創元社、一九四八年十二月）

『齋藤茂吉全集 第三七巻』（岩波書店、一九五四年九月）

川端康成『天授の子』（新潮社、一九七五年六月）

三七巻本『川端康成全集 第二三巻』（新潮社、一九八一年二月）

小林芳仁『川端康成の世界——美と仏教と児童文学と——』（双文社出版、一九八五年二月）

『保田與重郎全集 第一七巻』（講談社、一九八七年三月）

櫻本富雄『日本文学報国会 大東亜戦争下の文学者たち』（青木書店、一九九五年六月）

徐敏民『戦前中国における日本語教育』（エムティ出版、一九九六年一月）

小林英夫『満鉄「知の集団」の誕生と死』（吉川弘文館、一九九六年九月）

川村湊『文学から見る「満洲」「五族協和」の夢と現実』（吉川弘文館、一九九八年二月）

吉海直人『百人一首への招待』（筑摩書房、一九九八年二月）

李相哲『満洲における日本人経営新聞の歴史』（凱風社、二〇〇〇年五月）

品田悦一『万葉集の発明 新装版 国民国家と文化装置としての古典』（新曜社、二〇〇一年二月）

平山城児『川端康成 余白を埋める』（研文出版、二〇〇三年六月）

十川信介『近代日本文学案内』（岩波書店、二〇〇八年四月）

品田悦一『斎藤茂吉——あかあかと一本の道とほりたり——』（ミネルヴァ書房、二〇一〇年六月）

『〈菱川善夫著作集6〉叛逆と凝視——近代歌人論』（沖積舎、二〇一〇年一二月）

川村湊『満洲国』（現代書館、二〇一一年四月）

小泉京美編『〈コレクション・モダン都市文化第85巻〉満洲のモダニズム』（ゆまに書房、二〇一三年六月）

李聖傑『〈早稲田大学モノグラフ106〉川端康成の「魔界」に関する研究——その生成を中心に——』（早稲田大学出版部、二〇一四年三月）

小川靖彦『万葉集と日本人 読み継がれる千二百年の歴史』（KADOKAWA、二〇一四年四月）

森本穫『魔界の住人川端康成その生涯と文学【上】』（勉誠出版、二〇一四年九月）

旅の文化研究所編『満蒙開拓青少年義勇軍の旅路——光と闇の満洲』（森話社、二〇一六年四月）

福田淳子『川端康成をめぐるアダプテーションの展開——小説・映画・オペラ』（フィルムアート社、二〇一八年三月）

木下宏一『国文学とナショナリズム 沼波瓊音、三井甲之、久松潜一、政治的文学者たちの学問と思想』（三三社、二〇一八年四月）

渡部泰明編『〈アジア遊学241〉源実朝 虚実を越えて』（勉誠出版、二〇一九年一二月）

【新聞、雑誌、論文】

川端康成「本に抱く感想」（『東京日日新聞』一九三六年三月二一日）

川端康成「編輯当番記」（『文芸懇話会』一九三六年五月）

川端康成「牧歌」（『婦人公論』一九三七年六月〜一九三八年一二月）

江原鉄平「満洲文学と満洲生れのこと【一】」（『満洲日日新聞』一九三七年八月一八日）

「鎌倉に実朝の歌碑建立」（『日本学芸新聞』一九四二年八月一五日）

「日本精神の生活化 “愛国百人一首の選定”」（『日本学芸新聞』一九四二年九月一五日）

小林秀雄「実朝」（『文学界』一九四三年二月、五月、六月）

福井優「満洲国に於ける日本語普及の状況」（『日本語教授実践』一九四三年九月）

川端康成「『東海道』作者の言葉」（『満洲日日新聞』一九四三年七月一三日）

川端康成「真珠船」（『読書人』一九四四年三月）

川端康成「哀愁」（『社会』一九四七年一〇月）

川端康成「反橋」（『別冊風雪』一九四八年一〇月）

川端康成「しぐれ」（『文芸往来』一九四九年一月）

川端康成「住吉」（『個性』一九四九年四月）

川端康成「敗戦のころ」（『新潮』一九五五年八月）

川端康成「美しい日本の私」（『朝日新聞』他一九六八年一二月一六日）

- 佐伯彰一「解説」(川端康成『天授の子』新潮社、一九七五年六月)
- 川端香男里「覚書」(川端康成『天授の子』新潮社、一九七五年六月)
- 森本穂「戦時下の川端康成——その古典受容を中心として——」(「安田女子大学文学部日本文学科国語国文論集」一九七七年八月)
- 小林芳仁「『牧歌』論」(川端文学研究会編『川端康成研究叢書5』虚実の皮膜』教育出版センター、一九七九年三年)
- 海野福寿「一九三〇年代の文芸統制——松本学と文芸懇話会」(「駿台史学」一九八一年三月)
- 金井景子「川端康成の郷土幻想——『牧歌』をめぐる一考察」(「媒」一九八四年一〇月)
- 三橋透「川端文学 古典索引 人名編」(「成蹊国文」一九九四年三月)
- 三橋透「川端文学 古典索引 書名・作品名編」(「成蹊人文研究」一九九五年三月)
- 谷口幸代「川端康成の戦後——廃墟からの出発——」(「国文」お茶の水女子大学、一九九五年七月)
- 福田淳子「内に向かう視線——川端の知覚をめぐる——」(「江古田文学」一九九九年一月)
- 福田淳子「『東海道』をめぐる——心の“旅”に映し出される真実」(羽鳥徹哉編「解釈と鑑賞別冊」川端康成 旅とふるさと」至文堂、一九九九年一月)
- 原善、福田淳子、高根沢紀子「川端康成全集固有名詞索引IX日本文学(古典——作品)篇」(「上武大学経営情報学部紀要」二〇〇〇年三月)
- 稲垣眞美「川端康成著『東海道』に見る歌論——源実朝と足利義尚の“調べ”——」(「短歌研究」二〇〇二年七月)
- 高橋真理「川端康成と富士」(「国文学」二〇〇四年二月)
- 奥出健「川端康成——戦時下の満洲の旅をめぐる——」(「國學院雑誌」二〇〇四年一月)
- 品田悦一「万葉集に託されたもの——国民歌集の戦中と戦後」(『和歌をひらく第5巻』帝国の和歌』岩波書店、二〇〇六年六月)
- 河野基樹「『東海道』——皇統崇慕の文学——」(川端文学研究会編「川端文学への視界22」銀の鈴社、二〇〇七年六月)
- 松澤俊二「つくられる“愛国”とその受容——「愛国百人一首」をめぐる——」(「超域的日本文化研究」二〇一三年三月)

栄元「【研究ノート】『満洲日日新聞』の創刊と初代社長森山守次」(「Intelligence」二〇一五年三月)

栄元「租借地都市大連における『満洲日日新聞』の役割に関する一考察——「大連彩票」の内容分析から——」(「総研大文化科学研究」二〇一五年三月)

栄元「植民地日本語新聞の事業活動——大連・満洲日日新聞による「在満児童母国見学団」をめぐる——」(「総研大文化科学研究」二〇一六年三月)

山中正樹「『満洲国』の川端康成」(「創価大学日本語日本文学」二〇一九年三月)

多田蔵人「小林秀雄『実朝』論」(『アジア遊学²⁴¹』源実朝 虚実を越えて』勉強出版、二〇一九年一二月)

第六章 『雪国』——『北越雪譜』の位相と地名回避の効果——

【原稿】

日本近代文学館蔵『雪国』肉筆原稿

【書籍】

市島謙吉『随筆春城六種』(早稲田大学出版部、一九二七年八月)

相馬御風『砂に坐して語る』(厚生閣、一九三四年四月)

和辻哲郎『風土 人間学的考察』(岩波書店、一九三五年九月)

鈴木牧之編撰、京山人百樹刪定、岡田武松校訂『北越雪譜』(岩波書店、一九三六年一月)

中村光夫『《論考》川端康成研究』(筑摩書房、一九七八年四月)

三七巻本『川端康成全集 第一〇巻』(新潮社、一九八〇年四月)

林武志『川端康成作品研究史』(教育出版センター、一九八四年一〇月)

桶谷秀昭『昭和精神史』(文芸春秋、一九九二年六月)

岩田光子編『〈近代文学研究叢書22〉川端康成『雪国』作品論集成Ⅰ』(大空社、一九九六年一月)

岩田光子編『〈近代文学研究叢書22〉川端康成『雪国』作品論集成Ⅱ』(大空社、一九九六年一月)

岩田光子編『〈近代文学研究叢書22〉川端康成『雪国』作品論集成Ⅲ』(大空社、一九九六年一月)

大久保喬樹『森羅変容 近代日本文学と自然』(小沢書店、一九九六年一二月)

平山三男編『川端康成『雪国』湯沢事典』（湯沢町教育委員会、一九九七年四月）

北原保雄『青葉は青いか』（大修館書店、一九九七年十二月）

成田龍一『「故郷」という物語——都市空間の中の歴史学——』（吉川弘文館、一九九八年七月）

成田龍一、藤井淑禎、安井眞奈美、内田隆三、岩田重則『故郷の喪失と再生』（青弓社、

二〇〇〇年五月）

須藤宏明『疎外論——日本近代文学に表れた疎外者の研究——』（おうふう、二〇〇二年三月）

郷土研究会編『郷土——表象と実践——』（嵯峨野書院、二〇〇三年六月）

大原祐治『文学的記憶・一九四〇年前後——昭和期文学と戦争の記憶』（翰林書房、二〇〇六年十一月）

伊藤純郎『増補 郷土教育運動の研究』（思文閣出版、二〇〇八年五月）

片山倫太郎編『川端康成作品論集成 第四卷『雪国』（おうふう、二〇一一年二月）

伊澤壽治編『座敷歌集成』（東洋書院、二〇一六年七月）

【新聞、雑誌、論文】

小林秀雄「故郷を失った文学」（『文芸春秋』一九三三年五月）

川端康成より水島治男宛書簡（一九三五年一〇月二三日付、引用は、三七巻本『川端康成全集 補卷二巻』新潮社、一九八四年五月に拠る）

「新風土記叢書」広告文（『東京朝日新聞』一九三六年三月三十一日）

鈴木卯三郎「鈴木牧之の遺稿——『北越雪譜』——」（『読書感興』一九三六年四月）

川端康成「編輯当番記」（『文芸懇話会』一九三六年五月）

「新刊紹介」（『山と溪谷』一九三六年七月）

川端康成「信濃の話」（『文学界』一九三七年一〇月）

酒本麟吾「『北越雪譜』の郷土」（『旅』一九三九年十二月）

川端康成「あとがき」（『決定版 雪国』創元社、一九四八年十二月）

川端康成「あとがき」（『雪国』岩波文庫、一九五二年十二月）

中村光夫「川端康成論（3）——好色について」（『文学界』一九五七年九月）

河村清一郎「『雪中火事』と『天の河』——『雪国』・結末の改稿をめぐって——」（『金城国文』一九六五年一月）

「川端康成氏にノーベル賞」（『朝日新聞』一九六八年一〇月一八日）

河村清一郎「雪国」と「北越雪譜」(「明治大学人文科学研究紀要」一九六九年二月)

川端康成「あとがき」(定本『雪国』牧羊社、一九七一年八月)

平山三男「雪国」の虚と実——「雪中火事」の新資料報告——(「解釈」一九七七年一月)

海野福寿「一九三〇年代の文芸統制——松本学と文芸懇話会」(「駿台史学」一九八一年三月)

紅野敏郎「新風土記叢書」とその周辺」(「文学」一九八三年一〇月)

湧田佑「川端文学への新視点——「雪国」は「北越雪譜」のパロディである」(「すばる」一九八四年六月)

金井景子「川端康成の郷土幻想——『牧歌』をめぐる一考察」(「媒」一九八四年一〇月)

高橋有恒「湧田佑氏の「川端文学への新視点」について——「雪国」と「北越雪譜」——(川端文学研究会編『川端文学への視界1』教育出版センター、一九八五年一月)

田村嘉勝「川端康成「牧歌」と信地御巡幸」(「言文」一九九二年一月)

北原保雄「『雪国』の文章・続」(「日本語論」一九九四年一〇月)

たつみ都志「川端康成「雪国」におけるトポス——日常からの脱却——」(「昭和文学研究」一九九五年二月)

大久保喬樹「日本回帰する自然(I)」(「論集」東京女子大学紀要、一九九五年九月)

田村嘉勝「川端康成「牧歌」と信地郷土文献——郷土文献の作品化——」(「言文」一九九五年一二月)

上田渡「『雪国』——物語の構造化をこえて——」(長谷川泉、平山三男編「解釈と鑑賞別冊」川端康成「雪国」60周年」至文堂、一九九八年三月)

須藤宏明「『雪国』における空間論——「越後湯沢」という地名の拒否をめぐる——」(長谷川泉、平山三男編「解釈と鑑賞別冊」川端康成「雪国」60周年」至文堂、一九九八年三月)

竹内清己「日本文学としての『雪国』——空間システムと伝統様式——」(長谷川泉、平山三男編「解釈と鑑賞別冊」川端康成「雪国」60周年」至文堂、一九九八年三月)

田村嘉勝「『雪国』に求めた「日本の故郷」——竹内清己氏の発表にヒントを得て——」(長谷川泉、平山三男編「解釈と鑑賞別冊」川端康成「雪国」60周年」至文堂、一九九八年三月)

榎本隆司「発端——文芸懇話会始末のうち」(「早稲田大学教育学部学術研究国語・国文

篇」一九九八年三月)

山口浩行「旅人が見る故郷——風土記としての『津軽』」(『日本近代文学』二〇〇二年一〇月)

野坂昭雄『雪国』における映像と女性との関わりについて」(『山口国文』二〇〇三年三月)

大原祐治「裂罅としての郷土／幻視される故郷(下)——川端康成『牧歌』について——」(『学習院高等科紀要』二〇〇六年七月)

杉井和子「帚木三帖」と『雪国』——川端康成の描く別離と死——」(『講座源氏物語研究第6巻』近代文学における源氏物語』おうふう、二〇〇七年八月)

重松清「重松清さんと読む 百年読書会」(『朝日新聞』二〇〇九年十二月二七日)

片山倫太郎『雪国』研究史」(片山倫太郎編『川端康成作品論集成 第四巻『雪国』』(おうふう、二〇一一年二月)

山田利一「観光と文学 文学作品からたどる観光の歴史」(『岐阜市立女子短期大学研究紀要』二〇一二年三月)

三浦卓「非現実的な見方」の困難——川端康成・創元社版『雪国』をめぐる——」(『近代文学合同研究会論集』二〇一三年十二月)

立岡裕士「公的図書館における新風土記叢書の所蔵状況…新風土記叢書の普及について考えるために」(『鳴門教育大学研究紀要』二〇一五年三月)

高橋孝次『明石』と『津軽』——新風土記叢書の「郷土」(大原祐治編「日本文学と故郷／郷土」(二〇一三～二〇一五年度)千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書 第二九七集』二〇一六年二月)

仁平政人「旅行」する言葉、「山歩き」する身体——川端康成『雪国』論序説——」(『日本文学』二〇一七年六月)

国際交流基金データベース「Japanese Literature in Translation Search」
https://www.jplf.go.jp/JF_Contents/InformationSearchService (二〇二〇年九月一四日閲覧)

終章

【書籍】

吉田秀樹『川端康成——東京のシルエット』(龍書房、二〇一三年十二月)

福田淳子『川端康成をめぐるアダプテーションの展開——小説・映画・オペラ』(フィール

ムアート社、二〇一八年三月)

村山龍『〈宮澤賢治〉』という現象 戦時へ向かう一九三〇年代の文学運動』(花鳥社、二

〇一九年五月)

【新聞、雑誌、論文】

吉田秀樹「川端康成、戦中から戦後への創作意識をめぐって——『名人』推敲を一手掛かりに——」(『昭和文学研究』一九八八年七月)

近藤裕子「名人」(羽鳥徹哉、原善編『川端康成全作品研究事典』勉強出版、一九九八年六月)

福田淳子、杵渕由香、堀内京、佐藤翔哉「川端康成文学館所蔵 未発表書簡二通(横光利一宛、文学界宛)をめぐって」(川端康成学会編『川端文学への視界30』銀の鈴社、二〇一五年六月)

福田淳子「『本因坊名人引退碁観戦記』から小説『名人』へ——川端康成と戦時下における新聞メディアの戦略」(『学苑』二〇一六年二月)

その他

【書籍】

山本健吉編『〈近代文学鑑賞講座第一三巻〉川端康成』(角川書店、一九五九年一月)

平野謙『昭和文学史』(筑摩書房、一九六三年一二月)

長谷川泉編著『川端康成作品研究』(八木書店、一九六九年三月)

川端文学研究会編『川端康成の人間と芸術』(教育出版センター、一九七一年四月)

長谷川泉、神谷忠孝注釈『〈日本近代文学大系第四二巻〉川端康成・横光利一集』(角川書店、一九七二年七月)

三好行雄『近代日本文学史』(有斐閣、一九七五年一二月)

林武志『川端康成研究』(桜楓社、一九七六年五月)

進藤純孝『伝記 川端康成』(六興出版、一九七六年八月)

長谷川泉『第五版 近代名作鑑賞——三契機説鑑賞法70則の実例——』(至文堂、一九七七年八月)

羽鳥徹哉『〈研究選書21〉作家川端の基底』(教育出版センター、一九七九年一月)

長谷川泉、紅野敏郎、磯貝英夫編『資料による近代日本文学』(明治書院、一九七九年七月)

神谷忠孝『保田與重郎論』（雁書館、一九七九年九月）

櫻田常久ら著『芥川賞全集 第三卷』（文芸春秋、一九八二年四月）

高見順『昭和文学盛衰史 上』（福武書店、一九八三年三月）

高見順『昭和文学盛衰史 下』（福武書店、一九八三年三月）

松坂俊夫『川端康成「掌の小説」研究』（教育出版センター、一九八三年一〇月）

上坂信男『川端康成——その『源氏物語』体験——』（右文書院、一九八六年一月）

長谷川泉『近代文学研究法 改訂版』（明治書院、一九八八年三月）

伊藤隆、広瀬順皓編『近代日本資料選書11』松本学日記』（山川出版社、一九九五年二月）

『本多秋五全集 第七卷』（青柿堂、一九九五年八月）

伊吹和子『川端康成 瞳の伝説』（PHP研究所、一九九七年四月）

『小林秀雄全集 第二卷 Xへの手紙』（新潮社、二〇〇一年五月）

『小林秀雄全集 第六卷 ドストエフスキイの生活』（新潮社、二〇〇一年七月）

『小林秀雄全集 第五卷 文芸批評の行方』（新潮社、二〇〇二年二月）

中嶋展子『川端文学の「をさなごころ」と「むすめごころ」——昭和八年を中心に——』（龍書房、二〇一一年十二月）

小谷野敦『川端康成伝——双面の人』（中央公論新社、二〇一三年五月）

小林洋介『〈狂気〉と〈無意識〉のモダニズム——戦間期文学の一断面——』（笠間書院、二〇一三年二月）

牧義之『伏字の文化史——検閲・文学・出版』（森話社、二〇一四年十二月）

松本和也『昭和一〇年代の文学場を考える——新人・太宰治・戦争文学』（立教大学出版会、二〇一五年三月）

中村三春編『映画と文学 交響する想像力』（森話社、二〇一六年三月）

片山倫太郎『川端康成 官能と宗教を志向する認識と言語』（叡知の海出版、二〇一九年二月）

【新聞、雑誌、論文】

「特集 川端康成、その孤影の文学」（『国文学』一九七〇年二月）

「特集 川端康成の世界」（『解釈と鑑賞』一九九一年九月）

「特集 川端康成」（『解釈と鑑賞』一九九七年四月）

「特集 横光利一と川端康成」（『解釈と鑑賞』二〇一〇年六月）

初出一覧（ただし、いずれも改訂を施している）

序章 書き下ろし

第一章 「川端康成「牧歌」論——交錯する「日本の故郷」と神話——」

（「日本近代文学会北海道支部会報」二〇二一年五月）

第二章 川端康成学会第一六二回例会（二〇一四年四月一九日 於鶴見大学）

口頭発表「川端康成「高原」——軽井沢というトポス——」に基づく

第三章 昭和文学会第五七回研究集会（二〇一五年二月二三日 於早稲田大学）

口頭発表「川端康成「美しい旅」——正編と続編の断層——」に基づく

第四章 日本文学協会第三九回大会（二〇一九年七月七日 於京都女子大学）

口頭発表「川端康成「旅への誘ひ」——一九四〇年「新女苑」誌上での〈故郷〉探し——」に基づく

第五章 「「外地」メディアと小説——川端康成「東海道」の射程——」

（「日本近代文学会北海道支部会報」二〇一七年五月）

第六章 書き下ろし

終章 書き下ろし